金の閃光のもう一人の義兄　番外編集

珀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
金の閃光のもう一人の義兄　番外編集

【Ｎコード】
Ｎ５２３４Ｘ

【作者名】
珀狼

【あらすじ】
金の閃光のもう一人の義兄の番外編や記念話を集めたものです
これからは「番外編」「ＩＦ」「Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｋｉｎｇｄｏｍ」等はこっちで投稿します。

番外編「episode　zero」vol.1

１０年前、初代リィンフォースが消えて、１週間後の1月1日・・。
早朝、聖王教会でカリムと少女？が話をしている・・。
少女？の服装はネクタイ無しの黒いスーツの上に黒の足元までの長さのロングコートを羽織った状態だ・・。
ちなみに容姿は顔が小さく目が大きく髪の長さは腰の辺りまである

　カリム「ハンカチもった？財布は大丈夫？忘れ物ないわね？」

カリムは不安げな表情で少女？を見る、
カリムの表情とは裏腹に少女？は余裕といった

　少女？「あるよ、それに遠足じゃなくて。一応、任務で行くんだぞ？」

　カリム「分かってますよ！でも、その後、暫らくその星に居るのでしょ？」

　少女？「長くても3週間ぐらいだよ《3週間も！です！》はぁ・・。じゃあ行ってくるよ」

　カリム「変な人に、ついて行ったらダメですからね！《いかないよ！》タダでさえ女の子と間違われるんですから《うるさいよ！》」

少女？は聖王教会を後にして、第９７管理外世界に向かった・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊
地球　海鳴市　フェイトの自宅ではクロノが少女？と通信をしていた

クロノ「それで、何時こちらに来るんだ？」

少女？「（今日の、昼前には着くと思います）」

クロノ「今回も、数時間とかしか居られないのか？エース」

エース「（今回は、逃走した犯人を捕らえた後は緊急の任務とかが入らなければ2～3週間程ゆっくりして来いと言われてるのでその間地球に留まろうかと思いまして）」

クロノ「勿論、此処に泊まるんだよな？《は？》母さんや僕の居るこのマンションに泊まるんだよな？《いえ、ホテルにしようかと》お前なあ、此処はお前の家でもあるんだぞ？その事を忘れてるのか？《ですが、いきなり来たら迷惑なのでは？》そんなことあるか、いいな！此処に泊まるんだぞ分かったな！《はい、ではそろそろ》ああ」

エースは少し困った顔をしつつも了承し通信を切る、そして1人でソファーに座るクロノ
そこにエイミイとリンディがやってくる

エイミイ「クロノ君、今誰かと通信してた？《ああ、エースと話してた》え！？エース君！？こっち来るの！？」

エイミイはエースが来ると言う事に、とても驚く　クロノは更に地球に来る訳を言う

クロノ「ああ、何でもこの地球の此処海鳴市に逃げ込んでるある犯罪者を捕縛する為に単独で来るらしい」

クロノの説明を聞いたリンディは、溜め息をつきながら

リンディ「また、あの子は・・。余り単独任務はしないように一昨日も言ったばかりなのに・・。《任務なんですから仕方ありませんよ、艦長》そうなんだけどね～」

クロノ「それより、母さんエースの奴ホテルに泊まろうとしてましたよ」

それを聞いた、リンディとエイミイは

エイミイ「え！？何で？此処があるのに・・。」

リンディ「まさか、いきなり行ったら迷惑だろうからとかじゃあ無いでしょうね」

クロノ「その、まさかです《はぁ・・。全くあの子は》」

リンディ「帰ってきたら説教ね」

その頃エースは、予定より早く海鳴市に着き街を彷徨っていた・・・。

＊＊

エース「此処は一体何処だろう・・。」

エースがそう言ってると

　？？？「I do not have a map?」

　エース「いや、場所を示した紙が送られて来たんだがな・・・。
」

　？？？「What happened?」

エースは苦渋の顔をしながら紙の内容を告げる

　エース「・・・翠屋の近くの大きなマンションって書いた紙だけだからな・・。此処で魔法を使う訳にもいかないし、予定よりもかなり早く着いたんだし気長に探すさ”S2U?”」

　S2U?「I see」

　エース「それじゃあ、とりあえず人通りの多いとこに行くか、S2U?案内頼めるかな？」

　S2U?「All right」

エースは人通りの多い場所にとこに向かって歩き始めた・・。

＊＊

街の通りでなのはとフェイトそれから八神家は、フェイトの自宅に行く途中で人混みが多い所に目が行く・・。

何があったのかを聞いてみる事にする

なのは「あの～すみません」

野次馬「何だい？お嬢ちゃん」

フェイト「この人混み、何があったんですか？」

野次馬「ああ、これかい、３人の酔っ払いが１人の女の子に絡んでる絡んでるらしいんだよ」

それを聞いたなのは達は、人混みをかき分けて行き、その現場に到着する・・。

そこには白銀の髪をした少女？に酔っ払いが立ちはだかるように立っていた

少女？「そこ邪魔なんだけど」

酔っ払いＡ「うるせぇ！」

酔っ払いＢ「さっきぶつかった事を謝ってもらおうか！」

少女？「自分からぶつかって来ただろうに・・。」

酔っ払いＣ「それと痛い目に遭いたくなければ、金をよこしな”お嬢ちゃん”《あ？》」

少女？「今、何った？酔っ払い」

酔っ払いＣ「聞こえなかったのかい？”お嬢ちゃん”」

少女?「・・・おい、腐れ目の酔っ払いその痛い目とやら見せてみろよ、それとも口だけか?《この!くそガキ!》」

この少女?の言い方に酔っ払い達が激怒し一斉に、少女?に襲いかかる

酔っ払いC「このぉ!《こっちだ》がふっ!」

拳を突き出して来た、酔っ払いCの拳を難なくかわし、少女?は素早く後ろに回り込んで酔っ払いCの右腹部に右中段の回し蹴りを叩きこんで酔っ払いCを沈める

酔っ払いB「てめぇ!よくもやりやがっ《遅いねぇ~》ぐぇ!?《沈め》うぐぉぁ」

正面から酔っ払いBが詰め寄って来るより早く、少女?は、酔っ払いBに一気に詰め寄り右腹部に正拳突きを叩きこみ、酔っ払いBが腹部を抑えながらよろめく、その酔っ払いBに対して少女?は左の回転裏拳打ちを叩きこむと、酔っ払いBは回りながら倒れていく

酔っ払いA「こっ、こいつ~!《セイッ!》ぐあっ・・・」

少女?「いいか酔っ払い供、僕は男だ!《ぶぇ!》」

酔っ払いAが少年に向かって行くが、少年に避けられるそして酔っ払いAが少年の方へ向くと、少年は酔っ払いAの左腹部に正拳突きを入れ、酔っ払いAは腹部を抑えて前屈みになったところに少年が右の上段回し蹴りを決めて、少年は酔っ払い達を全員沈める
その様子を見ていたなのは達は・・・。

なのは「ほぇ～すごいね～」

フェイト「うん」

はやて「何か、映画みたいやな」

ヴィータ「おい、ザフィーラお前アイツの格闘はどうだ？」

ザフィーラ「悪くないな」

シグナム「（みんな、アイツが膨大な魔力がある事に気付いてるか？）」

少年「・・・」

シグナムがみんなに念話をする、その時、少年はなのは達の方を見ていた

なのは「（うん知ってるよ）」

フェイト「（私も）」

はやて「（うん気付いとったで）」

ヴィータ「（同じく）」

そう言っていると、少年がなのは達の方へ近づいて行き、少年がなのは達の横を通り過ぎる際に少年がなのは達に・・。

ー念話をするならもっと表情を隠すんだなー

なのは達「！？」

なのは達が一斉に振り向くがもう少年は姿を消していた・・・。
そしてフェイトの自宅に着いたなのは達がその事をリンディに話すと

リンディ「じゃあその酔っ払い達が、男の子に向かって”お嬢ちゃん”って言ったらその男の子が怒ったのね」

フェイト「はい」

クロノ「その男の子の髪の色は何色だったか分かるか？」

なのは「銀色みたいな感じだったけど・・・。」

はやて「あれは白銀って言うんやでなのはちゃん」

クロノ「そうか、はぁ～・・・。」

エイミイ「あはは、やっぱり、そっか～」

フェイト「あの～リンディさんは何か知ってるんですか？」

フェイトがリンディに少年の事を問いかけると、リンディは

リンディ「来たら紹介するわ」

そう言ってる頃、翠屋の前には・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊
エースが散々迷った挙句にようやくたどり着いていた・・。

エース「此処が、翠屋って言うところか・・。此処の近くの大きなマンションってあれだよな、でもどう行ったらいいんだろう?《どうしたんだい?》」

そうやって悩んでいると後ろから声を掛けられる

???「こんな所で悩んでいてどうしたんだい?」

そう尋ねてくる、大人の男にエースはマンションへの行き方を尋ねる事にした

エース「すみません、あのマンションへの行き方を教えてもらいたいのですが」

???「あのマンションかい?失礼だけど一体何の用なのかな?」

エース「親が住んでいて会いに来いって言われて今から会いに行くんです」

???「そうか、それはすまなかったね、あのマンションにはね・・。」

大人の男はマンションへの行き方をエースに懇切丁寧に道を教えてくれた

エース「どうもありがとうございました《いや、いいよ困った

時はお互い様さ》それでは」

エースは頭を下げて大人の男に礼を言って翠屋の前を後にして、マンションに向かって行く・・・。

＊＊＊

マンションに着いたエースはリンディの部室をマンションの住人から聞く・・・。

そしてリンディのインターホンを押す、すると中からリンディが出てくる

リンディ「久しぶりね、お帰りエース」

エース「ただいま、母さん」

リンディは頬笑みながらエースを出迎えた・・・・・・・・・・・・・・・・。

番外編「episode　zero」vol.2

なのは達が少年の話を言い終わって少し経った頃・・。
フェイトの自宅のインターホンが鳴る、

リンディ「あら、ようやく来たわね」

そしてリンディが誰かをインターホン内のカメラで確認して、玄関に客人を迎えに行った
そして自宅内に客人が入って来る、

リンディ「さっ、入って頂戴(はい)」

客人がなのは達の前に来る、その客人に驚くなのは達

なのは「あ！」

フェイト「さっきの」

はやて「空手兄ちゃんや！」

???「・・・誰？こいつ等」

先程の少年はなのは達の事を忘れていた、その返答にシグナムが

シグナム「貴様、主に対して無礼だろう！」

???「主って誰の事だよ《貴様！》」

少年の言い方に、怒り瞬時にＬＴを起動し少年に威嚇のつもりで横薙ぎをするシグナム

シグナム「！《地球ってのはえらく野蛮な星なんだな》くっ！」

???「そんなに、戦りたいなら、相手になってやるぞ？」

シグナムのＬＴを少年はクロノのＳ２Ｕに似たデバイスで止める・・。

更にシグナムに向け言葉を続ける、少年

???「僕はさっきの事で余り良い気分じゃ無いからな、どうする？ヴォルケンリッター、烈火の将《やめなさい！エース》・・はい」

はやて「シグナムもやで！《・・分かりました》」

エースとシグナムは互いに睨みあいながら、何時でも攻撃できると言う感じだ・・。

しかし、リンディがエースを止めると、渋々と言った感じでデバイスをしまうエース

そして、はやてもシグナムに注意しシグナムもＬＴを納める

エース「すみません、兄さん部屋貸してくれませんか？」

クロノ「構わないが、どうしてだ？《・・・眠いんです》はぁ、分かった。こっちだ」

なのは「（・・・あれ？この人優しい感じがする）」

そう言って、エースはクロノの部屋に向かった・・。
そして、クロノが戻って来るその手には白いカードの様な物がある、なのは達はクロノが戻って来るとある事を聞いてみる

なのは「さっきの人《エースの事か?》うん、そのエース君って一体」

フェイト「クロノと似たデバイスも持ってたし」

リンディ「・・・はぁ、紹介する前に寝るなんてあの子は全く・・。」

クロノ「仕方無いですよ、エースは基本的に忙しいんですから」

なのは「あの~《ああ、ごめんなさい》」

なのはに突っ込まれて、リンディがエースの紹介を始める

リンディ「本来なら自身が紹介するのが良いだけど・・。しょうがないわね・・。あの子の名前は、エース・ハラオウン《え!?》私の子供よ《ってことは・・。》」

リンディの紹介に驚く一同、そしてクロノ方を見ると、クロノは頷きながら答える

クロノ「僕の自慢の弟だ」

ユーノ「クロノが人を褒めてる《居たのかフェレットモドキ》ユーノ・スクライアだ!!」

エイミイ「まぁ、クロノ君、エース君を可愛がっていたからね《否定はしないさ》ほらね」

そうして皆が聞いていると、フェイトがクロノの手にある白いカード状の物を聞いてくる

フェイト「クロノ、そのカード状の物ってクロノのＳ２Ｕに似てるね《これか？》うん」

クロノ「まぁ、当然だろうこれは、Ｓ２Ｕ？、（ソング・トゥー・ユー・ツヴァイ）僕の、Ｓ２Ｕの姉妹機だからな《ちょっとええか？クロノ君》何だ？はやて」

はやて「何で、英語とドイツ語が混合しとるん？《それはだな》うん」

クロノ「エースはミッド式では無く、はやてやシグナム達と同じベルカ式だからだ。まぁ後の事は、本人に直接聞いてくれ《更にええか？クロノ君》どうした？」

はやてはクロノに少し前に言ったエースの発言が気になっていた為にクロノに聞いてみる事にした・・・。

はやて「あのな、さっきエース君はシグナムの事を”ヴォルケンリッター、烈火の将”って言ってやん《ああ》何でその事知ってんのかなと思って」

はやての疑問にクロノが答え始める

クロノ「それは、僕がはやてをＳランク魔導騎士にする為に本

局に居たエースにその手続きを全てやってくれと頼んだからだ、更にヴォルケンリッターと君の保護観察等の手続きもやってくれたのは全部エースだ・・。後、付け加えておくが僕は保護観察等の事はエースに頼んでいない《えっ？》とりあえず、はやてだけを先に魔導騎士にしてその後、少し時間を置いてからエースに保護観察等の事を頼もうと思っていたからだ《それってつまり》エースは君たちの事は、僕の口からでしか聞いた事が無いのに、君たちの事を信頼して保護観察等の事をやっていてくれたんだ」

はやて「そうやったんや・・・。シグナム《はい》皆も、分かってるな？」

ヴィータ「うん」

シャマル「勿論です」

ザフィーラ「分かっております」

守護騎士達がはやてのやりたい事が分かり頷く　そしてはやてはクロノに

はやて「エース君にお礼と謝罪がしたいんやけど、ダメやろか？《ダメじゃないが、起きないと思うぞ？》ふぇ？それはどうしてなん？」

はやてがそう尋ねると、クロノは

クロノ「部屋に入る前に聞いたんだが、２週間近く3時間以上眠った記憶が無いって言ってたから今行っても絶対に起きないと思うぞ？《そっか、そらしゃーないわ》それに今日はもう遅いし明日

か明後日にでもまた来るといい、エースは久しぶりに纏まった休暇で緊急任務が無ければ3週間程の休暇があると言っていたから《なら、そうするわ》」

そう言って、なのは達が帰って行って、数時間後・・・。
****

　S2U?「(Target Discovery)」

　エース「・・・・見つけたか《Yes》じゃ、捕まえに行くか《roger》」

S2U?から犯人を見つけた知らせを受ける、そして起き上がりクロノの部屋を出るエース
キッチンでは、リンディ達が食事をしていた・・・。

　クロノ「起きたか、エース《いや、起こされました》どういう事だ？」

　エース「仕事ですよ《手伝おうか？》いえ、1人で大丈夫です《そうか》S2U?を返してくれませんか？《ああ》どうも」
そう言って、エースはキッチンを後にして、マンションの屋上に向かって行った

　フェイト「仕事って？《ああ、言ってなかったか？》うん」

　クロノ「エースは元々此処に逃げて来た犯罪者の捕縛の為にこ

の地球に来たんだ」

フェイト「手伝った方が良いのかな？《心配無いさ》どうして？」

クロノ「僕の弟は強いからな」

そう言ってクロノは余裕の笑みを浮かべていた

＊＊＊

一方、その頃、エースは逃げて来た犯罪者と対峙していた

犯罪者「《止まれ》ちっ、管理局か！」

エース「え〜と、投降の意思があるなら君には弁護の機会が与えられる《あるかよ！》まっ、そうだろうなＳ２Ｕ?、ソードスタイル《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ》」

Ｓ２Ｕ?「Ｓｗｏｒｄ　ｓｔｙｌｅ」

杖の状態のＳ２Ｕ?が変形し、鞘付きの剣になっていく・・。

そして、鞘から剣の状態Ｓ２Ｕ?抜刀し構えるエース、そんなエースに対し犯人は

犯罪者「でも俺は運がいいぜ、こんなガキが相手だからな余裕で逃げ切れ《ショットバインド》くっ！」

余裕の表情をしているところに、エースのバインドにあっさりと捕まってしまう・・。

それに呆れる、エース

エース「・・・幾らなんでも隙を見せすぎでしょ？まぁいい・・。S2U?カートリッジロード」

S2U?「Load cartridge.」

S2U?に2発のカートリッジが供給される、そしてS2U?に炎が纏わっていき・・。

エース「・・・ファイヤースラシュ《ぐはぁ！》」

エースはバインドの上から犯人に向かい一撃を決めると、犯人は倒された・・。

倒された犯人は身体を痙攣させている・・。

エース「やりすぎたかな?、まぁ死にはしないしいっか、じゃあ護送班を呼ぶか・・。」

連絡を受けた護送班が犯人を連れて行き、エースの任務は呆気なく終わった・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

自宅に帰る途中でエースは、ある人物に会う

エース「・・・君は確か・・。《フェイトって言うんだ》」

フェイト「フェイト・テスタロッサ《そっか》うん」

エース「どうしてこんな所に？」

フェイト「その、少し心配で来ちゃった」

エース「心配してくれるのは嬉しいけど、女の子が夜道を１人で歩くのは余り関心しないな《うっ、ごめんなさい》一緒に帰るか、フェイト」

フェイト「うん！／／／」

２人は仲良く並んで帰って行った・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

番外編「episode　zero」　vol.3

日が昇る前、フェイトの住んでるマンションの屋上で・・・。

フェイト「やああ！《甘い》きゃ！」

フェイトの攻撃を軽くかわし、軽く一撃を加えるエース・・
そして、攻撃をかわされて一撃を加えられたフェイトはそのままこけて尻もちをつく・・。
こけたフェイトに近づくエース、そして

エース「もう良いだろ《まだ、やりたいんだけど・・。ダメかな？》眠いからパスそれとこういう練習をする時は、スカートはやめた方がいいと思うぞ？《ふぇ？》」

エースの忠告の意味が直ぐには理解できなかったフェイトだが、自分の格好を確認する
尻もちをつく⇒ミニスカの為に、スカートが捲れる⇒目の前にはエース＝・・・・。

フェイト「あわわわわっ／／／／／／」

フェイトは慌ててスカートを抑えて、涙目で上目づかいをしながらエースに問いかける

フェイト「・・・見た？《さぁ？》答えてよぉ～！／／／／／／」

エース「僕は戻るぞ《まっ、待ってよ！／／／／》・・・白

ねぇ～」

エースは1人向きを変えて自宅に引き返して行く、それを慌てて追うフェイト・・・。

そしてエースは小さく呟きながら、特定の色を答える、その色に激しく反応するフェイト

　フェイト「やっぱり！見たんだ！《見たって、何をだ？》ぅうぅ～／／／／／」

フェイトの追求を軽くあしらいながら自宅に戻って行った2人・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

そして、少し時間が経ち、フェイト達は朝食を取ってる1名を除いてだが・・。

　エース「ＺＺＺｚｚｚ・・・。」

エースは現在ソファーの上で、顔に雑誌を乗せて眠っている

　リンディ「今日は、エースどうするのかしら？」

　エイミイ「私も、聞きたいんですけどねぇ～・・。知らないかな？クロノ君」

エイミイはクロノに尋ねてみる、するとクロノは・・。

　クロノ「多分、ずっと寝てるんじゃないか？《えっ！？ずっと！？》ああ、エースの行う任務は激務な上に、エース自身も超過

密スケジュールだしな1年の中で休みと言ったら指で数える位しかないだろう《わっ、私が誘ってみてもいいかな？／／／》フェイトが？《うん》まぁ、いいが起きるかは分からないぞ？《やってみるよ》」

そう言って席を立ちソファーの上で寝てるエースに近づいて行くフェイトそして・・。

　フェイト「あの～・・・。もしよろしければ、今日私と一緒に行動しませんか？」

寝てるエースに、問いかけるとエースは雑誌を少し持ちあげて

　エース「・・・何処に行くの？《なのはの家に行こうかと》なのは？誰？《昨日来ていた栗色の髪をした子だよ》・・・あぁ、少し抜けてそうなあの子か」

　フェイト「えっと、どうかな？《何時から行くんだ？》えっと、今からなんだけど《じゃ、仕度をするから待ってろ》うん！／／／」

そして2人は、翠屋に向かった・・・。

＊＊＊

　エース「・・・・どうしてこうなった」

　？？？「さぁ！構えろ！」

何故かエースは若い男と道場で対峙していた・・。
その理由は・・・。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
翠屋は現在、若い男と、なのはが店番をしている

フェイト「お邪魔します《いらしゃいフェイトちゃん！》なのは！」

エース「・・・・(珍しいな、喫茶店の中にケーキ販売もしてんのか)《あのぅ〜》へ？僕の事？《はい♪》何？」

なのは「私、高町なのはって言います《知ってるそれで？》それでって、えっと・・。」

なのはは落ち少しずつ込んで行く・・・。

なのは「と、とりあえず、私部屋を片付けてくるよ、《私も手伝うよ！》」

なのはは気丈に振る舞いつつ部屋を片付けに行った

エース「・・・何だ？あいつ《おい貴様、少し来てもらおうか》はい？」

こうして、エースは若い男に道場へ連れて行かれた・・。
＊＊

？？？「来ないのなら此方からいくぞ！《速っ！》何とか受け止めたか・・・。」

エース「・・・っ・・（普通の人間の動きじゃないぞ！？一体どうなってんだ地球ってところは！ＡＡＡクラスやＳクラスの魔導師が居たり、普通の人間とは違う動きをする剣士が居たりと、地球という場所は化け物の巣窟なのかよ！？）《とりゃあ！》くっ・・」

？？？「くたばれ！《何をしてるの！お兄ちゃん！》なっ、なのは！」

？？？がエースに対して、高速とも思える程の斬撃をする、軌道が見えないエースは、勘と経験で何とか受け止めるが、エースの今の状態は魔力も使っていない只の少年、それと、若い男は青年明らかな力の差があり、どんどんとエースに刃が向かって行く。後少しで、エースに刃が触れる瞬間その時、道場の扉が勢いよく開きなのはの制止の声が道場内に響き渡る・・・。

エースが声の方を見ると、なのはと昨日の道を教えてくれた男が居たなのは「・・・何をしてるの？《こっ、これはだな》その人も私のお客さんだよ？その人と何故、真剣で戦ってるの？」

？？？「そうだぞ、恭也。何故客人に剣を向けているさっさと納めないか《分かりました》君、すまなかったね《いえ、大丈夫です》ん？君は確か・・。」

エース「昨日はありがとうございました」

士朗「やっぱりそうか！《お父さん知ってるの？》ああ、ち

ょっとね自己紹介がまだ、だったね私は、高町士朗、こっちで不貞腐れてるのが息子の恭也だ、あいさつをしなさい恭也《・・・分かりました》」

恭也「・・・高町恭也だ」

なのは「大丈夫？《何とか、しかし》どうしたの？」

エース「昨日の酔っ払いといい、地球という星は、えらく物騒な星という事が改めて分かった《そんなことないよぉ～》」

エースがそう言うと、なのはは腕を上下に振りながら否定する、そこに・・。

？？？「こういう、不良モドキも居るけど基本的には良い所よ《誰が不良モドキだ！》今みたいな行動をする人よ《うぐっ》」

？？？「そうよ、地球という星はとてもいい所よ♪」

そう言って、２人の女性が入って来る、１人はなのはに似ている

士朗「紹介しよう、妻の桃子と娘の美由希だ」

エース「どうも」

美由希「へぇ～綺麗な髪色ね～」

士朗「そう言えば君の名前を聞いていなかったな、教えてくれるかい？《はい》」

エースは姿勢を正して、

エース「エース・ハラオウンです。どうぞよろしくお願いします」

そして、桃子がエースへある事を言ってしまう・・・。

桃子「よろしくね♪」エースちゃん」《ダメだよお母さん！》あら？どうして」

なのは「エース君は」男の子」なんだよ！《嘘っ！》」

美由希「え！ホントに！？この顔だし髪も長いし、てっきり私も女の子と思ってた」

士朗「確かに、あの顔は見間違うな・・。あれ？エース君は・・・。あっ」

エース「・・・僕、強いもん、ひっく、泣かないもん、ひっく」

恭也となのは以外の人全てに、フルぼっこにされたエース・・・。エースが居ない事に気付き士朗が周りを見渡すと、道場の隅っこで体育座りをしながら顔を伏せて泣いてる、エースの姿があった・・・。

桃子「ごめんね、泣きやんでくれないかな？」

美由希「本当に、ごめんね～」

士朗「悪かったよ、エース君、頼むこの通りだ！」

士朗達が泣いているエースに必死に謝っている

エース「ひっく、泣いて、無いもん・・・。《お詫びに良い物着させてあげるから》ひっく・・ひっく、良い物？」

桃子「そっ、とっても良い物よ♪」

そいって、桃子は微笑む、そして暫らくして・・・・・。

＊＊＊

翠屋店内では・・。

客「ウェイターさんちょっと来て」

エース「どうされました？《このケーキ追加でお願い》ありがとうございます」

そう言って、ウェイター姿のエースが微笑むとお客の女性は・・。

客「ぐはぁっ・・・」

そう言って鼻血を出す女性客、この様子を見ていた桃子は・・。

桃子「思ってた以上ね、エース君の破壊力は、それに気遣いも出来て、礼儀正しく目上の人に対する態度、恭也なんかよりよっぽど役に立つわ♪」

　恭也「お母様に、そこまで言ってもらえるとぉぉぉ・・・」
恭也は涙を流しながら、食器を洗う・・。
＊＊
暫らくたって、客が居なくなると、桃子は・・。
　桃子「も～う、エース君可愛いわね～《あの～抱っこは恥しいんですが・・／／／》んも～、その顔もいいわね～《下ろして下さいっ》や～だ♪」
エースは桃子に抱きあげられた状態が恥しいのか手を上下に振るしかし桃子はそれを聞かない、その様子を見たなのはは・・・。
　なのは「・・・何んでだろう、娘としての危機を感じる・・。」
静かにそう呟くなのは・・・。
それに対して桃子は今度は抱っこからエースを膝の上に乗せると
　桃子「ねぇ、エース君《なっ、何でしょう／／／》家のなのはをお嫁さんにしない？」
　なのは「ふぇ！？お母さん！？／／／」
　フェイト「ムッ・・・」
　エース「じょ、冗談ですよね？／／／」

エースの発言に桃子は、頬笑みながら答える・・。
ちなみに、その時何故かフェイトの表情が険しかった・・。

桃子「冗談じゃないわよ♪エース君がなのはをお嫁さんに貰ってくれたらエース君は私の”息子”になるじゃな～い、ねっ貰ってよ～」

エース「ええっ、いや、そっ、その～、フェイト助けてくれよ」

エースの必死の頼みに、フェイトは・・・。

フェイト「知らないっ！《そっ、そんな～》」

桃子「なのはも、エース君ならいいわよね！」

なのは「ふぇ!?ええっと／／／／／」

なのはは顔を真っ赤にして下を向く、その時、恭也が・・。

恭也「俺は、許さんぞ！《黙りなさい、恭也》かっ、母さん・・・。」

桃子の静かなる一喝に言葉を止める恭也

桃子「士朗さんも、エース君なら、なのはのお婿さんにピッタリだと思わない?」

士朗「うん、確かにな、エース君なら、文句は無いな」

恭也「とっ、父さんまで、しかし！俺は《黙れ、恭也》とっ、父さん・・。」

士朗にも言われる恭也、その後に美由希が続く

美由希「エース君の将来的な容姿も安泰だし、エース君となのはの子供は自動的に可愛い系か、カッコイイ系のどちらかが決まってるし私も良いと思うよ」

恭也「何という言うおうが俺は《煩い、恭也》みっ、美由希まで・・。」

恭也は部屋の隅っこで体育座りを始めた・・・。

そして、店の中は、桃子がエースを膝の上に乗せてなのはの前で将来設計を話していく

それを顔を真っ赤にしながら下を向き話を聞いてる、なのはとエース・・。

美由希と士朗はその様子を微笑みながら見守っている・・。

一方のフェイトは、その様子を不貞腐れた顔でずっと見ている・・。

ちなみに恭也は部屋の隅っこで血の涙を流しながら顔を伏せて体育座りをしていた。

番外編「episode　zero」　vol.4

1月2日夜、現在エースとフェイトはなのはの自宅で夕食を取っている・・・。
ちなみに、エースの両サイドは、なのはとフェイトだ・・。

桃子「遠慮しないでね♪エース君」

物凄く良い笑顔でエースに語りかける桃子、それに対しエースは微妙な顔をする

エース「はぁ、分かりました桃子さん《違うわよ、エース君》へ？」

エースの桃子さんの発言に、真顔で突っ込む桃子そして桃子は・・・。

桃子「”お義母(かあ)さんよ”《えっ！？》だってゆくゆくは、なのはの旦那さんになるんだから今から慣れておいた方が良いでしょ？」

なのは「もう！お母さんってば！／／／／」

エース「かっ、考えておきっ《フンッ！》まっす！！（何をするんだ！フェイト）」

エースが桃子の答えに答えていると、答えの途中でフェイトがエースの足を思いっきり踏みつける、よほど痛かったのか、エースの顔は若干引きつっている

フェイト「・・・（知らないっ！）」

エース「（何怒ってんだよ・・・。）」

フェイト「フンッ！」

こういうやりとりがありながら食事は進んでいった・・・。

その頃、フェイトの自宅では・・・。

＊＊＊

こちらも、夕食をしていた

エイミイ「よほど、エース君が気に入ったんですね～桃子さん」

エイミイはおどけた顔でそう言うとリンディは

リンディ「そ～なのよ♪2人の着替えを届けに行った時に、将来、というか今すぐにでも、是非なのはちゃんをエースのお嫁さんにって薦められちゃった♪」

クロノ「またですか・・・。当然断って来たんですよね？《いいえ♪別の答え方をしたけど》・・・どう答えたんですか？」

リンディ「エースがなのはちゃんを気に入れば私は構わないですよって答えてきたわ！《威張らないで下さい！》さぁ、桃子さんどう出るかしら♪」

＊＊＊
夕食が終わり、リビングで寛ぐ士朗達・・。
エースは相変わらず両サイドを真っ赤な顔のなのはと不貞腐れた顔のフェイトで固められている・・。
そんな中、美由希がエースに質問をする

美由希「あの、エース君も魔導師なんだよね？《はい、そうですが》管理局だっけ、その管理局でのエース君の階級ってどのくらいなの？」

エース「僕は、今の階級は2等空尉ですよ」

士朗「その歳で、２等空尉とは恐れ入るよ・・。」

桃子「それって凄いんですか？士朗さん」

士朗「うん、エリートでもこうはいかないよ」

そう聞く桃子に士朗が答える

士朗がそう言うと、桃子はエースに向かい

桃子「エース君、なのは、いる？《おっ、お母さん！／／／／》何が不満なのよ、なのは」

美由希「まっ、お母さんは置いておくとして、エース君は、綺麗な髪色をしてるけどそれは、お父さん譲りなの？」

その美由希の質問にエースは、少し表情を暗くしながら静かに答える

エース「・・・この髪色は、恐らく生みの親の遺伝だと思います」

エースの答えに、士朗達は黙るが、なのはが続きを聞いてくる

なのは「えっと、それって《ちょっと、なのは！》」

慌てて、美由希がなのはを黙らせるが・・・。

エース「僕は、拾われっ子ですから、だから母さんや、兄さんとの血の繋がりはありませんよ《ごっごめんなさい》君が、謝る事じゃないよ次の質問とかは無いんですか？」

士朗「じゃあ、僕からいいかな《どうぞ》エース君は、普段どの様な仕事をしてるんだい《普段ですか？》うん」

エース「今の僕は、普段は遠くに逃げた犯罪者の追撃がメインですね、あとは戦争地域での先行して相手の数を減らす事や救援ですね」

士朗「・・・君みたいな子供がそこまでしなければ成らないほどに管理局は人手不足なのかい？《はい》」

エース「正直言って、猫の手も借りたいぐらいですフェイト達の用に魔力量がでかい人間は余り居ないのが現状ですし」

士朗「そうか、教えてくれてありがとう《いえ》」

桃子「さっ、”３人”共お風呂に入って来なさい」

エース「・・・・・３人って？《それは、勿論》なんですか？」

桃子「なのはとフェイトちゃんそれにエース君よ♪《ちょっと!？》さっ、行きなさい」

こうして、３人は一緒に入る事になってしまった・・・・。

＊＊

風呂場では・・・・・。

２人が今、身体洗ってる為、エースは湯船の中で逆方向を向いてる
３人共当然タオルを巻いている

エース「・・・・死にたい」

なのは「ごっ、ごめんねエース君」

エース「桃子さんの事な《その事じゃないの》じゃあ何？」

なのは「そ、その、《ああ、血の繋がりか》うん」

エース「だから気にしてないって言ったろ《でっ、でも》逆にそうやって何時までもそうされ方が僕には不愉快だ《えっ・・・。》それに僕は血の繋がりとか関係なくお母さんとはリンディさんだと思っている、だが血の繋がりの事をが気にならないと言えば嘘になる、だからもうその事のには、触れないでくれると嬉しい《分かったよ》それよりも、もういいか？さっさと出よう・・・っ！」

出ようとなのは達に言うと、背中に誰かが抱きつく感触がある・・・。

エースその人物の名前を言う

　エース「・・・何のつもりだ・・・。フェイト《何で分かったの？》なのは、先程からの反応を見てればそんな事したらリンゴ以上に赤くなってぶっ倒れそうだからな《ふ〜ん》」

　フェイト「なら、私は恥しがらないと？《違うのか？》違うもんっ！《ブオッ・・・・》」

　なのは「ふぇ、フェイトちゃん！？《フンッ！》だっ、大丈夫？エース君」

フェイトはエースの言葉に腹を立て、エースの頭を湯船に沈める

　エース「なっ、なんとか・・・。それより出ようか・・・。」

3人は風呂から出て、なのはの部屋に行くと、フェレットらしき動物が居た

＊＊＊

　？？？「遅かったね、なのは、フェイトそれに確か、エース」

　エース「・・・ペットが喋った《アハハ・・・。こう見えても人間なんだけど》ああ！兄さんが言っていたあの！《えっクロノが？》ええ確か、お名前がフェレット・モドキさんですよね？《違う

！≫えっ？」

ユーノ「ユーノ・スクライアだ、っちクロノの奴≪えっ？じゃあなのはの奴隷って言うのも≫絶対に違う！って言うかクロノは君になんて僕の事を言っていたんだ！？」

ユーノの質問にエースが答え始める・・。

エース「人間の姿は仮の姿で、動物形態が本体でデバイスをなのはに奪われた挙句に、デバイスを奪ったなのはに服従するも、影が薄い為に奪ったデバイスが始めからなのはの物みたいになっていって現在では、なのはのオマケ的な存在でマスコットにも成れない哀れなフェレットって聞いていますが・・。違うんですか？≪違う！≫じゃあ趣味が動物形態を利用した女体観測って言うのも≪そんなの違うに決まってる！≫じゃあ一体貴方は何ですか？」

エースのクロノから教えられたユーノの情報に苦笑いをしているなのはとフェイト

ユーノ「じゃあ改めて僕は、ユーノ・スクライア遺跡発掘をして流浪の旅をするスクライア一族の1人だこっちに来たのは、ある物の輸送中の事故でこの地球に、そのものが散らばってそれを回収する為に、この地球に来たのが最初かな≪ある物とは、ジュエルシードの事？≫え？知ってるの？」

エース「兄さんから、この事で地球に来れないかと頼まれたからね≪そうだったんだでもどうして来なかったんだい？≫僕はその時ちょうど、ある管理世界での暴動を抑える為にその最前線に行く途中だったからね、ジュエルシードの事件が終わってから兄さんからなのはとフェイトアルフの事を聞いたんだ≪じゃあ僕の事もそ

の時聞いたのか》え？ああ、ユーノ事は、ここに来る途中の通信でなのはの使い魔的な存在として聞いたんだけど・・・。」

ユーノ「あっ、アイツ〜〜〜！《お前、面白いな》えっ？」

エース「じゃあ改めて、僕はエース・ハラオウンだ」

ユーノ「再三だけど、ユーノ・スクライアだ、君とは気が合いそうだ《同感だ》」

この2人の様子見ていたなのはとフェイトは・・・。

なのは「（ユーノ君嬉しそうだね）」

フェイト「（うん、ここに来てからは男の子はクロノ位しかいないからね）」

なのは「（うん、男の子のお友達が出来てよかったねユーノ君）」

フェイト「（そうだね）」

こうして、ユーノとエースは暫らくの間、なのは達が居るのを忘れるくらい話し込んでいた

そして、時間が経っていき・・・・。

＊＊＊

現在、エースは・・・・。

なのは「ＺＺＺＺＺ」

フェイト「ＺＺＺＺ」

エース「（寝れん・・・。というかどうしてこうなる・・）」

エースの両隣りで寝てる２人・・・。

エース「（こいつ等、確かなのはのベッドで寝ていた筈だろう!?どうしてここに居るんだよ!?どんな寝像だおい!、ユーノも寝てるしどうすればいいんだよ・・・。）」

結局、この日エースは、一睡も出来なかった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

番外編「episode　zero」vol.5

1月3日、明け方、桜台登山道にて・・・・。

　ユーノ「じゃあ、やってみてエース《ああ》」

ユーノがそう言うとエースの掌サイズの魔法陣から1本の魔力チェーンが発生し、近くにあった木を縛りつける

　ユーノ「うん、流石だ、クロノが自慢するだけの事はあるね教え始めて1時間程度でチェーンバインドを覚えるなんて《先生が良いからな》そう言って貰えると嬉しいよ」

　エース「さて、もう少し練習するか《じゃあ見ておくよ》フッ、頼むよ先生」

そう言ってエースは再び、チェーンバインドの練習をし始めた・・。
その頃、翠屋では・・・。
＊＊

　桃子「よし、これで後は実印っとよし完璧！これで遂にエース君がうふふっ」

エースが魔法の練習をしている頃、桃子は何かを書いていた・・。
この不気味な笑いから察するにエースには言い事では無いのは確かだ・・。
そして、暫らくして美由希達が朝稽古から戻って来た何故かエース

を抱きかかえている

　桃子「美由希、どうしてエース君を抱きかかえてるの？」

　美由希「エース君も魔法の練習をして汗かいてるから、一緒にお風呂入ろうと思って
《私も、一緒に入るわ！》えっ？まぁ良いけど」

　エース「よくありません！放して下さい！《ダメ～♪》（ユーノ助けてくれ！）」

　ユーノ「（ゴメン、エース僕は・・、無力だ・・・。）《そっ、そんな・・。》」

　桃子「さっ、エース君綺麗になろうね♪《いえ、大丈夫です！》遠慮しなくていいわ～」

そして、エースは風呂場に強引に連れて行かれ・・。

＊＊＊

　桃子「さぁ、エース君♪」

　美由希「綺麗になろうね♪」

桃子と美由希は手をワキワキとさせながらエースに迫っていく・・・。

　エース「あっ、あのぉ・・・いっ・・、いやあああああああ

あああ！！！！」

エースは2人に身体の隅々まで綺麗にされた、そう隅々まで・・・。

＊＊＊

そして朝食時、桃子と美由希は笑顔でエースは顔を赤くして下を向いてる・・・。

なのは「どうしたの？エース君《もう、お婿に行けない》は？」

桃子「それなら大丈夫よ！なのはを行かせるから！《お母さん！／／／》さっ、エース君ここに記入をして《・・何です？これは》あっ、アンケートよ」

恭也「そっ、それは！《黙らないと、SI☆TU☆KEをするわよ？恭也》ひいいいい！」

そう言って恭也を黙らせた後、エースに、謎の紙に記入を促す桃子

エース「・・・何故上の部分が少し隠しているんですか？《さっ、さあ？何の事かしら》

なのはこれなんて読むんだ？《どれ～？》」

なのは「こんいんとど・・・。おっ、お母さん！《っち》／／／／／／／」

フェイト「・・・フンッ！《っ！（痛い・・）》」

桃子「全く、なのはは直ぐに恥しがって・・。そうだ！ねえエース君！美由希はどう？《ふぇ？》もう、ぶっちゃけて言えばエース君が息子に欲しい訳だし」

エース「ぶっちゃけ過ぎです！桃子さん《お義母さんよ！》それに美由希さんだって迷惑でしょうし・・。」

エースがそう言って美由希を見ると、美由希はエースにとってはよくない反応をする

美由希「私は別にいいわよ？《でっ、でも僕とじゃ歳が離れすぎじゃ・・。》歳っても7歳しか違わないじゃないそんなに離れてないしエース君なら将来安泰そうだし」

なのは　フェイト「ふんっ！《ぐっ！・・。》」

エース「ごっ、ご遠慮します・・。《そっか、残念♪》・・・痛い・・。」

美由希がエースに迫って行くとフェイトとなのはの2人がエースの足の片方ずつ、つまり両足を一気に踏みつける、これには流石のエースも声を上げてしまった・・・。

この踏みつけられた理由をエースが知る訳は無かった・・。

そして、色々あった朝食が済んで、エース達は、なのはとフェイトの友人の家に行く事になっていた為に高町家を後にする事になった・・・。

余談だが、この時桃子はエースを泣きながら掴んで中々放さなかった・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊
そして、大きな屋敷に着く、3人と1匹？
屋敷の中に入って行くと、金髪の女の子と、紫に近い髪をした女の子そして・・。
シグナム達も此処に居た・・・。

？？？「（フェイトちゃん達の間にいる人誰だろう・・・。かっ、カッコイイ・・／／／）」

？？？はエースを見た瞬間に胸をときめかせる要するに、一目惚れだ・・。
？？？に一目惚れされた、エースは、険しい表情で、シグナムを見ながら何時でも戦闘が出来る様に待機状態のＳ２Ｕ？を持っている、エースの表情を見てオロオロするなのはとフェイト

エース「・・・なのは、フェイトお前達は、僕を怒らすために此処に来たのか？《ちっ、違うよ！》何時でも良いぞ？烈火の将」

なのは「おっ、落ちつこうよ！エース君」

フェイト「そっ、そうだよ！」

ユーノ「２人の言うとおり落ちつきなよ、エース」

なのは達の説得で渋々Ｓ２Ｕ？をしまうエース、だが表情は崩れない・・。
そしてエースは暫らくシグナムを見た後、急になのは達に背を向ける歩き出す

なのは「何処行くの？エース君《帰る》ええ！？」

エース「こいつ等と居るとまた襲われかねないし《待って下さい！》誰？」

エースが帰ろうとすると、後ろから悲痛な声でエースに制止を掛ける少女の姿があった
その少女の声に足を止めて振り向き少女を見るエース、そして少女が語り出す

はやて「私は、八神はやてと言います《それで？》クロノ君からエース君が私や、私の家族へ何をしてくれたか聞きました、それでエース君に謝罪とお礼が言いたくて《何で君が先なんだ？》へっ？」

エース「・・・謝罪をするのなら何故やった本人が八神よりも先にしないんだ？」

エースがそう言うと静かに、シグナムがエースの前に来て頭を下げながら謝罪をする

シグナム「この前は、剣を向けて済まなかった・・。そして主はやてと我らへのご厚意に深く感謝します《反省してるならいいよ》」

エースがシグナムを許すとそれに続き、他のヴォルケンリッター来て順に頭を下げる

ヴィータ「はやての事と私達の事どうもありがとうございます」

シャマル「ほんとうに何てお礼を言ったらいいか分かりません」

ザフィーラ「感謝する、」

そして、最後にはやてがエースの前に来て、エースに頭を下げる

はやて「私と、私の家族をへの事なんとお礼を言ったらいいか分かりません、本当に

ありがとうございます《八神、今、守護騎士達と居られて満足か？》はい！とっても満足です！《そっか、ならいいよ》え？」

エース「そう思ってくれるなら、無理した甲斐があると言うものさ《あのぉ～》ん？」

エースがはやてと話していると後ろから、紫に近い髪をした女の子が話しかけてくる

すずか「私は、月村すずか君は？《僕はエース・ハラオウンだ》エース君だね／／／」

アリサ「私は、アリサ・バニングスよ《あっそ》何よその言い方は！喧嘩売ってんの？」

アリサがエースに突っかかっていき、アリサはエースの胸倉を掴む・・。

胸倉を掴まれたエースはアリサを見ながら言葉を発する

エース「やはり地球は野蛮な星だ《なによアンタは！》僕は僕だ、ゴリラ女」

アリサ「ごっ、ゴリラ女ですって!?《ああ、ピッタリだろ?》違うわよ!《止めようよアリサちゃん》だってコイツが・・。」

互いに譲る気の無い、アリサとエース、そこにすずかが割って入り、エースとアリサを引き剥がして、すずかはエースの隣でアリサに注意する

すずか「幾らなんでも、カッかし過ぎだよ、アリサちゃん!《悪かったわよ》ごめんね、エース君、気を悪くしないでね《まぁ、良いけど》ありがとう、エース君／／／」

少し、顔を赤くしたすずかは更に、エースに話しかける

すずか「奥の方で、お茶の用意をしてあるんだどうかな?《まぁ、良いけど・・》じゃあ行こっか♪《おっ、おいっ》早く、早くっ《引っ張んなよ》こっちだよ♪／／／／」

すずかは、エースの腕に抱きつくとお茶の用意してある部屋にエースを引っ張りながら行ってしまった、他のメンバーを残して・・・。

この、すずかの行動に一同は・・・。

アリサ「なっ、何アレ・・・。」

はやて「私ら、忘れられてへんか?」

シグナム「恐らく・・。」

ヴィータ「もういねえ・・。」

シャマル「若さね～♪」

ザフィーラ「速いな・・。」

ポカンとしてるこのメンバーとは違う2人は・・。

なのは「・・・、一応私お嫁さん候補なのに、いい度胸だよねエース君」

フェイト「エースってば、すずかにデレデレしちゃって」

取り残された、メンバー達はとりあえず、すずか達を追って行った・・・・・・・・・・・・・・・。

番外編「episode　zero」vol.6

部屋に招待されたエース達だが・・・。

すずか「えっと、エース君は何歳なの？《１０才》私と１つ違いか～／／／／」

楽しそうに、エースに話しかける、すずか、しかしその一方で・・・。

なのは「・・・随分と楽しそうだね、エース君・・。」

フェイト「・・・そうだね、と～っても嬉しそうだね」

鬼の形相でエースとすずかを見る２人、この２人の様子に他のメンバーは・・・。

シグナム「すっ、凄まじい殺気だ・・。」

ヴィータ「はっ、はやて～」

はやて「あっ、あかんで！ヴィータ・・、今なのはちゃん達に近づいたら殺されるで！」

シャマル「これが・・。３角関係！」

アリサ「まるで、天国と地獄ね・・・。（あのエースって奴・・。最初はムカついたけど、以外に礼儀正しいし見てれば根はイイ奴ってのが分かるわね、あっ、後結構、私好みの顔だし・・。もう少

し仲良くなってみようかしら・・。今度、家にも誘ってみようかしら）／／／」

ザフィーラ「（・・・先に、言われた）」

そして再び、エース達は・・・。

すずか「管理局って忙しいの？《かなりね》ふ～ん、そうなんだ～／／／／」

エース「何これ？、《それは、苺大福だよ》イチゴダイフク？」

すずか「食べてみれば分かるよ《ふ～ん》どう？」

エースは苺大福を口の中に入れて、どんどん表情が変わって行き・・。

エース「むっちゃ美味しい！、ありがとう”すずか”！／／」

エースは、すずかに向けて満面の笑みを浮かべる・・。

すずか「よっ、喜んでくれて何よりだよ（あぁ、幸せ・・・。）／／／／」

すずかが喜ぶと言う事は・・・、この2人の機嫌が悪くなると言う事だ・・・。

なのは「・・・、婚約者候補の私にもそんな顔しなかったのに・・。」

フェイト「・・・、一緒に住んでる私にもしなかったよ」

そして、すずかは更に会話を続ける、

　すずか「あのね、エース君はどんな女性（ひと）が好きなタイプなの？／／／」

　なのは・フェイト『ピクッ・・。』

　エース「好みのタイプ？《うっ、うん／／／》そうだな～・・。一言で言えば優しい女性（ひと）かな、《優しい人・・・。》後、紅茶がよく似合う女性かな《へ？》ふふっ」

＊＊

ちょうどその時、聖王教会にてカリムがくしゃみをする

　カリム「へくしゅ、へくしゅ！やだ、風邪かしら・・・。風邪をひいたらエース看病してくれるかしら？うふふっ・・・。」

＊＊

すずかは更に、エースへの質問をする

　すずか「それじゃあ次に、エース君が彼女にしてほしい事とかある？／／／」

　エース「何でそんな事を聞くんだ？《ちょ、ちょっと気になって／／／》ふ～ん、特には、無いけど・・・。あえて言うなら緑茶

＋砂糖入りかな《りょ、緑茶に砂糖！？》うん、とっても美味しいんだよ《がっ、頑張るね！》何を？」

なのは「・・・帰ったらやってみよう」

フェイト「・・・私も」

すずか「えっ、エース君は今、好きな人は居るの？」

すずかが恐る恐る、エースに好きな人が居るのかを聞いてみる・・。無論なのは達も聞き耳を立てている、その、すずかの質問にエースは・・。

エース「・・・・・居るよ」

すずか「えっ・・。そっ・・・、そうなんだ・・・。」

すずかは、エースの答えに一瞬思考が停止した、だがエースの回答は続く・・。

エース「居るけど、気付かれてない《えっ？》要するに片思いだよ・・・。」

エースは少し寂しげに答える、そしてすずかは・・。

すずか「そっ、そっか（エース君には悪いけど、よかった・・。これで私にもチャンスがあるって事だよね、私がいっぱいい〜っぱいアタックしてその女の人の事を忘れさせてあげるよ！エース君♪）」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その頃、聖王教会ではカリムがある心配をしていた・・・。

　カリム「心配だわ・・・。エースが女の子を落としていないか・・・。管理局では、エースは人気があるらしいし、特に若い女性に・・・・。　告白しようかしら・・」

暫らく黙るカリム、そして自身がエースに告白くする姿を思い浮かべると・・。

　カリム「やっぱ、ムリムリ・・・・。無理よね・・・・。エースが私の事、好きな可能性は余り無いと思うし・・・、告白したら私とエースの関係が無くなってしまいそうだし、それだけは絶対に嫌だから・・・。はぁ・・。でも、エースって誰が好きなのかしら？確か、２週間前に聞い時は・・・・・」

カリムは２週間前にエースに尋ねた時を思い出してみる・・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　エース「は？僕の好きな女性(ひと)が知りたい？」

　カリム「はい！」

　エース「・・・お前、それ、本気で言ってんのか？《勿論です！！》はぁ・・・、まぁ、分かってたけどさ・・・。《なっ、何ですか？》別に！おまえの得意の予言で当ててみろ！ふんっ！」

エースはカリムの質問に怒って席を立つ、そしてカリムに背を向け

て歩き出す

カリム「あっ、あのぅ・・、それで好きな女性(ひと)は《あんっ？》」

更に聞いてくるカリムに、エースは立ち止まってカリムの方を黙って見つめ、思考をする

エース「・・・（好きな女性(ヤツ)は、お前だよ！！お前！！と言うか気付けよ！！！僕なりに、かなり猛アタックとかしたのに・・・。結果がこの反応だよ！！僕は、カリムの口から好きという言葉が聞きたくて、僕なりに頑張ってアタックしたのに・・・。アタック結果は”僕の好きな女性(ひと)が知りたい”だってよ！！気付いてなかったのかよ！！なんか泣けてきた・・・・・・、まだ始まったばかりだ・・、と思いたい・・、でも2年経って結果がこれか先が長く険しそうだな・・・。でも今は、帰る！！）フンッ！」

今まで、エースは、彼なりに猛烈にアタックしたのだが方法とかが地味なのだ・・。

その方法は、花を贈ったり、カリムの執務室を訪ねて話をするとかだ・・。

しかし、これでもエースにとっては猛烈なアタックなのだが、カリムには全く気付かれていない・・。

ちなみにエースは、自宅にとか自身の執務室よりもカリムの執務室に居る事の方が断然に多いのだ・・。

つまり、エースは、それだけカリムに会いにきている、時には徹夜明けでも来るといった具合だ。だがエースは多忙なために会いに来るといっても、最短でも必ず2、3週間の開が出来てしまうのが現状だ・・・。

再び、カリムに背を向け歩き出すエース、カリムの質問にも自然と怒気が入るエース

　カリム「どっ、何処行くんですか？《し！ご！と！》あうっ・・。《じゃあな！》あっ・・。」

カリムはエースが怒っている為に止める事が出来なかった・・。
そして、バンッと勢いよくドアを閉めて出て行ったエース、残されたカリムは・・・。

　カリム「どっ、どうして怒ったんでしょうか・・・。それよりも嫌いになって無いと良いけど・・。後で、ちゃんと謝っておこう」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　カリム「また聞いて、怒らせるのも嫌だし・・、う～ん、一体誰なんでしょう・・。」

自身がその人物だとは、思いもしないカリムだった・・・。
＊＊
次に、すずかは質問を止めて、エースの隣に椅子を持っていく・・・。

そして椅子に座ってケーキを取って・・・。

　エース「どうした？《これも、美味しいんだよ、はい》へ？」

　すずか「はい、ど～ぞ《えっと、その・・。／／／》・・食べてくれないの？《いっ、頂きます》ど～ぞ」

そう、これは！はいあ～んの状態だ・・。

エースはフェイト達の視線を気にしながらも、自らの好きな物（甘いもの）に目がくらみ、すずかの行為を受け取るエース・・・、勿論この2人の行為を快く思わない、2人は・・。
怒りを通り越して、すずかとエースを見ながらずっと微笑んでいた・・。
他のメンバーは、お互いに抱きあい肩を震わせていた・・・。
そしてすずかの行為は更に続いていく・・・。

すずか「じゃあ、次はこれね、はい♪ど～ぞ《頂きます／／／》どう、美味しい？《うん／／》じゃあ、私にも食べさせて♪《え！？》あ～《・・・どうぞ》はむ・・・。うん美味しい♪／／／」

エースとすずかは、お互いに食べ比べをしながら、ケーキを食べていった・・・。
そして時間が経っていき、夕方になったところでお開きとなり帰る事になったのだが・・・。

すずか「私待ってるから！《あっ、ありがとう？》また来てくれるって信じてるから！」

エースの手を握って顔を真正面から見ながら言う、すずか
そのすずかに対しエースは若干引き気味だ、おまけにフェイト達が後ろから睨んでいる

エース「そっ、そろそろ帰らないといけないからごめんね《あっ・・。》」

そう言って、エースはすずかの手を離して、背を向けて歩いて行く・・・。
その後を追って行く、フェイトとなのはその時すずかに

すずか「なのはちゃん、フェイトちゃん、このまま私が突っ走ってエース君を貰う予定だから、余りエース君を誘惑しないでね」

そう言われる、その言葉になのは達は・・・。

　なのは「予定は、予定でしょ？すずかちゃん」

　フェイト「もしかしたら”私が！”、エースのお嫁さんになるかもしれないし・・・。」

そう言って、すずかに反論し、3人は・・・・。

　なのは　フェイト　すずか「「「うふふふふ・・・・。」」」

3人は、不気味に笑い合った・・。

そして、エース達は月村邸を後にし、それぞれの家に”無言”で帰って行った・・。

＊＊＊

家に、帰ってからもエースはフェイトに口を聞いてもらえなかった・・・。

そして夜、フェイトとエースが眠って暫らく立った時・・・。

　S2U？「The　emergency　communications.」

エースに本局から、緊急通信が来る

エース「・・・はい《休暇中すみません》いえ」

オペレーター「（エース・ハラオウン2等空尉、本局より緊急出動の要請です）」

エース「場所は？《＊＊＊＊の＊＊＊＊です》今から急行しますが、現在、第97管理外世界に来ていて直ぐには着けませんが良いですか？《はい、それは承知しておりますですがなるべく急いで下さい》了解です」

エースは通信を切ると、服を着替え始める・・・。

そして、部屋を出るエース、するとリビングでは、エイミイ達が何かを話していた・・・。

エイミイ「じゃあ家は、クロノ君と艦長と私とフェイトちゃんとアルフそして・・・」

エイミイが服を着替えてるエースに気付く

エイミイ「・・もう行くの？《はい》そっか・・。」

クロノ「今度は、何時頃までなんだ？」

エース「いきなり呼ばれたので正直分かりません《そうか》」

アルフ「フェイトには、会って行かないのかい？」

エース「もう、寝てるんだから起こしたら可哀そうだろ《そうかい》」

最後に、リンディは立ち上がってエースに近づき、そっとエースを抱きしめる・・・。
そして、エースに語り出す

　リンディ「次もちゃんと無事に帰って来てね・・・。エース」

　エース「はい" 母さん"」

少し、抱きしめあって、エースはリンディを離して・・・。

　エース「行ってきます、母さん」

　リンディ「行ってらしゃい、エース」

そしてエースは静かに家を出て行って任務に向かった・・・。
＊＊＊
翌日、リンディ以外が朝食を取っているとフェイトがある事に気付く・・・。

　フェイト「ねぇ、エイミイ、エースは？《えっ、えっと・・・。》エイミイ？」

エイミイが困ってる顔をしてると、クロノがフェイトの質問に答える

　クロノ「エースは昨日の夜に、本局から緊急出動の要請があってミッドに戻って行った《え？》だから此処には居ない」

　フェイト「そっ、そんな・・・、何で！起こしてくれなかった

の！？《エースが寝てるのに起こしたら可哀そうだからと言ったからだ》そんな・・・。」

フェイトの悲しみに満ちた表情を浮かべる、それを見たクロノはフェイトにある事を言う

　クロノ「自分だけ悲しいと思うな、フェイト《えっ？》僕達だって辛いんだ、自分の弟を危険な場所だと知っていて行かせなければならないんだぞ！・・・それに・・・。」

そう言い終わると、クロノはリビングへ向かって行き静かに新聞を見始める・・・。

次に、エイミイがフェイトに語りかける

　エイミイ「私だって、エース君は、弟みたいなものだからね・・・。正直辛いよでも1番辛い人が居る事を私とクロノ君は知ってるから《あっ・・。》だから私達は我慢してるんだよ・・。」

その人物が、誰か直ぐに分かったフェイトは、黙って朝食をの続きを食べ始めた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

リンディはフェイトが黙って朝食をの続きを食べ始めた頃、起きてはいたが・・。

部屋を出る事が出来なかった、その理由は・・。

　リンディ「うっ、うっ・・・。やだ私ったら・・、これじゃあまだ起きれないじゃない・・・。ううっ・・、くっ・・・。わっ分かっていても、やっぱりダメみたいね私、軍人向いて無いかも・・」

リンディは昨日の夜からずっと泣き続けていた、理由は無論エースの母親として・・・。
朝食を終えて、暫らく経ってから起きて来た、顔は何時もの表情を保っていたが、目が赤かった事は、皆気付いていたがそこに触れずに黙っていた・・・。
＊＊＊
緊急出動任務が終わって、ミッドチルダの自宅に帰る途中の道でエースはある物？を発見した・・・。

　エース「・・・・・何だ、あれは？」
エースはある物？に近づきそして、近くにあった木の棒を持って突いてみるすると・・。
　？？？「お腹すいた～～～《うおぅ、動いた！》たっ、食べ物～～～～」
　エース「放って置くのも迷惑だし取りあえず何か食わせてやるか・・・。」
そう言ってエースは行き倒れてた人物を背負って自分の家に帰宅した・・・・。
この行き倒れた人物が自身の専用デバイスを作ってくれる事などエ

ースはこの時夢にも思わなかった・・・・・・・・・・・・・・。

総合ＰＶ２０万アクセス記念、エースの子供の時代

某日　今日は、比較的に仕事も少なく、現在は昼休みでエース以外の人達が、昼食をしていた。

ギンガ「あれ？　エースさんはいないんですか？」

ギンガはエースが居ない事に疑問を感じる　ギンガの疑問にはやてが答える

はやて「エース君は今、第八陸士訓練校で本職中や」

ギンガ「あぁ　なるほど」

ギンガが納得していると、　エリオがこんな事を言う

エリオ「そういえば、エースさんって何時から教官だったんですか？」

このエリオの問いに、一同は

スバル「そういえば、何時頃からだろう？」

スバルは考え出す　次にティアナが

ティアナ「兄さんが最初の生徒って言ってたから６年前・・・エースさんが１４才の頃？」

困惑の表情を浮かべる、ティアナに　フェイトが

　フェイト「違うよ、ティアナ『え？』エースは、私と初めて会った時にはもう教導官の資格を持ってたから、その時の事はなのはの方が詳しいかな」

フェイトの振りに　なのは、は少し驚きながらも答える

　なのは「ふぇ！？　うっうん、確かにエース君は私が１２才の頃には教導資格を持ってたよ、私が教導の資格を取ろうとした時は試験対策の問題を作ってくれて、本番の時に資格試験の問題が８割ぐらいがエース君の対策問題から出たのはおどろいたなぁ～　そういえばエース君の小さい子供の頃ってどんな子だったんだろう？『知りたい？』ふぇ！？　リンディさん！」

　フェイト「母さん！？」

　リンディ「は～い、エースにちょっとお願いがあって来たんだけど、今はいないからまぁいいわ、あの子の子供の頃の事、聞きたい？『是非！』ふふ・・・わかったわ・・・・。」

リンディはエースの過去を話始める・・・・・・・・・・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　『小さい頃のエースは凄いとしか言えなかったわね・・・・。』

そういうリンディに一同は疑問の顔を浮かべていた　再度、リンデ

ィがエースの過去を語り出す。　エースが5歳の頃自宅の庭で、杖型の玩具デバイスで遊んでいた時に、それが起こる

エース「う～ん　えい！『ボウッ！』うわぁ！！ねぇ！お兄ちゃん！　お母さん！見て！」

クロノ「なんだ？　エー・・・・・・・。」

リンディ「どうしたの？エース・・・・・・・。」

家から出て来た、クロノとリンディは絶句した。　エースに持たせた、玩具デバイスから業火の如くの炎が点いているのだ・・・。そして足元には、ミッド式とは違う三角形の魔法陣が展開していた

エース「と～お！『ピキーン！』わぁ！！　こおちゃった！『！？』」

更にエースが杖を振ると次は、杖が凍ってしまった。　これに驚愕の顔をするリンディとクロノ、そして驚愕の顔を保ちながらリンディが呟いた

リンディ「魔力変換資質・・・。しかも炎と凍結の2種類・・・。そして、あの魔法陣は・・・。ベルカ式」

『これが、あの子が初めて魔法を使った日ね・・・。』

＊＊＊

なのは「え？　じゃあエース君は偶然に魔法を発動させたんですか！？」

少し、途惑いながら、なのはがリンディに聞く　それにリンディは

リンディ「そうなのよ、それから魔力量を測定する為に、私が本局に連れて行ったんだけど・・・・。」

リンディの顔が暗くなる、それを見る一同が、リンディに聞く

なのは「どっ　どうしたんですか？」

フェイト「何か、大変な事に？」

はやて「それとも・・・・」

シグナム「別の何かが・・・・・」

リンディの口が開き、緊張して、リンディの言葉を聞く

リンディ「エースが喉が渇いたって言ったから自動販売機で飲み物を買う時のボタンを押して、エースの方を向くと、エースはいなくなって・・・・。　あの子、迷子になったのよ・・・。」

暗い顔でそういう、リンディ　それに一同は

一同「あははは・・・・・」

苦笑いをするしかなかった　そして話を続ける

リンディ「迷子のエースを探していると、女性隊員達が食堂でえらく集まっていたのよ・・・。」

はやて「まぁ　まさか～・・・。」

リンディ「そのまさかよ・・・。　『やっぱり・・・。』幸せそうな顔でチョコパフェを食べてるエースがいたのよ・・・。」

そして当時の状況を言い始める　リンディ

＊＊

『その時の女性隊員達はこう言ってたらしいわ・・・。』

女性隊員Ａ「ぼく～　いくつかな？」

頬笑みながら、女性隊員Ａがエースに年をたずねると　エースは右手で指を折りながら自分の年を数え

エース「５さい！『かわいいい～！』」

満面の笑みでいうエース　それに女性隊員は黄色い声で反応する別の女性隊員が言葉を掛ける

女性隊員Ｂ「なにか欲しいものある？」

女性隊員Ｂがエースに欲しいものを尋ねると　エースは少し困惑した表情で考え、思いついたのか笑顔で答える

エース「ちょこぱふぇ～『待っててね！』　うん！」

女性隊員Ｂは給仕の男の人に物凄い剣幕で詰め寄る

女性隊員Ｂ「ちょっと！『なっ、何でしょう・・・。』今すぐにチョコパフェを作りなさい」

女性隊員Ｂがそう言うと　給仕の男の人はかなりビビった顔でこう答える

給仕の男「ちょ　チョコパフェはメニューに無いんですが・・『作れ』・・・はい？『今すぐ！作りなさい！！』　はい！」

給仕の男は涙を流しながら無償（男の自腹）でチョコパフェを作った、この日以来、本局の食堂に、チョコパフェのメニューが追加された。この本局のチョコパフェは現在は、リンディとエースの専用メニューになってたりする

女性隊員Ｂ「はい！チョコパフェよ！『ありがと～！お姉ちゃん！』　もう！かわいいわね！チョコパフェぐらい、いくらでも頼んであげるわよ！『ありがと～！』」

ところでチョコパフェ食ってるエースはある人物の膝の上に座ってる

ミゼット「どう？美味しい？『うん！』ところで、ママのお名前言える？『うん！お母さんは、リンディ・ハラオウンって言うの！』じゃあ、ボクのお名前は？『エース・ハラオウン　５さい！』そう、よくいえたわね『えへへ～』『エース！』あら？、お母さんよ」

リンディは現在のエースの状況を見て顔が青くなっていく、エースは伝説の三提督のミゼットの膝の上に座り呑気にチョコパフェを食っているからだ

リンディ「申し訳ありません！　ほら！エースも『ごめんなさい』『いいのよ中々面白かったし、じゃあ私はこれで』」

そう言ってミゼットが去っていった

＊＊＊

リンディ「これが、エースが初めて本局に来た話よ・・・。」

リンディは疲れた顔をしている　そこになのはが

なのは「5歳のエース君の容姿ってどんな感じだったんですか？」

フェイト「あ、私も気になる」

はやて「私もや」

そう言い始めるなのは達　そこでリンディが聞いてみる

リンディ「見てみる？『お願いします！』・・・はい、これが5歳の頃のエースよ『はぁ！？』」

一同は、リンディが開いた画像データを見る、そして驚愕の顔になる

ティアナ「可愛い・・・。／／／」

少し顔を赤くする、ティアナ

スバル「女性隊員の気持ちが分かる気がする・・・。／／／／」

スバルもティアナと同様に少し顔を赤くする

ローゼ「・・・さて、媚薬を買いに行こう／／／」

ローゼは顔を赤くして何処に去っていった。

ギンガ「（エースさんのとの子供は確実に可愛くなる、だったr・・・・・・・・）／／／／」

ギンガは顔を赤くして妄想を始めていた

なのは「ここまでとはね・・・・」

フェイト「うん・・・。」

はやて「今でも、少し女性に間違われるくらいやからな・・・・・。」

改めて、画像を見る3人娘そこには、リンディに抱っこされてる、目が大きく、女顔の、小さな子供の姿があった、その容姿は、一般の女の子よりも遥かに可愛い　そして再度、リンディが言い始める

リンディ「そういえば、先程あの子が何時、教導資格を取ったかを言ってなかったかしら『はい、言ってました。』そう、あの子が資格を取ったのが確か・・・。９歳のはずよ『９歳!?』えぇ」

なのは「は～　凄いんだね～『そんな事は無いわよ』　え?」

リンディの言葉に少し驚く、なのは　更に、リンディ真剣な顔で言葉を続ける

リンディ「エースは、確かに天才の部類に入るでしょう、実際、クロノもエースは凄い魔導師になるってそう断言してたし、でもそれ以上にあの子は、凄まじい努力を重ねたのよ。大人でも驚くほど『人の過去を勝手に話すのはどうかと思いますよ?』」

リンディの後ろから声が聞こえる　それに反応するリンディ

リンディ「はっ　早かったのね・・・。エース・・・。『いえいえ、それほどでも』」

エース「それよりも、本局の方に戻らなくていいんですか?『今すぐ戻ります!』やれやれ」

リンディは走って去っていった

なのは「エース君もう終わったの?『いや、この後は、Ｓｔ・ヒルデ魔法学院に講義に行く此処に寄ったのは忘れ物をしたからだ』ふ～ん、頑張ってね!」

ウインクしながら応援するなのはにエースは

エース「・・・・お前らも何時まで、昼飯を食ってるんだ？」

なのは達が時刻を見ると、昼食時間をかなり過ぎていた『今すぐ、仕事します！！』そう言って散らばる一同、その様子を見て、エースは溜め息をついていた・・・・・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外、フェイト誘拐事件（序章）

ローゼが来る前日、機動六課内、なのはとフェイトの自室で、フェイトはローゼに恨まれる事になる事件を思い出していた・・・。

　フェイト「（彼女来るんだよね、勿論、私の事恨んだままだよね、あの事件以来・・。）」

フェイトは過去のある事を思い出す。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

事件の日、フェイトは、午前中ショッピングモールにて、１人で買い物に来ていた。

　フェイト「（またメール返して来ない、エース・・。心配だから必ず返して言っておいたのに、たまに返信が来ても、そうか・・。とか、よかったな・・。だけだもんねもう少し何か言ってくれても良いのに・・・。）」

フェイトの少し後を男女のカップルが後を付けている、男女は、フェイトに聞こえないように小声で話し始める・・。

　男「・・・あれが、フェイト・Ｔ・ハラオウンか？」

　女「ああ、そうだよ・・。けど、大丈夫かねぇ？」

　男「何がだ？」

女「あの女、金の閃光という二つ名がある猛者だろ？　私達だけで捕まえられるのかと思ってね・・。」

男「それは、タイミングさえ良ければ問題無いだろう・・。」

女「どうして、言いきれるのさ？」

男「それは、あの女が管理局員だからだ。局員が街中で魔法を使う事は出来ないだろう？それよりも問題なのは・・・」

女「・・・白銀の炎翼かい？」

男「ああ、アイツは危険すぎる」

女「確かにね、戦艦を叩き斬ったりする奴だからね、でも今、白銀の炎翼は別任務でミッドに居ないから大丈夫だよ・・。」

その頃、エースはとある、違法研究施設の調査及び、破壊任務に来ていた

＊＊

エース「此処だな？フレイム」

エースは目標の場所かフレイムに聞く　それに答えて、更に語り出すフレイム

フレイム「はい、しかしマスター、何もアストレア姉さんや炎華姉さんのメンテナンス中に任務をしなくても良いじゃないですか・

・・。」

心配をするフレイムにエースは

エース「フレイム心配しなくても大丈夫だ、ちゃんとナイフと剣もあるし」

それに対しフレイムは未だ心配なのか言葉を続ける

フレイム「しかし、マスター、その剣はセシィさんがこの任務の為の応急処置で作った物でマスターの本気の技に耐える事は出来ないって言ってたじゃあないですか、それに私のＳ２ビットも全て調整中・・。心配にもなりますよ・・。」

エース「なら、さっさと終わらして帰ろうか、フレイム」

フレイム「・・・Ｊａ.」

そして、施設内に入って行こうとするエース、その時セシィから通信が入る

セシィ「（ちょっといい？エース）」

エース「何だ？今は任務中だぞ？」

セシィ「（うん、知ってるだけどこれを見て《こっ　これは！？》）」

エースはセシィのある物を見て驚愕した、そこには

セシィ「（リンディ・ハラオウン失脚計画、そしてこの計画の最重要部分に・・・。）」

エース「・・・フェイト・T・ハラオウン誘拐計画・・・。）」

セシィ「（恐らく近い内に、するわね≪・・・恐らく、今日だ≫　嘘！？）」

エース「（今日はフェイトは休日でミッドのショッピングモールに1人でウィンドウショッピングをすると言っていた、クロノ兄さんはクラウディアで航行任務中、母さんも本局で現在会議中やるなら今日だ・・・。すまないセシィ通信を切るぞ」

セシィ「（ちょ・・・・・・）」

エースはセシィとの通信を強引に切り　そしてある人物に連絡を取る

ゲンヤ「（どうした？　エース）」

エース「お願いが、あります・・・。」

ゲンヤ「（・・・聞こうか）」

エース「実は・・・。」

ゲンヤはエースの真剣な顔に、ゲンヤ自身も真剣になりエースの懇願を聞き始める

ゲンヤ「（分かった、今すぐに俺の信頼できる奴をその違法研究施設に向かわせる、お前はどうするんだ？）」

ゲンヤはエースの懇願を聞き入れ、そしてエースに自身はどうするのかを問いかける、ゲンヤの問いにエースは答える

エース「・・助けに行きます。」

ゲンヤ「（・・・処罰されるぞ？）」

ゲンヤはエースに処罰される事を警告するそれにエースは

エース「・・・知っています。」

ゲンヤ「（そうかい　なら、俺は巻き込まれたくないから切るな・・・。頑張れよ）」

ゲンヤが通信を切る際に小声でエースを応援する、そしてゲンヤの通信が終わったエースは、

エース「ありがとうございます・・・。　フレイム、蒼焔の翼を展開」

フレイム「Ｊａｗｏｈｌ．」

エースはフレイムの３ｎｄを展開し上空に飛翔する、そして、ミッドに向けて飛び去って行く、その頃フェイトは・・。

＊＊＊

フェイトは機嫌が悪い為か、険しい顔をしながら歩いている、そして考え事をしているためか、いつの間にかどんどん人気の無い場所に向かって行く・・。

フェイト「（もう、エースったら、なのはとかはやてには元気か?とか聞くのに私には全然聞いてくれないし、あ～もう!それに分かんないけどエースが他の女の子と話すとイライラする、これも全部エースが悪い!）」

ついに男女が動きだした・・・。

フェイト「あっ・・・行き過ぎた戻らないと《あの～すみません、道を聞きたいのですが》え?あっ、はい何処ですか?」

女がフェイトに声を掛けた、男は影に隠れている

女「此処なんですよ」

フェイト「えっと・・・」

女が地図をフェイトに見せる　フェイトが地図に意識を集中させている間に男がフェイトの背後にそっと近づき・・・・。

ＢＤ「Ｓｉｒ!」

フェイト「えっ?・・うっ・・・・・」

フェイトの背後から、スタンガンを撃ち込みフェイトを気絶させる

男「よっと、目的完了だな、後はこの女をクライアントの元に届けるだけだ」

男はフェイトの手足を縄の様な物で縛り、目隠しとテープで口を封じる

女「デバイスはどうする？」

男「此処に置いとけ、下手な事とをされたら困る《分かった》」

BD「Who are you, Sir. What will you do to kidnap！？」

男「知ってても、答えるかよ　おい行くぞ《あいよ》」

男はフェイトを持ちあげると去って行く

BD「Wait！」

フェイトを連れ去る、その行為がエースの逆鱗に触れ後悔するとはこの時この2人は、思ってもみなかったのだろう・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あるリニアレール駅でのある子供が空を見ていた子供が一瞬、青く光る何かを目撃する

子供「ママ、鳥さんがいるよ！」

母親「どこに～？」

母親も一緒に空をみるその瞬間に、凄まじい飛行音が聞こえ、そして

《キャアアアアアアアアアア！》

《おお！》

青い何かが凄まじい速度で通り過ぎて行った後に小さい衝撃波が駅にいる人達に当たり、女性のスカートが捲れ上がった、それに喜ぶ1部の男性、駅を通り過ぎたのは勿論、エースだ、その頃、上空のエースは・・・。

＊＊＊

エース「フレイム、ミッドまで後、何分だ？」

エースはフレイムに到着時間を聞く

フレイム「1Stunden 15Minuten.」

エース「・・・急ぐぞ（無事でいろよ・・。フェイト）」

フレイム「Ja.」

エースは更に飛行速度を上げていった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外、フェイト誘拐事件（２章）

フェイトは、目が覚めるが、身体を縛られて目隠しをされてる為、動けない上に此処が何処かが全く分からない、それに加えて更に口も封じられてる為に声も出せない・・。
幸いにも耳が妨害されて無かった為、何名かの人が来るのが聞こえる、犯人達の１人がフェイトの目隠しを外した・・。
そこには本局のある将校の姿があった・・。

将校「こんにちは、フェイト・Ｔ・ハラオウン」

フェイトに挨拶をする、将校・・。
それに対しフェイトは、ギロリと将校を睨みつける、将校は更に続ける

将校「そんな、恐い顔をしないでくれたまえ・・。」

フェイト「（コイツの目的は一体・・。）」

将校「おっと自己紹介がまだだったね私の名は、ブントル・二グス」

フェイト「（二グスって言ったら確か・・・。母さんを目の敵みたいにしてる将校だってクロノから聞いた事がある）」

ブントル「君のお母さんには、少しの間休みを取ってもらいたいのだよ」

ブントルは笑顔でそう言う、フェイトはこの発言で勘付く

フェイト「（コイツは私を人質にして母さんを脅す気だ・・・。ＢＤでれん・・・！）」

フェイトはＢＤが無い事に気付く、フェイトがＢＤが無い事に気付いた時に、犯人の内の１人が走ってくるそしてブントルにある事を伝えると、ブントルの顔が驚愕の物になり言葉に出す

ブントル「もう１人、フェイト・Ｔ・ハラオウンが見つかっただと！？」

フェイト「（え！？嘘！？）」

ブントルの言葉にフェイトも驚く、そしてブントルは、

ブントル「なら！そいつも捕まえてこい、どっちかが本物だ！」

犯人Ａ「はっはい！」

先程、フェイトが居たショッピングモールでまた新たにフェイト２を見つける、先程フェイトを捕まえた、犯人グループの男女の２人組

＊＊＊

男「確かに、さっきの女だ・・。」

女「うん、そうだね」

フェイト2「・・・」

フェイト2を尾行する、犯人の男女の2人組・・。
フェイト2はショッピングモールを出て暫らく歩いて行き裏路地に入って行った。

男「これは都合がいい、一気に行くぞ」

女「分かったよ」

フェイト2を探すために、裏路地に入って行く、犯人の男女の2人組・・・。
その裏路地は狭くは無いが、かなり入り組んでおり、犯人の男女の2人組はフェイト2を見失ってしまう

男「っち！・・。見失ったか！」

女「どうする?分かれて探すかい?」

男は思考をする・・。
そして、裏路地の入り組み方から考えて、考えを女に言う

男「そうだな、こう入り組んでては分かれて探す方がいいな見つけたら連絡をくれ」

女「わかった」

犯人の男女の2人組の男と女が別行動を始める

フェイト2「やっぱり、来たか・・・。」

その様子をじっと路地裏の建物の屋上から観ていたフェイト2、そしてフェイト2も動き出した・・・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

女は1人でフェイト2を探して、裏路地の奥に進んで行った未だ昼ぐらいだというのに周りはどんどん日の光が入らなくなっていき騒音とかも聞こえなくなって静寂になっていく・・・。

女「早く、見つかんないかねぇ・・・。」

女「何だい!?《(鈍間め・・。)》・・気のせいか・・・《フンッ!》・・んーヴー」

フェイト2「・・・BD、犯人の内1人はコイツであってるか?」

女が、カァンと何か金属的な物が落ちる物音に後ろを向くが後ろには何もなく・・・。
再び女が前を向くとフェイト2が立っており、女が前に向き直った瞬間に、フェイト2は女の口を左手で塞ぎそのまま女を持ち上げて、スカートの右ポケットからBDを取り出して犯人の確認する、そしてBDはこう答えた・・。

BD「Yes, Mr. Ace」

フェイト2「やはり、フェイトに変身してたらノコノコやって来たな誘拐した人物がもう1人出てくれば絶対に何かあると思い確かめ

に来て、どちらが本物か確かめる為にも、もう1人も誘拐すると思っていたが見事に引っかかったな・・。」

BD「That's right.」

フェイト2「とりあえず、こいつを餌にしてもう1人からフェイトの居場所を吐かせよう・・。でもまずは・・・。」

女「ヴ―!こっ・・。この!《ふんっ!》ぐっ!《殺しはしないが、それ以外なら・・。》ぶぅあ《いくらでもやる・・・。》」

フェイト2（エース）は女の口を塞いだまま押し倒して、マウント状態になると口を塞いでた手を離して、拳を振り上げてそのまま、女の顔面を左右の拳で連続で殴り付け始める

BD「Mr. Ace! And further, the killer will die!」

フレイム「Meister! Bitte aufhoren! !」

エースが女の顔面を暫らく殴っていると、BDとフレイムがエースに女を殴るのを止めるように呼び掛ける

フェイト2「・・・ちっ!・・・クアドラプルリングバインド・・。」

女「おぇ・・・・・」

エースは仕方なく、女を殴るのを止めて立ち上がる、その時、拳か

ら血がピタピタと数滴落ちる・・。
そして、女の顔面は痣だらけの上に全体的に顔面が腫れ上がって良く見ないと認識出来ない程になっていた、更に口の中を切った為か口から血が出ているそんな状態の女に対してフェイト2は4重の拘束用のバインドで女を動きを奪うと魔力で作ったチェーンで女の足に巻き付けて固定して女を適当な場所に吊仕上げて、女の端末を出してフェイト2は男を此処に呼び出した・・・。
暫らくして男がやって来る・・。

男「おい来たぞ・・・・・何だ?何かが吊るされている?・・・っ!」

男は先に何かが吊るされているのを見つける、その何かに男が近づいて行く・・・。
それは・・・・・。

女「・・・・・・」

男「おい!どうした!?」

女「・・・・・・・」

それは、ユラユラと揺れる、見るも無残になった、女の姿だった・・。
男が声を掛けるが、女は反応が無い、この時男の後ろで、スッと何かが動いていたが男は女の無惨な姿に気を取られて気が付かなかった・・。
女は風によって小さく揺れている・・・・・・。

男「じょ・・・、冗談じゃねぇ!、うっあああああああああ」

男は、女の無惨な状態に恐怖し逃走を始めた・・・・。その時に・・・。

―逃がすと思ってんの？―

何処からともなく声が聞こえる、そして男は立ち止まり左右を見るしかし何もいない、男は誰もいない裏路地で命乞いをする・・・。

男「たっ助けてくれ！たっ頼む！もう、こんな事しねぇからよ！」

―フェイト・T・ハラオウンは何処にいる？―

男が命乞いをすると、また何処からともなく声が聞こえる、その声はフェイトの居場所を男に聞く、いや言わせる、それに対し男は・・・。

男「＊＊＊元研究所だ！たっ頼む！助けてくれぇ！」

―嘘じゃないな？―

男「ほっ本当だ！助けてくれぇ！」

―そうか、じゃあ・・・じっくりやってやる・・・・・―

男「やっ、約束が違うじゃねぇかあ！《何時、お前とそんな約束をした？》ひっ！」

急に男の後ろから、先程の声が聞こえる、そして・・・。

男「ちくしょおおおお！《遅すぎだ・・。》おえっ！」

男は後ろに居るフェイト2に向かい拳を当てようとするが逆に炎を纏った蹴りをカウンターで喰らい、吹き飛ばされる、吹き飛ばされてる最中に急に身動きが取れなくなる、すると手足がバインドにより拘束されて男は磔【はりつけ】の様な状態になる、そこに、フェイト2がやって来て・・・・。

男「たっ《黙れ》おえっ・・・。《おい、起きろ》うっ・・」

フェイト2は、女同様に男の顔面を左右の拳で連続で殴り付け男が気絶すると顔を引っ叩き無理やりに起こすそしてフェイト2は先程と同じ質問を再びする

フェイト2「フェイト・T・ハラオウンが居るのは＊＊＊元研究所で間違いないな？《あっ、ああ》そうかじゃあ寝てろ・・・。」

男「う・・・・・」

フェイト2は魔力を込めた拳の一撃を男の腹部に入れて意識を刈り取る

フェイト2「フェイト・・・。＊＊＊元研究所。今、行くからな」

フェイト2は男のバインドを1回解くと、今度は女との同じ様に、4重の拘束用のバインドで男の動きを奪うと魔力で作ったチェーンで男の足に巻き付けて固定して、フェイトの捕らえられてる場所の

名前を呟く、そして男を引きずりながら女を吊るしてる場所に向かう・・。
その途中で変身魔法を解くそれと同時にマンホールの上にゴミが落ちてきた・・。
それを見てるエース、その頃フェイトは・・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊

ブントル「しかし、遅いですね・・・。おや？その目は何ですか？」

フェイト「・・・・」

フェイトは口を封じられている為に喋る事が出来ないが、目隠しを外された為、ブントルの事をずっと、睨みつける・・・。
そのフェイトの睨みが気に入らないのかブントルはフェイトに近づいて行き・・・。

ブントル「フンッ！」

フェイト「・・ヴ・・」

ブントル「ムカつきますね・・。その目」

ブントルはフェイトの頬を右手で思いっきり引っ叩く、この行為が、激怒しているエースに更に拍車を掛ける事になるとはブントル自身知りもしなかっただろう、この時、研究所の外は・・・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

犯人１「ふぁ～あ」

犯人２「暇だな・・。」

犯人達は外の見張りをだらけながらしていた・・。その時！
物凄い勢いと音で、マンホールの蓋が上に飛び上がった、これが悪夢の始まりの鐘だった・・・。

犯人１「なっ、なんだ！？」

犯人２「敵襲！？」

犯人１「でっでも敵は何処に・・・っ！・・上だ！」

上から先程、フェイト２を捕まえに行った２名がドサドサッと落ちてくる、それと同時に犯人１が上を向くするとそこには、炎の翼を広げて、犯人達を睨みつける白銀の髪をした魔導師が立っていた・・・。
そして犯人１はこう呟いた・・・・・・。

犯人１「はっ、白銀の炎翼・・・・・。」

犯人２「バカな！奴は今、真反対の所に居るんじゃないのか！？」

犯人１「とっ、とにかく中に居る奴らにしらせ《じゃあ、お前が知らせて来い、全員、相手をしてやる》ぐっ！」

エースは犯人1を元研究施設に向かって蹴り飛ばす。元研究所の外壁はエースに蹴リ飛ばされた犯人1によって、打ち抜かれて、それにより、異常事態を知らせるアラートが鳴り響く・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外、フェイト誘拐事件（最終章）

エースは犯人１を元研究施設に向かって蹴り飛ばす。
元研究所の外壁はエースに蹴リ飛ばされた犯人１によって、打ち抜かれて、異常事態を知らせるアラートが鳴り響く・・・・・・。

「ＡＬＥＲＴ」「ＡＬＥＲＴ」

フェイト「！？」

ブントル「何だ！？この揺れは、一体どうしたんだ！」

研究施設の中が大きな音と共に大きく揺れる・・。
それに動揺するフェイトとブントルそこに犯人の１人が、状況を知らせに来る

犯人「大変です！襲撃です！」

ブントル「何！？どいつだ！」

ブントルが犯人に襲撃者の名前を聞く、そして犯人は襲撃者の名前を言う

犯人「白銀です！、白銀の炎翼、エース・ハラオウンです！」

フェイト「（嘘！？）」

ブントル「バカな！何故アイツが此処に居る、今日は此処とは真反対の場所に居る筈だぞ！？」

ブントルとフェイトは襲撃者がエースと言う事に驚く

犯人「しかし！現に今、襲撃されてます！・・うわっ！」

ブントル「くっ・・・、来い！《！？》この女をあの中に入れるぞ・・。」

フェイト「んーん！」

犯人「わっ、分かりました！」

フェイトがある所に連れて行かれた頃、エースは外で犯人グループの相手にしていた

＊＊

犯人２「ハァアアアア！《のろま》ガハッ！？」

エース「《ガハッ！？》・・・煩い・・・、フン！」

エースは犯人２の腹部に拳を撃ち込むと、犯人２の身体がくの字にまがり犯人２が悶絶する、エースはその犯人２の身体を魔力チェーンで縛りつけ研究施設に向けて投げる、投げられた犯人２は研究所の壁に叩きつけられる、壁に叩きつけられた犯人２は少し壁に張り付いていたが、剥がれ落ちた、その犯人２だが、叩きつけられた衝撃からか犯人２の手足は真逆の方向へ向いている・・。

その時、研究所内から２０人の集団が出て来た

《うおおおおおおおおお！》

エース「・・・マルチショットバインド」

エースは出て来た２０人全てをバインドで一斉に拘束すると、次にエースは右手に意識を集中させ

エース「・・・吹き飛べ」

《一体なんだああああああああ》

エースは強烈な風で出て来た、犯人グループを上空に吹き飛ばした、その後、ドサドサと次々に拘束された、集団が落ちてくる・・。死者こそ居ないがほぼ全員、重傷みたいだ・・。中には、手足が痙攣している者も居る、そんな中、エースは、犯人の１人に近づいて行き犯人の胸倉を掴み上げ、睨みつけながらフェイトの居場所を問いただす

エース「・・・フェイトを何処に隠した？」

犯人「けっ、研究所の１番奥の部屋に居ると、きっ聞い《そうか》ガハッ！」

エースは犯人を地面に叩きつけると内部に入って行く
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

内部には、無数の武装した犯人グループがエースを待っていた・・・。

エースは携帯していた剣を抜くと、犯人集団はエースに向かい迫っ

て来た・・。

犯人A「テヤアアアア！《セイっ！》ぐはっ・・・」

犯人B「てや！《ハッ！》オエッ・・」

犯人C「このぉ！《テイッ！》ぐぇっ・・・」

次々に、犯人集団を沈めるエース、その時・・・。

ーピシッー

エース「・・っ・・」

エースの耳に、持ってる剣が小さくヒビが入る音が聞こえた・・・。

その頃、フェイトはある場所に連れて行かれていた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊

フェイト「（ここは？）」

フェイトはブントルに連れられ、ある部屋に連れて来らされていた。

ブントル「対、強力魔法生物用の、拘束ケージだよ。君には、この中に入ってもらう！」

フェイト「（きゃっ！）」

ブントルはフェイトを拘束ケージに投げ入れ、フェイトを閉じ込め

てフェイトに向き語り始める

ブルトン「さて、もう、彼を始末、出来た・・。ん?何だ?」

ブルトンは音のした方へ向くとドサッと目の前に、ブントルが雇った犯人の1人が魔力チェーンで縛りつけられ、それこそ、ボコボコになったという言葉がよく似合う状態で、エースは、ブントルに向かい犯人の1人を投げつけて来た・・・。
奥の方より、エースが姿を現した・・。
そしてフェイトの状態をみるエースそして

エース「フェイト迎えに来たぞ・・。ん?」

フェイト「(エース!)」

ブントル「バッ、ばかな・・・、いくら寄せ集めとはいえ30人はいたんだぞ!?それを倒して来たというのか!?」

自身が雇った、人員が全て倒された事に激しく動揺するブントル、そして、ブントルは自身の杖型のデバイスを起動させ、エースに向かっていく

ブントル「クソッ!くたばれ!」

両者のデバイスが合わさる、その時、エースの剣に入ってる小さなヒビが大きくなっていく・・。

エース「・・っ!《これは!》くそっ・・」

そして、エースのデバイスは音を立てて砕けてしまった・・・。

フェイト「（エース！）」

エース「くそっ・・・」

ブントル「フッ・・・どうやら、勝機は私にあるようだな」

エースの剣は、今までの戦闘のダメージにより粉砕してしまった・・。

そしてブントルに杖で殴られ後ろに飛ばされるエース、その様子を見る事しか出来ないフェイト、エースは持っている剣をその場に捨てる、ブントルはエースの剣を自身の力で破壊したと勘違いして余裕の表情になる、ブントルの余裕の表情に対してエースの表情は険しい、険しい表情のままエースは先程から、フェイトの頬が片方だけ赤事に気付いており、その理由をフェイトに聞く

エース「・・・ところでフェイト、お前の頬はコイツに叩かれて、赤くなったのか？」

フェイト「んっー！」

フェイトはブントルをかばって首を横に振る、しかし

ブントル「そうだよ、態度が気に食わなかったのでね・・」

ー ほぅ・・・ー

フェイト「んー！んーん！」

フェイトはエースが激怒している事に気付きエースの質問に、違う

と頬りに首を横に振るがブントルがフェイトを叩いた事を認める、
ブントルの言葉の後にフェイトは更に激しく首を横に振るがしかし、
もうエースを止める事は出来ない・・・。
そして、エースは自身が抑えていた殺気を封じていた枷を外す・・。
徐々にこの空間の空気が変わってゆく

ブントル「（何だ・・。この感じは？）」

エース「どちらの手だ？《はっ？》フェイトの頬を叩いた手だ
《みっ右手だが？》そうか」

エースは静かにブントルの方に向き

《ヒッ！》

エースは殺気の籠った目でブントルを睨むと、エースに一睨みされ
たブントルは思わず怯む

エース「俺の大事な、女性（ひと）を傷つけて・・・。」

フェイト「（だっ大事な、女性（ひと）！？／／／／）」

ーオマエ、ココカラブジニカエレルトオモウナヨ・・・・ー

エースは自分の右拳に魔力を込めて、更に拳に炎を纏わせて高くジ
ャンプする・・。
そして、急降下しながらブントルに向かっていく・・。

ブントル「くっ！」

ブントルは自身の杖を横に持ち、拳を受け止める構えをとる、そしてエースが目の前に迫っていき・・。
拳を開き、手の形を手刀にしてそのまま、ブントルの杖に目掛けて炎を纏った手刀を振り下ろす・・。

ブントル「うっ・・・嘘ぉ・・・《覚悟は良いか?》ひっ、《セイっ!》グフッ・・」

エースは手刀によってブントルの杖を真っ二つにする・・・。
更にブントルに殴り上げ上に飛ばした後ブントルが落ちて来た瞬間、エースはブントルに跨りブントルの右腕を持ち上げ

エース「この手がフェイトの顔に傷を付けたんだな?よっと《あああああああ!》」

エースは持ち上げたブントルの右腕の骨を砕く、それに悲鳴を上げるブントル・・・。
そして、エースは先程の男女同様にブントルの顔面を左右の拳で殴りつけ始める・・・。

ーお仕置きの時間だ・・ー

ブルトン「たっす《ムリ》た・・、はふ・・・・」

ブントルの顔がエースの左右の拳に合わせて動く・・。
ブントルの声が途中で聞こえなくなるがエースは満足してないのかまだブントルの顔を殴り続けている

エース「フェイトの顔に傷を付けやがってこれで終わると思うなよ?《・・・・・》」

最終的に、エースはブントルの顔を認識不能まで顔を変形させてしまった・・。
エースが殴り終わった後ブントルの周りは血とブントルの歯が散乱していた・・。
そしてエースはフェイトの方へ向かい、拘束ケージを見る

エース「これは厄介な・・。ブレイク系統の魔法じゃ解除出来ないようにしてある・・・。」

フェイト「んーん！」

エース「（これはナイフじゃ傷一つ付かない、俺が現在出来る最も高い攻撃は・・。アレだけか・・。）少し待ってろ今すぐ、出してやるからな」

右拳に炎を纏わせたエースは、フェイトが閉じ込められている、拘束ケージ向かって拳を連続で繰り出す・・・。
《くっ・・傷一つ付かないとは・・。》拘束ケージを殴り続けたエースの拳は傷つき血が出て始めている・・。

フェイト「んーん！（もう良いから！止めて！それ以上やると手が砕けちゃうよ！）」

フェイトは念話を送るが拘束ケージに念話妨害機能ついているのかエースには聞こえていない、フェイトの悲痛の願いも知らずエースはとんでもない行動をするそれは・・。

エース「これでダメなら・・・、そうだ！」

エースは隠しナイフ２０本を取り出し分解しナイフの中からカートリッジを取り出してまずは5個のカートリッジを握りしめるそして、勢いよく拳を繰り出すエース

フェイト「ンーン！！（止めて！お願いだから！もうやめて！！）」

エース「くうっ！・・・くそぉ、もう一度か・・。」

カートリッジから爆発が起こると、エースの拳は血を勢いよく噴き出した・・。

血の勢いが止むと傷の中から、薄く白い物が見える、エースはそれに構わず・・。

またカートリッジを握りしめ、拳に炎を纏わせる

フェイト「（もういいよぉ！だからもうやめてぉ！！）」

エース「ぐうう！」

フェイトは泣きながら、エースに止めるように念話を送るが、それを聞かずに、エースは、再び拘束ケージを殴るすると、再度、カートリッジから爆発が起こり、エースの拳の傷が広がり白い物が先程より大きく見え始める・・・。

《ぐうう・・・・っ・・・》傷の痛みに耐えてるエースにある音が聞こえる・・。

それは拘束ケージにピシリとヒビが入る音だった《ハァ、ハァ・・。へっ・・これでやっと、止めだ》あろう事か、今度は5個のカートリッジを握りしめ更にエースは、《あああ！》更に5個のカートリッジを直接傷口に刺して計１０個のカートリッジを握りしめ拳に炎を纏わせ、大量の魔力を込めながら

エース「うおおおおおおおおおお！」

エースはフェイトの捕まっている拘束ケージを破壊して、エースはフェイトに近づき、手足を縛ってる縄の様な物を解いて、テープをはがすと、エースは急にフェイトに強く抱きしめられ・・。そのまま、泣かれてしまう

フェイト「《え！？あっその》うっ・・・うっ・・・もうこんごどぉじないでぇ・・・《ゴメン・・・。それと、フェイト無事でよかった・・・。》うっわああああああん！」

エース「え！？あっその《うっ・・・うっ・・・もうこんごどぉじないでぇ・・・》ゴメン・・・。それと、フェイト無事でよかった・・・。《うっわあああああん！》（本当に、本当によかった・・。）」

フェイトは少しの間エースの胸で声を上げながら泣き続けた

＊＊＊

この後、エースは事態を知らせて管理局の魔導師が来て誘拐事件自体は幕を閉じた。

そしてエースは病院に運ばれ右手の手術を受けた際、爆発の衝撃で自身の手の骨が数本吹き飛んでおり、更にその他の部分も幾つか無くなっている事が判明した・・。

それにより人工骨やその他も人工の物を付けるとの事・・。

手術後、フェイトは未だしも駆け付けたリンディとクロノの大目玉をくらったエース、しかし大目玉をくらった直ぐ後に、２人に頭を

下げられて礼を言われたエースしかし、エースは《当然だから別に感謝しなくてもいいよ》と言って直ぐに2人に頭を上げるように言うがあげないふ2人、エースはフェイトに助けを求めようとしたが、フェイトはいなかった・・。
フェイトは病院内の自販機の前で事件の最中にエースに言われた事が頭から離れなかった・・。

―俺の大事な女性(ひと)を・・・―

―フェイト無事でよかった・・・―

フェイト「（・・・もしかして、私って・・。前から、エースの事好きなのかなぁ・・・多分、いや今まで否定してたけど《俺の大事な女性(ひと)を・・・》間違いなくそうなんだ／／／／）」

―俺の大事な女性(ひと)を・・・―

フェイト「でもどうしよう、そう考えると、これからエースと、どう話して良いかわかんないよ～／／／」

逮捕されたブントルはエースが持っていたリンディの失脚計画の全貌のデータにより、失脚した・・・。
そして彼はあの事件以来エースの事がトラウマになっておりブントルの裁判でエースが参考人で現れた際、ブントルは、いきなり《頼む！出来るだけ長く牢屋に入れてくれ！》と裁判官に頼みこみ、弁護士も《もう、それでいいです》と匙を投げた・・。
ブントルはフェイトの誘拐に加え、リンディの失脚計画それに、犯人達への管理局の大量の武器の横流し等、それにらより、ブントルは起動拘置所に５０年入る事になった・・。
ちなみに軍法会議後エースの処分を聞いたフェイトは自身の事を悔

いていた・・・・。

フェイト「（私が、もっと、しっかりしていればエースはこんな目に遭わなかったよね・・。私の所為だ・・・。私の・・・・。）」

エースの謹慎を受ける事は色んな所に広がっていき、とある部隊では・・・。

ローゼ「教官の顔に泥を塗った悪女、フェイト・T・ハラオウン・・・私は絶対に許さない！！そう・・・、絶対に！！」

ローゼにとってエースは師匠でもあり、自分のすべてだ・・。そのエースをこんな目に遭わせたフェイトをローゼは、この時点でもう、ローゼにとってフェイトは憎い奴いや、もはや敵以上になってしまった・・・。

こうして2人の間に海よりも深い溝が出来てしまった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

フェイト「明日こそ、仲直りできるといいな・・・・・・。」

そう思っていたフェイトだった。しかし翌日2人は激突する事になってしまう・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外、シグナムデート編２ｎｄ．ＳＴＡＲＴ

某日シグナムの妊娠発覚の前、六課内、自室の鏡で薄化粧をするシグナム
エースとシグナムは、暇が重なった為、シグナムの提案で再びデートする事となった２人
しかし、数時間と言うのも何なので、有給を使って泊まりがけで行く事なった・・・。

シグナム「・・・大丈夫だろうか？どこか変な所は無いだろか？」

鏡を見るシグナムするとそれに時計が映り込む《まずい、遅刻だ！》慌てて荷物を持って部屋を出ていくシグナム
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エース「遅い・・・。」

待ち合わせの場所で待ちくたびれる、エース、その時《すまん！遅れた！》シグナムが遅れて来る

エース「まったく・・・・・誰だ？お前」

シグナム「遅刻でそれは酷く無いか？」

エースが後ろを向くとそこには、しかめっ面のシグナムが居た・・。
シグナムが何時もとは違い、薄く化粧をしていた為エースは初め気

付かなかった・・。
エースの態度に、しかめっ面になるシグナム
　エース「フッ・・。悪かったよ・・。ふ～ん、薄く化粧してての
か・・。綺麗だなシグナム」
　シグナム「そっ、そうか／／／」
エースの一言でシグナムの顔が赤くなる
　エース「それよりも、今回は、この前一緒に行動した時よりも
かなり時間があるかな、シグナムは何処か行きたい所は無いのか？」
　シグナム「わっ、私は、お前の好きな所でいいぞ？／／／」
　エース「そう言われてもなぁ・・。う～ん」
エースは考え始める、そして考え纏めたのかそれを言う
　エース「なら、この間のオープンカフェに行こう、馬鹿共の所
為で余り楽しめなかったからな《確かにな》なら行こうか？」
　シグナム「ああ」
シグナムとエースの2人は、オープンカフェに向かう、その頃、六
課内では・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊
フェイトはエースの事を探していた。

その時、エリオに合った、フェイトはエリオにエースの事を聞いてみる事にする

フェイト「あっ！エリオちょといい？《はい大丈夫です。》エースが何処に居るか知らないかな？《エースさんですか？》うん」

エリオ「エースさんなら確か、シグナム副隊長と一緒に泊まりがけで遊びに行くと言ってるのを聞きましたよ？《・・・シグナムと？》はっ、はい！《・・そう、ありがとエリオ》いっいえ、大丈夫です！（どっ、どうしたんだろう？フェイトさん怒ってたけど・・・。）」

フェイトは何かを考えだして、部隊長室に向かった・・。

＊＊

部隊長室では、はやてとリィン＆焔華が書類整理をしていた・・。

はやて「そう言えば、今日と明日はシグナムが珍しく休暇なんやね」

リィン「シグナムが休暇ですかぁ？確かに珍しいですぅ〜。エースさんはどうなんですか？焔華ちゃん」

焔華「ますた〜も、きょうとぉあしたぁがおやすみぃだよぉ？リィンお姉えちゃん」

はやて「・・・焔華、聞きたいんやけどエース君、今日は何処におるんや？」

はやてがとてもスバラシイ笑顔で焔華に、エースの所在を聞く

　焔華「まっ、ますた〜ならシグナムのお姉ちゃんとぉデートのはずだよぉ？」

　はやて「そうか〜《はやて、今いいかな？》ええで〜フェイトちゃん」

その時、部隊長室の扉が開きフェイトが入室してくる

　はやて「ちょうどええとこに来たなフェイトちゃん、実は話があんねん」

　フェイト「実は私もだよ。はやて」

そして、はやてとフェイトがＫＡ★Ｉ★ＤＡ★Ｎを始めた・・。

その頃、エースとシグナムはオープンカフェに着いてコーヒーを飲んでいた・・。

＊＊＊

　エース「落ちついて飲んでみると中々、美味いな」

　シグナム「確かに美味いな」

　エース「フッ・・《どうした？》いや、こうしてシグナムと一緒に行動する日が来るとは思わなかったんでな《どういう意味だ？》俺と初めて会った時の事覚えてるか？シグナム」

シグナム「うっ・・、それは・・、確かに」

エース「あんな過激な挨拶をした、女と関係を持つ事になるとは《ばっバカ者!／／／》でも、事実だろ?《ばっ・・、場所を考えろ!／／／》あぁそれは、悪かったな」

シグナム「全く・・。それよりもこの後は、どうする気だ?／／」

エース「どうしようか?とりあえずデートなんだからデートスポットの公園でも行くか?《お前がそんな場所を知ってるとは以外だな》いや、知らんぞ?《何?》これから聞くんだよ。すみませーん、ちょっといいですか?」

エースは店員を呼ぶそして、女性店員にこの近くのデートスポットを聞いてみる

女性店員「なっ、なんでしょうか?／／／《ここら辺でデートスポットの公園みたいな場所を知らないかい?》そっ、そうですね～では○○公園などはいかがでしょう?《○○公園ですか?》はい!そこは、この前週刊誌で紹介された昼も夜もカップルで行きたい公園ベスト１０に入っていましたよ《そうですかどうも、ありがとうございます》いっ、いえ、大丈夫です気にしないで下さい!では私はこれで(カッコイイ人だったな～あっ私の連絡先、教えとけばよかったな／／／)」

エースは女性店員に、デートスポットの公園を聞くと、ある公園を進められるそこは、週刊誌に載るほどの場所だということだ・・。女性店員がエースに話してる時、女性店員の顔を見たシグナムはとても不機嫌な顔になり、女性店員を睨みつけていたが女性店員は気

付かなかったのか相手にしなかったのかとりあえず、シグナムが睨んでも女性店員は終始、頬を赤くして、目を輝かせながらエースと話していた・・。
そして、エースはシグナムをその公園に誘う事にし、シグナムの方を向く、するとそこには・・・・。

エース「ということで・・・・、どっ、どうした?シグナム」

エースはシグナムの方へ向く、すると、ダークオーラ全開中の笑顔のシグナムの姿が目に入り、思わず顔を引きつってしまうエース

シグナム「随分と楽しそうだったな?《そっ、そんな事無いと思いますが・・・。》楽しそうだったよな?そうだろ?エース・・。」

エース「とっ、とりあえず行こうか?《・・・そうだな》」

エースに言われ渋々、女性店員に紹介された公園に行く事にしたシグナムそして、オープンカフェを後にする2人・・。
実はこのオープンカフェでシグナムとエースの事を一部始終見ていた人物が2人居たのだその人物は・・。

火凛「・・・行きましたよ?マスター」

デバイスの火凛が、そう言うと物陰から出てくる2人組

セレッソ「ふぅ・・、それにしても誰なんでしょう、兄上と一緒にいたあの女性(めぎつね)は、まっ・・、まさか!《恋人かもね~》なっ、何を言ってるの!そっ、そんな訳無いでしょう!?」

カメリア「どうしてそう言い切れるの？《兄上があんな女性（めぎつね）になびく訳無いからよ！》じゃあ確認の為に後を尾行してみる？《のっ、望むところよ！》」

そして2人はシグナムとエースの後をつけて行った・・・。
****
シグナムとエースは2人並んで歩いていた・・・。
その少し後には追跡者が2名、エースとシグナムを1人は普通に、もう1人はシグナムに対してだけ睨むように、見ていた・・・。

エース「何か分からないが、恐らく俺が悪いんだろうから謝るから機嫌を直してくれよ、なっ？頼むよ《・・・げそうすれば先程の事は忘れてやる・・。》は？最初の方が聞き取れなかったんだが・・・」

シグナム「手を繋げと言ったんだ・・・。《わかった、はいどうぞ》うっ、うむ／／／」

エース「じゃあ、行こうか、シグナム」

シグナム「ああ／／／／／」

エースはシグナムに向かい手を差し出す・・。
そのエースの手を恥しそうに取り、手を繋ぐシグナム、
エースはシグナムが手を繋ぐとそのまま公園に向かい歩き出す・・・。
その後に、居る2人組は・・・。

セレッソ「あのぉ！女狐め！兄上の手を握るとは・・・。殺す！」

カメリア「はい、はい、そんな事したら、確実に、お兄ちゃんに嫌われるからね～《ぐっ・・》それでもいいなら止めないよ？《くうぅ～》それに、手も繋じゃったしもう、確実だ《そんな訳無い！》でも、お兄ちゃんから《後を追うわよ！》はいはい・・。」

セレッソ達はエース達の後をつけて行った・・・・・・・・。

総合PV40万アクセス記念・番外、シグナムデート編2nd．NEXT

シグナム達は、女性店員に教えてもらった公園に着いたそこには・・・。
周りには、カップルしか居ない空間だった・・。
それを見た、エースとシグナムは・・。

エース「本当にカップルしかいないな・・・。《ああ・・。》どうする？《さぁ・・・》とりあえずベンチにでも座ろうか《そうだな》」

エース達はベンチに、座るシグナムとエース・・・。
エースが話始める

エース「シグナム、俺達も他の人達から見れば、恋人同士に見えるかな？」

シグナム「フッ・・、どうだろうな・・・。／／／」

『コトッ・・・』

エース「・・・どうした？《別に良いだろ？この位／／／》まぁいいけど」

エースの肩に頭を乗せて、そう言い放つシグナムそれを受け入れるエース・・。
2人は、もう傍から見ればただの恋人同士だ・・。
この様子を離れた場所からスコープで見ていた、追跡者2人は・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セレッソ「何で！兄上の肩に頭を乗せてんのよ！《恋人同士だからじゃない？》そんな訳無いわよ！」

カメリア「普通の友達程度じゃ、手も繋がないし肩も乗せないって《・・・ね》どうしたのお姉ちゃん？」

カメリアがセレッソの方に向くと・・・。
そこには、瞳の色を単色にして、デバイスを起動させていたセレッソの姿があった・・・。
カメリアはセレッソに掴み掛り彼女を止める

カメリア「ダメだって！お姉ちゃん！本気（マジ）になったら！ね！？落ちつこうよ！」

セレッソ「離しなさい、カメリア！あの泥棒猫（シグナム）を消せば、兄上の貞操が保たれるのよ！《既に保たれて無かったらどうすんのよ！》それだったら兄上をかどわかした泥棒猫（おんな）達を１人残らず消せばいいのよ！《それは不味いでしょ！？》うるさい！離しなさい！《だめだよ！》兄上ぇ～～～！」

カメリア「とりあえず落ちついて～～！あっ２人が動くよ！《追うわよ！》」

セレッソ達が騒いでいるとエース達は移動を始めた・・・。
その後を追いかけて行くセレッソとカメリア・・・。
一方その頃、六課では・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

なのはを始めとしたヒロインズによる緊急会議が行われていた・・・。

はやて「シグナムとエース君・・・・。仲良すぎとちゃうか？　みんなはどう思う？」

はやての意見にメンバー達は

なのは「うん確かに六課の中で一番仲良いかも・・・。」

フェイト「大体一緒にいるし・・・。」

スバル「私、夜、シグナム副隊長の部屋にエースさんが入っていくのを何度か見た事があります・・・。」

ティアナ「私は逆に、夜シグナム副隊長がエースさんの部屋に入ってい行くのを見た事があります・・。」

ギンガ「まっ、まさかエースさんとシグナム2尉はもう関係を持ってるんですか！？」

ローゼ「・・・姉さん認めたくありませんが、十中八九エース教官と魔乳桃髪女（シグナム）はそういう意味を含めて、数回以上は夜を共にしています・・。私の放った、諜報員（ヴァイス）の情報によると、現在2日に1回は来ているそうです・・。それを裏付けるかのように最近、夜中エース教官の部屋から女性の声が聞こえるとの噂も立っています・・。」

はやて「何か対策を立ててんとアカンなぁ～」
エースとシグナムの対策会議が行われてる時、本人達は・・・。
＊＊

エース「こういうのも良いな・・・。」
シグナム「そっ、そうか／／／／」
エース「こっち来いよ《わっ、分かった／／／》観覧車なんて、乗ったのは小さい頃以来だな・・・。」
シグナムはエースの正面に座っていたが、エースに言われて、隣に座る
シグナム「エース、いっ・・・。今は楽しいか？」
エース「ああ、楽しいぞ《そっ・・・。そうか／／／》」
シグナムは観覧車に乗ってから顔が赤いその理由は・・・。
少し前にあるカップルがして会話を偶然聞いた為だ、その内容は・・。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

男「なぁ、知ってるかこの観覧車の噂《知ってるよ》」
女「確か、頂上で好きな人とキスをすると必ず結婚出来るって

噂でしょ？」

男「そうそう《でも、それってある条件付きだよね》」

女「女性からキスしないとダメだっていう条件、男だと別れちゃうらしいものね・・・・。」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その事を思い出しシグナムは外を見ながら現在地を確認する

シグナム「（よし後もう少し・・・。）」

どんどんと頂上に、近づいて行く観覧車そして頂上に差しかかった時にシグナムは・・。

シグナム「エース少し良いか？《何だ？》んっ・・・・。《んっ！・・・。》」

エース「《エース少し良いか？》何だ？《んっ・・・・。》んっ！・・・。」

シグナムはエースにキスをする、エースは初めは驚いたがすぐにシグナムのキスを受け入れてじっとしていた・・。

そして2人は暫らくの間、お互いの口を合わせていた・・・・。

2人がキスをした時、観覧車のシグナムとエースの乗ったゴンドラは少し揺れ動いた・・。

一方その頃、追跡組は・・・。

＊＊

＊＊＊＊
セレッソ達も観覧車に乗っていたが２人は離れてエース達を監視していた為に、急いで
来たがエースの後ろが取れず２人は、エース達の５つ後ろのゴンドラに乗っていた・・。

セレッソ「ちょっと！カメリア！ここじゃあ兄上の様子が見れないじゃない！」

カメリア「アタシに言われても・・・。困るんだけど・・・。」

セレッソ「くそっ！どうして！見えないのよ！兄上〜！大丈夫ですか！？汚されていませんか！？兄上〜！」

セレッソはエースの居るゴンドラに向かって叫ぶ

カメリア「はぁ〜」

叫ぶセレッソを見たカメリアは溜め息をついていた・・。
こちらも別の意味で揺れていた・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊
シグナムとエースの２人は観覧車から降りて来た後、公園を後し歩き出した・・。
キスをした為か公園を出た２人は少し顔が赤い

エース「いきなりだったから少し慌てたぞ／／」

シグナム「すっすまん《別に謝らなくても良いけどさ／／》／

／」

エース「次は何処行く？／／」

シグナム「そっ、そうだな・・。わたすっ／／／／《プッ・・》笑うな！／／／」

エース「アハハッ・・。ゴメンゴメン《知らん！／／／》待てよ！」

シグナムは意見を言うおうとした時噛んでしまい、それを笑うエースするとシグナムは恥しさの余りに、スタスタと先に行ってしまうそれを追いかけるエース

その様子を見ていた追跡サイドは・・。

＊＊

街中をスコープを片手にデバイスの火凜の機能でエース達の会話を盗み聞きと追跡してるセレッソの姿は、もはや不審者である

エース「《いきなりだったから少し慌てたぞ／／》」

セレッソ「何をされたのですか！？兄上！」

シグナム「《すっすまん／／》」

セレッソ「この泥棒猫（シグナム）！兄上に何をした！！」

そう叫ぶセレッソに注目する通行人達

カメリア「ほっ、ほら行くよ！お姉ちゃん！《ちょ、カメリア！》／／／／／」

そう言って、街中で叫ぶセレッソを引っ張ってエース達の後を追うカメリア、その顔は・・真っ赤になっていた・・・。

その頃、シグナムは落ち着きを取り戻し、2人は、暇潰しに、近くにあったジュエリーショップに来ていた・・・。

＊＊

シグナム「ほぅ～綺麗な物だな・・。」

エース「（分からん・・。何故、宝石とはこんなに高額なのだ？全く分からん・・・）」

余りにも対照的な考えの2人だった・・・。

ちなみに追跡組の2人はジュエリーショップの向かいのオープンカフェでカフェ・オレを片手にスコープでジュエリーショップを覗きエース達を監視中だ・・・。

エースは宝石を見ていると、シグナムがある所でじっと何かを見ていた・・。

エース「欲しいのか？《いっいやそうではないぞ！／／》分かりやすいなお前・・。」

シグナムはエースに尋ねられると顔を少し赤くしながら手と顔を同時に振る・・。

エース「どれどれ・・・。ダイヤのピアスか・・・。《手にと

って見てみますか?》」

定員がそう話掛けてくる、するとシグナムは・・。

シグナム「いや別に《お願いします・・。》　おいエース!?」

定員「かしこまりました」

エース「いいじゃないか着けてみろよ《うっ、うむ／／／》」

定員「どうぞ」

定員がピアスを出して来るそれを手に取り、着けてみるシグナム

定員「よく、お似合いですよ」

エース「シグナムそのピアスどう思う?」

シグナム「綺麗だと思うが?／／」

シグナムが綺麗だと言うとエースは

エース「じゃあこれを下さい《かしこまりました》」

シグナム「おい!エース!こんな高額な物私には、受け取る理由が《理由ならあるさ》何?」

エース「先程、笑ってしまったお詫びさ《お待たせいたしました》」

定員「¥＊＊＊＊になります《じゃあ、カードで》かしこまりました。ではお先にカードを、そして商品をどうぞ《どうも》ありがとうございました」

2人はジュエリーショップを出ると、先程とは違う公園を見つけて、そこに向かった・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そこでエースとシグナムは向き合っていた・・。
そしてエースは先程、購入したピアスをシグナムの耳に着ける

エース「うん、先程も言ったがよく似合ってるぞ、シグナム」

シグナム「そっ、そうか、ありがとう／／／」

そして2人は近くにあったベンチに座る

エース「ふわぁ〜《眠いのか？》一昨日から、St．ヒルデ魔法学院と第八陸士訓練校のテストを制作してて寝てないんだよ・・。」

エースが眠たそうに、そう言うとシグナムは・・・。

シグナム「なら寝るか？わっ、私のひっ、膝なら貸すぞ？《そお？助かる・・》／／／」

エース「ｚｚｚｚｚ」

相当疲れていたのかエースはシグナムが膝を貸すと直ぐに寝てしま

った・・・。

エース「ＺＺＺＺ」

シグナム「それほど、疲れていたのか・・・。それなのに私に付き合うとは・・・。それなら、部屋で寝てればいいものを、本当にバカ者だなお前は・・。／／／」

そう言いつつも、シグナムは顔を赤くしながらエースの頭を撫でていた・・。

そのシグナムとエースの桃色空間は追跡組の２人に当然見られていた・・・・・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外、シグナムデート編２ｎｄ．Ｌａｓｔ

エースに膝枕をして、頬笑むシグナム２人は桃色空間を作り出している・・・。

その様子を黙って見ている事が出来ない人物が此処にいた・・・。

　セレッソ「何してんのよ！あの泥棒猫（めぎつね）は！？」

　カメリア「・・・膝枕じゃない？」

カメリアは疲れている様子だ・・・。

　セレッソ「そう言う事じゃないわよ！何故！兄上があの泥棒猫（めぎつね）に膝枕されてるのかって事よ！アレをするのは本来、私の筈なのに〜！！！」

　カメリア「そんなこと言っても、お兄ちゃんには、私達の事は秘密なんだから始めから無理なん《何か言った！？》イイエ、ナニモ」

　セレッソ「うぅ〜！あの、泥棒猫（めぎつね）が、妬ましい！憎らしい！悔しい！」

　カメリア「結局、羨ましいんだね・・・。」

その、セレッソに羨ましがられてる、シグナムは・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

微笑みながらエースの頭を撫でている・・。
その途中で俳優らしき男が発声練習で・・。

　男「本当なんです！信じて下さい！」

そう言って去っていった・・。
それを見たシグナムは・・・。

　シグナム「・・・何だ？今のは・・。」

　エース「ｚｚｚ」

　シグナム「フッ・・、可愛らしい顔だな・・。／／／」

そう言うと、シグナムはエースの頬を軽く、ツンツンと突く・・。

　エース「うぅ～ん・・・ｚｚｚ」

　シグナム「フッ・・・。／／／」

突かれると、その突いてる手を退けて再びシグナムの膝で寝息を立てる・・。
シグナムも寝息を立てる、エースに再び頬笑みながらエースの頭を撫でる・・・。
その様子を追跡サイドは・・・。
＊＊
セレッソはシグナムに飛びかかって行きそうになっていた・・。
カメリアはそれを必死に止めている

セレッソ「離しなさい！カメリア！私は、あの性悪女の魔の手から兄上を助けなければいけないのよ！」

カメリア「ダメだって！将来お義姉ちゃんになるかも《そんなの、私は認めないわ！》でも、ここであの女の人を斬ったら絶対に嫌われるよ！《うぅ！兄上〜！！》」

そして時間が経っていき、辺りは暗くなっていた・・・。

そのに頃エースが目を覚ます・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エース「ううん・・・、ほへ？《起きたか？》シグナム？ああそうか俺、お前の膝の上で寝ていたんだったな・・。よいしょっと・・。」

シグナム「・・・もう少し、このままでも良かったがな《何か言った？》いや、何でも無い、それよりも、もういい時間帯だろうホテルにチェックインしに行こう」

シグナムはエースに聞こえないように本音を呟くそして、名残惜しそうな顔を直して、普段の顔にしてエースに予約しているホテルに行くように勧める

エース「ああ、そうだな《えっ、エース！》何だ？」

シグナム「そっ、その手を繋がないか？《いいよ、はい》ああ／／／」

シグナムとエースは手を繋ぎ桃色空間のままホテルに向かった・・・。

2人の追跡者を連れて・・・。

＊＊

ホテルに着いた2人は、荷物を部屋に置く為に、部屋に向かった・・。

同じころ、追跡組もホテルに到着し、カメリアが部屋をとっていた・・。

セレッソは現在、2人の部屋の場所を知る為に追跡している

その時のホテルマンとカメリアの会話は・・・。

　カメリア「空いている部屋はありますか？」

　ホテルマン「現在は7部屋程空いていますが・・・。失礼ですが持ち合わせの方は大丈夫でしょうか？」

ホテルマンがそう言うとカメリアは・・。

　カメリア「このカードで、お願いします」

あるカードをホテルマンに見せる、するとホテルマンは・・。

　ホテルマン「!?、少し確認させていただいても宜しいでしょうか？《大丈夫ですよ》失礼します・・。」

ホテルマンがカードの確認の為に離れていった、そして暫らくしてホテルマンが偉そうな人と一緒に戻って来た・・。

偉そうな人「もっ、申し訳ありません、カメリア王女殿下！直ぐにスイートルームを用意いた《一般のベッドが２つある部屋かダブルベッドの部屋で構いませんせん》しかし！」

カメリア「今日は、ただ遊びに来て急にホテルに泊まる事になったただけなので、食事も一般の物を２名分用意していただいたので構いませんせん《２名分ですか？》はい」

偉そうな人「分かりました、君《はい！》カメリア王女殿下の希望された部屋は空いてるかね？《はい、現在ダブルベッドの部屋が１つ程、空いております》」

カメリア「じゃあそこで《かしこまりました》」

そして部屋の鍵をホテルマンから受け取り、部屋に荷物を置きに向かう途中

カメリア「喋り方、間違って無かったかなぁ？あれ？お姉ちゃん？」

セレッソ「・・・見失った《とっ、とりあえず部屋に行こうか》・・・うん」

エレベーター前でエース達を見失った、セレッソを連れてカメリア達は、エレベーターに乗って自分たちの部屋に向かった・・・。

それと入れ違う様に、セレッソ達が乗った隣のエレベーターからエースとシグナムが出て来てホテル内のレストランに向かって行った・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ホテル内のレストランで無言で食事をとる２人
その時シグナムは他のカップルの行動が目に留まる・・。
そして・・・。

　シグナム「ほっ、ほらエース、／／／」

　エース「・・・何やってんの？」

シグナムは顔を赤くしてエースに自身の食事の１部をフォークで刺しエースの前に差し出す、それに対しエースは目を丸くして、シグナムの行動をシグナムに聞く・・・。
するとシグナムはそれに答える

　シグナム「はっ、はい、あ～んだ／／／」

　エース「・・・意味分かってんの？」

　シグナム「はっ、早くしろ！恥しいだろ！《あむ、これでいいか？／／》ああ／／／／」

　エース「じゃあ、はい《何！？／／／》おかえし、まさか自分だけ逃げないよね？」

　シグナム「・・・あむ・・美味い《それはよかった》／／／」

この後も、この２人はお互いの料理を最後の１口ずつまで交換し合った・・・。
そして、食事が終わった２人はに部屋に戻る為にエレベーターに乗

る・・・。
またしても入れ違う様に、シグナム達が乗った隣のエレベーターからセレッソ達が出て来てセレッソ達はそのままレストランへ向かった・・・。
＊＊
部屋に戻ったシグナムとエース２人は同じソファーに座っている・・。
そしてシグナムは先程と同じくエースの肩に自身の頭を乗せている・・。

エース「１つ聞いてもいいか？《何だ？／／》何故、ダブルベッドにしたんだ？」

シグナム「気分だ《嘘だ》そう思うなら、この部屋の意味くらい、理解しろ／／／」

エース「はぁ、先にシャワー浴びてくる・・・。」

そう言いエースはシャワーを浴びにシャワー室に入っていった・・・。
そして少し経ってエースがバスローブ姿でシャワー室から出てきて次にシグナムがシャワー室に入っていく、エースはソファーに座る暫くするとシグナムが出てくる、シグナムは髪を下ろして、エースと同じくバスローブを着けている・・。
そして、シグナムはエースの隣に座ると、エースの肩に頭を乗せる・・・。
２人でいる時はもうエースの肩はシグナム専用の枕になってしまってる様だ・・・。

エース「頭を乗せて、どうなの？《安らぐな／／／》そう」

シグナム「おっ、お前は、どうなのだ？《ん～イイ匂いがする～》ばっ、バカ者／／／」

エース「そういえば、今日膝貸してくれてありがと《どうした？いきなり》いや、お礼言うのを忘れてたと思ってさ《別に、構わない／／／》」

シグナム「それに、イイ物も見れたしな《何だ、それは？》秘密だ・・。んっ／／／」

シグナムはそう言うと、エースの肩から頭を離して、エースの顔を自分の方へ寄せキスをする・・・。

エース「んっ・・ハァ、《今度は、エースからしてくれ／／／》わかった・・、んんっ・・・。プッハァ・・《このまま、ベッドまで運んでくれ／／／》フッ・・分かった」

シグナムが口を離すと、今度はエースからキスをするようにシグナムが要求しそれに答えるエースその際、シグナムがエースに抱きつく、エースもそれを抱きしめ返し、そして口を離したエースはシグナムを抱きかかえてベッドに運び・・・。

エース「いいかな？シグナム／／／」

シグナム「あぁ、来てくれ・・エース・・・、んっ・・。／／／」

こうして２人は、桃色空間を展開し愛を確かめ、始めた頃、追跡組は・・・。

****
****
****

セレッソ「兄上・・・。はぁ・・・。心配だわ、あの毒婦に汚されていないだろうか・・・。」

セレッソは兄の貞操を案じていた、それに対しカメリアは

カメリア「さあ？《カメリア！あなたは、あの毒婦に兄上が汚されないか気にならないの？》全然？、と言うかお兄ちゃんが、あの女性を襲うという選択肢は無いの？」

セレッソ「そんな事ある訳無いわ！《どうして？》私の兄上だからよ！《あっそう》」

《トン・・・。》

隣の壁を少し叩いた音がカメリア達に部屋に聞こえる

カメリア「お隣さん、過激だねぇ～」

セレッソ「常識を弁えて欲しいわね《それ、お姉ちゃんが言う台詞じゃないよ？》」

こうして夜が過ぎていった・・・。そして早朝、シグナムとエースは・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

2人はつい先程まで、桃色空間を展開し愛を確かめあっていた・・。
しかし、エースに急用が出来た為に今から帰る事になった・・。

　エース「本当に悪いな、シグナム《気にするな、お前が悪い訳じゃあ無い》」

　シグナム「教師としての仕事なら仕方ないだろう」

　エース「今度、埋め合わせを必ずするよ《期待して待っておこう／／／》」

　シグナム「それよりも、六課に帰るまで手を繋がないか？《ああ、いいよ》／／／」

2人は部屋を出て、手を繋ぎながらエレベーターに乗って、フロントに行き、チェックアウトをして六課に帰って行った・・・。
その2人がエレベーターに乗るまでを見ていた人物が1人いた・・・。

　カメリア「え！？お兄ちゃんと、あの女の人隣の部屋だったんだ・・・。じゃあ昨日のアレは・・・。じゃあ、あのピンクの髪の人が将来、私のお義姉ちゃんになるのかな？ともかく、今お姉ちゃんがいなくてよかったね、お兄ちゃん♪」

エースとシグナムは六課に帰って、エースは直ぐに、教師として用がある為にＳｔ．ヒルデ魔法学院に向かった・・。
しかしシグナムは他のヒロインズから尋問を受けるハメになってしまい・・。
エースが六課に帰って来た時かなりやつれていた・・・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外編、エースのお見合い、ぼりゅ～む１

某日、リンディがエースの子供時代の話をした何日か後・・。
エースはクロノに呼ばれて、本局のクロノの部屋を訪ねていた・・・。
クロノはエースにある頼みごとをする・・。

エース「は？お見合い？」

クロノ「そうだ《やだよ》そこを何とか頼むよ《メンドイ》」

エース「だって、仮にしたとして何を話していいのか分からんし」

エースは緑茶（砂糖９個入り）を飲みながらそう言う・・・。
するとクロノは、エースにこう言う

クロノ「なら、エースは、今恋人がいるのか？《うるさいよ！》ならいい機会だろう？」

エース「どんな機会だよ・・・。」

クロノ「とりあえず、会うだけでもいいんじゃないか？」

エース「母さんは、何て言ってんの？《母さんも了承済みだ》ちっ」

クロノ「この前、母さんが六課に行った理由はこのお見合いの件だ」

エース「・・・はぁ、母さんまで、グルかよ」

溜め息を吐きながら、諦めた顔をして・・。
そしてエースは仕方なくお見合いを了承する

エース「日取りは？　《明後日だ》もう、こんな事はやめて下さいね《ああ》じゃあ、私は六課に戻ります」

そう言ってエースは六課に戻って行く・・・。

****

六課に戻ったエースは部隊長室に向かった

エース「部隊長少し、いいでしょうか？　《えっ、エース君か？》はい《ちょっと、待ってくれへん？》いいですけど」

そう言って、エースが部隊長室の前で暫らく待っていると

エース「まだかな・・。《もう、ええよ》失礼します。

エースが部隊長室に入って行く、すると中には、なのはとフェイトもいた

****

エース「明後日、休みをいただきたいのですが」

はやて「理由聞いてもええか？《私用です》何や～？言えへんのか？」

エース「いやそうではなくて、本当にただの私用なんで・・・。」

なのは「まさか・・、デートじゃないよね？《違う》」

はやて「まっ、ならええわ、明後日の休暇を許可します」

エース「ありがとうございます。」

フェイト「でも、エースが休暇を申請するなんて珍しいね」

エース「クロノ兄さんの頼みだからな仕方ないさ・・・。《クロノの？》ああ、それと・・。」

エースはフェイトに近づいていきフェイトの正面に立って、更に顔を近づける

フェイト「ふぇ！？《いいから、じっとしてろ・・・。》はっ、はい！／／／／」

なのは　はやて「あぁ！？」

フェイトはエースに真正面から見つめられて、エースの言葉に目を瞑りじっとして、エースの顔を近付くのを待っていた・・。

しかし、エースの顔は、少し近づいただけでそこから動かないそして・・。

エースはフェイトの唇を指でなぞる

エース「ほい、取れた《ふぇ？》これだよ」

エースはフェイトに付いたある物をフェイトに見せる

フェイト「クリーム？《そうだよ、何だと思ったんだよ？》え！？いや・・・その・・／／／／」

エース「まぁいいや、《あぅ・・・。／／／》じゃあ、俺は、仕事に戻るが、あんまり食べ過ぎると・・。太るぞ？《うっ！・・、はい気を付けます・・。》じゃあな」

エースはそう言い残すと部隊長室を出ていった・・・。

そして、エースはヘリの整備室に向かった

＊＊

エース「ヴァイスいるか？」

ヴァイス「エース教官！？どっどうしたんですか？《なに慌ててんだ？》何でも、無いっす！それでどうしたんですか？」

エース「聞いてみるがお前、お見合いするとしたらどんな服を着ていく？」

ヴァイス「お見合いっすか？《ああ》やっぱ、スーツが妥当じゃないっすか？」

エース「やっぱそうか・・、ありがと参考になった・・。それと余り変な事すんなよ？」

ヴァイス「あはは、了解っす」

エースがヘリの整備室を出ていくと、ヴァイスはある物を出す

ヴァイス「これが見つかったかと思って、ヒヤヒヤしたぜ」

ヴァイスが言うある物とは、エースの生写真、それを確認してる時にローゼがやってくる

ローゼ「今回のブツは？《これっす》ほぅ、相変わらずいい仕事だな《ありがとうございます》そう言えば、エース教官とすれ違ったが何かあったのか？《ああ、それなら・・》」

ヴァイス「お見合いに来て行く服を相談されたんスよ《何！？お見合い！？》ええ」

ローゼ「それで、誰がするか言っていたか？《いいえ、特には》・・・そうか」

そう言い残し、ローゼは黒いオーラを纏いながら去って行った・・・。

そして、その頃エースは自室でロッサと通信をしていた・・。

＊＊

エース「という訳で、お見合いにはどんな服がいいか教えてくれ」

ロッサ「（・・・なんで僕に聞くんだい？《何となく知ってそうだから》・・まぁ、いいけど誰がするんだい？《俺だ・・。》は？何だって？《俺なんだよ・・。》嘘だよね？《嘘なら、どんなにいいか・・。》けど、どうしてだい？《さあ？》）」

エース「母さんと兄さんが勝手に決めたんだ、俺は今日、初めてこのお見合いの事を知ったんだよ《そっ、そうなんだ》とりあえず、教えてくれないか？《ああ、こういう・・》」

そして、エースはロッサにどんな服がいいかを聞き終えて通信を切る

エース「ありがとう助かったよ、ロッサ《いや、いいよ別に》それじゃあな《うん、またね》ああ」

そして通信を終えたロッサは・・・。

＊＊

ロッサ「・・・すまん、エース・・。僕は義姉さんに勝てないんだ・・・。」

カリム「（何かしら、ロッサ）」

ロッサ「実は・・・。」

ロッサはエースに心の中で謝りながらカリムにエースのお見合いの事を報告した

＊＊

＊＊＊＊
そして、お見合い当日・・・。
エースはお見合いの場所の＊＊＊ホテルに向かった・・。

リンディ「あ！こっちよ、エース」

レティ「あら、遅かったわね？エース君」

ホテルのロビー近くで呑気に手を振るリンディと、その隣にはグリフィスの母、レティの姿があった・・・。

エース「お久しぶりです。レティおばさん」

レティ「ええ、久しぶりねエース君」

リンディ「あら？私には無いの？エース《母さんもお久しぶりです》うん！、まぁ・・。許してあげるわ」

リンディは少し不機嫌になりつつ、エースに自身の事を聞き、エースがリンディの事を答えると直ぐに機嫌を直す・・。
次に、レティがエースに語る

レティ「リンディ、その辺にしておきなさい・・。エース君、相手はもう着いているから、行きましょう《はい》」

そうして、エース達が去っていくとその少し後を追う黒いオーラを放つ2人組・・・。
その黒いオーラを放つ2人組とは・・・。

ローゼ「・・・行きますよ、姉さん」

ギンガ「ええ、ローゼ」

そして、ローゼ達とは別にもう1組、別の地点からエース達を追っている2人組がいた
その人物達とは・・・。

カリム「・・・本当に来ましたね・・、さぁ、追いますよ！ビーナス」

ビーナス「何で私がこんな目に・・・。《行きますよ！ビーナス》・・はいはい」

怒りの目をしたカリムがエースの後を追う、そしてカリムの後にビーナスが続く・・。
ちなみにビーナスはカリムの所に偶然遊びに来た為に一緒にエースのお見合いの追跡をさせられている・・・。
そして別室で、エースはお見合いの相手と会っていた・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リンディ「こっちは私の息子、エース・ハラオウン」

エース「どうぞ、よろしく」

レティ「こっちは、私の親戚の娘で、ネルケ・アメント」

ネルケ「どっどうも／／／／／」

こうして、エースの、3名の追跡者＋1付きのお見合いが開始された・・・・。

お見合いを開始したエースとネルケの２人は互いの趣味等を言い合っていく
リンディがエースに念話をする

　リンディ「（エースこういう事は男性から話しかけるものよ《そうなの？》そうよ、分かったらさっさとしなさい♪《楽しんでませんか？》まぁね～♪《ハァ・・・》）」

　エース「アメントさん《ネっ、ネルケと呼んで下さい／／／／》じゃあネルケさん《はっはい！／／／／》お歳は？《１７です・・。／／／／》へぇ～１７ですかぁ・・・・、１７！？へっ、へ～」

エースはネルケの歳に驚きレティに念話をしてみる

　エース「（レティおばさん《何かしら？》失礼ですが、ネルケの両親はこのお見合いを知ってるんですか？《知らないわよ・・・。》え？どうしてですか？）」

エースがネルケの両親がこのお見合いを知らない事を疑問に思うと、その訳をレティが話始める・・・。

　レティ「（この子は、幼い時に実の両親が交通事故で死亡しているのその後、私の
紹介で、ある人物に引き取ってもらったの《どうして、おばさんが引き取らなかったんですか？》言い訳にしかならないけど、グリフィスがまだ目が離せなかったからね・・・。そんな訳でこの子の両

親はこの事は知らないわ、《じゃあ、引き取った人は？》知ってるわよ？というかその引き取った人が、このお見合いを強く希望したのよ？《はい？》この子を引き取った人物はね・・・）」

エースはネルケを引き取った人物の名前を聞いてこれが仕組まれたものだと確信する

ネルケを引き取った人物の名前は・・・。

レティ「（この子を引き取った人物の名前はミゼット・クローベル、本局の統幕議長よ《嘘でしょ？》本当よ、《じゃあ、このお見合いはまさか・・・、》ええ、始めからエース君が来る事が前提で計画したものよ♪《嵌められた・・。》」

エースの脳裏に、リンディとレティそれからミゼットが笑いながらこのお見合いを計画してる姿が浮かんでくる・・・。

レティ「（まぁ、この子自身もミゼット提督に強くエース君に会いたい事を言ってたらしいからこのお見合いはちゃんとしてくれないかしら？《まぁ、レティおばさんの頼みなら》ふふ、ありがとうエース君《別に、いいですよ》」

ネルケ「あっ・・、あのうエースさんのご趣味は？／／／／」

エース「魔法辞典を読む事ですね、ネルケさんはどの様なご趣味を？」

ネルケ「料理と、音楽を少々、それと・・・、あるコレクションを少し《どの様なコレクションか聞いても宜しいでしょうか？》あっ・・・はい実は・・・／／／／」

このネルケのコレクションにエースは驚く事になる・・。

ネルケ「ファンクラブ内で販売されているエースさんのグッツです《・・・はい？》でっ、ですから、エースさんのグッズ集めです／／／／」

エース「・・・・何それ？」

ネルケ「えっ？ご存知じゃないんですか？《今、初めて知った》おっおかしいですね・・ちゃんと会員カードにも公認と書いているですよ？えっと、ほらここに《どれどれ・・》・・・あっ《・・・本当だ》／／／／」

ネルケからエースの公認ファンクラブがあると聞いて驚く、エース・・。

ファンクラブの存在を知らせる為に会員カードを取り出してエースに見せる際、エースがネルケの手を掴み取る、手を掴まれたネルケは顔を真っ赤にしている・・・。

その時の追跡組は・・・。

＊＊

ギンガとローゼはエース達がお見合いしている部屋が見える少し離れた場所からスコープと集音マイクを使い監視をしている、ちなみに、この追跡の為に、ギンガとローゼは、フロントの人とオハナシ合いでホテルの部屋を取った・・・。

会員，Ｎｏ．３　ギンガ「今のとこは問題無いわね・・・。」

会員，Ｎｏ．４　ローゼ「そうですね・・・。あっ！」

会員，Ｎｏ．１１１１７　ネルケ「（・・・・・っと、ほらここに《どれどれ・・》・・・あっ／／／／）」

エースがネルケの手を取り、手を掴まれたネルケは顔を真っ赤にしたその光景を見た、２人は・・・・。

ローゼ「・・・殺す！・・・・・」

ギンガ「落ちつきなさい！ローゼ！《話して下さい！姉さん！早く、あの毒婦を八つ裂きにしないと！エース教官は私の物なんですから！》やめなさい！それと、エースさんは私の物よ！《何を言ってるんですか！？エース教官と私は全宇宙が誕生する以前から結ばれる事が決まっていたんです》何を戯けた事を！エースさんと結ばれる私よ！《私です！》」

ローゼ「・・・なら、姉さん、どちらがエース教官と結ばれるか勝負しますか？」

ギンガ「いいわよ、勝つのは私だもの」

ギンガとローゼは勝負をする為に部屋を出ていった・・・・。

その頃、もう一組の追跡組は・・・・・。

＊＊

カリム達もギンガ達と同じく、部屋をとりエースのお見合いを監視している

会員，Ｎｏ．１５　ビーナス「全く、少しはエースを信用し

てあげなさいよ・・。」

会員，Ｎｏ．１　カリム「でも、ビーナス、エースですよ？エースの事だからまた新たにエースの事を好きになる女性(ひと)が増やすかもしれないんですよ？」

ビーナス「それは・・・。父親があぁだから否定が出来ないわね・・。ハァ・・・」

ビーナスが溜め息をつき終わると、エースのお見合いに少し変化が起こる

ネルケ「（・・・ほらここに《どれどれ・・》・・・あっ《・・本当だ》／／／／）」

エースがネルケの手を取り、手を掴まれたネルケは顔を真っ赤にするその光景を見た、カリムは、険しい顔で・・・。

カリム「どうして、エースは何時もあぁなのかしら？」

そう言ってエース達がお見合いしている部屋を睨みつけている・・・。

カリムの発言の後にビーナスが続く

ビーナス「これは、明らかに遺伝ね・・・。主に父親の」

そう言うビーナスも何かを思い出したのか表情が険しい

そしてビーナスの発言後、お見合いしてる２人は更に会話を続ける

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊
エースはネルケの手を掴んだまま喋る
　エース「しかし、何時の間に・・・、ファンクラブなんて出来たんだ?《知りたい?》」
エースの疑問に思ってるとリンディが言葉を掛ける
　エース「・・・何で母さんがそんな事を知ってるんですか?」
エースがそう言うとリンディは胸を張りながら答える
　会長　リンディ「それは、私が作ったからよ!《何してんですか母さん!?》ちなみに副会長は・・・。」
　副会長　レティ「私よ《・・・おばさんまで何してんですか》まぁ、いいじゃないエース君それよりも、そろそろ放してあげたら?ネルケ・・、真っ赤よ《え?》」
　エース「ああ、ごめんよ《いっ、いえ／／／》それと聞いてみたいんですが、《なっ、何でしょう?／／／》ネルケさんは何時頃から、その《ファンクラブの会員になったかですか?》はい・・・《それは・・・》」
　ネルケ「それは、私が１４歳の時、管理局本局の方に用事で行った時にエースさんに出会い、その・・・。キャッ!／／／／／／」
ネルケはエースとの出会いを思い出して、顔を真っ赤にし両頬を手で押さえて顔を左右にブンブンと振る
そのネルケの様子を見たエースは・・・。

エース「どうしたんだ？一体・・」

リンディ　レティ「「鈍感・・・《えっ！？》」」

エース「あの、ネルケさん？《はっ！すいません！／／／》いやいいですけど・・」

リンディ「まぁ自己紹介も済んだし、レティ・・・《そうね、じゃあ》外で少し2人で話して来なさい」

エース「はい」

ネルケ「わっ、分かりました／／／／」

エースとネルケの2人は部屋を出て、外に向かった・・・・・・・・・。

総合ＰＶ４０万アクセス記念・番外編、エースのお見合い、らすと

エースとネルケが2人で外で話始めた頃、追跡していた筈のギンガとローゼは、エースの事で言い合いになりホテルより少し離れたある場所で戦っていた・・・。

ギンガ「ハァアア！」

ローゼ「ヤアアアア！」

2人の蹴りが合わさり、力の押し合いになるそして・・・。

ギンガ「ハア！」

ローゼ「チッ・・・、」

ギンガの蹴りが強かったのかローゼが後ろに飛ばされてゆく・・・。飛ばされたローゼは直ぐに起き上がり、ギンガに向かって行き

ローゼ「エイッ！《ハッ・・》ヤアッ！《ッ！》・・・ッ・・・《ウッ！》」

ギンガに向かって行ったローゼは、ギンガに対して右足で前蹴りをするがギンガに右足を掴まれてしまう、しかしローゼは残った方の左足でそのままギンガの後頭部にめがけて延髄斬りを放つが、足が少しずれてギンガの左肩にローゼの延髄斬りが炸裂する
そして、延髄斬りを左肩に受けたギンガは掴んでいたローゼの右足を放して、後ずさる

ギンガ「くっ・・・、うっ《・・・流石ですね》」

ローゼ「咄嗟に、私の技に対抗して、私の足をずらして首への命中を避けるとは」

ギンガ「うっ・・、まだまだ、妹には負けないわよ!、行くわよ!私がエースさんを貰うんだから!《寝言は寝て言って下さい》」

ローゼ「私が、エース教官のお嫁さんになるんです!《いくわよ!》返り討ちにしてあげます!」

今度はギンガがローゼに向かって行く

ギンガ「ハアッ!《ハッ!》・・・セイッ!《くっ!》ヤアッ!《あうっ!》」

右足で中段の廻し蹴りを放つが、ローゼにブロックされ、そして更に、左腕を掴まれる、しかしギンガはローゼに掴まれてる左腕の拘束を解き、左腕でローゼの腹部に左鉄槌を叩き込み、更にローゼを投げ飛ばす・・。

ギンガ「どう?諦めたら?《冗談でしょう?まだまだこれからですよ》」

お互いに構えをとるその時、遠くの方で・・・。

子供「ねぇ、ママ、あのお姉ちゃん達何しているの?」

子供がギンガ達を指さす、すると子供の母親は子供に答える

　母親「多分、今見た限りじゃぁ格闘技の練習だと思うけど？」

　子供「ふ～ん、でもあのお姉ちゃん達恥しくないの？《どうして？》あのお姉ちゃん達、キックする時、パーー見えちゃってるよ？《見ちゃいけません！》」

ギンガ達が戦っているのは広い公園だ、許可なく魔法を使用する訳にもいかないのでギンガ達は格闘のみの対決をしている訳だが、ＢＪも展開してない為、私服のまま戦っているのだが両者スカートという事を忘れているのだろうか？両者あれ程激しい蹴りをするのだ勿論、丸見えだ、この２人、人気の無い場所で戦えばいいのに・・・。

ちなみにギンガが青、ローゼが黒だ・・・・。

ギンガ達が戦ってる頃、エースとネルケは・・・・。

****

　ネルケ「・・・・（どっ、どうしよう！折角、エースさんがこんな近くに居るのに、緊張して話が出来ないよぉ～）《あのぉ》はっ、はい何でしょう！？／／／」

　エース「ネルケさんは、本局に用事で来た事があると言ってましたが、局に所属入っているんですか？《えっ、ええ、空曹です》ほぅ空曹ですか・・・」

エース達は会話が盛り上がり始めた頃・・・・。

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院では・・。

＊＊

シャッハがエースの代わりで近接戦闘の講義を終えていた

　シャッハ「はい、じゃあ今日はここまで！」

　生徒「ありがとうございました！」

シャッハが運動施設を出ていく、その時に何かカードみたいなのを落とした。

　アインハルト「?、こっ、これは!?」

　シャッハ「（はぁ〜、エースさんから急に頼むんですから・・・・。そう言えば、今日は騎士カリムは、ビーナスさんと何処へ行ったのでしょうか？）《シスター、シャッハ》はい、何でしょうか？《これが、落ちましたよ》ああ、ありがとうございます《それでは》」

アインハルトはシャッハに落し物を渡す、それを受け取り礼を言うシャッハ

カードを見ながら思い耽るシャッハ

　会員Ｎｏ．２シャッハ「（・・・私、別にエースさんのファンじゃ無いのになぁ・・・）」

シャッハはそう思いながら、職員室に向かって行った・・。

その後をじっと見つめるアインハルト

会員，Ｎｏ．１２０１１　アインハルト「・・・まさか、こんな所で1桁のナンバーに会うとは、しかし負けませんよ！シスターシャッハ」

アインハルトがある決意をした頃、エース達は、会話が弾んでいた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ネルケ「エースさんは、どの様なお菓子が好みなんですか？／／／」

エース「ケーキとか甘いものが特に好きですね」

ネルケ「たっ、たとえばですが《何でしょう？》しょ、将来、子供は男の子と、女の子どちらが欲しいですか？／／／」

エース「子供ですか？《はっ、はい／／／》どちらでも良いですが希望としては、私も男だから男の子かな《がっ、頑張ります！／／／》何をですか？《いっ、いえ！何でも無いです！／／／》はぁ・・・、ネルケさんはどうして自分とお見合いを？」

ネルケ「えっと、以前お会いした時からずっと気になって、お話をしたくて、レティおばさんに頼んでみたんです。／／／」

エース「会ってみてどうでしたか？がっかりしましたか？《いえ、そんな！むしろ、私が思っていた以上で益々好きになりました！／／／》へ？」

エースは自身の事をどうか尋ねてみると、ネルケは突如、告白をしてきた・・・。

ネルケ「《好きになりました・・・って》はい！私は、本局でエースさんと初めてお会いした時からずっと好きでした、そして今日、お会いしてエースさんとお話をして益々好きになりました。出来れば結婚を前提にお付き合いして下さい／／／／」

ネルケの告白にエースは

エース「・・・・すみません、ネルケさん私は実のところ貴女と本局で会ったことは覚えていませんし私にとってネルケさんは初めてお会いした人なんです。なので今、好きと言われても正直、困ります。なのでお付き合いも出来ません《・・・そうですか》すみません」

エースがネルケの告白を断ると、ネルケは少し沈んだ顔になったが、直ぐに顔を直して
エースと向き合いながら、

ネルケ「・・・そうですか《すみません》・・・・ですが私はエースさんを諦めません！《はい？》今がダメなら私の方に振り向いてもらえるまでずっとあなたにアプローチをかけるだけです！・・んっ・・・。《んっ！》・・ぷはぁ・・・。これは・・、とりあえずの宣戦布告です！それと、《・・・えっと、なんでしょう？／／》今度は、エースさんを、デートに誘っても良いでしょうか？《まぁ、空いてる日なら》じゃあ、お誘いしますね！／／／」

ネルケは自身の告白を断ったエースに対し、エースの事を諦めない事をエースに告げ

て、エースにキスをして、それが恋の宣戦布告だと言い、次はデー
トに誘っても良いか
聞くと、エースがいいと答える・・・。
そして、エースは・・・・。

　エース「えっと、その、わかりました?、《もう、時間も経
ったし戻りましょうか?／／／》はっ、はい／／」

エース達は戻って行き、2人のお見合いは終わった・・・。
この様子を見ていた、追跡組は・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

　ネルケ「（たとえばですが将来、子供は男の子と、女の子どち
らが欲しいですか？）」

　エース「（子供ですか？どちらでも良いですが希望としては、
男の子かな）」

エース達の会話を、ビーナスのデバイス機能を使い盗み聞きしてい
る2人
そして、ビーナスはカリムに自身の孫であり、エースの子の経過を
聞いてみる

　ビーナス「う～ん、私は、女の子も捨てがたいわね・・・、で
？どっちなの？」

　カリム「もう少しすればハッキリ分かるそうですよ。私として

は、どちらでも構わないのですが、《女の子の方がいいわよ》何故ですか？《祖父も父も天然の女たらしだからよ》ああなるほど・・・。《まぁそのたらしに惚れた所為で苦労すのはしょうがないでしょうけど》ふふっ、そうですね／／」

ビーナス「それにしてもこの娘、《ええ》もう、陥落済みとはね・・・。」

カリム「どうして、本当に何時もエースは会った女性を落とすんでしょうか？《遺伝よ、遺伝、まぁ、あの人に比べたら遥かにましだけど》そんなに酷かったんですか？」

ビーナス「ええ、私と付き合っている時でも普通に私の目の前で言い寄らてるし、あの人の誕生日は、毎年、家の前に宅配便の行列を作った程よ、勿論全て、女性からのプレゼントよ、結婚してからもプレゼントの量は減る事は無く、むしろ増えていたわ、それだから1回本人をシバキ倒して問い詰めると、『ほっ、本当です！教えてません！だから優しいビーナスに戻ってぇ～』って泣いていたから女の方が勝手に調べて送ったんでしょうけど結婚後は、女達から、私への明らかな当てつけね」

カリム「そうなんですか・・・。《いい、あの父親だから結婚後も絶対に女を落とし続ける可能性が大だから、甘やかしたらダメよ》う～ん私に出来るでしょうか？《あれを見なさい》へ？」

カリムがエース達の方を向くと、ネルケがエースにキスをしている所だった・・。
それを見たカリムは・・・。

カリム「・・・・エース、次来た時、覚えてらっしゃい・・・・

」

ビーナス「躾けかたを教えるわ《お願いします！》まずはね・・・・」

こうして、カリムはビーナスより躾けの仕方を教わった・・・。

ちなみにギンガ達は結局決着が付かず、ずっと戦っている所を警備隊に注意を受け、戻った所をローゼは、クロノに、ギンガはゲンヤに注意を受けた

エースとネルケのお見合いの数日後、六課に衝撃が走る・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大声を上げて、六課内を走り回る焔華、その手にはある本が握られている

焔華「たいへんだよぉ～！！すくぅ～ぷ！すくぅ～ぷだよぉ～！！！」

昼の休憩中の食堂に焔華が走って来る

はやて「どうしたんや？焔華、《これをみて！》なんや？いった・・・何やこれは！？」

なのは「こっ、これは！？」

焔華の持って来た、本は管理局の有名人の情報が公開される一般と局内に販売される週刊誌で大変に人気の週刊誌だ、今回の見出しは・・・。

『緊急スクープ！！エース・ハラオウンついに婚約か！？お相手は有望空曹！！』

記事の内容は、２日前、我々は信じられない情報を入手する事に成功した、局内の女性隊員に圧倒的な人気を誇るエース・ハラオウン氏がお見合いをしたと言うのだ。

お相手は、３歳年下の将来有望有る空曹、お相手の空曹はエース氏の母親のリンディ統括官の親友であるレティ提督の親戚の親戚の娘との事

このお見合いは、前からエース氏の事を気になっていた空曹の強い希望で実現したらしく、兄のクロノ提督もこのお見合いの賛成しエース氏に強くお見合いを勧めたという、このお見合いで両者は急接近！し噂によると、なんとキスまで済ませたらしい・・・。

この両者は近々、デートをする予定らしく、そこで結婚が決まってしまうのかどうか本誌も目を光らせる事にする・・・。

なおこの情報源は、エース氏の兄、クロノ・ハラオウン提督による物であり大変信憑性が高いと書いてあった・・・。

これを見た、はやて達は、早速本局のクロノ部屋を襲撃したが、既にリンディとレティが襲撃しており、クロノはボコボコにされていた。

ボコボコになったクロノの代わりにリンディがはやて達に説明をする。

リンディによるとこの週刊誌の情報は2日前に、クロノ自身の取材時うっかり、お見合いの話をしてしまった事から今回の事になったらしい、ちなみにＴＶでもこの内容が公開された為、エースのお見合いはミッド全域に広まった、今日のこの記事により局内の女性隊員が彼方此方で泣き始め、局内でも大変な1日になった・・・。

一方、話題の中心人物のエースは・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊
聖王教会のカリムの自室で、週刊誌を見せられ尋問を受けていた

　カリム「これは一体どういう事ですか？《さっ、さあ？》＊＊＊ホテル・・・」

　エース「・・・何故その場所を？《居ましたから》嘘！？《ホントですよ♪》あっ、あのぉ《歯を食いしばりなさい・・・》あう！」

カリムはビーナスに教わった方法で、笑顔でエースの頬を左右に連続で引っ叩いてエースのネクタイを掴み自身の前に引き寄せて、笑顔のまま質問する

　カリム「・・・で？どこまで、しましたか？《知ってるく》黙りなさいあなたに質問する権利はないわで、どこまで、しましたか？《キスまで・・》ホントですか？《ほっ、本当です！だから何時もの優しいカリムに戻って下さい！》・・・まぁ今回はこのくらいで許しましょう次は更に酷くなりますからね？《はっ、はい！》それでは、とりあえずお茶にでもしましょうか、勿論、付き合ってくれますよね？《勿論です！》では、シャッハを呼びましょう・・。」

カリムに呼ばれたシャッハがお茶を持ってきた際、エースの頬に付いた手形に驚き大丈夫か心配すると、エースは暗い顔で大丈夫と言っていた・・・。
ちなみに六課に戻った際もエースは更に、リンチに似たお仕置きを受けた・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家へのお泊り

なのは達がお花見をした２日後の月曜日・・・。
午前、聖王教会のカリムの執務室にて・・・。

　エース「じゃ、そろそろ行くよ《もうですか？》うん、久々に母さん会えるんだし」

　カリム「・・・そうですか、《また来るから、そんな顔しないでくれよ・・・。》絶対ですよ！」

　エース「それじゃ行って来るよ。カリム《気を付けて下さいね》実家に帰るだけだよ」

不安な顔のカリムをなだめて、席を立ってカリムに見送られながら聖王教会を後にする
エースそして、エースは再び第９７管理外世界、地球に向かった・・・。
＊＊＊
地球のフェイトの自宅ではリンディが誰かと電話をしていた

　リンディ「ええ、今日の昼頃に着くと言ってましたから、そろそろ此処に、着きますね、ええ、それでは・・・。」

リンディは電話を切ると上機嫌になる、そこにエイミイが来てどうしたのかを尋ねる

エイミイ「どうしたんです？艦長」

リンディ「うふふ～ちょっとね♪」

エイミイ「？」

リンディの言い方に疑問を持つ、エイミイだった・・・。
その頃ちょうど、地球に着いたエースは、リンディの家に向かって行っていた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

エースは、翠屋の前に差しかかると誰かが出て来た・・・、それは・・・。

桃子「エース君！久しぶりね！《桃子さん！？》お義母（かあ）さんよ！」

桃子はエースが翠屋に丁度差しかかった時に出て来た・・・。
まるで来る事をあらかじめ知ってたみたいに、そして桃子は出て来るといきなりエースを抱き上げてる、エースは驚いていた為に簡単に捕まり桃子に抱きあげられる

エース「どっ、どうしたんですか？それと、下ろしてください！《イヤよ♪》／／／／」

エースは、自分を降ろすように桃子に言うが、桃子がそれを聞く訳が無く、それどころか桃子は自身の胸に、エースの頭を押し付ける
この行動にエースは

エース「はっ、離して下さい！《イ～ヤ♪》あうぅ・・／／／／／／」

エースは恥しさの余り顔を真っ赤にしてしまう・・・。

そしてエースは桃子に抱き上げられたまま翠屋の中に連れて行かれた・・・。

＊＊＊

連れて行かれたエースは桃子の膝の上（指定席）に座らさせられている

エース「降ろして下さい・・。《ダメ♪》うぅ・・／／／／」

エースが顔を赤くして桃子の膝の上でじっとしていると、店の奥から士朗が出て来た・・。

士朗「やぁ、エース君久しぶりだね《お久しぶりです／／／》ところで、どうして桃子の膝の上に座っているんだい？《翠屋の前で捕まえられました・・／／／》そうか・・」

顔を赤くしながらも士朗の受け答えに対応するエース・・・。

エース「あのぉ、士朗さん《何だい？エース君》桃子さんに僕を下ろすように言ってくれませんか？《すまない、私は無力だ・・。》そうですか・・・」

エースは士朗の反応を見て、この高町家では誰が1番偉いのかが分かった・・。

更に、桃子は膝の上にエースを乗せたまま話始める・・。

桃子「ねぇ、エース君は何か好きなケーキとかある？《ありますけど・・》どんなの？」

エース「シュークリームと《あなたシュークリーム持って来て》」

桃子がそう言うと、士朗がシュークリームを持って来てエースの前に置くと・・。

桃子「食べてみて、エース君《え？》いいから《はっ、はぁ》」

エースは、シュークリムを食べる、すると、すずかの家で苺大福を食べた時と同じようにどんどんと顔が変わっていき・・・。

エース「美味しい！ありがとう桃子さん！」

その表情を見た桃子は・・・。

桃子「あぁ〜もう！かわい〜わね！エース君！！《くっ、苦しいです、桃子さん／／／／》あっ、あらごめんなさい」

エースは再度桃子に胸に、頭を押し付けられながら強く抱きしめられる・・。

勿論そんな事されたエースは再び顔を赤する丁度その時、翠屋のドアが開く・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翠屋のドアを開けるなのは、ちなみにはやてとシグナムも居る・・。

この内2人は中の光景に驚いたが、1人は違う反応を見せる

なのは「ただい・・・。何をしてるのかな?お母さん」

はやて「おじゃまし・・。って、エース君!何で桃子さんの膝の上におんねん!」

シグナム「おじゃまいた・・・、エース!?何故そこに居る!?」

翠屋の中に入った3人は、直ぐに桃子に抱きかかられて顔が赤いエースを見つける・・。
そして桃子が3人に理由を話し始めた・・。

桃子「何故、エース君が私の膝上に居るのかその理由はね、勿論!、将来の義息子とのスキンシップよ!」

そう力説する桃子に3人は・・。

なのは「・・・まだ、そう決まった訳じゃ無いけど、だけど≪ひっ!≫お母さん一応の娘の婚約者候補に対して馴れ馴れしいんじゃないかな?」

鬼の形相で桃子を見るなのは、その顔を見たエースが恐怖を覚える・・。
それに対して桃子は、なのはを挑発するかのように・・・。

桃子「あらあら、恐いわね~♪よしよし私が居るから大丈夫よ♪≪むぅ・・。≫なのは、エース君を恐がらせてどうするのよ全く、これくらい別にいいじゃない、なのはは、将来好きなだけ、エース

君とイチャイチャ出来るんだから《なっ！？／／／》」

なのは「そうじゃ無いってば！全くもう！／／／／」

そんな、なのは達の会話を見ていた、はやてとシグナムは・・・・。

はやて「前、すずかちゃんの家で、なのはちゃんが婚約者候補って言ってたのは、ほんまやったんやね」

改めて、なのはがエースの婚約者候補である事を確認するはやて、その時シグナムが
1つ気になる事があり、その事を思い始める・・・。

シグナム「そのようです、しかし、気になる事があります《どうしたんや？》エースは、自宅に一旦帰って来たのでしょうか？」

はやて「さぁ？それは、分からんな～、けど、どうしてや？」

シグナム「帰って無いのだとしたら、もう1人の人物もなのはと同じく鬼の形相で此処にやって来ると思いまして」

はやて「あぁ、『エース居る！？』来たみたいやな、シグナムの思った通り確かに、全くええ顔はしとらんな《そのようです》」

再度、翠屋のドアが開きそこには片手にかばんを持った、鬼の形相のフェイトが翠屋に入って来た、フェイトは翠屋の店内で、桃子の膝の上に、抱き抱えられているエースを発見する、するとフェイトの顔は鬼の形相から徐々に素晴らしい笑顔に変化していった
笑顔になった、フェイトがエースに近づいて話掛ける・・。

フェイト「久しぶりだね、エース《そっ、そうだね・・・。》これ、母さんがエースに渡して来いって《あっ、ああ、ありがとう》うん！どういたしまして♪」

エースは顔を引きつらせながら、フェイトからかばんを受け取る・・・。

かばんを渡された時、エースはある事に気付く・・・。

エース「・・・今、母さんって言ったか？《うん》じゃあ、お前」

フェイトはエースを見ながら、自己紹介を始める

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです改めてよろしくね”エースお兄ちゃん”」

フェイトが自己紹介を終えると、エースは・・・。

エース「そうか、話受けたんだな《うん》そっか、妹か・・妹ねぇ・・。／／」

エースは少し照れながら、”妹”という言葉を繰り返して言う、すると妹になったフェイトが最初の質問をエースにする・・・・。

フェイト「お兄ちゃん聞きたい事があるけどいいかな？《何だ？》どうして、お兄ちゃんは、何時まで桃子さんの膝の上に載ってのかな？」

なのは「それ、私も知りたいな」

この時エースは本能的に悟った”これはマズイ”とその瞬間、エースは桃子の膝の上から瞬間に降りて、逃げ出すも直ぐに、なのはとフェイトに囲まれたエース・・。
そして、エースは・・・。

なのは「エース君の・・・・。」

フェイト「エースの・・・・・。」

エース「まっ、待て2人と『バカー!!』」

エースは、フェイトとなのはの2人から左右頬を同時に、思いっきり叩かれてそのまま意識を失った、気絶したエースは夜まで目を覚まさなかった・・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家へのお泊り２

エース普段とは見慣れぬ部屋にて目を覚ます

ユーノ「《・・ここは？》あっ、起きた？エース、この部屋は、なのはの部屋だよ」

そう言う親友の動物形態

エース「ユーノ、僕は何時間位寝てたんだ？《５時間位だよ》そんなにか」

ユーノ「凄かったよ、なのはのお父さんが気絶してる君を此処に運んで来た時は、特に、なのはとフェイトは、どうしようって涙目で言ってたし《はぁ・・・》」

エースは溜め息を吐きながら、言い始める

エース「そんなに泣く位なら、あんなに強く叩かなくても良いじゃ無いかな」

ユーノ「アハハ、確かにそうだね、でもエースは、死んだように眠ってたから仕方ないよ《そんなにか？》うん、どうしてそんなに寝てられるのか自覚はあるの？」

エース「ある《聞いても良いかい？》ここ、一週間あんまり寝ずに、ある人物に会ったりしていたからそれが原因だと思う《どんな人だい？》僕の良き理解者の１人かな」

そう言ってエースはある人物を思い浮かべる・・・。
＊＊＊
エースが思うその人物は、自身の部屋で思い耽っていた

カリム「はぁ〜、エース早く帰って来ないかしら・・・。」

カリムはベッドに寝転びながらエースに貰った懐中時計を見て呟く・・。
ちなみに、この懐中時計はエースが初めて自分１人で選んでプレゼントした物だ・・・。

カリム「早く帰って来〜い、彼女が心配してるぞぉ〜・・・。なんちゃって／／／」

ベッドに寝転びながら、左手で顔を支えて、右手でエースに貰った懐中時計つつきながらそう呟いて顔を赤くするカリム・・・・。
＊＊＊
カリムが呟いている頃、エースは起き上ってある所で食事をしていた・・。

エース「あのぉ〜《何？エース君》降ろして下さい美由希さん」

美由希「イヤよ《そうですか・・。》」

桃子「はい、エース君ア〜ン《自分で食べれますよ／／／》ダメよ！」

はい、ア～ンをエースにする桃子、現在のエースは美由希の膝の上に座らせて桃子に食べ物を食べさせてられようとされている・・・。

エース「何故ですか!?《それは》それは?」

桃子「私がエース君に、ア～ンしたいからよ!」

そう力説する桃子にエースは横目で、ある人物に助けを求める・・・。

エース「(”恭也さん”助けて下さい!!)」

恭也「(エース・・・。)」

この2人、実は現在は仲良しであるその理由は・・・。
すずかエースに電話してる時に、姉の忍が乱入した時に一緒に居たその時エースと話をしたのが切っ掛けで急に仲が良くなり現在”恭也さん”とエースに呼ばれている・・・。
その恭也はエースの視線を・・・。

恭也「(すまない俺は無力なんだ・・。)」

そう思って、恭也はエースの視線を無視する・・・。
その恭也の反応にエースは・・・。

エース「(そんな・・・)《はい、エース君》うっ・・・。あむっ／／／／」

エースは遂に諦めて、顔を赤くして桃子のはい、ア～ンを受ける

桃子「エース君、美味しぃ？《美味しいです／／／》そうよかったわ♪じゃあ、次はこれね、はい、ア～ンどう？《これも、美味しいです／／／》」

エースは桃子に、はい、ア～ンをされながら食事を進めていく・・・。

その様子をみているなのはは、嫉妬に燃えていた、尤も本人の自覚は無いが・・・。

なのは「むむむぅぅ～（何で、何で！お母さんも、お姉ちゃんも私の！婚約者候補にそんな風にするのかな！まだ正式な婚約者じゃないけど・・・。そんな風にされて良い気は誰だってしないと思うよ！）」

なのはは、そう思いながら無言で食事を進めていく・・・。

その様子を見た士朗は・・・。

士朗「ふむ（この様子だと、なのはは、近い内に自分の気持ちに気付くだろう、だがその時エース君の周りには恐らく・・。好意を寄せている女性が何人居る事やら・・・。）」

こうして食事は無事？に済んだ、そしてエースとなのはとユーノ（フェレット）はリビングに行ってテレビを点けて、ちょうどやっていた特撮モノを見る・・・。

＊＊

現在は、士朗達が、順番にお風呂に入っていてなのはは、少し桃子を手伝っていたが、このテレビ番組を見る為に最後の方に入る事に

している・・・。

隊長「（・・・お前は一体何をしてたんだ!!）」

そう言って、主役らしき人物を思いっきり叩く、隊長そして、隊長が主役に語り出す

隊長「（お前のやっていた事は訓練なんかでは無い！この丸太棒に・・・お前を憎しみ突き刺す心があるか!?）」

そう隊長が言った後に、突如場面が変わりいきなり、ジープが現れる・・・。
その様子を見た、エースとなのは達は・・・。

エース「やっぱりこの星の人が考えてる事は分からん・・・。」

なのは「特訓って凄いんだね～・・・。」

ユーノ「これは・・・。凄いね・・・。」

そう言って再びテレビを見る、なのは達・・・。
ジープで主役を追い回す隊長、そして隊長は・・・。

隊長「（逃げるな!!逃げるんじゃない!!!《隊長ー!》逃げるなぁ!）」

そう言って生身で逃げる主役をジープ追い回して、棒で叩いたりする隊長・・・。

エース「理不尽だな・・・。（でも、これ訓練に使えるかもな・

・。）」

ちなみに、この番組のジープ特訓を真似した特訓法をエースはギンガとローゼの2人の弟子にしているギンガ達2人とってこの特訓は、ジープと言っただけで反応する程のトラウマだ・・・。

桃子「なのは～お風呂に入って来なさい《は～い》」

エース「じゃ、僕はそろそろ《何処行くの？エース君》えっ？帰ろうかなと」

なのはがお風呂に向かった後、エースが自分の家に帰ろうとすると桃子に止められる、そして桃子の口からエースにある事が告げられる・・・。

桃子「今日と明日はエース君は家に泊まるのよ《はい！？そんな事、何時決まったんですか！？》今日の朝、エース君が来る前よ♪ちなみにリンディさんも承諾済みよ」

エース「んなっ！？」

リンディの言葉に驚き口をパクパクさせるエース、そして更に、桃子は笑顔で言葉を続けていく・・・。

桃子「嘘だと思うならフェイトちゃんが持って来たかばんの中身を見ると良いわ～♪《こっ、これは・・・》ね～♪」

慌てて、かばんを確認するエース・・・。

かばんの中にはエースの着替えが数着入っていた・・・。

桃子「じゃあエース君は、私と一緒に入りましょうか《はい！？》うふふ～」

エース「冗談ですよね？《お母さん、出たよ～》」

桃子と話をしてる間に、なのはが風呂から出てきてある事を告げる・・。

なのは「後は、エース君とお母さんだけだよ～じゃ私、先に部屋に言ってるから／／」

そう言い残して、なのはは意味深な言い方をして部屋に向かって行った・・。

そうして残される桃子とエース・・・・。

エース「どっ、どうして・・、じわじわと近づいて来るんですか？《少しずつ、逃げてるからよ♪》ぼっ僕最後でいいです！いや最後がいいですっ！《ダ～メ♪》ひっ」

そう言って逃げようとするエースの手を掴む桃子そして、掴んだままエースを風呂場に引きずっていく桃子・・・、そしてエースは・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局エースは引きずられて行き、桃子と一緒に入る羽目になった・・。

エースの頼みで、桃子とエースはタオルを巻いている・・・。

勿論、桃子は嫌がっていたがエースの頼みという事もあり渋々タオ

ルを巻いた・・・。

桃子「さぁ！洗うわよエース君！《やっ、じっ自分で出来ますから！／／／》え～」

そう言ってる時、桃子のバスタオルが解けてしまう・・・。

桃子「《うぇ！？／／／》あら、解けちゃった、まぁいっか、さっ洗うわよ！あっ、あれ？エース君？《うっ・・》う？《うぴゃ～・・・。／／／／／》あらあら、」

桃子の裸を目の前で目撃したエース・・。初めて母親以外の大人の女性の裸を眼前で見てしまったエースは興奮して奇声を発しながら気絶をしてしまった・・・。
その様子を見ていた桃子は・・・。

桃子「これは、完全に気絶、しちゃってるわね・・・、はぁ、もっと、騒ぎたかったのにまぁいいわ、今は、とりあえずこの間に身体を隅々で綺麗にしましょ♪」

そう言って、文字道理、身体の隅々まで綺麗にされたエース・・・。
その後エースは気絶したまま、なのはの部屋のベットに運ばれた・・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家へのお泊り３

気絶したエースをなのはの部屋に連れて来てベッドに寝かせた桃子・・・。
その桃子は寝かせた後直ぐに、自室に行った・・・、桃子は何故か微笑んでいた・・・。

なのは「気絶するなんて、一体どうしたんだろう?まっ、いっか私も寝よ～っと」

そう言って、なのははエースの隣で寝始める・・・。
それから、少し経った夜中にエースは目覚める・・・。

エース「僕、気絶したんだ・・。あっ・・・／／／／」

そして、風呂場で桃子の裸を目撃した事を思い出して顔を赤くするエース・・・。
その時、鼻から赤い液体が流れる・・・。

エース「やばっ・・。フゥ・・。」

医療魔法を使って、鼻血を即効で止めるエース・・・。

エース「・・・幾らなんでもアレは強烈過ぎだよぉ・・《う～ん》ん?何だ、なのはか・・・と言い事は此処は、なのはの部屋か・・・、僕も寝よう・・・。」

エースは再び目を瞑るが、やはり風呂場の光景が思い浮かんで離れない・・・。

そんな時、エースにある事件が起こる・・・。

エース「・・・寝られん・・・、どうしよう《うぅ～ん》ちょ、なっ、なのはさん!?」

寝ぼけてる、なのはがエースに抱きついてきたのだ・・。

エース「うんっ、しょ・・っと・・。顔近っ!」

体勢を変えて、なのはと向き合う様にするエース・・・。
そのとたん目の前に入った光景は、なのはの寝顔だ、しかも距離が近い・・・。

エース「とりあえず、離さないと《え～すく・・・》ちょ!・・・!?」

寝ぼけたなのはがどんどんと顔を近づけていってついに・・・。
エースと口を合わせてしまう、いきなりの展開に驚くエース・・・。

エース「!!（とっ、とりあえず離さないと!）ん～!ぷはっ《うぅん・・・》」

エース「ノーカンだ!、ノーカン!なのはは寝ぼけてたんだしノーカン忘れよう!うん」

力を込めて引き離す、そして何とかキスと体勢を変える事に成功するエース・・・。
しかし、なのはは結局、朝、起きるまでエースを離す事は無かった・・・。
朝、なのはが起きてエースに謝った、するとエースは・・・。

エース「だっ、大丈夫ですよ！高町さんはい、でででは失礼しますっす！／／／」

なのは「？どうしたのかな？」

急に余所余所しい態度でなのはの部屋から出て行った・・・。

＊＊＊

朝食後、マスコットキャラ扱いで（桃子の膝の上）で店の手伝い？をしてる、エース・・・。

桃子「なのはと何かあったの？エース君《なっ何も無いですよ！？／／／》ウ～ソ♪さぁさっさと言いなさ～い♪《はっ、はい実は・・・。》」

エースは桃子に自白をきょ・・・・促されてエースはキスの出来事を抜きで昨日、寝ぼけたなのはに抱きつかれた事を大人しく白状した、すると桃子は・・・。

桃子「なるほどね～、でも残念《え？》キス位したのかと思ったわ♪」

エース「そっ、そんな訳無いじゃ無いじゃないですか～（すっ、鋭い・・・。）」

桃子「う～んでも、それなら変に避けるより、普通に、接した方が良いと思うのだから普通に接してあげて頂戴《分かりました》うん」

エースの悩みに助言を与えた桃子は・・・。

桃子「じゃあ次は、おやつ食べましょうか♪《突拍子も無いですね》そ～お？」

そんな時、桃子へ更に拍車をかける人物が現れる・・・。

リンディ「それじゃ～私も混ざろうかしら♪《母さん！？》それにしてもエースとってもいい場所に座ってるわね～」

エース「こっ、これは！そのっ！えっと・・・／／／／」

リンディ「5年位前までは普通に私と一緒に《あああああ！？／／／》お風呂に入ったり、一緒に寝たり手を繋いで買い物にも行ってたのに、どうして最近は、私に甘え無くなったのかしら？」

桃子「あら、エース君の小さい頃ってそんなに甘えん坊でしたの？」

エース「ん～んんん！！！（それ以上は喋らないで下さい！母さん！）」

何かを伝えようとしてるが桃子に口をしっかり押さえられてるエース

リンディ「それはもう！今とは別人の様に可愛かったですよ♪でも・・・、今のこの状態はやっぱり師匠（クロノ）の影響かしら思えば、あの子に修行をつけてもらってた辺りから段々とこんな感じになっていったから・・・。あぁ、あの頃が夢のようだわ・・・。」

リンディがエースの小さい頃の可愛さを力説すると、桃子は・・・。

桃子「それは是非に見て見たかったです《見ます？》あるんですか！？」

エース「んんん！んんんんんん！！！！（ヤメテ！お願いだから！！！！）／／／／／」

リンディ「この映像記録にっと・・・・。あった、じゃあ早速、再生開始っと」

現在、エース3～5才の映像記録再生中・・・。
桃子とリンディが食い入るようにその記録を見る・・・。
そして見終わると・・・。

リンディ「やっぱ何度見ても可愛いわ～♪」

桃子「確かに、これは可愛いですね～♪」

エース「（何だこの公開処刑は・・。いっそ殺してくれ、頼むから・・・）」

リンディと桃子がエースの小さい頃の話で盛り上がっていき・・・。
時間が経って、なのはとフェイト達が学校から戻って来る・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

なのは「ただいま～・・・・。」

フェイト「おじゃましま・・・。」

学校から戻って来たなのはとフェイトはある光景を目撃するそれは・・・。

リンディ「じゃ、次はこれね♪はい、ア～ンどう?」

エース「・・・美味しいです・・・はい・・。」

桃子の膝の上のエースにケーキをはい、ア～ンで食べさせてるリンディ・・・。

しかし何故かエースは照れるそぶりも無く、何故かエースの様子はやつれていた・・・。

その様子を見た、なのは達ががエースに事情を聞く

なのは「一体ど、どうしたの?エース君」

フェイト「かっ、顔色が悪すぎるよ?」

心配して、事情を聞いてきた、なのはとフェイトにエースはゆっくりと顔を2人に向け・・・。

エース「・・・僕、もう人生に疲れちゃったよ・・。」

なのは「本当に、一体どうしたの!?」

フェイト「そっ、相談に乗るよお兄ちゃん!」

エース「もういいんだ・・。もう《じゃあ、次は、これよエース♪》はい・・。」

こうして何かを悟ったエースに対して心配するなのは達にマイペースな母親達とカオスな展開がこの後もずっと続いって行った・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

カオスな展開が終わった後リンディとフェイトが帰っていって・・・。
晩御飯を食べた後、エースは美由希とお風呂に入って居た・・・。

美由希「それは大変だったね・・・。」

エース「僕、本当に死にたかったですよ《アハハ・・・。》」

美由希がエースの今日あった事を聞いていると風呂場の扉が急に開いて・・・。

桃子「死なれたら困るわね～《とっ桃子さん!?／／／》お義母さんよ」

エース「ななな、何故いいい居るんです!?／／／／」

桃子「何故って言われたら昨日出来なかった、将来の息子との一時をする為かしら」

エース「洗い物してませんでしたか？《士朗さん達がやってくれてるわ♪》」

桃子「それじゃ・・・・。」

そして昨日と同じく、エースに迫りくる桃子・・・。

エース「何で昨日と同じくじわじわと迫って来るんですか？《逃げるからよ♪》くっ・・」

桃子「じゃあ、えいっ！《はっ、離して下さいっ！／／／》だ～め」

美由希「じゃあ、私も！《ちょ！？美由希さん！？／／／》いいじゃん♪」

エース「いやあああああああああ～！！」

エースは身体の彼方此方を弄られて悲鳴を上げながら、隅々まで洗われた・・・。

身体の隅々まで洗われた際、エースはある現象を2人に見られてしまう・・・。

桃子「やっぱり、男の子なのね～《へっ？》うふふ」

美由希「それはそうだよ、お母さん、ああならない方がおかしいよ」

エースはとある異変に気付く、そして・・・・・。

エース「あわわわわ・・・・うわ～～～～～ん！／／／／」

エースは顔を真っ赤にして風呂から出て、魔法で身体を一瞬で乾かして、凄まじい早さで着替えてなのはの部屋に逃げ込んでいった・・・。

部屋には、先に風呂から上がったなのはとユーノが話をしていた・・

。

なのは「どっ、どうしたのかな？エース君」

ユーノ「さっ、さあ？」

エース「もうダメだおしまいだ・・・・・」

なのはの部屋に逃げ込んだエースは先程の事を桃子と美由希に気付かれた事に対して深く絶望していた・・・。

そして高町家での最後の夜が始まる・・・・・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家へのお泊り４（終）

エースがなのはの部屋に逃げ込んで少し経った時・・・。
ようやく落ち着きを取り戻して来たエース・・・。

エース「はぁぁ～・・、明日からどうやって生きて行こう・・・。」

なのは「一体どうしたの？エース君《なのはには分かんないよ・・。》むっ・・、そんな事無いもん！さっ、話してみて《なのはに話したら僕は死ぬ》うぇ！？」

なのははエースの言い方に少し意地になって聞くが・・・。
エースの更なる”答えの話したら僕は死ぬ”という答えに驚き聞くのを止めた・・・。
その次に、ユーノが続いて事情を聞くと・・・。

ユーノ「じゃあ僕にも話せないかな？《ユーノだけなら教えてもいいよ》そっかいいのか・・・いいの！？《うん》じゃ、じゃあ話してみてよ《実は・・・。》えっ・・」

なのは「（どうして私じゃダメなんだろう・・）」

などとなのはが思考しているとエースはユーノの耳元で理由を聞いて行くユーノ・・・。
そしてエースがユーノに言い始めるとユーノの顔がドンドンと悲しみに満ちていき・・・。

ユーノ「何時か良い事あるさエース・・・」

エースに同情し始めた、その時なのはの部屋のドアが開く・・・。
そして、そこには現在エースが恐れてる2人の姿が・・・。

　エース「うっ、うみゃーーーーー！《ダメよ♪逃げたら》」

奇声と共に脱走しようとするエースしかし、あっさりと桃子に捕まってしまう・・・。
そして、桃子はエースにこう告げる・・・。

　桃子「さて、”一緒に寝ましょうか”エース君」

　エース「・・・・え？・・・」

エースの悩める夜が始まりを告げた・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊
現在、エースの状態は・・・。

　美　エ　な　桃
　由　―　の　子
　希　ス　は

こうなっており、エースは女性達の丁度間に寝かされていた・・・。
この時エースは黙って天井を見ながらこう思っていた・・・。

　エース「（カリム～・・・・。助けてくれぇ～～・・・・）」

一方エースに助けを求められたカリムは・・・・。

＊＊＊

カリム「うふふ・・。幸せ・・・。」

エースと一緒に居る夢を見ていた・・・・。
内容は、伏せておこう・・・。

＊＊＊

桃子「ううーん、《ちょっ／／／》」

なのは「う〜〜《うぇ？／／／》」

美由希「うん〜〜《はうっ／／／》」

三人が寝ぼけてエースを抱きしめにかかる・・・。
その三人に対しエースは此処から抜け出そうと必死に動いてみるが・・・。
全員に掴まれてる為に身動きを取る事が出来ないそして・・・。

なのは「うにゅ〜《ちょ！またかよ！／／／／／》うう〜」

エース「あぶねっ・・・。／／／／」

また、寝ぼけたなのはにキスをされそうになるがそれを何とかかわしたエース・・・。

エース「寝ていて無自覚というのが更に性質が悪い」

美由希「うぅ～ん《ちょ、やっ、やばい・・／／／／》」

エース「もっ、もろに当たってるし・・・。／／／／／」

なのはのキスを何とかかわしたエースは次に美由希に後ろから抱きしめられる・・。

その際に、エースの背中に美由希の胸が押し当てられる・・・。

エース「何でこんなに力が強いんだよ!?／／／／／」

なのは「う～ん」

美由希の腕を何とか外そうとするが、何故かやたら力が強く外れない・・・。

そんな時、更にエースに再びなのはの顔が迫って来る・・・。

エース「え?ちょ!まっ待て!《う～んっ・・》!!」

再び、寝ぼけたなのはに、キスをされてしまったエース・・・。

離れようとするが、美由希に抱きつかれてる為動く事が出来ない・・・。

なのは「ぷはっ・・・・う～ん《ちょっと!?／／／》」

エース「更に抱きつかれた!?／／／／」

なのはに口を離されたエースだが、なのはは、そのままエースに抱きつく・・。

なのはと美由希の２人に両側から抱きつかれるエース・・。
しかし、更なる不幸？がエースを襲う！

　桃子「う～ん・・。《貴女はダメですって！／／／》う・・ん・・」

　エース「どっ、どうしよう・・・・。／／／／／」

結局、三人に抱きしめられて最早身動き１つ取れなくなってしまったエース・・。
エースは、この状態で朝を迎える事になってしまった・・・。
しかし、エースの不幸は続く・・・・。
＊＊＊
朝、目が覚める桃子そこには・・・。

　エース「・・・は・・な・・し・・て・・く・・だ・・さ・・い」

途切れ途切れの言葉で自身を離す様に懇願するエースの声がする・・・。

　桃子「え！？だっ、大丈夫？エース君！ちょっと美由希！なのは！起きなさい！」

　美由希「う～んどうしたの～？《早く！エース君を離しなさい！》え？あっ！！大丈夫！？エース君！ちょっと起きなさい！なのは！なのは！」

なのは「ううん・・何～お姉ちゃん《直ぐにエース君を離しなさい！》ふぇ？にゃああ！ごっ、ごめんね！大丈夫！？」

何とエースは三人、（特に美由希と桃子）に強く抱きしめられた所為で圧迫されて呼吸がしにくくなっていて、言葉が途切れ途切れに為っていたのだ・・・・。

桃子達が解放したおかげで助かったエース・・・。

エース「しっ、死ぬかと思った・・・。」

そんな時に、ユーノがエースに向かい念話をしてくる・・・。

ユーノ「（昨日はお楽しみでしたね♪）」

そんなユーノの言葉にエースは・・・。

エース「（・・・何処から見ていた？）」

ユーノ「（美由希さんに抱きしめられてる辺りからかな）」

そのユーノの言葉に、エースは言葉に怒気を含ませながらこう答える・・。

エース「（・・僕は優しいから、今すぐ忘れるなら見逃してやる）」

ユーノ「（・・・忘れなかったら？）」

エース「（・・・肉屋にミンチにして売る《今、忘れました》よし）」

そんな時に、士朗がなのはの部屋に来る・・・。

　士朗「みんな、おはよう『おはよう（ございます）』あっ、エース君フェイトちゃんが迎えに来てるよ《フェイトが？》うん」

　エース「分かりました、用意をしてきます《分かったよ》」

そうして、士朗が出て行くと帰る用意を始めるエース・・・・。

＊＊

　フェイト「（朝早来たけど、怒ってければいいな・・。）」

そう思ってるフェイトに、エースが荷物を纏めて桃子たちと降りてくる・・・。

そして・・・。

　桃子「やっぱり、離したくない～《ちょ、桃子さん!?／／／》」

　フェイト「むっ・・・」

桃子は突然にエースを泣きながら抱きしめて離そうとしない・・・・。

　桃子「こんなに可愛いんだもの《まっ、また来ますから・・・多分》多分じゃイヤ！」

　エース「そっ、そんな事言われても・・」

桃子「昨日や一昨日みたいに毎日お風呂入りたいしぃ～」

フェイト「・・・一緒にお風呂・・・・・」

エース「どっ、どうすれば良いですか?桃子さん《・・・じゃぁ》じゃあ?」

桃子は渋々、エースの質問に答える・・。

桃子「それじゃ、お義母さんって呼んでよ《はい?》言ってくれないと離さないから」

桃子の返答に困りながらも、答える事にするエース・・。

エース「・・・お義母さん・・・これで良いですか?《うん♪いいわよ♪》へ?」

エースが答えるとアッサリと泣きやみエースを離す桃子この反応にエースは・・・。

エース「嘘泣きだったんですか!?《ええ♪》ちょ」

桃子「この位しないと呼んでくれそうに無かったから♪《やられた・・・》」

満足げな桃子に対しエースは、少しショックを受けた・・・。

そうなりつつも、エースはフェイトの方向くと・・・。

エース「さて、帰ろうかフェイト《うん♪》」

フェイト「帰ったら、桃子さんと一緒にお風呂に入った話を主にキキタイナ♪」

エース「え？何？怒ってる？」

フェイト「ゼンゼンソンナコトナイヨ♪≪痛いんですけど・・≫ジャア、カエロッカ・・。」

エース「ちょっと、フェイトさん！？目の色が単色ですよ！？ああ、お願いだから！引きずらないで！！！」

エースは、高町家を後にして地獄と化す自宅へフェイトに引きずられながら帰って逝った・・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家での後日談よ！

翠屋店内で桃子と美由希の２人は以前訪れたエースの噂をしていた・・。

桃子「あ～もう一度来ないかしらエース君」

そう言って、テーブル下の足をぱたつかせる桃子

美由希「そんなに早くは来ないよ、お母さん」

そんな桃子の様子を苦笑いしながら、見守る美由希

桃子「でも、会いたいのよ～。そして抱っこしたいのよ～」

美由希「全く、お母さんは・・・。」

そんな会話をしてる時、エースは・・・。

＊＊＊

やっぱりと言うか何と言うか、とりあえずエースは・・・。
聖王教会のカリムの執務室に来て雑談をしていた・・・。

エース「ふわぁ～《眠いんですか？エース》まぁね・・、あんまり・・寝て・・無いし・・。」

エースは、目がトロ～ンとしており少しと言うか・・・。
大分と言った方が良いくらいに眠そうだ・・・。

カリム「そうなんですか・・・。無理しないで下さいね《う・・ん》」

少し不安な表情でエースを見るカリム・・・。

エース「だい・・・じょう・・《ちょ、エース!?》ぶぅ・・・・ZZZZ」

エースは限界が来たのか、椅子に座ったまま寝始めた・・・。
流石にその光景驚き声を大きくするカリム、しかしエースは起きない・・・。

カリム「はぁ、仕方ないわね・・・、シャッハちょっといい?」

シャッハ「(何でしょうか?騎士カリム《ちょっと来てくれない?》分かりました)」

シャッハが部屋に来て一緒にエースをソファーに寝かす2人・・・。
そして静かにシャッハが部屋を出て行く・・。
その後、カリムはエースの頭を持ち上げ自分の膝の上に乗せる

エース「ZZZZ・・・。」

カリム「・・全く、起きたら注意しますよ・・。」

こうして聖王教会での一時が過ぎていく・・・。
その頃、桃子達は、エースの泊まった日の初日の事を話していた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

桃子「それで、私がリンディさんとの連絡を終えて待ち伏せをしようと思ってたところに丁度良いタイミングでエース君が来たのよ」

美由希「それでお母さんはどうしたの？《思わず抱き上げたわ♪》思わずって・・」

桃子「だって、そうしたかったんだもの♪そして私が抱き上げた後に胸の辺りで抱きしめたら顔を真っ赤にして、本当に可愛かったわ〜♪」

美由希「それは、いくらエース君でも恥しがるよ・・・。」

少し呆れ気味に言う美由希に対して、桃子は嬉しそうな顔で更に話を続ける・・・。

桃子「それで、店の中で膝の上に乗せたらじっとしてあの表情も良かったけどやっぱり１番はシュークリームを食べた時の顔ね！あれは最高だったわ！」

そう力説する桃子に美由希は少し興味を示す・・・。

美由希「そんなによかったの？《最高よ！》ふ〜ん、少し見てみたいかも」

桃子「もう最高なんだから！《ただいま〜》あら、おかえりなのは」

その時なのはが学校から戻って来る、帰って来た、なのはは、話の内容を聞いてくる

なのは「何の話をしてたの？」

桃子「エース君の話よ《エース君の？》そうよ♪興味があるならさっさと着替えて此処に来なさい《は～い》」

少し経ってなのはが着替えて来た・・。

なのは「着替えて来たよ《じゃあ、続きを話しましょ》うん」

そして続きを話始める桃子・・・。

桃子「確かこの辺りでなのはが帰って来たのよね《うん、そうだよお母さん》」

美由希が答えると更に続ける桃子

桃子「それにしてもあの程度のいちゃつきで不貞腐れるなんて、全くなのはもフェイトちゃんもまだまだだね～♪《むぅ》うふふ～」

桃子の発言に、少しイラッとするなのは、そんな事はお構い無しに話を続ける桃子・・。

桃子「その日の晩御飯の時も良かったわね～」

美由希「ああ、あの私の膝上に座らせて、母さんが食べさせた時ね《ええ♪》」

桃子「あの時は、エース君、恭也に横目で助けを求めていたわね・・でも恭也は私が少し見たらあっさり諦めてくれたから良かったわ～♪」

美由希「そうだね、オハナシしなくて済んだね♪」

何とも物騒な会話である・・・。

桃子「食事の時も面白かったけど、やっぱりその後のメインイベント！これよ！」

美由希　なのは　「メインイベント？」

桃子は拳に力を入れ、そう力説をする

桃子「一緒にお風呂よ！『あ～ぁ』でも、実際あの時はどうしようかと思ったのよ」

なのは「どうして？《エース君がね》どうしたの？」

桃子「私の裸を見て気絶したのよ～」

この桃子の発言に、なのはは・・・。

なのは「へぇ～お母さんの裸をねぇ・・・（今度、会ったらオハナシだね♪）」

桃子「それにしても、エース君、まるで女の子の様な凄く綺麗な肌をしていたわね、隅々まで洗った時それが分かったし」

なのは「すっ、隅々／／／／」

この、なのはの反応に桃子は・・・。

桃子「当然、アレもちゃんと綺麗にしたわよ、なのは♪」

なのは「ふぇ！？／／／／」

なのはが何かを想像して顔を真っ赤にする様子を見た桃子と美由希は・・・。

頬笑みながらなのはの反応を楽しんでいた・・・・・・・・・・・・・・・・・。

総合ＰＶ６０万アクセス記念・番外編、高町家での後日談よ！２（終）

先程に続いてエースの泊まった２日目の話を始めた桃子・・・。

桃子「２日目の朝は、なのはのおかげで凄く大人しかたのよね～♪」

なのは「私のおかげで？《ええ》」

桃子はニコニコしながらなのはを見る、それに対して美由希となのはは顔を合わせる
そしてエースの大人しかった理由を話始める桃子

桃子「エース君の大人しかった理由はね、なのは、あなたが寝ぼけてエース君に抱きついてたから、らしいのよ《ふぇ！？／／／》まぁ、私としてはキス位してくれてもよかったのだけれど《おっ、お母さん！／／／》寝ぼけてるんだから仕方無いわよね」

エースの大人しかった理由を聞いた瞬間に顔を真っ赤にするなのは・・。
更に話を続ける桃子

桃子「その後にリンディさんに３～５才の映像記録を見せてもらったのだけど・・。」

美由希「どうしたの？お母さん」

桃子　？？？「超（蝶）サイコー！だった（わ）！」

なのは「いっ、今、一瞬誰かいなかった!?」

美由希「何もいなかった!何もいなかったわ!ただの見間違えよ!なのは」

なのは「うっ、うん」

美由希は、なのはを何とか言い包める、そして桃子に何が良かったのかを聞く美由希

美由希「なっ、何がそんなに良かったの?お母さん」

桃子「そりゃ、何と言っても!小さい頃のエース君よ!《そっ、そうだよね》今のエース君も勿論、可愛いけど、あの映像のエース君は正に歩くお人形さんみたいだったわ~♪まぁ、その映像を見た後のエース君は燃え尽きたようだったけど」

なのは「にゃはは・・・。」

美由希「あはは・・。」

なのは達は苦笑いをするが更に、話を続ける桃子

桃子「次は、やっぱり2日目のお風呂よね~♪」

美由希「あの時のエース君の反応は面白かったね~」

桃子「ええ、彼方此方を弄くりながら洗って、隅々まで綺麗に

したからね～」

　なのは「あっ・・彼方此方・・・／／／」

桃子の発言に顔を真っ赤にするなのは

　桃子「あらあら、なのはには刺激が強かったかしら？」

　美由希「まぁ、しょうがないか～」

なのはの反応を頬笑みながら見る、桃子と美由希
そして桃子は最後の事を思い出す

　桃子「後は、最後のエース君が私の事をお義母(かあ)さんと言ってくれた事よね」

　美由希「あの、やり方は少し汚い気がするよお母さん」

　なのは「私も、同じかな」

そんな2人に対し、桃子はこう答える

　桃子「涙は女の武器よ、使わないと損よ・・・。エース君、今何してんのかしら？」

そう言って、エースの事を考える桃子・・・。
一方、そのエースは・・・・。
＊＊

エース「ｚｚｚｚｚ・・・。」

カリム「ホントに起きませんね・・。なら・・ちょっとだ《姉さんちょっといいかい？》わぁ！？《ごっ、ゴメン》いえいいんですよ別に／／／／」

カリムが寝てるエースに、キスをしようと口を近づけ、合わさる寸前のところでロッサが部屋にやって来てその光景を目撃されてしまう・・。

そして見られたカリムは慌てふためく

ロッサ「本当にゴメンよ《いっ、いえ／／／》それにしてもこんな大きな声を出してるのに起きないね、エース」

カリム「・・・ええ、それほど疲れてるんでしょう」

心配な顔を浮かべるカリム　カリムの発言の後にロッサが話始める

ロッサ「そうだろうね、聞いたん話なんだけどエースはここ最近急激に任務の量が増えたらしいんだ《どうしてですか？》噂では、エースはレジアス中将の誘いと忠告を無視した所為らしい《どうしてそんな事を・・。》レジアス中将の誘いって言うのは恐らくだけど地上本部への移籍の誘いだと思う、殆んど全ての状況に対応出来る魔導師は管理局中探しても数える位しかいないからね・・。忠告の方は分からないけど・・リンディ提督の立場が上がれば、何とかなるだろうけど・・」

カリム「そうですか・・・。」

エース「ＺＺＺＺ・・・」

そう言ってカリムとロッサは、エースの顔を心配そうに見つめていた・・・・・・。

過去編の主な登場人物　ボリューム１

エース・ハラオウン（１０）

本局、航空隊所属の魔導師　階級は２等空尉
優秀なも同士であるが故に休みが少なく殆んど地球の自宅には帰って来ない
その為にリンディを始めフェイトやクロノそしてエイミイなどを心配させている
任務の殆んどが単独任務なのだがリンディに心配をかけさせ無い為に黙っている
すずかを始めとして色んな女性に好意を持たれてるが・・・。
本人は現在カリムに好意を持っている　しかし気付いてもらえて無いちなみにレジアスの忠告は聖王教会と関わるなと言うものでありエースは、この忠告を完全無視している　なおデバイスはＳ２Ｕ？

補足だが、えーすはとある小動物が大の苦手あり、その小動物を見ただけでエースは奇声を上げて逃げ出す

カリム・グラシア

エースに好意を持ってる女性の1人でエースの良き理解者の内の1人
両想いなのだが両者が共に空回りしている為に友達という立場から
全然進展がない
しかし、カリムはエースに膝枕や、エースの寝てる隙にだがキスま
で済ませている
教会内を2人が手を繋いで歩いてるところも目撃されている
その為、傍から見れば2人は恋人以外の何者でもないがカリム達本
人がそれを完全否定している・・。
ちなみに10歳当時でエースが母親以外でプレゼントをした女性は
カリム1人だけ

高町桃子

喫茶翠屋のパティシエ兼経理担当
娘の、なのはとエースを婚約させようとしてる人物
理由は、ただ単にエースを息子に欲しいから
その為にエースをとても可愛がっている、なのは曰く”娘の危機を
かんじる”らしい
エースが翠屋を訪れた際には必ず桃子の膝上が指定席
この過去編でエース以外で最も出番が多い人物　（ラスボス）

リンディ・ハラオウン

エースの母親
エースが任務で地球を離れた後に1人で泣くなど、エースをかなり気にかけてる事が伺える、しかし桃子と悪乗りをしたら止める事が出来ない
最近、エースが甘えてくれない事に不満があるようだ

クロノ・ハラオウン

エースの兄でエースの師匠に当たる人物
クロノもリンディ同様にエースをかなり気にかけてる

高町なのは

時空管理局嘱託魔導師
本人の自覚は無いがエースに好意を持っている
カリム以外でキスをした女性

フェイト・T・ハラオウン

時空管理局嘱託魔導師
なのは同様に本人の自覚は無いがエースに好意を持っている
エース曰く、よく怒る少し恐い妹と、エースに本人と全く逆のイメージを持たれている

八神はやて

エースに多大なる感謝をしている女の子
はやてはエースの事を始めは少し恐い兄ちゃんと思っていたが現在は・・。
めちゃめちゃ面白い兄ちゃんという風に評価している

月村すずか

エースに一目惚れをした女の子
現在、なのはとフェイトそして、まだ見ぬカリムに対抗意識を燃やしている

アリサ・バンニングス

すずかの親友の女の子
エースはそこそこ仲がいい友達と思ってる
アリサ自身は、すずかが猛アタックをエースの事が色んな意味で興味津津の様子

なのはの家に泊まった後、フェイトに引きずられて帰宅したエース・・・。
そして問答無用でフェイトの部屋に強制的に直行されて行き・・・。
エースにバインドをして拘束してなのはの家で何があったのかを聞きだした・・・。

フェイト「・・じゃあ次は私の番だよね？《何が！？》言う事を聞いてもらうの《何で！？》まさかとは思うけど・・なのはは良くて私はダメって言わないよね？”お兄ちゃん”♪」

笑顔でフェイトに”お兄ちゃん”と言われたエースの答えは当然・・・。

エース「・・・はい」

思えば、エースは若干ではあるが・・かなり前より弟、妹が欲しかった為に・・・。
既に、この時からフェイトに対しては甘かったのかもしれない・・・。

フェイト「じゃあ・・今日は、私と一緒に過ごす事《はぁ！？》いい？」

エース「何言ってんの！？《・・ダメ？お兄ちゃん》うぅ・・・」

エースが困惑していると・・そこに助けが入る・・・。

リンディ「ダメよフェイト《母さん？》今日は、まだ学校でしょう？《あっ！》さっさと着替えて行きなさい・・さっエースもこっちへ来なさい」

エース「はい、母さん」

そう言って出ていく2人・・残されたフェイトは・・・。

フェイト「・・ちっ・・まぁ、帰ってエースを独占すればいいか♪」

そう言って時計を見るフェイト・・時計の針は、何時も登校する時間より20分も進んでいた

それに気付いたフェイトは急いで着替えて学校へ向かった・・ある物を忘れて・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

フェイトが学校に行った後・・エースは・・・・・。

エース「降ろして下さい・・母さん」

リンディ「イ・ヤ・よ♪だって、この抱き心地・・何とも言えないんだもの♪」

リビングでリンディの膝の上に乗せられてぬいぐるみ的扱いにされてるエース・・・。

クロノやエイミィは、エースを助ける気はなくその様子を見て微笑んでるだけだ・・・。

そんな中・・エイミィがエースに質問してくる・・・。

エイミィ「ねっ、ねっ、エース君《何ですか?》エース君は、フェイトちゃんの事どう思う?《どうとは?》好きか嫌いかのタイプだよ」

そう言うエイミィの質問にエースは・・少し考えながら答える・・・。

エース「そうですね・・好きか嫌いかで言ったら・・嫌いなタイプですね」

エースの意外な答えに少し驚くエイミィ達・・・。
そして・・その嫌いな訳を言い始めるエース・・・。

エース「僕が、なのはと話をしてると足を踏みつけたりしてくるので余り好きなタイプではありませんね」

エースの返答に苦笑いを浮かべるエイミィとリンディ・・・・。
クロノは、何故フェイトがそんな事をするのかと思考している・・・。

クロノ「一体、どうしてだろうな・・そんな事、普段はしないのに」

エース「嫌われてるのでしょうか?《それは、無いと思うが・・》」

この兄弟の会話に、エイミィとリンディは・・・・。

エイミィ　リンディ「（鈍感兄弟）」

そんな中、冷蔵庫に飲み物を取りに行ったエイミィがある事に気付く・・・。

エイミィ「あれ？フェイトちゃんお弁当忘れてますよ」

リンディ「あらあら・・そうだ！エース届けてくれない？」

エースにフェイトの弁当を届けるようにお願いするリンディ・・・。

そのお願いにエースの返答は・・・・。

エース「行っても良いですけど・・場所が分かりません」

リンディ「それじゃ、地図を描くわね♪」

そう言って簡単な地図を描くリンディ・・そして描き終わった地図をエースに渡す・・・。

リンディ「今から、行ったら昼休みには間に合うと思うからよろしくね♪」

エース「分かりました・・では、行ってきます」

そう言って、フェイトの弁当と地図を持って部屋を出てフェイトの学校へ向かって行った・・エース・・そして部屋に残った、リンディ達は・・・。

リンディ「これで、少しでもフェイトとの仲が進展すれば良いのだけれど・・」

エイミィ「難しいでしょうね・・1番の影響を与えた人物がこれですから」

そう言ってクロノを見る2人・・・。

クロノ「なっ・・何なんだ？《はぁ～・・・》」

＊＊＊

そうして地図の通りに従いエースは・・なのは達の通う学校・・・。私立聖祥大学付属小学校にやって来た・・・。

エース「・・学校か・・・」

聖祥学園の校舎を見て、何故か少し暗い表情をするエース・・・。
エース「おっと・・そんな事より弁当(コレ)を届けないとな」

そう言って顔を直して、校舎へと歩を進めるエース・・・。そうして、暫らく散策していると教員の姿を発見しエースは歩み寄って行く・・・。

エース「すみません《何だい？え～っと》”僕”です」

男である事を強調するエース・・それに教員が申し訳なさそうな顔をした後に、エースに用件を尋ねてくる・・・。

教員「それで、どうしたんだい？」

エース「実は妹の忘れ物を届けにきたのですが小学校の校舎が分からなくて・・良ければ教えて貰えないでしょうか？《ああそれなら、あっちの方だよ》ありがとうございます」

そう言って教員は、１つの校舎を指さす・・エースはお礼を言ってその場を後にした・・・。

＊＊＊

エースは小学校の校舎に着くと職員室に向かいそして・・訳を話すと昼休みまで此処に居ると良いと言われて、言葉に甘えて居る事にした・・・。

そして、時間が経って昼休みになると、校内放送で教師がフェイトを呼び出した・・・。

暫らくしてフェイトがやって来た・・・。

フェイト「あの、先生・・何でしょうか？」

教師「あちらの方に、ご家族の方が忘れ物を届けに来てますよ」

来客用のソファーの方を見る教師、フェイトが来客用のソファーに行く途中に他の教員がクスクスを薄い笑いをしている・・その反応に疑問を感じるフェイト・・・。

そしてフェイトは、忘れ物を届けに来た人物に驚く・・・。

エース「よっ、中々早く来て感心だな」

フェイト「おっ、お兄ちゃん！？」

エースという意外な人物の訪問に驚くフェイトだった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

80万アクセス記念　過去編　ハラオウン家・・・2

フェイトに弁当を渡したエース・・用も終わって家に帰ろうとした時・・突然フェイトに・・。

フェイト「昼休みだけでも一緒に居ようよ・・ねっ？」

エース「しかしだな・・」

昼休みだけでも一緒に過ごそうと誘われる・・その返答に困るエース・・。

教師「昼休みくらいなら居ても構いませんよ」

その時、教師に昼休み位なら居ても良いという許可が下りた・・・。

フェイト「ほら、じゃあ行こう”お兄ちゃん”♪」

エース「わっ・・分かった・・はぁ・・」

つくづく自分が情けないと思いつつもフェイトと一緒に、なのは達の居る場所へ向かう事にするフェイトとエース・・・。

エース「・・・なぁ《何？》物凄く注目されてないか？」

フェイト「それは、生徒じゃない子が校内に居るからだよ”お兄ちゃん”」

エース「それも、そうか《早く行こう》あぁ」

そう言いながら、エースとフェイトは廊下を抜けて行った・・・。
この時、廊下でエースを目撃した女生徒達の反応は・・・。

女生徒Ａ「なっ・・何？今の人／／／」

女生徒Ｂ「どっ・・ドストライク・・ガハッ！」

女生徒Ｃ「私の春が来た・・／／／」

女生徒Ｄ「美男子！ゲットですわ！」

そして、同じ頃・・・男子生徒の反応はというと・・・。

男子生徒Ａ「あの娘(こ)が男な訳がない！」

男子生徒Ｂ「君を・・待っていた！／／／」

男子生徒Ｃ「僕は、君の存在に心奪われた！／／／」

男子生徒Ｄ「ハァハァハァ・・・グヘヘヘ・・・・。」

こんな風に歩くだけで色んな人を撃墜したエース・・・。
ちなみに、これが更に、フェイトの嫉妬心に煽りを入れる事になるとはエースは、当然の事だが、知るよしも無かった・・・・。
そして、フェイトとエースは屋上に着き・・なのは達と合流する・・・。

＊＊

アリサ「あっ！アイツは！」

なのは「あれ？エース君？」

はやて「どないしたんや？」

三人が少し驚いていると・・何時の間にか高速ですずかが、エースの横に移動して・・。

そして、直ぐに腕を組み、フェイトからエースを引き離すように距離を取る・・・・。

すずか「久しぶり！エース君♪元気だった？《まぁ、ぼちぼちかな》そう、よかった♪」

エース「ところで、どうして腕を組んでるんだ？《スキンシップよ♪／／／》」

そう言って・・すずかは更に、強くエースの腕を抱きしめる・・・・。

それを当然、快く思わなフェイトとなのは・・既に、フェイトはすずかを睨みつけている・・。

そして、なのはは、とても素晴らしい笑顔だが、殺気が滲み出ている・・・・。

すずか「エース君♪はい、あ～ん・・・・・・」

早速すずかがエースにアピールして来る・・そしてフェイトはついに・・・・。

限界を迎えたのか、ある事をエースに提案する・・・。

フェイト「ねぇ・・お兄ちゃん学校が終わったら私と模擬戦をして・・そして私が勝ったらもう、余り他の女の子と話さないで」

エースにそう言うフェイト・・すると・・エースは、すずかの腕を優しく離して・・フェイトに向かってこう述べた・・・・・。

ーーーお前如きが、僕に敵う訳無いから止めておけーーー

エースのこの言葉に逆上するフェイト・・それに、なのはとはやても少し逆上している・・・。

そして・・フェイトがエースに先程の意味を改めて聞いてみる・・・。

逆上してるフェイトの顔は険しい・・そして険しい顔のままエースに聞く・・・。

フェイト「どういう意味かな?それって」

エース「そのままの意味だ、フェイトじゃ僕には敵わない」

今度は、なのは達もこれに参戦してくる・・・。

なのは「そんなのやってみないと分からないよ!」

はやて「そうやで、エース君!」

この2人の言葉にエースは、溜め息をつきながらやれやれといった顔で答える・・・。

エース「はぁ~こっちは親切心で教えてるのに・・我が儘な娘(こ)

達だ・・」
エースは通信を開きリンディに連絡を取る・・そして事情を説明すると・・・。

　リンディ「（はぁ・・全く、あなたは・・場所は、アースラの訓練施設を貸し出しましょう・・ちゃんと手加減してよね・・）」
そう言ってリンディは通信を切る・・そしてエースはフェイトを見据えると・・・。

　エース「場所は確保した・・僕と本気で戦うなら学校が終わってから来るといい・・ただ僕は・・・クロノ兄さんの様に、手加減は一切しない始めから潰す気でいく・・それでも良いなら相手をしてやる・・よく考える事だ」

エースは険しい顔でそう言い放った・・。
言い終わった、エースは、静かに立ち上がってその場を去っていった・・・・。
＊＊＊
そして放課後・・・フェイトは、先程の怒りが収まりつつあった・・・。
だが、そこにフェイトの怒りの炎を再び燃やす奴らが現れた・・・・。
　男子生徒Ａ「ねぇ！ハラオウンさん《何かな？》あの娘（こ）は、妹？それともお姉ちゃん？是非僕に紹介してほしいんだけど！」

　フェイト「それって・・エースの事？《エースって名前なんだ

～素敵な名前だ～≫」

男子生徒Ｂ「・・・エース姫／／／／」

男子生徒Ｃ「抱きしめたいな！エース！／／／」

男子生徒Ｄ「エースたん・・ハァハァハァ・・・」

男子達は、エースが男という事を否定して盛り上がってる・・・。
そんな中フェイトは、男子達に容赦の欠片も無い鉄槌を下す・・・・。

ーーーエースは、私のお兄ちゃんつまり男の子だよ？ーーー

その瞬間・・男子達は、ピシリッ・・という音立てて石化した・・・。

男子生徒Ｃ「ふんっ！そんなの大した問題では無い」

男子生徒Ｄ「エースたん・・ペロペロ・・ハァハァハァ・・・」

約2名を除いてだが・・その後、石化した男子の集団を突き飛ばして女子の集団が入れ替わりにやってくる・・そしてフェイトに向けて一斉に、あるお願いをする・・それは・・・・。

ーーーお兄さんを紹介して下さい、そして私に下さいーーー

勿論、全ての女子に断りを入れたフェイト・・・。
女子達への断りを入れてる最中のフェイトの表情は普通だったが心の中では・・エースへの怒りの炎が再び燃え広がっていた・・・。
ちなみにだが・・１部の男子は、エースが男と知った上でファンになった人達が・・数名程居たとか居ないとか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

80万アクセス記念　過去編　ハラオウン家・・・3

アースラ内でフェイト達を待つエース・・・。
そこに、フェイト達がやって来た・・途中で合流したのかシグナム達も一緒だ・・・。
そんな中・・約1名・・義妹(フェイト)は背後に嫉妬の炎を出しながらエースを睨みつけていた・・・。

　エース「（ちょっと恐いぞ・・）それで、一体誰が来るんだ？」

なのは「まずは、私だよ《〝まず〟とは？》私とフェイトちゃんが交代で相手をするの」

　エース「つまり、なのはを倒すと次がフェイトって訳か？《そうだよ》はぁ・・・プッ」

エースは溜め息をついた後・・急に噴き出すそして・・・。

　エース「アッハハハハハハハハハハッ！・・・・・」

腹を抱えて笑い出した・・そして笑い終えるとなのはのを見据えてこう言い放った・・・。

　　　―――いいだろ・・新米共(ルーキー)・・格の違いを教えてやる――

そう言い残してなのは達の前を後にした・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊
訓練場内で対峙するなのはとエース・・・・。

なのは「私が勝ったら、さっきのルーキーって発言直してよね！　ＲＨ！」

エース「勝ったらな・・？（ツバイ）」

ＲＨ　Ｓ２Ｕ？「Ｓｅｔ　ｕｐ.」

なのはは、専用のＢＪセイクリッドモードを展開する・・・。
そしてエースもＢＪを展開する・・・。

Ｓ２Ｕ？「Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ，Ａｓｓａｕｌｔ　Ｆｏｒｍ.」

エースの愛機Ｓ２Ｕ？の機械音声がそう発言した後、エースの周囲が青く輝き始める・・。
そして、中から、ＢＪに身を包んだエースが姿を見せる・・・。
アサルトフォルムと言われるエースのＢＪは、軍服調のスーツの様な感じで手と足にそれぞれプロテクター調の防具が付いていおり・・・更に、ＳＴＳ時のフェイトと同じ様な純白のマントを装着している・・エースは淵は青で留め具はシルバーだ・・・。

エース「ルールを説明するぞ・・時間は無制限、相手を気絶或いは戦闘不能にした方の勝利、試合回数は１回のみこれでいいな？《うん》では、始めよう・・兄さん」

エースがモニターを展開する・・そして・・・。

クロノ「（始め！）」

クロノの試合開始の宣言が下された・・・・。

なのは「ＲＨ！」

ＲＨ「Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ」

試合開始の宣言の後直ぐに、なのはが砲撃をチャージし始める・・。

エースは一歩も動かず、杖状態のＳ２Ｕ?を持ってその場所に立っている・・そして

なのは「ディバイーンバスター《・・Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ・・》ーー！！」

なのはの砲撃は寸分違わずエースに向かっていった・・・。

ＲＨ「Ｉｔ'ｓ　ａ　ｄｉｒｅｃｔ　ｈｉｔ.」

なのは「うん、今のは手応えあ《確かに大したもんだ》！?」

なのはは・・背後からのエースの声に驚く・・・・。

エース「まぁ・・”当たれば”の話だがな《どっ・・どうして》当たる直前で高速移動魔法を使っただけだぞ《嘘!手応えあったもん!》そんなもん囮（デコイ）を使っただけだが?」

涼しい顔でそう述べるエース・・エースは更に語り続ける・・・。

エース「この程度の戦術・・基礎の内だぞ?さて続けよう・・

か！《きゃあ！》」

エースは、Ｓ２Ｕ？で激しくなのはの右腹部を叩きなのはを吹き飛ばす・・。

ここから・・エースのワンサイドゲームが始まった・・・・・。

エース「ツバイ」

Ｓ２Ｕ？「Ｃｈａｉｎ　Ｗｈｉｐ.」

なのは「っ！」

エースは、チェーンバインドの応用で作った魔力チェーンを吹き飛ばされて立ち上がろうとしてるなのはに向け放つ・・そしてなのはを魔力チェーンで拘束すると・・・・。

エース「せえええい！《きゃあああああ！》」

魔力チェーンを激しく振り回す・・巻きつかれてるなのはも当然激しく振り回されている・・・そしてエースは・・・・。

エース「えええええい！」

魔力チェーンと一緒になのはを地面に向け激しく叩きつける・・・。

地面に叩きつけられたと同時になのはの周囲に砂埃が舞い上がる・・・。

エース「確か・・こうだよな・・ディバインバスター・・・・」

Ｓ２Ｕ？「ｓｈｏｔ.」

エースは、未だに砂埃の舞っている場所に向けて先程なのはがエースに向けって放った直射型の砲撃魔法を放つ・・この様子をモニターで見ていた観戦者達は・・・・。

＊＊＊

ヴィータ「おい！あれってなのはの！」

シグナム「ああ・・砲撃魔法だな・・」

はやて「でも・・どうしてエース君が使えるんや？《覚えたんだろう》」

はやての疑問に直ぐにクロノが答える・・更にクロノが言い続ける・・・。

クロノ「エースの持ち味は、何と言っても相手の技の吸収して自分の物にして強さを増す事だからな・・なのはのディバインバスターは・・確かに、高威力の攻撃魔法だが膨大な魔力を直接目標に向けて放出するシンプルな方法だ・・・この程度ならエースは、一度見ただけで完全に、コピーできるだろう・・さて続きを見ようか」

クロノ達は再びモニターへ目をやる・・・。

＊＊＊

エースの砲撃魔法によって砂埃が舞う・・そんな時エースの手足が

何時間にか仕掛けられたなのはの放ったバインドに捕らえられる・・・。

エース「へぇ・・・（少し見なおしたよ）」

なのは「ハァ・・ハァ・・これで終わりだね・・いくよ!全力っ!全開!」

RH「Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ.」

なのはは・・満身創痍の状態ながらもエースをバインドに捕らえる事に成功する・・・。
そして、何時もの掛け声と共に集束砲撃魔法の発射体勢に入る・・。

なのは「スターライトー《・・カウンターバインド・・》え!?」

なのはは集束砲撃魔法の発射寸前で急に行動不能に陥る・・その事に戸惑うなのは・・。
しかも・・なのはを行動不能にさせてるバインドは、先程・・なのは自身がエースに向けて放ったバインドだ・・・。

エース「僕に・・バインドを仕掛けるとは、正直予想外だよでも・・”僕の敵じゃないな”でも僕にバインドをした御褒美によく使う技で止めを刺してあげるよ」

エースは・・そう言い終えると・・足元に莫大な魔力を溜めて真上にジャンプする・・・。
そして身体を回転させる・・・身体を回転させてる途中に足に炎を纏わせる・・・そして、そのまま、なのはに向けて炎を纏わせた

蹴りを放つ！

エース「えいやあああああああああ！」

なのは「きゃあああああああああああ！！！」

エースの蹴りがなのはの腹部に直撃する・・・エースの蹴りの衝撃でバインドと上着のＢＪが弾け飛ぶそのままエースは、なのはを蹴り続けながら地上へ向かっていく・・・。

そして・・地上に叩きつけられるなのは・・・・・。

なのは「・・・・・・」

エース「・・・砲撃以外は大した事はないな」

気絶してるなのはに向けてそう言い放つエース・・・。

クロノ「（勝者、エース・ハラオウン！）」

クロノの勝利者宣言が静かに訓練場内に響き渡った・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

８０万アクセス記念　過去編　ハラオウン家・・・４

エースは足元に莫大な魔力を溜めて真上にジャンプし身体を回転させる・・・。
身体を回転させながら足に炎を纏わせてそのまま、なのはに向けて蹴りを放つ！

エース「えいやああああああああ！」

なのは「きゃああああああああああ！！！」

エースの蹴りがなのはの腹部に直撃し・・更に蹴りの衝撃でバインドと上着のＢＪが弾け飛ばしそのままエースは、なのはを蹴り続けながら地上へ向かっていき・・・。
そして・・凄まじい衝撃音と共に地上に叩きつけられるなのは・・・・・。
その後・・クロノの勝利者宣言が静かに響き渡った後・・見学者達は・・・・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
なのはが負けたという事に・・ただ驚いていた・・・・・。

フェイト「嘘・・・」

ヴィータ「おい・・マジかよ」

はやて「なのはちゃんがこうも一方的に・・・」

シグナム「強いとは思っていたが・・これ程とはな」

ザフィーラ「確かにな・・」

シャマル「でも、どうしてここまで強いのかしら《それは僕が答えよう》

シャマルの呟きに割って入って来たクロノ・・そしてクロノが語り出す・・・。

クロノ「エースの主な仕事は戦乱鎮圧だ・・という事は・・エースの活躍の場は自動的に戦乱の地域という事になる・・そんな場所で戦ってるんだ弱い訳が無いだろうそれに」

ーーーエースはかなり手加減をして戦っているーーー

そう言うクロノに、更に驚く一同・・・そんな中、言葉を続けるクロノ・・・・・・。

クロノ「君達は、エースがベルカ式という事を忘れてないか？『あっ！』そうだエースの愛機のS2U？にもカートリッジシステムが搭載されているにも関わらずエースはカートリッジを1発も使っていない・・その上まだアイツはデバイスを変形させていないだろう？」

クロノの言葉に黙る一同・・・。

そして、フェイトとエースの模擬戦の番がやってくる・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊
訓練場内でＢＪを展開し対峙するフェイトとエース・・・・。

フェイト「私が勝ったら他の女の子と話さないでね」

エース「勝ったらな（まっ・・負けられないな絶対に）《それとね》何だ？」

ーーー本気で戦って欲しいのーーー

クロノからエースが手加減してるという事を聞いたフェイトは、真剣な顔でエースに手加減をしないように頼む・・そしてエースの返答は・・・・。

エース「・・・怪我しても知らないよ？本当にいいの？《うん》分かった」

少し渋ったが、エースは本気で戦うと了承した・・・・。
そしてエースがＳ２Ｕ？に指示を出す・・・。

エース「ツバイ・・ソードスタイル《Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》」

Ｓ２Ｕ？「Ｓｗｏｒｄ　ｓｔｙｌｅ」

杖の状態のＳ２Ｕ？が変形し、鞘付きの剣に姿を変えていく・・・。
そして、鞘から剣の状態Ｓ２Ｕ？を抜刀し構えるエース・・・。

クロノ「（２人とも準備はいいか？）」

エース「えぇ」

フェイト「うん」

クロノ「（それじゃあ・・・始め！）」

クロノが試合開始の合図をする《Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ.》それと同時に消えるフェイト・・・。

Ｓ２Ｕ？「Ｂｌｉｔｚ　Ａｃｔｉｏｎ.」

少し遅れてエースも消える・・・。

フェイト「あれ？《こっちだ》っ！」

先にフェイトが姿を見せる・・その後エースがフェイトの背後に現れる・・・。

エース「やっぱり背後を狙って来たな・・《まるで背後狙ってるのが分かってたみたいだね》まぁね・・鎌の特性は、”よく知ってる”からな・・・さてこれで終わりなのか？」

フェイト「まだこれからだ・・よっ！」

フェイトＢＤを振りかぶりエースに向けて振り下ろす・・・。

それをＳ２Ｕ？で受け止めるエース・・受け止めた瞬間、火花とガキンという金属同士がぶつかる独特の音が響き渡る・・・。

エース「ツバイ・・カートリッジロード」

Ｓ２Ｕ？「Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ.」

エースは互いのデバイスを交差させてる状態からＳ２Ｕ？に指示を出す・・・。
そしてＳ２Ｕ？に２発のカートリッジが供給される・・そしてＳ２Ｕ？に炎を纏わせ・・・。

エース「ファイヤースラシュ」

エースは交差さてる状態のＢＤの上からＳ２Ｕ？でＤＢの柄を一刀両断した・・・・。

フェイト「こっ・・これは！」

フェイトは追撃を回避するために後ろへ移動する・・・。
そして、エースを見ながら思考する・・・。

フェイト「（今のは、間違え無くシグナムの紫電一閃と同じ技・・・）」

ＢＤ「Ｒｅｃｏｖｅｒｙ.」

ＢＤの柄が再生する・・・。

フェイト「（恐らく・・この速度での打ち合いだったら勝ち目は無い・・だったら高速機動の打ち合いに持っていけば勝機が見えてくるかもしれない）よし・・ＢＤソニックフォーム」

ＢＤ「Ｙｅｓ，ｓｉｒ. Ｂａｒｒｉｅｒ ｊａｃｋｅｔ. Ｓｏｎｉｃ ｆｏｒｍ.」

フェイトはＢＪを換装する・・・。
見た感じ的に装甲をさらに薄くすることによってより高い高速機動を実現するフォームというところだろうか・・だがエースに問題が発生したそれは・・・・。

エース「（なっ・・何だアレは！完全にレオタードとスパッツじゃないか！正直・・目のやり場に困る・・どうしたものか・・まっ・・まぁ、あれだけ装甲が薄いんだ一撃で倒せるだろう）／／」

エースはそう思考すると、Ｓ２Ｕ？に指示を出す・・。

エース「・・サイズスタイル・・」

Ｓ２Ｕ？「Ｓｃｙｔｈｅ　ｓｔｙｌｅ．」

エースの指示でＳ２Ｕ？は大鎌に姿を変えていく・・・。
そして・・Ｓ２Ｕ？が大鎌に変形し終えると・・更にバックパックがエースの背中に追加装備された・・その後少し驚いた顔のフェイトがエースに話しかける・・・。

フェイト「エースも鎌使うんだね《まぁな》だからさっきよく知ってるって言ったんだね」

エース「そう言う事だ・・・ツバイ」

Ｓ２Ｕ？「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．Ｍａｇｉｃ　Ｊａｍｍｅｒ．Ｐｈａｎｔｏｍ　ｓｙｓｔｅｍ．Ｏｐｅｎ」

フェイト「何をしたの？《さぁ？》」

エース「・・さて行く・・よっ！！」

S2U？「Ｆｌａｓｈ　Ｓｈｏｔ．」

エースがそう言い終えると、強烈な閃光がフェイトを襲う・・・。
閃光の後にフェイトが目を開ける・・そしてＢＤに探査の指示を出す・・だが・・・・・。

フェイト「ＢＤ！」

ＢＤ「Ｔｈｅ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｔａｒｇｅｔ　ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ．」

ＢＤはフェイトにエースの反応が一切無い事を告げる・・・。
エースは、フェイトの前から文字通り”消失”したのだ・・・・・・・。

フェイト「えっ！？そんな！もうい《やあっ！》うっ！・・・・・・・」

フェイトはＢＤに再度探査をするように指示を出そうとするが・・・。
いきなり右肩に強烈な衝撃が走りその後、地面に叩きつけられて意識を失う・・・。

エース「やっぱこの姿疲れるな・・・」

フェイトが意識を失った後、先程までフェイトが居た場所にエースが現れる・・・。
そして気絶してるフェイトを見てクロノが勝者を言い渡す・・・。

クロノ「（勝者、エース）」
クロノの勝利者宣言が訓練場内に響き渡った・・・。
　クロノ「（それとエース《何ですか？》フェイトを運んで来てくれ《えっ！？》頼んだぞ）」
そう言ってモニターを切るクロノ・・・。
エースはフェイトに近づいてき・・フェイトを抱きかかえる・・・。
　エース「はぁ・・・（やっぱり・・目のやり場に困る）／／／／」

気絶したフェイトをお姫様だっこの状態で抱き上げるとエースは目のやり場に困り続けながら訓練場を後にした・・・・・・・・・・・・・。

＋＋＋

デバイスの紹介
　S2U？　Song・To・You　？（ソング・トゥー・ユー・ツヴァイ）

エースの持つデバイスでクロノの持つＳ２Ｕとは姉妹機
リンディが入局の際エースに贈った思い出のデバイス
インテリジェントデバイスでありカートリッジシステム搭載型（リボルバー式）
杖、剣、鎌の３形態に変化する・・・。

基本形態の杖は砲撃等に使うのが基本だがエースは打撃をする時にも多くこの形態を好んで使用している

剣の形態は近接戦闘形態・・フェイトのバルディッシュ・アサルトを真っ二つにするなど
切れ味、威力共にポテンシャルが高い・・シグナムのＬＴと同じく刀身に魔力を込めて炎を纏わせる事が出来る

鎌の形態は奇襲戦闘形態・・この鎌の形態になるとバックパックが背中に追加装備される・・このバックパックは対魔法ジャミングと強力な幻覚の発生装置であり・・ジャミングにより相手のデバイスから自身の熱や生体・・全ての反応を完全に消し更に強力な幻覚で相手の視覚からも自身を消す・・相手とっては正に敵が突然消えたように思える・・・。
しかし・・このジャミングと幻覚の発生装置は、魔力消費がとても激しく使いどころに困る装備と言えるだろう・・この理由からエースは殆んどこの形態を使わない

家族の写真・・・単独で動く事が多いエースはデバイスに定期的に送られてくるリンディ、クロノ、エイミィが写った写真を全て保存している・・・最近フェイトも増えて嬉しい様だ
ちなみに別フォルダには・・・カリムの写真が数枚保存されている

子守唄・・・幼い頃、リンディが歌っていた子守唄が録音されているエースは辛い時などよく聞いているようだ・・・・・・定期的に再生されてる記録がある

？？？？システム

※備考・・・エースは、このＳ２Ｕ？をとても大切に使っているようだが・・・しかし最近、成長に伴ってエースの戦闘センスや魔力の向上にＳ２Ｕ？が対応出来なくなってきているエースは自らにリミッターを掛けるなど対策はしてるようだが・・・。
もはや壊れるのは時間の問題だろう・・・。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋

８０万アクセス記念　過去編　ハラオウン家・・・５

エースとの模擬戦が終わって暫らく経ってフェイトは目を覚ます・・・。

するとそこは自分のベッドの上だった・・・・・。

BD「How are you now?」

フェイト「うん・・大丈夫だよBDは？」

BD「No problem.」

フェイト「（負けちゃったんだね・・私・・）とりあえずみんなのとこに行こうか」

BD「Yes sir.」

フェイトはベッドから起き上がると・・リビングへ向かった・・・。

＊＊

リビングはテレビが点いているが静寂している・・・。

その事を少し疑問に思いつつもリビングに入って行くフェイト・・・。

エイミィ「あっ・・起きた？フェイトちゃん」

何時もより少し小さめの声で喋るエイミィ・・そんなエイミィの様子をフェイトは疑問に思い聞いてみる事にした・・・。

フェイト「どうしたの?エイミィ《アレだよ、アレ》あっ・・」

そう言ってエイミィがある方向を指さすそこには・・・。

リンディ「ふふっ・・」

エース「ｚｚｚｚｚ・・・・。」

ソファーの上でリンディに膝枕されながら眠るエースの姿があった・・・。

よほど眠かったのか・・それとも安心してるのだろうか文字通りエースは熟睡していた

リンディ「あら、起きたの?フェイト《うん、母さん》」

フェイト「よく寝てるね、エース《えぇ、模擬戦の後少しあったからね》何があったの?」

フェイトが何があったのか尋ねると、リンディは微笑みながら答え始めた・・・・。

リンディ「模擬戦が終わった後・・フェイトをお姫様だっこしながら帰ってきた時にね《(お姫様だっこ・・・)／／／》シグナムさんに試合を申し込まれたのよ」

リンディから知らない内に・・エースにお姫様だっこされた事を告げられて顔を真っ赤にするフェイト・・フェイトはそれを隠すかの様に話を更に進める・・・。

フェイト「そっ・・それでエースはどうしたの？《勿論、断ったわ》そうなんだ／＼」

リンディ「でもシグナムさんが中々諦めてくれずに苦労してたわね・・他にも、はやてさんがエースにフェイトとなのはさんの対応のあまりの違いを聞かれた時に珍しくエースがかなり焦っていたわよ」

フェイト「エースは何で焦っていたの？」

リンディ「さぁ？何故でしょうね～♪」

リンディとフェイトの会話が盛り上がってる一方で自室のクロノは・・・。

＊＊

クロノ「・・やはり、限界が近いな」

クロノは、S2U？に現在の状態を見る端末を使い・・モニターでS2U？の状態を見ながらそう呟く・・。

クロノ「・・しかもあれだけ使うなと言っておいた”シャープネス”を使った記録がある」

”シャープネス”という単語に目を細めるクロノ・・・。

クロノ「”シャープネス”を使った事は後で問い詰めるとして・・・問題なのは、エースの新しいデバイスか・・・エースの戦闘セン

スそれと魔力の向上についてこれるデバイスともなると相当難しいだろうな・・・S2U？は念式は少し古いがスペック上では今のRHやBDよりも少し高い訳だし・・それを超えるとなると・・・単純にRHやBDの数倍のスペックでは無いとダメな訳だしな・・・困ったな」

クロノの呟きは・・闇へと消えていく・・・・。

＊＊

未だに、リンディと会話を続けるフェイト・・・。

その会話の中で、フェイトは以前から思ってたある事をリンディに聞く事にする・・・。

フェイト「あのね、母さん・・エースにもっと仲良くするにはどうすればいいと思う？」

そう聞くフェイトに、リンディもフェイトにある事を聞く・・・。

リンディ「フェイトは、エースの事が好きなの？《えっ！？／／／》」

リンディの問いに顔を真っ赤にするフェイト・・・。

フェイト「お兄ちゃんとしては好きだよ《男の子としては？》分かんない《そう♪》」

リンディ「う〜ん・・エースに好かれる方法ね・・多分だけど《うん》エースが他の女の子と話してる時に、フェイトがエースの足とか踏まなければいいと思うわ」

フェイト「でも・・エースが他の女の子と話してると何かムカつくんだもん・・」

リンディ「うふふ・・でもエースは”元々の性格”から考えれば、日常的に、少しでも暴力や手を出す女の子は嫌うと思うわよ」

フェイトはリンディの”元々の性格”という言葉が気になり聞いてみる・・・。

フェイト「元々の性格って?」

リンディ「エースは元々こんなにクロノみたいに、ぶすっとした性格じゃ無かったのよ、クロノの元で修行をしてからこんな感じになったのよ」

フェイト「どんな感じ《解析が終わりました》」

フェイトがリンディにエースの元々の性格を聞こうとした時・・。丁度クロノが部屋からリビングにやって来てフェイトの質問を遮る

リンディ「で、どうだった?」

リンディがクロノに真剣な顔で聞く・・するとクロノが答え始める・・・。

クロノ「まず始めに・・S2U?は、もう限界です・・・近々壊れるでしょう《そう・・・》それともう1つ”シャープネス”を使った記録がありました」

リンディ「っ！・・そう・・《問い詰めますか？》いいえ・・無事に帰って来たのだから今回は許しましょう《いいんですか？》えぇ・・」

エース「ｚｚｚｚｚ・・・・。」

こうして時間が経っていく・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

その後エースは起き上がって食事も済ませてエース現在、風呂に入っている

エース「気持ちいい・・なのはの家では、まともに入れなかったからな～」

エースは湯船に浸かり高町家での事を思い返して・・自身の自宅でゆっくりとリラックスしている喜びを感じていた時、事件は起こった・・・。

フェイト「お兄ちゃ～ん入ってもいい？《ハァ！？》」

エース「今出るから少し待ってて《もう、入っちゃった♪》何イッ！？」

ちゃっかりもう風呂に侵入したフェイト・・エースは行動が一時停止した・・・。

そんなエースに笑顔で一緒に入ろうという小悪魔な妹・・・。

フェイト「だから一緒に、入ろう♪お兄ちゃん」

エース「・・・じゃあ、お先に・・《待って・・》」

行動が回復したエースは取り敢えず、出て行こうとするが・・。
フェイトに腕を掴まれて、こう言われた・・・。

フェイト「”お兄ちゃん”は・・私と一緒にお風呂入るのイヤなの？」

妹であるフェイトの泣きそうな顔＋上目遣いという攻撃に、エースの返答は・・・。
まぁ・・当然の事ながら

エース「・・いいよ・・一緒に入ろうか、フェイト《うん！》はぁ・・・」

攻撃時間は、たった3秒で陥落してしまう自覚無の妹バカ・・・。
ちなみに、エイミィは3、４時間近く誘った事もあるが断っている・・・・。
そして・・フェイトと一緒に過ごす夜は、まだ続く・・・・・・・・・・・・・・。

80万アクセス記念　過去編　ハラオウン家・・・6（終）

フェイトと仲良く?お風呂に入ってるエース・・・。

エース「・・・痒い所は無いか?」

フェイト「うん、大丈夫だよ」

フェイトの頭をゴシゴシと洗うエース・・・。

何故、エースがフェイトの頭を洗ってるかというと・・・。

ーーー洗ってくれる?”お兄ちゃん”ーーー

フェイトにそう頼まれたからである・・・。

フェイト「ねぇ、エース《何だい?》さっきクロノと母さんの会話の中に”シャープネス”という単語が出てたんだけど”シャープネス”って何なの?」

フェイトが先程のリンディ達の会話で疑問に思った事をエースに聞いてみた・・・。

するとエースは、微笑しながらこう答える・・・。

エース「それはS2U?のシステムの1つで、フェイトには、全く関係ない事だよ」

フェイト「ふ~んそうなんだ」

エース「さて、流すぞ目瞑れよ《うん》よっと」

エースはシャワーでフェイトの頭を泡を流す・・・。

そうして風呂を出るエース達・・・。

＊＊

風呂から上がると、エース達はリビングへ向かった・・・。

丁度その時、ＴＶがあるＣＭをしていた・・・。

ナレーター「美味しい、＊＊＊のショートケーキ！」

そのＣＭにリンディ達は・・・。

リンディ「これ、美味しそうね♪」

フェイト「うん！私も食べてみたい」

リンディとフェイトが盛り上がる所に、エイミィが口を挿む

エイミィ「でも・・このショートケーキ超人気で店が開いて１０分も経たない内に売り切れて入手困難だって、美由希ちゃんが言ってたよ」

リンディ「そうなの・・残念だわ・・」

フェイト「仕方ないよ・・」

エース「・・・・」

とても残念な顔をするリンディとフェイト・・そんな２人の様子を

エースは黙って見ていた
それから暫らく経って・・寝る時間に差しかかる少し前・・・。
エースはクロノにある物が有るかどうかを質問をした・・そのある物とは・・・・・。

エース「兄さんアレってこの家にあります？」

クロノ「アレ？・・あぁ、あるぞ・・この前、商店街のクジで僕が当てたのがそれがどうしたのか？《勝手に、使っても良いですか？》別に構わないが？」

エース「ありがとうございます」

そう言い終えると、ソファーに寝転ぶエース・・・だが・・・・。

フェイト「一緒に寝よう♪」

エースはフェイトの自室に連行されて行った・・・・・。
＊＊

フェイト「う～～ん」

エース「はぁ・・寝れない・・・」

フェイトに抱きつかれて、全く寝れずに困り果てるエース・・・。

エース「こうして黙ってると可愛いんだけどね・・・」

フェイト「・・・・・／／」

エース「起きてないよな・・《（ギクッ・・・）》」

一瞬だが、フェイトの頬が赤くなった様に感じたエース・・・。
そして、顔を近づけて確認して見る・・・。

フェイト「ＺＺＺＺ・・・／／」

エース「気のせいか・・僕も寝よう・・・（明日は早いんだし）」

エースは、目を瞑り眠りについた・・・・。
＊＊
早朝・・日もまだ出て無い頃・・・。
フェイトのベッドからなんとか抜け出したエースは・・・。

エース「・・・行くか、場所は確か・・・・」

そう言って、エースは自宅から持って来たある物に乗り何処かへ向かって行った・・・・。

新聞配達員「ふう・・今日も終わったな・・・・・・・・はっ？」

？？？「～♪」

新聞配達員は信じられない光景を目撃し驚愕の顔をする・・・。

新聞配達員「え？・・嘘だろ？」

それは・・新聞配達員の運転する原付をスケボーに乗った少女の様な子供が涼しい顔で追い越すという摩訶不思議な現象だ、新聞配達員の運転する原付は、現在４０ｋｍという事は、スケボーに乗った少女の様な子供は軽く５、６０ｋｍ以上は出てる事になる

新聞配達員「・・・きっと疲れてるんだ・・うん」

新聞配達員は疲れで幻覚のようなものを見たと思って帰って直ぐに寝た・・・。
しかし、この・・・謎のスケボーに乗った子供は・・・様々な場所で目撃され・・・その際に赤信号で止まってた車に乗ってた人物に・・とあるケーキ屋の場所を聞いたとか、いないとか・・ともかく、この車や原付を平気で追い越す、スケボーに乗った子供は、海鳴の怪奇現象ランクインした・・。
＊＊
その後、時間が経ってフェイトが学校から帰ってくる・・・。

フェイト「ただいま～」

エイミィ「あっ、おかえり、フェイトちゃん」

エイミィがご機嫌な顔をフェイトに向ける・・フェイトはエイミィのご機嫌な理由を尋ねる

フェイト「どうしたの？何かいい事でもあったの？」

エイミィ「冷蔵庫見てみなよ《うん》」

エイミィに言われた通りに冷蔵庫の中を見るフェイト・・そこには・・・。

フェイト「これって！」

エイミィ「そう！あの＊＊＊のショートケーキだよ！！エース君が偶々＊＊＊の近くを通りかかって残ってたのを買って来たんだって！」

そう力説するエイミィ・・フェイトはふとある事に気付く・・・・。

フェイト「あれ？エースは？」

エイミィ「えっと・・そのね」

エイミィが少し言い辛そうに答える・・・。

エイミィ「エース君は、急な呼び出しでまた本局に行ったんだ≪えっ・・≫でも！大丈夫だよ今回は、そんなにかからないから直ぐに帰って来るって言ってたし」

フェイト「うん・・」

フェイトはエースがまた急にいなくなった事に落ち込んでいく・・・。

エイミィ「さっ・・さあ！食べよっか！折角エース君が買って来てくれたんだし」

フェイト「うん、そうだね（帰ってきたら、困らせてやるんだから♪）」

フェイトの落ち込みをエイミィが持ち前の明るさで、なんとか機嫌を直させる・・。

そして、機嫌が直ったフェイトは・・エースが帰って来たらどんな事をしてエースを困らせてやろうかと考えていた・・・・・・・・・・・。

８０万アクセス記念　幼少期の思いでと弱点？　前

某日・・それは、ヴィヴィオの何気ない言葉より始まった・・・。・・・自宅でＴＶの怪奇特集を見ていたヴィヴィオがなのはにある事を聞く・・・。

ヴィヴィオ「ねぇ、なのはママ！」

なのは「何かな？ヴィヴィオ」

ーーーパパって恐いものあるの？ーーー

＊＊

翌日・・六課部隊長室にて・・・。

なのは「・・・という訳なんだけど・・・」

はやて「う～ん・・確かに何なんやろうな」

フェイト「私も、よく知らないな～・・・・」

隊長陣は・・エースの恐いものについて真剣に悩んでいた・・・。

その疑問を持ちつつ食堂へと足を運んで・・更に大々的になる・・・・。

＊＊

エースの恐いものについて隊長陣は、新人達にも話してみた・・・。

スバル「エースさんの・・・」

ティアナ「苦手な・・・」

エリオ「物・・・」

キャロ「ですか？」

この事に、新人達も困惑する・・・。

ティアナ「う～ん・・・」

スバル「ギン姉も、そんな話聞いた事ないって言ってたし・・・」

エリオ「謎ですね・・・」

そんな時キャロがある事を言う・・・。

キャロ「あの、あのですね・・・」

ーーーそれなら、知ってる人に聞けばいいんじゃないでしょうか？ーーー

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

クロノ「（・・・そんな事で僕に、わざわざ通信をしてきたの

か？）」

不貞腐れた顔のクロノがモニター越しにそう言う・・・。

はやて「うん、気になって仕方がないんよ、なっ！お願いや！教えて♪」

クロノ「（断る！全く・・こんな下らない事で《クロノく～ん》何だ・・あああああ！？）」

クロノがはやての手にある物をみて奇声を上げて反応する・・・。
それは・・妻のエイミィでは無い別の女性と2人っきりで食事をしてる光景の写真だ・・。
その写真を見た女性陣の目がとても冷たい・・・特にフェイトの

はやて「教えてくれるよね？《分かった・・。》おおきにな～」

クロノ「（だが！その写真とその写真のネガをよこせ・・それが条件だ）」

はやて「ええよ～♪」

そしてクロノがエースの恐がるものを言う・・・・。

ーーーエースの恐がるものは”ハムスター”だーーー

はやて「はっ？」

なのは「へっ？」

クロノ口から正に意外な答えが返って来て目が点になる一同・・・。

ティアナ「あっ、あの・・クロノ提督、理由は何ですすか?」

クロノ「(さぁ?その理由自体は僕も良くは知らないんだ・・理由が知りたければ僕では無く母さ・・リンディ統括官に聞いた方が早いと思うぞ?)」

ティアナ「そうですか」

ヴァイス「(これいいネタゲットだな!これを使ってエース教官にささやかな復讐(おれい)をしてやろう・・フフフッ)」

ヴァイスはそう思いながらこっそり食堂を後にする・・・。
この後、彼は自身に起こる恐怖など知るよしも無い・・・・。
ヴァイスがこっそり去って後に、クロノがこう付け加える・・・・・・。

クロノ「(あぁ、それとな絶対に遊び半分でエースにアレを見せるなよ?)」

フェイト「どうして?」

クロノ「(大暴れするからだ)」

はやて「何で暴れるん?ハムスター恐いんやろ?」

クロノ「(あぁ、見た瞬間は逃げるが・・後に怒り狂って大暴れするんだ・・)」

なのは「ぐっ・・具体的にどんなふうに暴れるの？」

クロノ「（まずアレが居た建物を全てを焼き払うか無差別に物を壊しまくるか、持ってた奴を地獄の底まで追って一日中殴るかこのどれかだ・・それじゃあな）」

みんなでエースに悪戯しようとしていた為に、顔が青くなる一同・・・。

その後・・・顔が回復した一同は・・・エースがハムスターが嫌いな理由が知りたい為にこの人を呼んだ・・・・。

リンディ「え？エースがハムスターが嫌いか、ですって？」

はやて「ええ」

はやては取り敢えず、エースが本当にハムスターが嫌いなのか確認をしてみる

リンディ「ええ、それこそ超が付くほどにね」

するとニコニコしながらそれを肯定するリンディ・・・。

なのは「どうして、嫌いになったんですか？」

リンディ「それは噛まれたからよ《へっ？》これは見た方が早いわね」

そう言ってリンディがモニターを操作してある映像を映す準備をする・・・。

はやて「それは？」

リンディ「エースの可愛い時の映像よ♪見たくない？」

女性陣「そんな訳ありません！！」

一致団結し力強く答える女性陣・・・。

リンディ「じゃあ・・映すわよ～♪」

そして、モニターに小さい頃のエースが映し出される・・・・・・・・・・

８０万アクセス記念　幼少期の思いでと弱点？　後

映像に映し出される幼き頃のエース・・・。
再び小さいエースを見た六課一同の様子は・・・。

　はやて「改めて見ると何か反則な気がするわ・・」

　なのは「奇遇だね、はやてちゃん私もそう思ってたところだよ・・」

　フェイト「私、女っていう自信が無くなってきちゃった・・・」

エースの姿を見るや否や急にネガティブオーラを出し落ち込む隊長陣・・・・。
少し落ち込んだ後に、顔上げて続きを見る事にする・・・。
どうやら映像の内容は・・幼少期に行った動物園みたいだ・・・・。
＋＋

　リンディ「これが、キリンよ」

　エース「きりぃん？《えぇ、そうよ》ほぅぁ～」

そう言いながら首をかしげるエース・・・。
リンディがそれを肯定すると改めてキリンを見るエース・・。
そして、エースとリンディの２人は別の動物を見に移動する・・・。

　オオカミ「アオォオオ～ン」

エース「！！？」

エースは突然のオオカミの遠吠えらしき声に驚く・・。
そして咄嗟にリンディの背後に隠れる・・・。

リンディ「大丈夫だから出て来なさい《ほっ・・本当にぃ？》本当よ♪」

リンディの言葉を信じてエースは、恐る恐るリンディの背後から出てくる・・・。

オオカミ「・・・・・」

リンディ「ほらね♪《うっ、うん》じゃあ次に行くわよ」

エースはオオカミが沈黙してるのを確認すると・・・リンディの隣にピッタリと身を寄せる
そうして身を寄せながら次の動物のケージに向かった・・・。

ライオン「ＧＡＡＡＡＡＡ！！」

エース「うっ・・《ほら、檻に入ってるから大丈夫よ》うん・・」

ライオン「ＧＡＡＡＡＡ！！」

エース「ひっ！」

ライオンの咆哮に驚き先程と同じくリンディの背後に隠れる・・・。

こんな様子を見ていた六課のメンバーは・・・。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

はやて「・・だれ？この子」

なのは「えっと・・そのぉ・・・」

はやてやなのはを始め一同が信じられないっといった顔をしている・・・。

リンディ「正真正銘のエースよ入局前の頃だけど？」

リンディの解答にただ呆然とする一同・・・。

リンディ「あっ・・・ここねエースがアレが嫌いになった理由は」

そう言うと、映像はある場面に差しかかる・・・。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

そこは、小動物たちとの触れ合いコナーみたいな場所だった・・・。

エースは、ウサギ達に餌を与えている・・その時・・・。

ハムスター「・・・カプッ・・・・。」

エース「いっ・・・」

リンディ「（これは・・・）」

1匹のハムスターがエースの指を軽く噛んだ・・その瞬間・・・・。

エース「いたあああああい！！」

エースは声を上げると同時に涙目になると・・・。

エース「いやあああああ！たべられるうううううううううう！！」

そう泣き叫びながら何処かに向かって全力疾走して行った・・・・。

リンディ「はぁ・・」

リンディは溜め息をつくとエースを追いかけて行った・・・。

＋＋

リンディは映像を切ると一同に向き

リンディ「これが・・エースがハムスターが嫌いになった原因ね」

そう言って、お茶をすする・・・。

はやて「この様子からすると・・エース君って・・」

リンディ「えぇ、超が付くほどの恐がりで泣き虫だったのよ」

リンディの解答に、呆然とするしかない一同・・・。

　フェイト「どのくらいの恐がりだったの？」

　リンディ「犬に吠えられて私の後ろに隠れたり、猫に威嚇されて逃げたり、カラスの鳴き声にも泣きそうになってたわね～・・・と言うかあの子は大きな声で鳴く動物や虫は大体恐がってたわよ？」

さらりとそう言うリンディ・・・。

　フェイト「それじゃあ・・1日1回は泣いてた《2、3回ね》そっ、そうなんだ・・」

　リンディ「クロノとの修行で犬とかの耐性は付いたみたいだけど、ハムスターだけはどうしても克服出来なかったのよ・・今でもハムスターの事を凶悪生物や魔獣とか言うくらいだからね・・・」

リンディの話にずっと呆然とする一同・・そしてリンディは話を終えると直ぐに帰って行った

一方・・その頃、ヴァイスは・・・・。

＊＊

　ヴァイス「へへっ・・コイツさえいれば俺の天下だ！」

ヴァイスの掌には何処かで仕入れたハムスターが乗っている・・・。

そこに、簡単な書類整理の為にエースが六課にやって来た・・・。

　ヴァイス「エース教官！《ん？どうした？ヴァイス》ちょっと

来て下さいよ～」

エースは素直にヴァイスの方へ行く・・・。
するとニヤニヤしたヴァイスはエースにある事を頼む・・。

ヴァイス「エース教官、ちょっと手を食器の様に合わせて下さい」

エースは少し疑いつつも、言われた通りに手を茶碗の様に合わせる・・・。

エース「・・・こうか？《えぇ・・それ！》・・・・・・・」

エースの掌に凶悪生物（ハムスター）が乗せられる・・・。
その瞬間思考が停止するエース・・少し経って思考が回復すると・・・。

エース「あばばばば！みぎゃあああああああああああああああ！！」

即座に凶悪生物（ハムスター）を下に落として泣き叫びながら全力疾走し何処かに消え
て行ったエース・・その様子を見たヴァイスは・・・。

ヴァイス「うわははは！」

大爆笑していた・・その後ヴァイスは、この事をみんなにも言う為に食堂へ向かった・・。

ヴァイス「・・と言う訳なんですよ！」

先程の事を楽しげに言うヴァイス・・しかし他のメンバーは・・・。

はやて「なっ・・なんて事を・・・・」

なのは「どっ・・どうしよう・・」

なのは達の顔が絶望の表情に染まって行く・・その時、六課に全体放送が流れる・・・。

ーーーヴァイス・グランセニック陸曹20分以内に海上訓練施設に集合せよーーー

ーー特別訓練を行う・・・尚、来ない場合は、隊舎に誤射が当たるかも知れないーー

ーーーみんなの”素直”な対応を願うーーー

その全体放送終了と同時に、なのは達にバインドで拘束されるヴァイス・・・。

ヴァイス「ちょ《ゴメンね・・》」

そして一同が同時にこう言う・・・。

ーーー私達、まだ死にたくないから・・・・ーーー

それから強制的に海上訓練施設に連れて行かれるヴァイス・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ヴァイスを待っていたのは・・ただの鬼神だった・・・。

エース「・・・先程は素敵なプレゼントをどうも《いっ・・いえ》お礼に君を強くしてあげるよ♪どう？嬉しいだろう？」

口元は笑っているが・・目が単色な上に殺気が籠っている・・・。

ヴァイス「でっ・・・出来れば遠慮したいなぁ～・・・」

エース「・・・それ無理♪」

ヴァイス「ですよね・・・・」

エース「じゃあ・・特訓（リンチ）を始めよか♪」

ーここから先は過激な為お送りする事が出来ませんご了承下さい・・・ｂｙはやてー

特訓（リンチ）を終えたヴァイスは、後にエリオにこう言ってたそうだ・・・・

。

ーーーもう、エース教官に悪戯はしない・・本当に命を落としかねないーーー

こうして六課一同は、新たなる教訓を1つ学んだのだった・・・・・・・・。

８０万アクセス記念　ビーナスの子育て日記（前書き）

グラムサイト2さんのリクエストにより
ビーナスの子育て日記を書きました・・上手く書けたか不安です・・
。

８０万アクセス記念　ビーナスの子育て日記

２０年前ポイニクセル王国・・サディア邸内・・・・。
ビーナスは、自室で日記を付けていた・・・・。

ビーナス「・・こんな感じかしらね」

エース「ね〜」

エースもベビーベッドの中で答える？
そのエースの反応にビーナスは・・・。

ビーナス「んも〜可愛いわね〜♪」

エースを持って立ち上がりグルグルと回る・・。

メイド「失礼しまああああああああ！？ビーナス様！？早くエース坊ちゃまを降ろして下さい！！《何でよ？》何でもだからです！！」

エースをベビーベッドに戻すとビーナスはメイドから説教を受け始める・・・。
そんな中・・日記が捲れて記載された所が・・現れた、内容は・・・・。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

＊月＊日・・

今日は、エースのご機嫌と天気も良くて、良い日になりそうだ・・。

私は、何時ものように朝食を取る為に、エースと一緒に食堂へ向かった・・。

食堂では、お父さんと馬鹿（スペード）が一緒に食事をしていた・・・。

ー国王「あっ、スペードそれとってくれ《どうぞ》ありがとう」ー

ースペード「お義父さん、そろそろ時間ですよ《うむ》」ー

この2人似たもの同士なのか、かなり仲がいい、そんな男供は城に向かった・・・。

ここからが私とエースの時間だ・・・。

私は、エースに粉ミルクを与える・・それを飲むエースに自然と頬が緩む・・。

勿論、私以外の使用人達の頬も緩んでいる・・・。

朝食を済ませた私とエースは、中庭で寛いでいた・・・。

その時、使用人が来て私宛の荷物を持って来た・・どうせ中身は分かるのだが

そう思いながら荷物を開けると・・中身は、赤い塗料で書かれた手紙が数通入っていた・・。

手紙の内容に私はやっぱりと思う・・手紙に書かれていた文面は・・。

ー私のスペード様をかどわかす女狐、スペード様に近づくのを止めなさいー

そんな感じの内容だ・・私は筆を取り返信した・・。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

まずは、被害妄想お疲れ様・・

心配しなくても私は、1回もスペードをかどわかしてないわ

付き合う時の告白も、結婚のプロポーズもスペードが私にしたのよ

こんな事、貴女に言っても無駄だろうけど・・私とスペードは貴女には、分からない絆・・愛で結ばれてるのよ

言っておくけど、貴女が割って入る隙間なんて何処にも無いわよ？

信じられないなら、スペードを誘惑でもしてみなさい

スペードは貴女なんかには絶対に誘惑されないから

”スペードの妻”　ビーナス・L（レオ）・サディア

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

全く、馬鹿（スペード）の管理は大変ね・・まぁこれはその馬鹿（スペード）を好きになった私の宿命だろうけど・・悔いは無いけどね・・・。

私はそう思いながら、エースに同意を求める・・すると可愛らしい顔で返事をくれるエース・・全く、将来・・女泣かせにならなければ良いけど・・と思ってしまう

だが・・その瞬間、馬鹿（スペード）を思い出して、それは絶対に無理と確信した

それにしても、エースは本当に手が掛からない子だ・・・。

私としては、もう少し手の掛かる子でも良いと思うくらいだ・・・。

こういう手の掛からない所は私に似たのだろう・・それは、それで嬉しいのだけれどもう少し世話を焼きたい私としては、本当に微妙なところだ・・・。

そうこうしてると、お父さんとスペードが帰って来たので私は、エースを抱きかかえるとリビングに移動する・・・。

リビングに移動したら・・スペードがエースを抱かせてくれと頼んできたので私は仕方なくエースを渡そうとしたところ急にエースが激しく泣きだした・・・。

どうやらエースは、余り父親（スペード）の事は好きでは無いようだ・・これが初めてではないのに、床に手と膝をつき項垂れながら落ち込

む筆頭騎士・・・。
　私は、エースをあやしながら、何とも情けない筆頭騎士を横眼で見ていた・・。
　エースは泣きやんで直ぐに寝てしまった・・普段、全く泣かない子なので泣き疲れたのだろうか？
　エースが寝たのを確認したスペードが再度抱かせてくれと頼んできたので私は再びエースを渡そうとした瞬間エースは目を覚まして父親（スペード）の顔を見るとまたもや激しく泣きだした・・・。
　そして再度、先程と同じく何とも情けない恰好で落ち込む筆頭騎士を尻目に私は自室へと戻っていった・・・。
　自室に戻った私は、日記を再確認して改めて思う・・エースが手が掛からない子なのでこれでは、子育て日記では無く普通の日記だと・・・。
　エース居れる時間は、正直言って少ない・・もっともっと迷惑をや手を掛けさせてほしいものだ、それが私があの子との思い出になるのだから・・・・・・・・・・。
＋＋
日記にはそう書かれていた・・・・。
ビーナスは、メイドからの説教が終わると・・開いていた日記帳を閉じる・・・。
そして、再度エースを抱きかかえて

ビーナス「今日は、どんな思い出を作りましょうか？エース」

エース「かぁ！」

ビーナス「ふふっ・・・・」

ビーナスとエースは部屋を出て行った・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

80万hit記念・・・エースとクロノの初めての魔法特訓

15年前、エースはクロノと一緒に、ある場所に来ていた・・・。
そこは、管理局が運営する訓練施設だった・・・。

クロノ「着いたぞ、エース」

エース「ここ、どこぉ？お兄ちゃん」

エースがそう尋ねるとクロノは静かに、こう答える・・・。

クロノ「・・お前を鍛えるところだ」

エース「きたえるぅ？《そうだ》」

クロノはそう言ってS2Uを起動して、エースに訓練用のデバイスを渡す・・。
デバイスを渡した後にクロノはエースに、こう告げる・・・。

クロノ「いいか、エースよく聞くんだ《うん！》お前は、今から強くならないといけない」

エース「どおして？」

クロノ「お前に、魔法を使える力が見つかったからだ」

エース「まほ～？」

クロノ「そうだ、それも強力な程のな・・・」

そう言って少し俯くクロノ・・だが直ぐに顔を上げて話を続ける・・・。

　クロノ「だから、その強力な魔力を使いこなす術を身につけなくてはいけないいんだ」

　エース「みぃにぃつけるう？」

　クロノ「あぁ、覚えるという意味だ・・だから僕と一緒に魔法とかの修行をするぞ」

　エース「？」

クロノの言葉をまるで理解してないエース・・・。
そのエースの顔にクロノは・・・。

　クロノ「始めたほうが早いな」

そう言って、Ｓ２Ｕを持ってエースの隣に立ってクロノは魔法の指導を始めた・・・。
その様子をモニター越しに見てる人物達が居た・・・。
＊＊
その様子を見ていたのは、母親のリンディとその親友のレティ・ロウラン・・・。
更に、ギル・グレアムにその使い魔のリーゼアリアとリーゼロッテだ・・・。

レティ「・・・まさか、エース君が入局するなんてね」

グレアム「あの子の歳は、幾つなのだね?リンディ提督」

グレアムの質問に・・リンディは、苦渋の表情をしながら答える

リンディ「・・・5歳です」

ロッテ「5歳!?」

グレアム「若いな・・・《はい》・・それにとても優しそうな子だ《えぇ》」

エースの歳を聞いたグレアムは顔をしかめながら言う・・・。

更に、グレアムはこう続ける・・・。

グレアム「・・・こんなにも優しい子に戦いの術を与え戦士にさせて戦わせる我々は最早、犯罪者・・いや・・悪魔以上の者なのかもしれないな・・・」

グレアムの言葉に、一時的に言葉を詰まらせる一同・・・。

それを破るかのように、アリアがリンディに質問する・・・。

アリア「あの、リンディ提督・・あの子の魔力は?」

リンディ「・・・現時点ではSS一」

このリンディの発言に驚愕するアリアとロッテ・・・・。

アリア「だっ・・」

ロッテ「SS・・・」

その一方で、レティ達は顔をしかめてこう発言する・・・。

レティ「・・成程、そういう事ね」

グレアム「・・どうりで上が欲しがる訳だ」

レティやグレアムの発言に、再び黙る一同・・・。
そんな時、クロノがこの部屋に来た・・・。

クロノ「失礼します」

リンディ「どう?クロノ」

リンディの問いかけにクロノは・・顔をしかめながら答える・・・。

クロノ「・・ハッキリ言って、エースは天才って言う部類でしょう、訓練校で身に付ける初級魔法をもう形にし始めてています≪そう≫」

モニターには1人で練習するエースの姿が映ってる・・。
その様子を見ながら更に言葉を続けるクロノ・・・。

クロノ「・・正直、僕はエースの入局は反対ですが・・なってしまった事を蒸し返す気ではありませんが、一体誰がエースを管理局に入れたんですか?」

リンディ「・・〝誰〟では、ないわ・・・」

クロノ「・・・そう言う事ですか、じゃあ僕は戻ります」

そう言って再び、エースの元に行ったクロノ・・・。

リンディ達は、その様子を黙って見送った・・・。

＊＊

クロノ「じゃあ次は、これを教える・・・」

S2U「Stinger Ray.」

クロノ「スティンガーレイ！」

クロノがそう言うと、高速の光の弾丸が発射される・・・。

エース「すご〜い！」

クロノ「さっ、始めるぞ・・まず・・・・」

こうしてクロノと特訓は夜遅くまで続いた・・・・・。

＊＊

自宅に戻ったエースは食事等を済ませると直ぐに寝てしまった・・・。

エース「ｚｚｚｚ・・・」

リンディ「ごめんなさい・・・エース」

大量の動物のぬいぐるみを置いてあるベッドで寝るエース・・・。
リンディはエースの寝顔を見ながらエースに謝る・・・。
＊＊
その一方でクロノは、アリアとロッテに通信をしていた・・・・。

クロノ「今日は、すまなかったな、あんな物を買わせてお金はまた払うから」

アリア「（いいよ、それくらい）」

ロッテ「（それにしてもどうして、クロ助は動物のぬいぐるみが欲しかったのかい？）」

ロッテがそう尋ねると、クロノはその理由を答えた・・・。

クロノ「それは、エースの動物恐怖症を無くすためだ」

アリア「（動物恐怖症とぬいぐるみがどう関係するの？）」

クロノ「エースは別に動物自体が苦手な訳じゃない、現にキリンとか馬とかは普通に触ってるからな・・急に大きな声で叫ぶモノが苦手なんだ・・だから普段叫ばないって頭に覚え込ませれば自然と、克服出来るだからそれにぬいぐるみは、一番効果的な事だそれに、一人前になる頃には、それ相応の耐性は強制的についてくるだろう・・・。」

クロノの言葉に言葉を詰まらせるアリアとロッテだった・・・・・・・・・。

こうして、エースの初めての魔法を習った日は、終わりを告げた・・・・・・・・・・・・・・・。

緊急リクエスト！ネコ姉妹とエース

１５年前の某日・・・。
クロノとリンディが急な任務の為にエースの面倒が見れない為・・。
アリアとロッテにエースの世話を頼み、２人はリンディの自宅に向かった・・・。
そして家に着いた２人は、合鍵で扉を開けるとエースをさがし始めた・・・。

アリア「エース、居ないの？」

ロッテ「エー助？」

２人がエースを探すが何処にも居ない・・・リビングにはクロノがエースに出した課題が既に終了しており、参考書や辞典も綺麗に並べられていた・・・。
アリアは、課題を見て見ると・・・

アリア「これは、訓練校で出るレベルの問題だわ・・・」

ロッテ「え！？クロ助は、エー助にそんな事をやらせてるのかい！？」

そして、アリアは１つ１つ答えを確かめていく・・・。

アリア「凄いわ・・全部、正解してる」

ロッテ「ほぇ～・・・、って！今は、エー助を探さないと！」

アリア「あっ！そうね！」

アリアは課題を置いて、２人は再び家中を探すが何処にもエースの姿は無かった・・・。
そして、２人は別れてエースの行方を捜した・・・。

アリア「何処行ったのよ！？」

アリアがそう言ってると・・ロッテから念話が入る・・・。

ロッテ「（エー助居たよ・・・《何処！？》＊＊＊だよ《直ぐに行くわ！》）」

アリアは、ロッテに言われた場所に行った・・・。
着いた場所は、公園と呼ぶには余りに狭い場所で遊具も余り無いとこだった・・・。
すると、ロッテがその公園でアリアを待っていた・・・。

アリア「ロッテ！エースは？《こっちよ・・》」

ロッテは、そう言ってある方向をアリアに指し示す・・・。

アリア「あっ・・・・・」

そこには、公園に１人でブランコの上に座って俯いてるエースの姿があった・・・。
元々、余り遊具も無く狭い場所なので居るのはエース１人だった・・・。
アリアとローゼは無言で頷き合うとエースに近づいていく・・・。

ロッテ「エー助♪どうしたんだい？こんなところに１人で」

エース「ふぇ？あっ・・猫のお姉ちゃん」

アリア「そうよ、猫のお姉ちゃんよ♪で、どうしてたの？こんなところで」

アリアがそう聞くとエースは暗い顔でこう答える・・・。

エース「１人で遊んでたの《１人でって・・・》お母さんとお兄ちゃんは、お仕事だからお兄ちゃんに、大人しくしてなさいって言われたのだから１人で遊んでたの」

そう言うエースに、アリアとロッテは・・・。

アリア「じゃあ、私達と一緒に遊びに行かない？」

エース「でも、勝手にどっか行ったらダメってお母さんが言ってたし」

ロッテ「それじゃお家で私達と遊べばいいよ」

エース「うん！」

そう言って、エースとアリア達はエースの家に向かった・・・。

＊＊

アリア「何して、遊ぼうか？」

ロッテ「エー助は、何かしたい事ある？」

そう聞く、アリア達・・それにエースはこう答えた・・・。

エース「何もない・・」

そう言った時、くぅ～という音がアリアとロッテに聞こえた・・。

アリア「ロッテ？」

ロッテ「あっ、アタシじゃないよ！／／」

アリア「それじゃあ・・・・」

2人がエースを見ると、顔を真っ赤にしてるエースが居た・・・。

時間を見て見ると、昼過ぎだったので・・。

アリア「ふふっ・・それじゃあご飯にしよっか」

ロッテ「でも、アリア私達、料理って得意じゃないでしょ」

アリア「でも、出来ないって訳じゃないし取り敢えず冷蔵庫の中を見てみましょ」

そう言って冷蔵庫を開けると、そこには料理が2、3品用意されていたしかも3人前ずつ

エース1人なら1人前で良いはずなのに確かに3人前程用意されている・・・。

ロッテ「どうして、なんだろう・・・」

アリア「ん？これは・・・あっ」

料理の皿の近くにメモ用紙が置いてあった、そのメモ用紙を取って見るアリア・・・。

それは、リンディがアリア達に宛てた物だった・・その内容は・・・・。

ー・・アリア、ロッテごめんなさいね・・クロノの事だから必ずあなた達に頼むと思うわ一応、食事はあなた達のも用意しておいたから良かったら食べて頂戴・・・親の私が言う事じゃないけど、エースの事お願いね・・・ー

この文面に、アリアとロッテは・・・。

アリア「流石、リンディ提督ね、始めからクロノが私達にお願いするの見越してこの料理を作っていたのね」

ロッテ「じゃあ、早速食べよっか！《そうね》」

そうして、食事を食べ終わった後・・・・・・・。

エース「すぅ・・すぅ・・・・」

アリア「疲れたのかしらね・・・」

ロッテ「そうかもね」

エースは、疲れてたのかアリアの膝を枕にして眠っている・・・。

そして、エースの寝顔見た2人は・・・・・。

アリア「それにしても、凄く可愛いわね・・・・。」

ロッテ「ねぇ、アリア・・持ち帰ったらダメかな?」

アリア「ダメでしょ・・でもその気持ち分かるわよ!」

そこで2人はぐっと固い握手をして、『同志!』と言葉を交わす!
その後、エースはクロノ達が帰って来るまで寝ていた・・・・・・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード

新暦６１年・・・ポイニクセル王国：フィラメント城・・城内・・筆頭騎士執務室

　？？？「スペード様～！スペード様～！」

勢いよく扉を開けこの部屋の主、スペードを探す女の子・・・。
女の子は、スペードが居ないと分かるとため息をつく・・・。

　女の子「はぁ・・またか、あの人は・・探す私の身にもなってもらいたいものだ」

そう言い残して女の子は部屋を後にする・・・。
そして、廊下でスペードの居場所を知ってそうな人物に遭遇する・・・。

　女の子「あっ・・ビーナス王女！《あら・・》少し、よろしいですか？」

　ビーナス「どうしたの？スコル」

ビーナスが少女の名を呼び用事を聞く

　スコル「スペードさんを見かけませんでしたか？」

　ビーナス「見てないわ・・居ないの？《はい》なら、いつもの所じゃないの？」

スコルはビーナスの解答に、ため息をつきながらがっくりと項垂れる・・・。
ビーナスは、そんな様子のスコルの背中を軽く叩きながら・・・。

　ビーナス「頑張ってね♪筆頭騎士の従者さん」

そう言い残し去って行った・・・。
スコルは、再度ため息をつきながらスペードが居るであろう場所に向かった・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

　スコル「やっぱり・・・」

スコルがやって来たのは城の屋上・・・。
そこでスペードは備え付けのベンチに座りそこからノートに風景を描いていた・・・。

　スコル「筆頭騎士《どうしたの？スコル》どうしたの？じゃ、ありません！」

スペードは鉛筆を停めスコルに顔を向けて用事を尋ねる

　スペード「そんなに怒ってると綺麗な顔が台無しだよ？」

スペードの言葉に頬を紅くさせるスコル

　スコル「またそんな事言ってビーナスさんに叩かれても知りませんよ？／／」

スコルがそう言うとスペードは、顔を若干引きつらせながら答える・・・。

スペード「そっ・・それは困るな・・・」

スコル「なら・・むやみに女性を口説かない事ですね」

スペード「えっ?私が何時、口説いたの?」

スペードはスコルの忠告の意味が全く分かってない様子だ・・・。本気で分かってないスペード様子にスコルは、ため息しか出て来なかった・・・・。

スコル「はぁ・・もういいです・・・聞いた私が馬鹿でした・・・」

スコルは、そう言い終えると表情を変える

スコル「それよりも、４大国王より出動要請です」

スコルの言った言葉に表情を変え騎士の顔になるスペード・・・。

スペード「内容は?」

スコル「反乱軍、中核オードマン、セレク、シロア3名の発見情報が手に入りました」

スペードに言われ要請内容を言うスコル・・・。

スペード「・・・本当にそれだけか？」

スペードに問われるとスコルは首を横に振り更に言葉を続ける・・・。

スコル「もう1つ潜伏先で巨大戦艦を建造中との事です」

スペード「成程・・それで私か《はい》よっと」

スペードは風景を描いてたノートを閉じて立ちあがってスコルに振り向く・・・。

スペード「じゃあ・・用意をして行こうか、スコル」

スコル「Ｙｅｓ，　Ｍｙ　Ｌｏｒｄ．」

そうしてスペードとスコルは、城の屋上を後にする・・・。

＊＊

城内に入りスペードは自室で用意をする・・・。

スコル「今回は、どちらの剣：デバイスを使いますか？」

スペード「紅魅刃（もみじ）にするよ」

スペードは、そう言って壁に掛けてある日本刀に手にしてそれを待機状態にする・・。

すると日本刀は十字架状のペンダントの物に変わった・・。

そしてそのペンダントを首に掛けるスペード・・・。

スコル「”セイバー”は？（いいよ）よろしいので？」

スコルはそう言ってもう1つの壁に掛けて両刃剣を見る

スペード「うん・・だってセイバーにしたら”手加減”が出来そうに無いから」

スコル「そうですか」

スペード「よし、終わった！じゃあ、行こうか」

スペードが荷物を纏め終わる

スコル「はい」

部屋を出て廊下を歩いてる時に、スペードがスコルにある事を尋ねる・・。

スペード「そう言えば、行き先って何処なの？」

スコル「言ってませんでした？《うん》行き先は・・」

スコルはスペードを見ながら行き先の場所を言う・・・。

スコル「行き先は・・97管理外世界です」

スペード「確か、惑星名が地球だっけ？《はい》細かな場所は？」

スペードがそう言うとスコルは発見データを見直してスコルは場所を告げる・・・。

スコル「えっと・・日本・海鳴市という場所です」

スコルが詳細な場所を言って再びスペード見ると・・・。

スペード「綺麗な場所だといいな～♪」

などと言っていた為、スコルが忠告する・・・。

スコル「仕事で行くんですよ?《わっ・・分かってるよ!》なら、よいのですが」

そんなやりとりをしながらスコルとスペードは、城を後にし地球に向かった・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード２

目標地点：地球・海鳴市に到着したスペードとスコル・・。
そして到着早々にスコルが情報集めに出る・・・。
だが・・その前に、スコルはスペードに注意をする・・・。

　スコル「いいですか？筆頭騎士・・私は、これより情報集めをする為に、単独行動をとりますその間、何をしても構いませんが戦闘は避けて”女性に近づかないで”下さい」

スペードに”女性に近づかないで”のところを強調して忠告するスコル・・・。
そのスコルの発言が気に食わないのかスペードは、ムスッとした顔で聞き返す・・・。

　スペード「そんなに、私は信用が無いのか？《いいえ》なら、どうして！？」

スコルはため息をつきながらヤレヤレといった表情でスペードに理由を述べる・・・。

　スコル「はぁ・・・貴方は、自身の顔と言動等を少しは自覚するべきです・・ふんっ！」

不機嫌な表情でそう言い放って１人情報集めに向かった・・・。
残されたスペードは、その場で暫らくスコルに言われた事を考えていた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊
その後スペードは考えるのを止めて街をぶらりと歩き始めた・・・・。

スペード「中々、良い星だな・・・」

そう言ながらスペードが歩いていると少し先で車椅子に乗った居た・・・。

少女は何かを必死で押そうとしている・・・。

???「ん～後、もうちょいやのに～・・《これで良いかな?》あっ・・／／」

スペードがそう言いながらボタンを押すと少女がスペードの方を見る・・・。

???「あっ・・ありがとうございます／／／／／」

スペード「ふふっ・・どういたしまして♪おや、さぁ行きしょうか」

少女が顔を赤くしてお礼を述べるとスペードは笑顔でそれに答える・・・。

お礼を述べた後、スペードは少女の後ろに回ってそっと車椅子を押し始める・・・。

スペードは、そのまま少女を自宅まで送り届ける事にした・・・。

少女を家まで送り届ける途中・・・・。

???「お兄さんはどうして私を助けてくれたんですか?」

少女がそう尋ねるとスペードは少し暗い顔をしながら答える・・・。

スペード「私にも、君と同じ位の子供が居るから見過ごせなかったんですよ・・・」

スペードの暗い顔に気付いたのか少女は、話を進める・・・。

？？？「男の子なんですか？女の子なんですか？」

スペード「男の子ですよ、君の様な子があの子の彼女になれば良いのですが」

？？？「あっ・・此処です、本当にありがとうございました」

少女の家に着き少女がスペードに改めてお礼を言う・・・。
スペードは答えた後、その場を去っていった・・・。

スペード「いえいえ、それではこれで《あっ・・》・・・」

少女が何かを言いかけていたがスペードの姿は既に無かった・・・。

？？？「家に上がってもらってちゃんとお礼がしたかったのに・・・」

少女は家の前で1人そう呟いていた・・その家の表札には”八神”と書かれていた・・・。
＊＊
スペードは、街の案内図を発見して眺めていた・・・・。

その時、スペードの後ろを青年と少女が通って行こうとした・・・
だが・・・。

スペード「う～ん・・この辺りで景色の綺麗な公園は・・・」

青年「！！？」

少女「！？っ・・・・」

青年達は、ただ後ろを通り過ぎようとした時に本能的にある事を感じとった・・・。
それは、スペードから漏れた1割弱にも満たない剣気だ・・・。
青年達はそのスペードの剣気を浴びて文字通り・・動けなくなった・・・。
そんな中、青年が自分が動けない状態の思考をする・・・。

青年「（なっ・・・何だ・・この尋常じゃ無い剣気は！？・・・
相手は、ただ立ってるだけだというのに・・気を・・失いかけてる・・・くっ・・たっ・・耐えなければ・・・）」

青年は必死になって意識を保つ事に全神経を使う・・・。
腕からは汗が滴り落ちる・・・。

スペード「じんじゃ？何だコレは？・・よし行ってみよう」

そう言いながらスペードは、この場を後にした・・・・。

青年「はぁっ！・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

スペードの姿が無くなったと同時に青年は、地面に膝と手をつく・・

・。
その瞬間に、頭から大量の汗が滝のように流れる・・・・。
　青年「はぁ・・・けっ・・結局・・姿をみっ・・・見る事が出来なかった・・・」

青年は途切れ途切れにそう語った後に少女を見る・・・・。
すると少女は立ったまま気を失っていた・・・・。

　青年「しょ・・しょうがないか・・・俺でさえこうなんだ・・・美由希に耐えれる訳がない」

青年は、スペードが去った後も汗が止まる事は無く・・・・。
その上、膝が笑って立つことさえ出来なかった・・・・。
結局、青年が立ちあがったのは、スペードが去って1時間近く経ってからだった・・・・。
＊＊
その後スペードは、神社に行く途中に、少し道に迷ってしまった・・・・。

　スペード「う~ん・・迷った・・・・。」

スペードは近くに何か無いかを探してみる・・・。
すると、喫茶店の様な店が目に入った・・スペードは、財布を確認する・・・。
中には、日本円で現金２０万がメモ入りで入っていた・・・。

　スペード「ん？誰からだろ？」

メモを広げて読むスペード・・その内容は・・・。

ーーーーー馬鹿（スペード）へーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

　コレを読むって事は迷ったか何か欲しい時でしょうから取り敢えず・・・。

　ホテルに2、3日泊まれるくらいのニホンの通貨を入れておきます・・。

余り、スコルに、心配させないように　　　ビーナス

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

そう書いてあったコレを見たスペードは・・・・。

　スペード「やっぱアイツには敵わないな」

そう言いながらスペードは喫茶店に入っていった・・・・。

その喫茶店の名前は・・漢字2文字で翠屋と書かれていた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード３

神社の場所を聞く為に店に入るスペード・・。

???「いらっしゃいませ～」

すると店内には、見た感じ２４、５の女性とその隣にはこの店の主人らしき人物がいた
スペードは、取り敢えずシュークリームを2個程頼む事にした・・・。

スペード「じゃあシュークリームを2個程お願いします」

女性「はい♪ありがとうございます！」

女性はスペードの注文通りにシュークリームを2個、取って箱に入れようとする・・・。
その時、店の主人がスペードに話しかける・・・。

主人「失礼ですが《何でしょう?》貴方は、剣をしますか?」

この主人の問いに、スペードは若干笑みを浮かべながら答える・・・。

スペード「ふっ・・まぁ嗜む程度ですが」

主人「なら、いきなりで失礼ですが一本お相手願い出来ますか?」

主人の言葉に女性が反応する・・・。

女性「あなた！折角怪我が治ったのよ！何故また戦うの！？」

その女性の言葉に主人が優しく答える・・・。

主人「すまない・・桃子、でも彼は恐らく今まで戦ってきた中で恐らく最強の強さを持ってる剣士(ひと)だ、それがこうして私の目の前に現れた・・頭では分かってるのだがどうしても剣士としての血が騒いでいるんだ・・・」

この主人の答えに桃子は溜め息をつきながら答える・・・。

桃子「はぁ・・勝手にして下さい・・でも、士郎さん・・後でお説教ですからね」

諦めた顔をして桃子は士朗に仕方なくOKを出す・・・。
桃子の許しが出たところでスペードの方を向く士朗・・・。

士朗「で・・君は、どうかな？」

スペード「一本だけなら」

士朗「そうか！なら、早速始めようこっちだ着いて来てくれ」

士朗は嬉しそうに、スペードを自宅内の道場に案内した・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊
士朗に道場へと案内されたスペードは道場が珍しいのか少し見渡し

ていた・・・・。

士朗「木刀はどれを使うんだい？」

スペード「じゃあ・・これで」

そう言って木刀を適当に1本選ぶスペード・・・。

士朗「じゃあ、合図だ・・・・・」

士朗はコインをスペードに見せそれを指で真上に弾く・・・。
その後、コインが床に音を立てて落ちる・・その瞬間・・・・。

士朗「はぁあ！」

士朗が、高速ともいえる物凄い速さでスペードに迫る・・・だが・・・。

スペード「・・・・フッ・・」

スペードは、若干の笑みを浮かべた後に士朗よりも後に動く・・・。
すれ違った後、士朗とスペードの両者はピクリとも動かない・・・。

スペード「・・・・」

そして、決着が付く・・・。

士朗「・・・・くっ・・」

その後、士朗の小太刀を模した2本の木刀が綺麗に真っ二つにされ

る・・・。
士朗の2本の木刀の刃の部分だけが落ちる・・・。
その切り口の断面は、機械でも使ったかのように綺麗に斬られていた・・・。

　スペード「これで、よろしいですか？」

スペードの問いかけに士朗は、清々しい顔で答える・・・。

　士朗「あぁ、十分だありがとう」

そう言って木刀を片付けた士朗とスペードは再び店の方に戻った・・・。
＊＊
2人が店に戻ると、桃子がスペードに話かけてきた・・・。

　桃子「すみません、士朗さんが無理を言って」

　スペード「いえいえ、気にしてませんよ・・私も貴重な体験が出来ましたし」

　桃子「そう言ってもらえると助かります」

桃子は苦笑いをしながらスペードに返答する・・・。

　桃子「あっ・・そう言えば、シュークリームを2つでしたね♪」

　スペード「はい」

桃子「おまたせしました」

桃子がシュークリームの入れてある箱をスペードに渡す・・・。

スペードが財布に手を入れるその瞬間・・・。

桃子「お代は結構です《えっ？》士朗さんが迷惑を掛けてしまった、せめてものお礼だと思って下さい」

スペード「しかし《どうぞ♪》ふふっ・・《あっ／／／》じゃあそう言う事にしときます」

スペードの笑顔を見た桃子が頬を赤くする・・・。

スペード「あっ・・そう言えば、この近くに”じんじゃ”って言う所あります？」

スペードの質問に士朗が答えようとする・・だが・・・。

士朗「あぁ・・それなら《それなら》えっ・・？」

桃子「それなら、この先を・・・」

士朗の答えを遮るように桃子がスペードに神社の場所を説明する・・・。

そして、桃子は神社の場所を説明し終わる・・・。

スペード「そうですか、どうもありがとうございます」

桃子「いっ・・いえ、どういたしまして／／／／」

スペード「では、私はこれで」

スペードはそう言って店を出て行った・・・。
そして残された、桃子と士朗は・・・。

桃子「うふふ～／／／」

士朗「まっ・・まさか桃子・・・あの人に?」

恐る恐る士朗は、桃子にスペードの事を聞いてみる・・すると・・・。

桃子「えっ!?そっ・・そんな事無いわよ?ついて行きたいとか思って無いわよ!?ただ、ちょっと・・・／／／／／」

士朗「ちょ・・ちょと何だ?」

桃子「いっ・・言えないわよ／／／／／」

士朗「桃子さん!?」

この後・・士朗は、必死になって桃子の心を取り戻した・・・。
士朗は、この時本気でスペードに桃子を取られると思った・・・。
実際、桃子も、もう少し話していたら恐らくついて行っていたと言っている・・・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード４

スペードは桃子に教えられた通りに道を進んで行く・・・。
すると長い石の階段が見えて来た・・スペードはその石段を上って行く・・・。

スペード「石の階段とは珍しいな・・・」

更に上って行く・・・。

スペード「にしても・・長い・・日本ではこれが普通なのか？」

スペードは、この石段の長さに疑問を持ちつつも更に上る

スペード「よっ・・ようやく終わった・・軽い拷問だぞこれは・・」

そしてスペードは、ようやく石段を上りきって座れるところが無いかを散策する・・・。
すると、１つのベンチが目に入る

スペード「あそこに座るか・・」

そう言ってスペードはベンチに座ると先程のシュークリームを食べ始める・・・。

スペード「あっ・・美味しい・・ビーナスにも食べさせてやりたいな」

シュークリームの美味しさに少し感動するスペード・・・。
そして食べ終わると、スペードは、アタッシュケースを開ける・・・。
その中から、ノートとペンケースを取り出しスペードは、神社の風景書き始める・・・。

スペード「（日本というのは素晴らしい景色が沢山あるな・・・）」

そう思いながらスペードは、鉛筆を進める・・・。
暫らく経って、風景を書き終わったスペードは鉛筆を置き一息つく・・・。
その時、木の枝から子猫が落ちそうなのがスペードの目に止まった・・・。

スペード「紅魅刃！」

紅魅刃「Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ.」

スペードは瞬時に高速魔法を発動し子猫を救ってその後、子猫を下に降ろす・・・。
その後、後ろを振り向くと・・・少女がキラキラした目をしながらスペードを見ていた・・・。

スペード「どっ・・どうしたの？（みっ・・見られた！？）」

少女「すっ・・すご～い！ねぇ、あれどうやったの？」

興味津々にスペードが高速移動した原理を聞いてくる少女・・・。
それに、スペードは適当な理由を述べる・・・。

スペード「えっと・・気合いかな・・お嬢ちゃん」

なのは「お嬢ちゃんじゃないよ、なのはだよ！」

少女は自分の名をスペードに言う・・。

スペードは、なのはの話題を逸らす・・・。

スペード「あのさあ！なのはちゃん！《なぁに？》この近くで綺麗な花がいっぱいある公園とか知らないかな？《知ってるよ》何処か教えてくれないかな？」

なのは「いいよ！こっちだよ」

なのははスペードの手を引っ張ってその場所に連れて行く・・・。

＊＊

スペードが連れて来られたのは・・・

スペード「こっ・・・これは・・・・・《桜だよ》さくら？」

スペードは桜の美しさに感動して言葉を失った・・・。

そして静かに桜を見てるスペードになのはが問いかける・・・。

なのは「桜、知らないの？《花は詳しく無くてね》ふ～ん」

スペード「それにしても・・・本当に綺麗だ・・・・」

スペードが改めて、桜の美しさに感動する・・・。

桃子「なのは～！《あっ！お母さんの声だ！》」

そんな時、なのはを呼ぶ声が聞こえる・・気が付くと辺りは茜色になっていた・・。

その声は、どうやらなのはの母親の声らしい・・そして、声の方へ走って行くなのは・・。

なのはは、途中でいったん止ってスペードを見て

なのは「バイバイ！おじちゃん！《なっ！？》えへへ♪」

なのはの去り際の一言に驚くスペード・・・。

そして、そのままスペードは硬直してしまった・・・・。

？？？「ぷっ・・くっ・・くっ・・少女の前では筆頭騎士も形無しですね・・ぷっ・・・」

スペード「笑いたきゃ笑いえよ、スコル・・・・・。」

スペードがそう言うと影からスコルが出て来る・・・。

そして、スペードの近くまで来ると・・・。

スコル「もっ・・もう限界・・ぷっ・・アハハハハハハ！」

スコルはスペードを指さしながら腹を抱えながら大爆笑した・・。

そして笑い終えたスコルが、スペードを見て見るとスペードは不貞腐れた顔をしながらそっぽ向いていた・・そんなスペードにやれやれといった表情で近づくスコル・・・。

スコル「はぁ・・やれやれ・・・ねぇ、スペード《何？んんっ

！≫んっ・・／／／／」

スコルは、顔を振り向けたスペードの唇を自分の口で塞ぐ・・・。

スコル「ぷはっ・・・どう？少しは自信取り戻した？／／／」

口を離したスコルがスペードにそう尋ねるとスペードは少し照れながら答える・・・。

スペード「うっ・・・うん、まぁ／／／」

スコル「なら、結構♪／／／」

そう言ってスコルは、スペードの肩に頭を乗せて桜を見る・・・。

スコル「それにしてもこの花・・綺麗ね」

スコルもスペードと同様に桜の美しさに感動しながら眺める・・・。

スペード「そうだね」

スコル「ふふっ・・・ビーナス姉さんに見せたら喜びそうね」

スコルは笑みを浮かべながらそう言う・・・。

スペード「確かにね≪少し、取って帰って姉さんに贈れば？≫いやだよ」

スコル「どうして？」

スペードは、王国に居るビーナスに贈ればいう提案を断る・・・。
スコルは、スペードにその理由を聞く・・するとスペードは・・・。

スペード「そんな事したらアイツはこう言うよ」

ビーナス?「・・・浮気?相手は誰?」

スペードがビーナスの真似をしながらそう言うとスコルは・・・。

スコル「アハハ・・なにそれ~・・全く・・姉さんが聞いたら怒るよ」

スペード「ふふっ・・聞かなければ問題無いさ《ヒド~イ》アイツがな」

スコルが笑いながら答えた後に更に調子に乗るスペード・・・。
そして、笑い終えると再び桜を眺める2人・・・。
その時に、スコルが眺めながらスペードに語りかける・・・。

スコル「ねぇスペード《何だ?》・・この戦乱が最後よね・・これで最後よね?」

スペード「俺は、そうだと信じたいな・・・」

そう言ってスコルとスペードは、暫らくの間、静かに桜を眺めてい

た・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード５

スコルとスペードは、桜を見終わって一息つく為にホテルに向かった・・・。
その後、ホテルに着いて部屋に入るとスコルが目標の探索結果を伝えた・・・。

スコル「では、報告します奴らは”この星には”居ません」

スペード「この星には？《そうです”この星には”です》というと？」

スコル「奴らは、この星には食料等を買いに来ていたようです・・潜伏先は、別にありました《位置は分かってるの？》はい、位置は、９８無人世界でした・・奴らが使ってると思われるその場所へ行く為の中継ポートも発見しました」

スペード「流石だね、それじゃあ少し休んでから行こうか《えっ？》どうしたの？」

スコル「いっ・・今からじゃないんですか？」

スコルはスペードに何故今すぐ行かないのかを聞いてみる・・・。
するとスペードがため息をつきながら答える・・・。

スペード「はぁ・・どうせスコルの事だから１日中走り回ってたんでしょ？言わなくても疲れてるのは分かってるよ《バカ・・／／》おっと」

スペードの答えが図星なのかスコルは顔を真っ赤にする・・・。
その後スコルは、スペードに抱きついて胸に顔を埋める
そして、そのまま、ベッドにスペードを押し倒す

　スコル「でも・・ありがと／／／」

スコルは、小さい声でスペードに礼を言う・・。
その後、抱きついて胸に顔を埋めたままのスコルがスペードにある注意をする・・・。

　スコル「スペード《何だい？》”今は”しないでね歯止めが利かなくなりそうだから／／」

　スペード「ふふっ・・了解、だったら後なら良いのか？」

スペードが冗談交じりにスコルに聞くとスコルは・・・。

　スコル「いっ・・いいよ《え？》だって・・最近してないし／／」

顔自体は顔を埋めたままなので見えないが恐らくスコルの顔は真っ赤だろう・・・。

　スコル「じゃ・・じゃあ、少し寝るね／／／」

驚いて固まっているスペードを余所にスコルは眠りについた・・・。
スコルはこの時、時間が止まれば良いのにと密かに思っていた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊
ホテルで休息をとった後・・スコルとスペードは、敵の潜伏してる世界に到着した・・・。
そこでスコルは、探査魔法をするとある事に気付き作戦を立て直す事にした・・・。

スコル「あっ・・潜伏先と、戦艦の造船所は別みたいですね」
スペード「距離は？《大分離れてます》なら、分かれて戦(や)るか？」

スコル「その方が良いですね、私はどっちに行きましょうか？」
スコルがスペードに指示を仰ぐ・・。
するとスペードは、少し考えるとスコルに指示を出す・・・・。

スペード「スコルは、潜伏先に向かってくれ君の装備は”殲滅戦”に向いてるしね」

スコル「了解しました」

そして・・スコルとスペードはデバイスを起動する・・・。

スペード「行こうか・・紅魅刃」

紅魅刃「Ｓｔａｎｄｂｙ，　ｒｅａｄｙ！」

スペードのＢＪを展開する紅魅刃・・。
紅魅刃のＢＪを展開したスペードの装備は・・・。
黒スーツの様な恰好でそれに銀色の腕当てにメタルブーツ・・・。
そして最後に、特徴的な紅く大きな翼広げる・・・・。
次に、スコルがＢＪを展開し始める・・・。

スコル「行くわよ”紅龍妃”」

紅龍妃「Ｊａｗｏｈｌ！」

スコルのデバイス紅龍妃（こうりゅうき）は、スコルの甲冑を展開する・・・。

その姿は、頭部以外ほぼすべてが強固なアーマーで覆われた姿だ・・・。

それに加えて背中のバックパックの右側に、巨大なガトリング砲・・・左側には、巨大な魔力砲が懸架されており更に、脚部にも何やら武装が施してある・・・。

そして・・スコルも甲冑を展開し終わる

スペード「よし！行こうか《ちょっと待って》どうした？んっ！」

スペードが飛び立とうとした時、スコルに呼び止められて振り向くスペード・・・。

その瞬間、スコルに突然キスをされる・・・。

スペード「はぁ・・・どうしたんだ？急に」

スコル「ふふっ・・何でも無いよ、行こう・・スペード」

スペードはスコルにキスの理由を聞くと笑顔で何でも無いと答える・・・。

その後、スコルとスペードの２人は騎士の顔になる・・・。

スペード「あぁ、無事に帰って来いよ、スコル《スペードもね♪》勿論だ」

スコル「じゃあ、また後で《あぁ》」

そして・・スコルとスペードの2人は、それぞれの戦場へ向かった・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード６

スコルが来た敵の潜伏先の建物はまるで基地の様な建物だった・・。
その敵の潜伏先が見える位置にスコルは降りると勧告を始める・・・。

スコル「こちらは、ポイニクセル王国、騎士団所属のスコル・サディアです・・貴方達の行動は知れています大人しく武装を解除し投降しなさい」

スコルが投降の勧告を済ませ暫らく経ってから・・・。
建物から何万という数の武装した兵士が出てくる・・・。
そしてスコルに向かって攻撃をする・・・。

紅龍妃「Ｐａｎｚｅｒｓｃｈｉｌｄ！」

その攻撃を難なく防ぐスコル・・・。

スコル「とても分かりやすい返事ね・・いいわ遊んであげるわ・・紅龍妃」

その後、スコルは空高く飛び上がると空中で前回転をする・・・。
前回転の後、落下しながら左回転に移行する・・・。

紅龍妃「Ｊａｗｏｈｌ．」

着地したスコルにタイミング良く返事をする紅龍妃・・。
そして・・背面部、右側のバックパックから巨大なガトリング砲を右腕に装備して・・・。

スコル「さて・・滅するわよ！紅龍妃」

紅龍妃「Ｂｒｅｎｎｅｎ.」

紅龍妃の機械音声と共にガトリング砲が発射される・・・。
ガトリング砲の凄まじい威力で一気に何千いや・・何万という兵士をなぎ払う・・・。
しかし、それでも数百という単位の兵士が突っ込んで来る・・・。

兵士達「うおおおおお！」

スコル「ふふっ・・おバカさん♪」

スコルの不敵な笑みと共に、両方の肩側面にある魔力砲が起動する・・・。
そして向かってくる兵士達に向けて直射型の砲撃が発射される・・・。
命中した兵士達が宙を舞う・・・だが、それでも残った兵士達が突っ込んで来る・・・。
そんな兵士達に対してスコルは・・・。

スコル「いい加減しつこいわね・・それじゃあ！」

スコルの声と共に、左右の肩装甲と胸部装甲・・更に、両脚部のコンテナが開く・・・。

スコル「全ターゲット補足・・・全てを滅するわ」

紅龍妃「Ｂｒｅｎｎｅｎ！」

スコルの呟きの後に、長距離砲以外・・全ての砲門を一斉発射する紅龍妃・・・。
威力も然る事ながらその圧倒的な砲火の前に・・瞬く間に、炎と爆煙の中に消えて行く兵士達・・そして砲火が終わるとそこには何も残っていなかった・・・。
その様子を潜伏先で見ていた残党貴族の１人・・シロアは・・・・。
＊＊

シロア「馬鹿な！？こんな事があってたまるかあああ！！８万！８万だぞ！！？雇われとはいえ、８万兵士達が天士（てんし）スペードならともかく、あの汚らわしい妾の小娘などに倒されるなどとそんな馬鹿な事があってたまるかあああああ！！」

シロアは目の前に広がる光景を信じる事が出来なかった・・・・。
そんな時、兵士の１人がシロアに報告をする・・・。

兵士「目標が何かを仕掛けようとしています」

シロア「何いぃ！？」

シロアは、モニターに映ってるスコルに注目する・・・。
＊＊

スコル「よっと・・」

スコルは、一旦ガトリングを右側のバックパックに戻す・・・。
その後、左に、懸架されている巨大な魔力砲を左腕にセットする・・・。
砲身が重いのか、右手も使って魔力砲を持ち上げる・・・。

スコル「アンカー固定」

紅龍妃「Ｊａ.」

スコルの両足から地表にアンカーが打ち込まれ足場を固定する・・・。
その後、魔力砲の銃口が輝きだす・・・。

スコル「最大出力・・・」

スコルがそう言うと、魔力砲の長さが倍に伸びる・・・。
そんな中、潜伏先の建物がバリアーを張る・・・。
だが、構わずスコルはチャージを続けていく・・・。

紅龍妃「ｂｅｒｅｉｔ.」

紅龍妃がチャージが出来た事をスコルに知らせる・・・。
そしてスコルは、砲身をゆっくりと潜伏先の建物へ向けて・・・。

スコル「砲撃開始!!」

紅龍妃「Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ!」

魔力砲の銃口より巨大な砲撃が目標に向けて発射される!
潜伏先の建物のバリアーは、スコルの放った砲撃によって簡単に破

られてしまう・・・。
そして・・・魔力砲の砲撃が終わる・・・。
＊＊
砲撃が終わって、生き残ったシロアが目を開ける・・・。
そこには、信じられない光景が広がっていた・・・。

　シロア「なっ・・ばっ・・馬鹿な・・」

先程まで、目の前には建物とかが在った筈なのに・・・。
それが”消えていた”そして砲撃が通った地表はえぐられていた・・・。

　シロア「どっ・・どうすれば良い？一体どうすれば！？」

それは、先程の砲撃の威力を見事なまでに表現していた・・・。
そんな時シロアに、ある光景が目に飛び込んできた・・・。
＊＊
スコルが再度、魔力砲をチャージしようとするが・・・。

　スコル「あっ・・魔力切れ・・・」

砲身に魔力切れのランプが点いていた・・・。
仕方なく、魔力砲を仕舞って再びガトリングを右腕に装備するが・・・。

　スコル「よっと・・・・あれ？」

ガトリングは、カタカタカタと空撃ちをする・・・。
その他の武装も撃ってみるが、全て空撃ちになっていた・・・。
つまり・・これは・・・。

スコル「はぁ～弾切れかぁ・・・・」

これを見たシロアは残っていた全ての兵士をスコルに向けた・・・。
その数・・約五千・・シロアはこの時、勝ちを確信していた・・・。
どんどんとスコルに迫りくる敵兵・・・。
そして、スコルがため息をつきながら行動を起こす・・・。

スコル「はぁ～・・仕方ないか・・紅龍妃、アーマーパージ」

紅龍妃「Ｃｌｅａｒ　Ａｒｍｏｒ.」

紅龍妃の機械音声の後・・・。
スコルに装着されていた全てのアーマーが一気に弾け飛ぶ・・・。
その後・・上がノースリーブのシャツ＋ジャケットとネクタイ・・。
下は、ミニスカ＋二―ソにショートブーツと・・先程とは全く別の
姿をしたスコルが現れた

紅龍妃「Ａｂｓｃｈｌｕｓｓ　ｄｅｒ　Ｂｅｒｅｉｔｓｔｅｌｌｕｎｇ.」

スコル「紅龍妃・・第二形態」

紅龍妃「Ｊａｗｏｈｌ.」

スコルの指示により紅龍妃がその姿を変える・・・。

紅龍妃は、日本刀の形態になる・・・。

スコル「いくわよ」

紅龍妃「Ｊａ．」

スコルは、剣を抜刀せずにそのまま敵に高速で突っ込んでいく・・・。

そして、敵陣を物凄いスピードで駆け抜けて行き・・・。

スコル「瞬紅華・・・」

敵陣を駆け終わったスコルは、静かにそう呟く・・。

そして・・何時の間にか抜刀していた剣を鞘に納める・・・。

敵兵士達「ぐおおあああ！」

剣を納めたと同時に、敵兵士達は血が噴き出しながら次々と倒れて行く・・・。

そして・・最後に残っていた1人も倒れてしまった・・・。

その後、敵兵士達の死体により地上を真っ赤に染め上げる・・・。

スコル「目標はどこかしら？紅龍妃・・探査をお願い」

紅龍妃「Ｊａｗｏｈｌ．」

スコルは、大量の屍を踏みながら潜伏先の建物に向かった・・。

＊＊

建物の地下・・隠し部屋内でシロアは身を隠していた・・・。
そこに、足音が近づいて来る・・そしてドアが斬られてスコルが姿を見せた・・・。

シロア「まっ・・待て投降するから命だ《必要ありません》えっ・・・」

シロアが投降しようとするが・・スコルはそれを却下する・・。
その後・・スコルが、話を続ける・・。

スコル「最初の勧告で投降しなかった時点で貴方の事は殺すと決めていましたから
最後くらい潔く私に、斬られなさい・・」

そう言って、スコルはシロアの首筋に剣を当てる・・・。

シロア「まっ・・待ってくれえええ《逝きなさい・・》・・・・・・」

シロアが必死に助けを求めるが・・・。
スコルはそれを無視して首筋に当てた剣を振り抜く・・・。
その後、シロアの首が落ちて転がる・・その首を見たスコルは・・・。

スコル「大人しくすれば、こんな汚い顔にならないものを・・・」

そう呟いた後に、スコルは・・・。

スコル「さて、此処の破壊をしないとね」

地下の隠し部屋を後にして・・この建物の破壊活動に向かった・・・・・・・・。

１００万ｈｉｔ記念・・外伝：スペード７

スコルと別れたスペードは、戦艦が建造されているという造船所に向かった・・・。
そして、目的地に着いたスペードは、上空より見下ろし戦艦の大きさを見る・・・。
戦艦の大きさは大体、アースラの倍ぐらいの大きさだ・・・。

スペード「大きいな～・・・・、おっと眺めてる場合じゃなかった・・」

呑気に戦艦の観賞をしていたスペードは、本来の目的を思い出す・・。
そして、スペードは敵に降伏勧告を始める・・・。

スペード「えっと・・・こちらは、ポイニクセル王国騎士団所属、筆頭騎士スペード・・・大人しく投降して下さい・・」

スペードの勧告後、５分も経たない間に造船所より敵兵が出てくる・・・。

スペード「はぁ・・何で、こうなるのかな・・」

スペードは溜め息をつきながら敵兵を見つめる・・・。
そして、待機状態の紅魅刃を握って

スペード「仕方ない・・紅魅刃」

紅魅刃「Ｙｅｓ，Ｂｌａｄｅ　Ｍｏｄｅ.」

紅魅刃が待機状態から日本刀の形態に変化する・・・。
その後、スペードに向かって魔力弾が向かってくる・・だが・・・。
スペードは、それを紅魅刃で居合抜きしながら真っ二つにする・・・。

スペード「相手の返事は決まったみたいだし・・行くよ！」

紅魅刃「Ｙｅｓ，　ｓｉｒ．」

スペードは紅魅刃を片手に飛行しながら敵兵に向かっていく・・・。
敵兵を次々に斬り落としてスペードは地上に血の雨を降らせる・・・。

スペード「（寄せ集めの兵だな・・大した強さじゃないが少し数が多いな）」

兵士「うおおおお！《ふっ・・・》・・・・・」

スペードが思考していると敵が、不意打ちをしようとする・・。
だが・・スペードは振り向きざまに横薙ぎの斬撃で敵兵の首を斬り落とす・・・。

スペード「（よくもこんなに兵を集めたな・・・）」

スペードは、残党貴族がこれだけの兵士を集めた事に少し関心していた・・・。
そんな思考をしてる時に、兵士の１人がスペードに斬りかかるが・・

兵士「かくｇ《せいっ！》・・・・」

スペードの放つ高速の返し技に、敵兵は呆気なく五体を切り刻まれる・・。
その後・・敵兵は肉片となって地上に落ちて行った・・・。
だが、敵の数が多い為に中々、戦艦の破壊が出来ないスペード・・・。

スペード「一気に決めようか・・・紅魅刃」

スペードは、紅魅刃を一旦鞘に納める・・・。

紅魅刃「Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ.」

紅魅刃の機械音声の後・・右腕の腕当てから薬莢が排出される・・・。
その後、再び鞘から紅魅刃を抜刀すると、紅魅刃の刀身が紅くなっていた・・・。
そしてスペードは、紅くなった紅魅刃を構えると・・・

スペード「火龍斬：散・・・」

スペードは敵陣に向かって紅い斬撃を飛ばす・・・。
その斬撃は敵陣に向かう途中で無数に分散する・・・そして・・・。

敵兵達「ぐわあああああぁぁぁ・・・・・・」

分散した斬撃は・・空中に居る全ての敵兵を切り刻み肉片となり落ちる・・・。
肉片の落ちた後に、赤い雨が降り更に多くの血の雨が降り注ぐ・・・。

スペード「さて・・戦艦の破壊に《Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ》っ！・・・」

戦艦の破壊に向かおうとするスペードを地上の敵兵達からの砲撃が襲う・・・。

スペードは咄嗟にシールドを出して防ぐ・・・。

スペード「紅魅刃！《Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》炎衝波！」

スペードは、再び紅魅刃を鞘に納めてカートリッジを供給させる・・・。

その後・・腕当から2発の薬莢が排出される・・。

スペードは、鞘から抜刀し紅い刀身の紅魅刃で身体を回転させながら斬撃を放つ！

放たれた光刃はブーメランのような回転をしながら高速で地表に向かう・・・。

スペード「炎葬・・・」

スペードの呟きの後に、斬撃が地表に当たる・・・。

斬撃が当たった地点を起点に巨大な爆発を起こし火柱が空まで上がる・・・。

爆発の後・・人はおろか草木さえ無くなり大地は黒一色に染め上げられた・・・・・。

スペード「さて、今度こそ戦艦の破壊に行こう」

紅魅刃「Ｙｅｓ．」

そして、スペードは紅い翼を羽ばたかせながら戦艦の元へ向かって行った・・・。

＊＊

一方・・戦艦内に潜んでいたオードマン、セレクは・・・。

　オードマン「早く、脱出しなければ！」

　セレク「よし！用意出来たぞ！急げ！《分かった！》」

敗北を悟った2人は、自分達だけで小型船に乗って脱出しようとしていた・・・。

そんな時、戦艦全体が音を立てて揺れる・・・。

　オードマン「なっ何だ！一体、セレク！急げ！」

オードマンはセレクに、脱出を促すが・・・。

　セレク「駄目だ！脱出扉が開かない！《何故だ！?》分からん！」

セレクが幾ら脱出艇から指示を出すが扉は開口しない・・その理由は・・・。

＊＊

オードマンとセレクが脱出艇に乗る少し前・・・。

スペード「火龍砲！」

紅魅刃「ｓｈｏｔ．」

スペードの手より巨大な砲撃が撃ち出されて戦艦に当たる・・・。
だが、当たった個所の装甲が歪んだものの戦艦は無事だった・・・。
実は、この砲撃が脱出扉を歪めてしまって変形した扉は開く事が出来なくなってしまいオードマン達は脱出不能となってしまった・・・。

スペード「仕方ない・・叩き斬ろう・・紅魅刃」

紅魅刃「Ｙｅｓ，Ｆｏｒｂｉｄｄｅｎ　Ｂｌａｄｅ．」

スペードが紅魅刃を真上に振り上げると紅魅刃は、その姿を変えてゆく・・・。
そして紅魅刃は、実体化した魔力刃で覆われた巨大な大剣にその姿を変えた・・・。

スペード「斬り伏せ炎神！《Ｓｌａｓｈｉｎｇ！》やあああああ！！！！！」

スペードが戦艦に向かって紅魅刃を振り下ろす！！
＊＊
その頃・・脱出艇内のオードマン達は・・・。

オードマン「早くしろ！《やってる！》あっ・・・」

紅魅刃がどんどん艦内に斬り込んでいき・・
そして・・その刃は、オードマン達の元に来て・・・。

　オードマン「ああああああああ！！」

　セレク「やめろおおおおおおお！！」

この叫びを最後に・・オードマンとセレクの２人は艦と共に運命を
共にした・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

　スペード「こんなもんだろ」

　紅魅刃「Ｙｅｓ．」

戦艦を紅魅刃で切り刻んだスペード・・・。
ちょうど、その時スコルがスペードに合流した・・・。

　スコル「まぁ、見事に切り刻んだわね・・・オードマン達は
？《あ！》全く・・・」

　スペード「もっ・・紅魅刃《Ｎｏ　ｓｕｒｖｉｖｏｒｓ．》
そっか・・逃がしたかな？」

　紅魅刃「Ｉｍｐｏｓｓｉｂｌｅ．」

スコルに言われたスペードが慌てて生存者の確認をする・・・。
すると紅魅刃は生存者無しの返答をした・・次に取り逃がしたかを

確認すると紅魅刃はありえないとスペードに返答した・・・・。

スペード「じゃあ、最後にもう一度、生存者の確認を《いません》なら、帰ろうか」

スコル「はい、筆頭騎士」

こうして、任務を終えたスペード達は、ポイニクセル王国に帰って行った・・・・・・・・。

いんたびゅ～

第1回、珀狼先生（笑）に聞いてみよう！

スバル「はい♪という事で始まりました！第1回、珀狼先生（笑）に聞いてみよう！」

珀狼「えっ？マジでやんの？」

スバル「勿論です！では最初の質問です。ミッドチルダ在住のＰＮ．白銀の炎翼さんからです《もう、名前出してよくね？》えっと・・主人公のエース君の名前について教えてくだ・・教えろ駄作者・・だそうです。では、お答えいただきましょう！」

珀狼「え？俺が答えんの？《はい♪》はぁ・・エースの名前の意味は特に、ありません
《そうなんですか？》うん、だって彼の名は俺の血液型から来てる物だしそれとウルトラ○ンエースがＡの1文字でエースって読むからそれにあやかってエースと付けたんだしぶっちゃけて言えば、別にクマ吉でも良かったし」

……

Ｑ2

スバル「へ～・・それじゃあ、次の質問です。ＰＮ．スターズ０

4さんから・・最近、私の出番無くない？だそうです。これは私も同意見です！さぁ！お答えを！」

珀狼「だから、ＰＮ．隠す気微塵も無いよな！？・・ったく、はい答えましょう・・スバルとスターズ０４さんは、詳しくはネタばれになるので何時とは言えませんがエースの補佐のポジションを短期ですが与えるつもりです。なので出番はありますご心配なく」

スバル「よかったね！ティ《ファントム！ブレイザー！！》げほっ・・」

珀狼「次は？《少しは、心配して下さいよ～》ダイジョウブカイ？」

……

Q3

スバル「もう・・えっと次は、ＰＮ．やり手の”美人”部隊長さんから・・この物語で1番昇格したヒロインと1番、1番降格したヒロインは誰なん？後、”私に”出番くれへん？だそうです」

珀狼「・・やり手ｗｗｗ。まぁ、答えましょう　そうですね～1番昇格したのは、フェイトで1番降格したヒロインはカリムです」

スバル「その理由は？」

珀狼「フェイトは、この”金の閃光のもう一人の義兄”の元の物語ではフェイトはヤンデレつまりはローゼのポジションだったんで

すから、ちなみにヤンデレ度はローゼを軽く超えています。次に、カリムですがこれは出番ですねハーレム系になったと言う事でカリムは、なんと・・・・8割近くかそれ以上の出番がカットされています最早哀れとしか言いようがありません・・・次の質問は？」

……

Q4

スバル「えっと・・次は、PN.高町なのはさんからです《実名かよ！！》えっと・・私の扱い酷くありません？後、魔王って言われる理由が分かりません・・だそうです」

珀狼「酷く、ありません。それと魔王って言われる理由は自分の胸に手を当ててみて下さいそうすれば分かるかも知れませんよ？次」

……

Q5

スバル「えっと・・次は、感想ブースの質問で、将軍様さんからです・・カリムの出産はどうするんですかね？エースに自身の妊婦姿を見せない様に通信だけなのですかね～・・だそうです」

珀狼「お答えしましょう！・・ズバリその通りですエースに自身の妊婦姿を見せない様にした上でこっそり出産します・・何時生まれるかは言えませんが・・次は？」

スバル「今回は、以上です！お疲れさまでした！最後に、読者の方に一言」

珀狼「えっと、皆さんの面白いの一言が聞けるように、これからも面白い話が書けるようにしていきたいと思います。それでは！」

スバル「これより下は、おまけのスコルさんの武装です。オマケですので見なくても結構ですよ。それじゃあ！また」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

デバイス：紅龍妃・・待機時は赤いリストバンド

第一形態の装備一覧

・右腕：大型魔力ガトリング砲

・左腕：高魔力エネルギー中、長射程砲

・肩：魔力短機銃×2

・肩側面部：中近距離魔力砲×2

・肩正面：内蔵式追尾魔力弾４０・・×２

・胸部：小型魔力ガトリング×４

・脚部：魔力弾ポッド６０・・・×２

・脚部：アンカー２・・・×２

・背面部：魔力エナジーウイング×２

・背面部：魔力ジェネレーター

……

……

大型魔力ガトリング砲（ジェネレーター供給）

・第一形態の主流武器で凄まじい威力の６銃身式ガトリング砲、口径は６０　ｍｍ

・背面部の魔力ジェネレーターから直接、魔力を供給されて魔力弾を高速で撃ち出す

・発射される弾はヴァリアブル系と同じ様な多重弾であり対フィールド魔法弾である

・このガトリング砲は、その多重弾を毎分８９００発も発射する

・因みに、このガトリング砲・・重量３０ｋｇもあり片手で持つのは困難なはずなのだが・・

スコルは、身体強化魔法を使ってるとはいえこのガトリング砲を片手で使用している

……

……

高魔力エネルギー中、長射程砲（ジェネレーター供給）

・起動すると左腕にセットされる巨大な魔力砲
・これもガトリングと同じく魔力ジェネレーターから魔力を供給されて砲撃を撃ち出す
・威力は、チャージ無しの砲撃で並の魔導師ならシールドを張った状態で砲撃の余波のみで吹き飛ばし気絶させ・・チャージした場合はアースラ級の戦艦を丸ごと消し去る程の強靭な威力を誇る
・欠点は3つ・・まず1つ目は、チャージ無しの場合でもどんなに上手く使っても4、5発位しか撃てない事とチャージした場合は1発（良くて2発）で魔力切れを起こす
・2つ目は、あのガトリング砲を片手で使用しているスコルでさえ両手で持たなければ照準が全く合わせられない程に重い事
・3つ目は、高威力の為に反動が凄まじくアンカーを打ち込まないと体勢を保てない事
それによりチャージ中は棒立ちになってしまう

……

魔力短機銃（ジェネレーター供給）

・肩部に内蔵された魔力弾式の短機銃
・主に、近接防御用だが、それでも充分に相手を倒す威力を持つ

……

中近距離魔力砲（ジェネレーター供給）

・肩側面部に装備されている中近距離の魔力砲

・チャージ無しでなのはのディバインバスターと同等の高威力の砲撃を撃ち出す

……

追尾式魔力弾

・ショルダーアーマー内に内蔵されている自動追尾式魔力弾
・１回に撃てる弾数は片方４０発で両方で計８０発
・内蔵されている小型ジェネレーターによりアーマー内で魔力弾を形成している
・欠点は・・・全ての魔力弾を出さないと再チャージが出来ない上に魔力弾の形成にはかなりの時間がかかる事

……

胸部小型魔力ガトリング（ジェネレーター供給）

・バストアーマー内に隠され小型の魔力たガトリング砲
・こちらも主な使い道は、近接防御用だがそれでも充分な威力を持っている
・開放時には胸部アーマーの防御力が低減してしまう

……

魔力弾ポッド

・レッグアーマーの側面に取り付けられている魔力弾ポッド
・弾数は、片側６０発で左右合わせて計１２０発
・複数の敵に対して飽和攻撃を仕掛ける為の兵装で追尾機能は無い

・内蔵されている魔力弾が炸裂タイプの魔力弾なので高威力
・肩の魔力弾と同じくこちらも小型ジェネレーターがアーマー内に内蔵されていて内部で魔力弾の形成を行っていて・・・こちらは、追尾機能が無い分肩より若干ではあるが再チャージの時間が短い

……

ニードルアンカー

・レッグアーマーに内蔵されている打ち込み式のアンカー
・長射程砲の発射の反動を抑える為の装備

……

魔力エナジーウイング（ジェネレーター供給）

・背中に装備されている飛行用の大型魔力光翼
・翼基部フレームより巨大な魔力ウイングが展開される仕組み非使用時はバックパック
側面に折りたたまれている
・主に、シールド代わりの防御用だが、ウイング自体も魔力刃の性能を兼ね備えておりウイングによる対象の斬撃やウイングから直接、フォトンランサーの様な槍型の魔力弾を発射する事も可能な攻防一体の装備
・本来は超高速飛行と旋回性能を持っており正に目にも止まらぬ速さで飛行が出来る
だが・・第一形態のアーマーの重量等で並の魔導師等の飛行速度しか出ていない
・ちなみに、ウイングのみを残して他のアーマーをパージさせる事は出来る

……

魔力ジェネレーター

……

・背面部に装備されているバックパック型の超高出力の魔力ジェネレーター
・ガトリング砲と魔力砲を懸架出来るアームが付いている
・第一形態のほぼ全ての魔力を出しているが常にチャージが出来る訳では無くて1度全てを使わないと再チャージが出来ない
・チャージの時間は、恐ろしいほど長くまだまだ改善しなければならない点が多い

……

……

紅龍妃・・・女性人格ＡＩ

ベルカ式

・”刀剣型主体”のインテリジェントデバイス・・・他のガトリング砲やら魔力砲は、全てがストレージや非人格式のアームドデバイスと別のデバイスで構成されている
・紅龍妃の第一形態は、紅龍妃自体は待機状態のままでシンクロ機能を利用した他のデバイス等を制御する指揮官的役割をしている
・他のデバイスを収納・瞬間装着している為に甲冑の上からアーマー等を装備していて撃ち終わったらアーマー等をパージして第二形態（本来の甲冑）で戦闘する
・因みに、紅魅刃と紅龍妃は双子機である

・紅龍妃の通常フォルムは日本刀

・Ｂｌａｄｅ　ｆｏｒｍ・・・高密度に圧縮された魔力刃に覆われた片刃の長剣

・Ｒｉｅｓｉｇｅｓ　Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍ・・・ＢＤのザンバーに似た半実体化した魔力刃を持つ大剣

・Ｈｅａｖｅｎ　Ｓｌａｓｈ　Ｓｃｈｗｅｒｔ　ｆｏｒｍフルドライブ時は、巨大な対艦刀

備考：紅龍妃は娘のジュピリアに受け継がれてる

120万hit記念・Another story of the kingdom・・・

Another story of the kingdom・・・。

始まります・・・。

ポイニクセル王国：フィラメント城

王国唯一の王子である人物を探して少女ジュピリアは城内を走る
因みに、ジュピリアが王子を探してる理由は・・

ジュピリア「何処ですか！駄王子エース！出てきて説明しなさあああい！！」

ジュピリアの言う昨日の件とは、昨日エースが幼馴染みの女性とキスをしていた事。
その事実を知ったジュピリアは激怒しながら城内を走り回る
そして、走り回ってるとジュピリアは中庭にあるテラスである人物と出会った

ジュピリア「ねぇ！リリア！エースお兄たん見なかった！？」

リリアはテラスにある椅子に座りテーブルに紅茶を置き休憩をしてるようだ

リリア「見なかったわよ？小娘《あっそう！》相変わらず騒がし

いわね・・」

リリアはジュピリアが走り去った方角を見ながら呟く
その後、指を鳴らすとテーブルに掛かってるテーブルクロスが消える
そしてテーブルの下からエースが姿を現した

エース「助かったよ。リリア《いえ・・》」

リリア「それよりも。昨日、アクアとキスをしたのは本当ですか？」

リリアはエースに匿った礼として噂の真相を尋ねた
するとエースは若干、頬を赤く染めながら・・・

エース「うんっと・・まぁ、本当かな／／／／」

リリア「そうですか、まぁ良いです。アクアにはどうせその方面では敵いませんし」

そう言ってエースは噂は本当で事を肯定する
その後、リリアはそう呟いた後に席を立ち上がりエースの横をすれ違う際に・・・

リリア「・・私は、別に第2、第3夫人でも結構ですのが・・・」

――――ちゃんと選ばないと私は実力で貴方（エース）を手に入れます――――

リリア「それだけは、お忘れ無き様に・・。それでは」

そう言ってリリアはエースが何かを言う前に姿を消した。

アクア「あっ！お～い！エース！」

リリアが姿を消した直後にアクアが姿を見せる
そして直ぐにエースの傍に寄って来ると・・

アクア「よっと♪《おっ、おいっ！／／／》良いじゃん♪気にしなくても」

エース「ったく・・それで、どうしたんだ？《デートしよ♪デート♪》デート？まぁ、良いけど、何時ものように街でいいか？《いいよ～♪／／》じゃあ。行くか／／／」

直ぐにエースの腕に自分の腕を絡ませて胸を押し当てるように密着する
その後、エースをデートに誘い2人は街に繰り出して行った
＊＊

ポイニクセル王国：王都リラ

2人はデートを楽しむ為に王都に来ていた。
しかし・・現在2人は・・・

市民A「おい！あれ・・エース王子とアクア王女じゃないか？」

市民女A「あっ・・本当だ。あの様子・・お忍びデートかしら？」

市民達に注目されて中々デートを楽しむ事が出来なかった。
それもその筈、エース達はこの国の王子と王女でありエース達の事を知らないという人は、この国にまず居ない程の有名人だからだ。
しかも現在、市民の間で２人に関する。ある噂が流れているから更に注目されてる

アクア「ちょっと、照れ臭いね／／／」

エース「仕方ないだろう・・変装もさせずに連れて来たんだし／／」

アクア「アハハ・・／／／」

仕方なくエースとアクアは逃げるようにこの場を後にして。
そして街外れにある”龍桜園”と言う名の公園に来た
＊＊

王都リラ：龍桜園

エースとアクアの２人は龍桜園に着いた後、　２人のとっておきの場所で寛いでいた。
因みに、このとっておきの場所は２人だけの秘密の場所であり誰も来ない
その秘密の場所にはベンチとかは無いので直接芝生の上に座る２人。

エース「・・やっと、落ちつけるな」

アクア「そうだね～。エー君♪／／／」

アクアはエースを2人っきりの時だけの時に呼ぶあだ名でエースの意見に同意する
あだ名を呼ばれたエースは少し恥しそうに言い返す

エース「ほっ、他の人が居る時はその呼び方はするなよ？／／」

アクア「分かってるよ♪／／」

アクアは笑顔でエースに返答する。
その後、2人は暫らく何もせず呆けてるとエースが欠伸をした。

エース「ふぁ～・・。」

アクア「どうしたの？エー君」

エース「・・昨日のアレの所為で緊張して寝れなかったんだよ／／」

アクアがエースに欠伸の理由を尋ねる
エースが寝れなかった理由は昨日アクアにキスをした事が原因らしい
アクアはそれを聞いた後に・・・

アクア「・・だったら、使う？《何を？》ここを／／／」

そう言ってアクアは自分の膝をポンポンと軽く叩いて使う場所を示す
するとエースは、寝転んだ後にアクアの膝の上に静かに頭を乗せ・・
・

エース「・・悪い、借りるわ・・・・」

そう言った後エースは、アクアの膝の上で直ぐに眠りに就いた。
そして、アクアはエースの寝顔を見ながら

アクア「そっか・・エー君。昨日、緊張したんだね～♪いい子、いい子／／／」

そう言った後にアクアは、頬笑みながら寝てるエースの頭を撫でていた・・・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom.2

始まります。

ポイニクセル王国：龍桜園

時刻が昼過ぎになると流石にエースも腹が空き起きていた。
そしてアクアと供に昼食の相談をしていた。

エース「何処かに食いに行くか？それとも家で食べる？」

アクア「う～ん・・折角のデートだし外で食べよっか」

エース「分かった《それでさぁ・・エー君》何だよ？」

アクア「何時まで私の膝を枕にしてるの？《もう少しだ／／》そっか。ふふっ・・。／／／」

エースがアクアの膝枕でなごんでいる頃・・・。

＊＊

ビーナス邸：ビーナスの自室

ビーナス「・・はい、一応検討してみます。はい・・それでは」

ビーナスは誰かとの通信を終える
そこにタイミング良くスペードとアクアの父親”コニス”が姿を見せる
そして2人がビーナスに話しかける

スペード「どうした?《ちょっとね・・》悩み事か?言ってみろよ」

コニス「力になるよ?ビーナスさん」

2人がそう言うとビーナスが困った表情を浮かべる
その後仕方ないといった顔で理由をスペード達に答えた

ビーナス「実は、私の友人の親がエースをお見合いの相手に指名して来たのよ」

ビーナスがエースにお見合いの話が来た事をスペード達に告げる。
そしてスペード達はビーナスが言ったお見合いの話に対し・・

スペード「受けろ《はいっ!?》って言うか受けるべきだな!」

コニス「そうだな、受けるべきだな!」

ビーナス「2人とも何言ってんの!?アクアはどうするのよ?」

スペード達はお見合いの話を受ける事をビーナスに進めた
ビーナスが反対するとスペード達はお見合いの話を受ける訳を話出

した

スペード「だからだよ《えっ？》エースがお見合いをすれば」

コニス「流石のアクアだって焦りを感じ今以上の関係になりそうだし。それに何より」

ビーナス「それに・・何よ？」

スペード　コニス「「俺たちが楽しめるから！」」

ビーナス「・・・は？」

ビーナスは2人の返答に目を点にしたその後スペード達は目を点にしたビーナスを部屋に残して

スペード「じゃあよろしく～♪」

コニス「スペード！今日は祝いだ！俺の家で朝まで飲むぞ！《おう！》」

そう言いながらスペード達はビーナスの部屋を出ていったそして残されたビーナスは・・・

ビーナス「・・”今日は”じゃ無くて”今日も”でしょうが・・。は～ぁ・・。全く・・あの人達は私は、これがどうなっても知らないわよ？」

そう呟いた後にビーナスはお見合いの話の返事をする為に通信パネルを開いた

＊＊

ビーナス邸：エースの部屋

エースとアクアの2人は昼食を食べた後、エースの部屋に来て2人はベッドに隣同士で

座りながら部屋で寛ぎつつTVを見ていた
TVの内容はエースとアクアの関係についての特集だった

エース「何やってんだよ・・。」

アクア「少し、恥しいね／／／」

アナウンサー『・・今日は、エース王子とアクア王女のお2人を良く知る方に特別ゲストとして来てもらっています！お呼びしましょう！王国の副筆頭騎士にしてエース王子の弟君でもあるヒドラ・サディア卿です！どうぞ～』

エース「ぶっ！」

アクア「ヒドラ君！？」

エースとアクアはヒドラの登場に驚愕する
2人が驚愕した後に、ヒドラがTVの画面に映りインタビューが始まった

ヒドラ『どうも』

アナウンサー『早速ですが、最近のエース王子とアクア王女のお2人の仲は、一体どうなんでしょうか？』

ヒドラ『最近ですか？《はい！》そうですね～キスをしたとは聞きました』

アナウンサー『何と！キスですか！？因みにどなたからの情報ですか？』

ヒドラ『兄さん達が居ない時に父さんが城内の放送を使って堂々と・・・』

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

スペード「みんな～！聞いてくれ～！昨日遂にエースがアクアとキスしたんだ！お祝いしようじゃあないか！！そうだ！宴会！えんかっ《一体！何やってんのよ！》待て！落ちつけ！ビーナス！アッ～～！！・・・・」

その後、城中が笑いに包まれたのは言うまでも無い

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

ヒドラ『・・って事で兄さんとアクア姫以外みんな知ってますよ』

エース「あの！クソ親父～！何晒しとんじゃ～！！／／／」

アクア「あわわわ・・・／／／／／／」

恥しさの余りエースは急いでＴＶ本体のボタンを押してをＴＶ消した！

その後エースは後ろを向くと顔を真っ赤してベッドに座ってるアクアがいた。

だが、何時までもこの状態で居る訳にもいかないのでエースは、取り敢えずベッドに向かって行くとアクアの少し隣に座る

アクア「ばっ、バレバレだったね／／／／／」

エース「そっ・・そうだな／／／」

アクア「こっこれから、どっどうしようか？／／／／」

エース「さっさあ？分かんない／／／」

２人は微妙な空気に戸惑っていた

そんな時、偶然にもお互いの手が触れる

そして無意識的にその手を握り合うエースとアクア

エース「おっ・・俺達って、こっ婚約者どっ同士だよな？／／／」

アクア「うっ、うん。そっ、そうだね／／／」

そう言った後２人が顔を合わせる

その後、エースとアクアは引き寄せられるようにキスをした。

アクア「はぁ・・2回目だね／／／」

エース「さっ3回目も良いかな？《いいよ・・。エー君／／／》」

そして、エースとアクアはお互いに抱きしめ合いながら気持ちを確かめる様に、3回目の口付けを交わすのだった・・・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom. 3.5

始まります。

ビーナス専用次元航行戦艦：グレートアスカロン

翌日エースはビーナスの専用艦グレートアスカロンに乗って移動中
専用艦の王族室で不機嫌になってるエースの機嫌をとるビーナス
エースの不機嫌の理由は、ビーナスのミッドチルダでの仕事の警護
と・・・

ビーナス「ねぇ～・・。お願いだから、機嫌直してよエース」

エース「無理。大体、何でお見合いなんてしなきゃいけねーんだよ？」

エースがお見合いをさせられる為である（ほぼ強制的に）
王族なのでお見合いの話自体は結構というか頻繁にあるエースだが
アクアが居る為に全て断っていたのだ。

ビーナス「ほら！デザートも《要り”ません”》はうっ！」

エースに敬語を使われダメージを受けるビーナス

ビーナス「敬語はやめて！お願いエース、何時もの話し方で話して！」

エース「これで良いでしょうか？ビーナス女王」

ビーナス「いやあああああ！！！」

ビーナスがダメージを受けてる頃、王国のアクアは・・・・。

****

ビーナス邸：エースの部屋

昨日は、家にスペードが来ていた為、エースの部屋に泊まったアクア何故、エースの部屋にアクアが泊まったかというとスペードとコニスは酒が回るとアクアやエースに絡む為だ。その為2人が酒を飲む時は必ずどちらかの家で飲むので、来ていない方の家にエースとアクアのどちらかが泊まりに行ってる。
因みにエースはアクアに”何もしていない”

アクア「ん〜！今日も良い天気。あれ？エースは？」

ベッドから起きあがったアクアはエースが居ない事に気付き周りを見渡すとアクア宛てにエースの書き置きが置いてあった。それを読むアクア

アクア「急な任務で、ミッドチルダに2、3日行ってきます・・

か、起こしてくれれば見送りが出来たのに、変なとこでエー君は気を使うんだから／／」

そう言った後にアクアはエースの部屋にあるクローゼットの１つを開ける
そこには、女性物の服とかが入っていた。そうこのクローゼットはアクア用のものだ。
アクアはよく泊まりに来るので部屋にある余りのクローゼットに服等を入れてる
そしてアクアは予備の騎士服に着替え始めるその途中でアクアはある事に気付いた

アクア「・・あれ？どうしてエー君の”公騎士服”が無いんだろう？・・・まさか！？」

そしてアクアはエースのクローゼットを開けて中を見る

アクア「・・やっぱり、”式典用のマント”も無い・・・ということは・・」

――――へぇ～・・。エー君は、お見合いに行ったんだ～♪――――

エースのお見合いの件がアクアにバレた頃、エースとビーナスは・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ミッドチルダ・・ホテルアグスタ

ビーナス達は私用があってこのホテルアグスタに来ていた
そこにビーナスの友人に会う、それは・・・・。

はやて「ビーナスさん　お久しぶりです」

ビーナス「あら！はやてちゃん♪久しぶりね」

時空管理局本局、二等陸佐の八神はやて
エースは少し離れた位置から2人の様子を伺う事にした

はやて「ビーナスさんは相変わらず綺麗ですねぇ～・・。」

ビーナス「お世辞はいいわよ、もう35のおばさんよ」

はやて「35才で、その美しさは反則ですよ？」

ビーナス「もう♪おばさんをからかわないの！／／」

ビーナスが年甲斐も無く照れながらはやてと話に花を咲かせる
するとそこに紫色のドレスを着た金髪の女性が急ぎ足でやって来た

？？？「はっ、はやて～！《どうしたんや？フェイトちゃん》今、交戦中とは別の位置からガジェットが大量に来るって、どうしよう？私も出た方がいいかかな？」

はやて「う～ん・・フェイトちゃんを応援に出すとホテル内の警備が《なら、私が手伝ってあげましょうか？》ビーナスさんが、で

すか？」

ビーナス「まぁ、私自身じゃあ無いけどね♪で、どうする？」

ビーナスの提案にはやては少し考え始める

そして、真剣な表情（かお）でビーナスの方を向き

はやて「・・・お願い出来ますか？」

ビーナス「勿論よ♪・・聞いてたわよね？エース」

そう言うと少し離れたソファーからエースがビーナスの元にやって来て

エース「それは、命令ですか？《そうよ♪》・・Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ Ｍａｊｅｓｔｙ.」

エースはそう言った後にビーナスの元を後にしようとする

その時、フェイトがエースに話しかけて来た

フェイト「あの！私も一緒に《邪魔だから、別にいい》でも！ガジェットの情報とか」

フェイトが必要にエースに迫る

迫るフェイトに業を切らしたエースはついに・・・

Ａ（アルビオン）「Ａｎｆａｎｇ. 《っ！》」

エースはデバイスのアルビオンを剣の形態で展開しフェイトの喉元に突き付ける

そして足を止めて頬から冷や汗を垂らすフェイトに向けて

エース「俺は、今虫の居所が悪いんだ・・・。次は斬るぞ？」

エースはそう言って剣を仕舞いフェイトに背を向け歩き出した・・・・・・・・・。

公騎士服

王国の騎士が公の場等で着る正装
大体の使われ方は結婚式やお見合い等に着られる事が多い

……

式典用のマント

王国の騎士は上位騎士になるとマント着用になる
式典用のマントは普段、身に付けるマントとはデザインが違う
こちらも大体の使われ方は結婚式やお見合い等に着られる事が多い

王国の騎士の階級は

1．筆頭騎士、2．副筆頭騎士、3．上位騎士・・までがマント着用者

……

4．中騎士・・又は準上位騎士、5．騎士、6．騎士見習い、7．従者・・がマント無し

因みに、マント着用者は名前の後に卿が付きマント無しだと名前呼びになってる

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom. 3.5

続きます。

ホテルアグスタ：施設外

エースは六課に協力する為に敵の配置のデータを受け取りに向かった
そして施設外に出ると現場指揮をしてる人物に話しかける

エース「・・・シャマル《あっ、エース君！ちょうど・・》煩い、手伝ってやるから、さっさとデータをよこせッ！刻み殺すぞ？」

シャマル「はっ！はい！（なっ何で、怒ってるの！？私、何かしたの！？）」

A（アルビオン）「Empfang.」

はやてからエースが来る事を聞いていたのでエースに状況を伝えようとしたところ
エースにいきなり鬼の形相で睨み付けられたシャマルは涙目でデータを渡した
その後エースは、召喚魔法陣を展開して・・

エース「蒼く潤う気高き旋風・・。我が羽根となりて天地を駆け

抜け・・。来よ!我が友シルフェル!!」

エースがそう唱えると召喚魔法陣の中から蒼い翼を持つ女性のエルフが姿を現した
そして現れたエルフはエースの前で膝を着き頭を下げると・・

シルフェル「お呼びでしょうか?マイロード」

エース「このマントを持った後、母さんの護衛を頼む」

シルフェル「Ｙｅｓ，Ｍｙ Ｌｏｒｄ.」

エースがシルフェルにマントを渡すとシルフェルはエースに一礼した後姿を消した
その後、エースは耳に付いているミニチュアの剣型のイヤリングを外して・・・

エース「行くぞ・・・アルビオン」

Ａ(アルビオン)「Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ Ｈｉｇｈｎｅｓｓ.」

自身の剣(デバイス)を持ち騎士甲冑を展開する
エースの紅き騎士甲冑はまるで紅蓮の炎を連想させる色合。
背中の銀色の翼は日の光を浴び輝きを放つそして

エース「エース・Ｌ・サディア・・目標に向かい飛翔する!」

エースは銀色の翼を羽ばたかせ蒼き空へ舞い上がった。
一方、機動六課の防衛メンバーは・・・

****
****
****

ホテルアグスタ：施設外

機動六課スターズ分隊、ティアナ・ランスター
彼女は、空中に複数の魔力スフィアを形成し

ティアナ「クロスファイヤー！シュートッ！！」

そして彼女の複数の誘導弾による射撃魔法が発射される
しかし無理をして制御しきれない規模の量を撃った弾は・・・

スバル「へっ？」

無数の弾はガジェット達に当たる
だが、その内の２つが制御しきれずに同じ分隊の隊員スバルに向かって行く

ヴィータ「ハァ！　っ！？しまった！」

駆け付けた分隊の副隊長ヴィータによって１発は防がれた
しかし、もう１発は未だ向かっていたその時、空から何かが降って来て

スバル「・・・あれっ？」

その何かはティアナの弾を防ぐとスバルのウイングロードに突き刺

さる
ウイングロードに突き刺さったのは魔力刃で出来た少し短めのブレードだった

ヴィータ「・・・魔力ブレード？・・誰だ？」

その後、無数の銀色の羽根が空から落ちて来た
銀色の羽根は日の光を浴び光を放つ

スバル「・・綺麗《えっ？》」

その羽根を見たスバルは素直に綺麗と呟いてしまう
ヴィータはその1枚を手に取るとこう呟く

ヴィータ「・・アイツ、来てんのか？」

一方、その銀色の羽根の持ち主は・・・
＊＊

ホテルアグスタ：施設外

少し、時間を食った為にエースは高速移動魔法を使い防衛線に着く
すると・・エースの到着から5分と経たない内にガジェットが姿を見せた
そしてエースは、アルビオンを構えると

エース「・・・殲滅開始ッ！」

A（アルビオン）「Ｊａｗｏｈｌ．」

そう言い終わった瞬間に銀色の閃光がガジェット達を突き抜けていく
そして、その閃光は一気に３０機近くものガジェットを全て撃破した

エース「・・こんなモノなのか？噂のガジェットは・・」

A（アルビオン）「Ｆｅｉｎｄｅ，　ｖｉｅｌｅ　Ａｎｓａｔｚｅ」

アルビオンが敵の接近をエースに告げる
するとエースはアルビオンを持つ手に力を少し込める

エース「アルビオン、カートリッジロード」

A（アルビオン）「Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．」

エース「少し、本気出すぞ？追いてこれるか？アルビオン」

A（アルビオン）「ｎａｔｕｒｌｉｃｈ．」

エースはアルビオンの刀身に冷気が出始めた
その後、エースは再び銀色の閃光となりガジェット達の間をすり抜けていく
そしてエースが通り過ぎた後ガジェット達は四散した直後に凍りつき地上に落ちていく

エース「氷斬流閃」

A「Alle Ziel Verschwinden.《追撃機は？》Nein.」

アルビオンが全てのガジェットの消滅を確認する

その後、エースは少し気分が晴れたのか先程よりも表情が柔らかくなった

エース「よし、それじゃあ帰投するぞ。アルビオン」

A「Yes, Your Highness.」

エースは銀色の翼を羽ばたかせながらホテルアグスタに帰投していった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ホテルアグスタ：施設外

エースがホテルアグスタに降り立つとシルフェルがエースのマントを持って立っていた

エース「御苦労だったな」

エースはそう言いながらシルフェルからマントを受け取りそれを着る

シルフェル「いえ、他に御用は？《無いな、下がって良いぞ》分かりました」

シルフェルは魔法陣を展開しその中へと消えていった
その後、機動六課のメンバーとビーナスがエースに近づいて来る

はやて「さっきは言いそびれたけど、久しぶりやな～♪エース君」

笑顔ではやてがそう言いながらエースに近づいて来る
するとエースはあからさまに嫌な顔をしながら

エース「出たな。タヌキ娘《誰が！タヌキ娘や！》お前だ、お前」

はやて「相変わらずのムカつく奴やな～ッ！」

エース「安心しろ、お前だけだ《何やとぉ！？》言われたく無ければ女性らしくなる様に努力しろタヌキ」

はやて「また！タヌキって言うた！《はいはい、そこまでよ》ぐぬぬぬ！」

ビーナスが言い合いをする2人に割って入る
そして2人の言い合いを止めるとエースの方に向き

ビーナス「少しは気分転換出来た？《まぁ、少しは》そう、じゃあ行くわよ？」

エース「はぁ～・・分かった」

エースは重いため息をする
その後、ビーナスと供にお見合いの場に向かって行った・・・・・・

・・。

アルビオン

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版のエースが所有するアームドデバイス

コニスがエースが2代目筆頭騎士の就任の際にお祝いとして授けられた
アルビオンは紅魅刃の強化発展した機体。主な色は白
刀では無く、両刃の剣主体に変更されている
エースの剣技に耐えれるように変形機能は基本形態を含めて2つしか無い
基本のソード形態と斬艦刀の2つ
カートリッジは、紅魅刃と同じく右腕の腕当ての中に備わってる
待機状態はシグナムのＬＴの様にミニチュアの剣の形状。それを加工して普段は指輪にして右手の中指に装着している
尚、Ｂ2システムも搭載してある

「Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｈｉｇｈｎｅｓｓ.」は英語だがエースの王国ではこれは王族に対する「了解」の意を込めた返事なので追加登録されている
この他にも「Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ.」や「Ｙｅｓ，　Ｍｙ　Ｌｏｒｄ.」なども追加登録されている

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom. 4

はじまります。

王族座乗艦：アスカロン「桜姫」

王族座乗艦アスカロン艦内の王族室
そこには2人の王族、セレッソとカメリアが国へ帰る為に搭乗していた

セレッソ「・・アクアがメールで言ってた事本当かしら？」

カメリア「さぁ？でも、お父さんを締め上げれば、何か分かると思うよ？どうせ原因は１００％お父さんだろうし」

セレッソ「まぁ、そうでしょうね・・それで後、どの位で着くのかしら？」

カメリア「確か、2，3時間位だったよ」

セレッソ「そう、早く帰ってお父（バカ）さんを締め上げ無いとね♪」

カメリア「そうだね♪」

セレッソ達の中でスペードへのお仕置きが決まった
その頃、エースはと言うと・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

某ホテル：特別室

エースは若干苛立ちが残るもののビーナスの顔を立てる為にお見合いを行っていた
お見合いの相手は、聖王教会、教会騎士団の騎士カリム・グラシア

カリム「えっと・・エースさんのご趣味は？」

エース「無趣味ですが？」

カリム「じゃあ・・好きな物は？」

エース「甘いものです。因みに嫌いな物は、バレンタインデーと”高町なのは”」

エースの口からなのはの名前が出た事に少し驚くカリム
その後、カリムは高町なのはについてエースに尋ねて来た

カリム「えっと、高町なのはさんが嫌いな理由をお聞きしても良いでしょうか？」

エース「あの女が、ミッドにバレンタインとかいうふざけた風習を広めた所為で王国にもその風習が移って来て私は大変迷惑してい

るんですよッ！・・彼女をご存知で？」

カリム「えっと・・一応、なのはさんが現在所属している機動六課の後見役ですので」

エース「機動六課？あぁ・・あの煩いタヌキ娘が作った部隊が確か、そんな名前だったな《はやてをご存知なのですか？》”一応”知り合いですが」

カリム「奇遇ですね。私も知り合いなんですよ♪《貴女も？》ぇぇ♪」

はやては自身が知らぬ所で2人の会話の手助けをしていた。
その頃、知らぬ所で手助けをした本人は・・・
＊＊＊

機動六課：部隊長室

久しぶりに会ったエースの事を考えながらリィンと一緒に書類を整理するはやて
その最中に急にリィンがはやてに話しかけて来た

リィン「・・はやてちゃん、エースさんと何か良い事でもあったんですか？」

はやて「いっ・・・いきなり言うてんの！？リィン！／／／／」

はやてはリィンの不意を突いた質問に顔を真っ赤にして慌てる
あからさまに今までエースの事を考えてたはやてにリィンが更に質問する

リィン「だったら、はやてちゃんはエースさんの事嫌いなんですか？」

はやて「嫌いやッ！嫌いッ！大いッ嫌いや！」

リィンにエースの事を強く嫌いと主張する、はやて
はやてがそう言った後リィンは、悲痛な表情（かお）ではやてにこう言った。

――――だったら何故、今、はやてちゃんは泣いてるんですか？

――――

リィンにそう指摘され思わずはやては両頬を触る
すると、リィンに指摘された通りはやては涙を流していた

リィン「・・はやてちゃんがエースさんの事を考えや話をしてる時とても幸せそうな顔を
してる事はリィンを含めシグナム達も家族皆が知ってますよ？」

はやて「うっ・・・／／／／」

リィン「それに、リィンに人を好きになるのは素晴らしい事だと教えてくれたのは他ならぬ、はやてちゃんですよ？」

はやてはリィンにそう諭されると、はやては涙を拭きその後、自信

に満ちた顔で・・・。
はやて「なら、私の王子様（エース）を私の虜にさせたてしまおうかな！／
／」

リィン「ですぅ〜！」

はやてが自分の気持ちに正直になってエースへの想いを自覚した。
その頃、エースとカリムは・・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

某ホテル：特別室

はやての事が切っ掛けとなりカリムとエースはその仲を深めていっ
てた
そしてカリムとは共通の話題も多く話す内にエースの機嫌も直って
いって今では、先程
の不機嫌が嘘の様に機嫌が良くなっていた。
カリム「ふふふっ・・・ビーナスが自慢してた通りの人物ですね／
／」
エース「母さんが？《えぇ／／》・・因みにどんな事を？」
エースがカリムに尋ねるとカリムは・・

カリム「女同士の秘密です♪／／／」

エース「うっ／／／」

微笑みながらそう言うカリム
エースはこの時初めて、アクア以外の女性を”可愛い”と思ってしまった。

カリム「どうしました？”エース”あっ・・・／／／」

カリムは思わずエースの名前を呼び捨てに呼んでしまう
そして自身の言動に頬を赤く染めるカリム
そんなカリムに対しエースは・・・。

エース「・・えっと、いっ今《すっ、すみません》いっ、いえ、大丈夫ですよ”カリム”／／／」

カリム「あっ・・。はい／／／」

その後、恥しさの余りお互い顔を真っ赤にして俯く2人
そんな時、部屋のドアが開いてビーナス達が入って来た。それは即ちお見合いの終了

を告げるものだった・・・。
その後、挨拶をしてお互いに別れて行く
エース達が別の方向へ歩いていると急にカリムがエースの元に走って来て

カリム「あっ・・あの！エース《はい？》次は、”個人的”にお

会いして下さいね／／／」

顔を真っ赤にしながらそう言うカリム

エース「はい、分かりました／／」

カリム「お待ちしています。エース／／／」

それにエースが次も会う事を約束すると嬉しそうに元来た道を帰って行った。

そんなカリムを見送るエースに、ビーナスが

ビーナス「・・・・カリムに惚れたの？《んなっ！？／／／》そう♪」

エース「何も言ってませんが！？／／／／」

ビーナス「その位、見れば分かるわよ。・・・でも、1番はアクアにしなさいよ？あの娘は許嫁とか関係無しにエースに全てを捧げてるんだから・・」

エース「・・・分かってるよ。その位／／／」

ビーナス「なら、良いわ」

ビーナスとエースはそう会話をしながらこの場を後にした・・・・・

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
  -

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom. 5

始まります。

時空管理局：本局内

ビーナスとエースはビーナスの知人に会う為に本局に来ていた
その知人とは、時空管理局の総務統括官であり

ビーナス「お久しぶりです。リンディ先輩」

リンディ「あら！いらっしゃいビーナス、それにエース君も♪」

エース「どっ・・どうも（この人やっぱり苦手だ・・）」

そして、エースの苦手な人物であるリンディ・ハラオウン。
リンディの部屋に入ったビーナス達は席に座る

リンディ「元気にしてた？ビーナス」

ビーナス「えぇ、おかげ様で先輩は・・って元気そうですね」

リンディ「勿論よ♪エース君は？元気だった？」

エース「えっ・・えぇ、まぁ」

こうしてリンディとビーナス達の会談が始まった

その頃、王国のセレッソとカメリア達は・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

ビーナス邸：中庭

スペード「いや・・・ホントスイマセン・・・だから許して・・・いや、
許して下さい」

スペードは現在、中庭で三角形の木を並べその上に正座させられ、
更にその太ももの上に石を載せられてる・・・いわゆる石抱である
そんな状態のスペードを見下ろすセレッソを始めとする3人の娘達

セレッソ「・・・では何故、あの様な愚かな事を？」

カメリア「・・・返答次第ではお父さんでも許さないよ？」

ジュピリア「嘘を言えば、石追加ですから♪」

殺気全開で言う我が娘達。
流石に恐ろしいのでスペードは正直に理由を話す事にした

スペード「・・・エースの困り顔が見たかったからです。ハイ」

スペードの理由に3人の娘達は顔を合わせ同時に頷き気合う
そして一斉にスペードの方を向くと

━━━石追加の上、引き続き続行だね♪━━━

スペード「ちょっ！？やっ、やめっ！アッ━━━━━━━━！！」

スペードの悲鳴がビーナス邸に響いた
そして、もう一方のバカ親の方は・・・
＊＊

リウス邸：中庭

アクア、リリアそれからルビアがコニスに対して三角形の木が無い石抱をさせていた
因みに三角形の木が無いのは騎士で無いコニスへのお情け

アクア「ど〜して、お父さんはエースにお見合いをさせたのかな？」

※エー君は2人きりの時の呼び方なので現在は、エース

コニス「いや〜・・。2人が何時までも進展しないから切っ掛け作りにと・・」

リリア「それでもやって良い事と悪い事があるでしょう？コニスおじ様」

コニス「いや〜。アハハハハ・・・・だっダメ？」

ルビア「死にたいの？」

ルビアがコニスのこめかみに自身の「銃型」のデバイスを押し当てる

コニス「アハハ～・・。ルビアちゃん幾らなんでも・・この距離は痛いよ？」

ルビア「なら、撃ちましょうか？」

コニス「止めて下さい。お願いします」

コニスが涙目でお願いをするとルビアは仕方なくデバイスを下げる

その後アクアがコニスの眼前に方天戟型のデバイスを突き付け

アクア「表向きの理由は分かったから、本当の理由を言いなさい」

アクアがそう言った後するとコニスは苦笑いを浮かべつつ

コニス「・・バレた？《とっくの昔に》アハハ～・・。ん～っと面白そうだったからかな～」

アクア「・・・どうする？」

ルビア「同情の余地なし」

リリア「同じく」

アクア「そうね、じゃあ石と三角形の木を追加しましょうか？《えっ！？》」

ルビア「じゃあ私は木の方を持って来るわ」

リリア「私は石を」

その後、リウス邸の中庭では哀れな科学者の悲鳴が聞こえる事にな
る・・。
一方、その頃ミッドのビーナスとエースは・・・
＊＊
＊＊＊＊

時空管理局本局内：リンディの部屋

リンディとビーナスが会話に花を咲かせてる
すると部屋に間席を外していたエースが入って来た

ビーナス「遅かったけど何処に行ってたの？」

エース「ちょっと外に前来た時に予約してた物を取りに行ってた」

ビーナス「ふ〜ん」

エースがビーナスの隣に座る
その後リンディがニコニコしながらある提案をエースにする

リンディ「ねぇ、エース君《何でしょうか？》うちの娘とお見合
いしない？」

リンディは自分の娘とのお見合いを持ちかける

それをエースはニッコリと笑顔で・・・

エース「お断りします♪」

・・と即座に断った。
これにリンディは不貞腐れながら反論する

リンディ「何でよ～！良いじゃないお見合い位、ねぇ～貰ってようちの娘」

エース「お見合いから飛躍しすぎですよ、大体クロノさんが良いと言わな《あら、それなら大丈夫よ？》・・・はい？」

リンディ「だってこれはクロノ案だし♪《何ぃッ！？》それにビーナスもエース君が良いなら別に構わないって許可も出たし」

リンディの言葉の後にビーナスの方を向くエース
そるとビーナスはあからさまにエースから視線を逸らす

エース「かっ、考えさせて下さい」

リンディ「分かったわ、良い返事を待ってるわ～♪」

因みにリンディの娘とのお見合いは果される事になる・・・しかし、それはまた別の話
その後、リンディの会談が終わり、王国に帰る為に本局内の廊下を歩いていると・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

本局内：廊下

レジアス「おや、サディア少将にエースではないか」

ビーナス「・・どうも」

レジアス「どうだ？エースよ貴様、いい加減に儂の物に《ならない》っ！」

エース「俺は、お前なんかの部下には死んでもならない《何ッ！？》行きましょう」

ビーナス「えぇ」

ビーナスとエースがレジアスを無視して歩き出す
その後残されたレジアスはというと・・・

レジアス「ぐぬぬぬッ！クソッオオッ！！」

エースに侮辱に近い言葉を掛けられたレジアス
エース達に無視された彼はその場で悔しがる事しか出来なかった・・
・・・・・・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom.

Another story of the kingdom. 6

始まります。

グレートアスカロン：王族室

エースとビーナスは王国に帰る為にビーナスの戦艦に乗って移動中だ
戦艦は順調に航行している途中、彼女はがエースが未だに公騎士服
と式典用のマントを着けている事に気が付きそれを聞いてきた

ビーナス「どうして、未だに公騎士服と式典用のマントを着けてる
るの？」

エース「・・・特に理由は無い《ふ～ん》」

その時エースはビーナスに突然こんな事を聞いてきた

エース「母さんは、アクアの事どう思う？」

エースにそう聞かれたビーナス
彼女は何となくエースの言いたい事を察し

ビーナス「・・いい子よ、とてもね」

言葉は少ないが、しかし意思の籠った答えをする

エース「・・分かってるよ。その位」

ビーナス「なら、いいわ」

２人を乗せた、戦艦は王国に向かって更に航行して行く
その頃、王国では・・・。
＊＊

リウス邸：中庭

此処ではスペードを加わえたコニスへのお仕置きが続いていた

コニス「あの～・・そろそろ、降ろしてくれるかな？」

スペード「うん・・もうしないからさ」

石抱きから２人は、現在、十字架に磔にされている
バカ２人はその場で、談話してる王女達に降ろす様に頼みこむが・・

アクア「・・どうする？」

ルビア「反省してるようにも見えるし・・」

リリア「してない様にも見えますし・・・」

そんな中、スペードの娘セレッソがとんでもない意見を出した

セレッソ「・・嘘発見機にかけて嘘の場合、死なない程度に・・」

――――火で焙りましょう――――

スペード「ちょ！？マジかよ！？」

コニス「じょ、冗談だよね！？洒落にならないよ！？」

スペードとコニスが驚きの声を上げる

そんな時、２人はビーナスが部屋で呟いた言葉を同時に思い出した

――――どうなっても知らないわよ？――――

顔が真っ青になっていくスペード達

そんな彼らに、カメリア達が追い打ちをかける

カメリア「う～ん・・まぁ、仕方ないかな～・・今回、ばかりはね」

ジュピリア「同情の余地なんてある訳無いし」

王女達の容赦の無い行動に絶望してる２人に天の助けが舞い降りた

――――おじさんに、クソ親父、助けて欲しいか？――――

その声は２人にしか聞こえない念話らしく王女達は気付いていない

声の主は勿論エースだ。

コニス「（ありがとう！エース君！）」

スペード「（流石、我が息子！）」

エース「（だったら俺の言う通りにするか？するなら助けてやる）」

コニス&スペード「「（します！させていただきます！）」」

エース「（よし！なら・・・・分かったな？≪（Ｙｅｓ，　Ｙｏｕｒ　Ｍａｊｅｓｔｙ！）≫）」

スペードとコニスがエースに返答した

その後、エースは何処からともなくナイフ型にした魔力刃をスペードとコニスの手足を縛ってる縄に向かって投げつけコニス達を解放する

スペード&コニス「「だらっしゃあああああ！！！」」

解放されたスペード&コニスは奇声を上げながら全速力で逃げる

当然、王女達は2人を追いかけていった

王女達「待てこらぁあああああ！」

アクア「待ちなッ！？」

アクアも他の王女達に続こうとしたがいきなり手を掴まれ木の陰に引き寄せられた

そこには、ミッドから王国に帰って来たエースが居た

アクア「エー君!?《ちょっと来い》えっ?えっ?何?／／」

エースは戸惑うアクアの腕を掴んだまま移動して行った

＊＊＊

王都リラ:龍桜園

エースはアクアの腕を掴んだまま龍桜園に来た
当然、此処に来る途中で様々な人に2人は目撃された
そんな事はお構いなしにエースは黙って2人だけの秘密の場所にアクアを連れて来た

アクア「どっ・・どうしたの?エー君」

アクアは何時もとは違うエースの雰囲気に少し戸惑う
そんな中エースが話始める

エース「・・アクア、俺がお見合いした事は知ってるな?《うん・・》俺は、恐らく・・今後もお見合い等をしなきゃいけないと思う《うん・・》」

英雄のスペードと女王のビーナスの子で第1王位継承者、更に白銀種でもあるエース
その存在価値はかなり大きい物であるのは誰の目から見ても明白
それ故・・エースに取り入ろうとする輩は、かなり多くいる

エース「・・・俺は、これからもアクアに色々と不愉快な思いをさせると思う」

そんなエースの言葉をアクアはただ黙って俯きながら聞いてる

エース「そんな俺だけど、アクア君には、これからもずっと傍に居て欲しい・・・」

アクア「・・・えっ？」

そしてエースは服の中から小さな箱を取り出しその中身をアクアに見せる

アクア「こっ・・これって」

箱の中身は８月の誕生石でありアクアの瞳と同じ様な翠色(みどり)で桜の花の形をした

ペリドットの宝石が付いたアクアの名前入りの指輪だった

そして、エースはアクアに・・・

エース「・・アクア・Ａ・クアラさん、私と結婚して頂けますか？」

アクア「えっと・・はっ、はい、喜んで／／／／」

アクアの返答後エースは彼女の左手の薬指に指輪をはめた

これによりエースとアクアの２人は正式に婚約した

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ビーナス邸：エースの部屋

エースとアクアの２人は龍桜園からエースの自室に移動した
そしてエースの自室に着いた２人は肩を寄せ合いながらベッドに座る

アクア「気になったんだけど、お父さん達は何処に行ったの？」

エース「クソ親父と、おじさんなら助ける代わりに街中を走り回る様に指示を出したんだ・・因みに破ったら母さんや叔母さんに”綺麗なお姉さんの店”に通ってる事をバラすって条件付きで♪《酷くない？》あの位問題無いさ」

そんな風に会話をしていると不意にアクアは自分の左手、薬指の指輪が目に入り
エースに、こう話しかけてくる・・・

アクア「・・・婚約しちゃったね《嫌だったか？》ううん、そんな事無いよ。ただね、いまいち実感が沸かないんだ《なら・・》あっ・・／／／」

エースは優しくアクアを寝かせるようにベッドに押し倒し・・

エース「実感を沸かせてやるよ／／」

アクア「えっと・・《どうする？／／》おっ、お願いします。《んっ／／》んんッ・・・／／／」

エースとアクアの2人はお互いの愛を確かめ合ぅように愛しあっていった

この日から暫らく経ってエースとアクアの正式な婚約が発表された

その時、他の王女達に婚約を迫られたのは言うまでも無い・・・・・・・・・・・・。

これはもう1つの物語

the kingdom――Another story of

Another story of the kingdom. ＋2ndキャラ

Another story版

エース・L・サディア　２０歳

主なデバイス：アルビオン&シルバーブレイド

エースがハラオウン家に養子に出されず成長した姿
スペードとビーナスの息子であり第1王位継承者となっている
剣の才能それにビーナスの知略等に加え白銀種と恐ろしいまでのスペックを受け継ぎ
本来とは違い、幼少の頃はスペードから直接剣術の指導を受けている為に４大王達やスペード除くと王国1番の強さを誇っている
エースは王族の中でも特に群を抜いて人気が高く最も期待されてる王子
１０歳の時、スペードの暗殺に来たサキュラスと戦闘、勝利し捕縛しスペードの窮地を助けた。この時スペードに後任の筆頭騎士になれと直接任命を受ける。
そして１５歳の時に2代目の筆頭騎士に就任し現在に至る

備考：サキュラス捕縛の後管理局から勧誘を受けている。今のとこは返事は保留中

好きな動物：サメとハムスター　↑！？

嫌いな動物：鹿

……

…………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙの最後に、アクアにプロ―ポーズし正式に妻に迎えている
他にも第２王妃の他に、第３王妃にカリムを迎えており現在３人の妻が居る模様。
未だに、筆頭騎士の座に君臨しており忙しい日々を送っている
ＪＳ事件の時には、リンディの要請を受けてヒドラとルビアの２人を連れて参戦
ゆりかごの撃墜や市民の救助、ガジェットの撃墜などにも１役買っている

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

アクア・Ａ（アクイラ）・クアラ　　性別女　　誕生日８月６日

第１王妃候補

髪色：白銀　　瞳：翠　　２０歳

母親譲りの優しい印象を強く受ける顔立ち
スタイルもフェイトと同じかもしくはそれ以上と決して悪く無い
エースと同じ日に生まれお馴染みであり許嫁
そして母親のリウスと同じく”白銀種”でもある

アクアも?世の子孫、その証拠に名前にA（アクイラ）の文字を持ってる
両者両想いなのだが何時までも幼馴染の関係に痺れを切らしたアクア
エースはその事を受け止めてキスをしてアクアとの関係を一歩前進
させた
傍から見れば、間違いなく恋人同士だが昔からああなので、その自
覚は一切ない
…………………………………………
…………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

第１王妃、アクア・Ａ（アクイラ）・サディア
前のＡｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙでエースからプロポーズされたア
クア
それにより２ｎｄでは、第１王妃”候補”から第１王妃となり名前
も変わった
結婚後は、秘密にする必要が無くなったのでラブラブに拍車がかか
ってしまい・・最早手の施しようが無い
アクアは現在、エースとの子供の事で悩んでいる
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

ルビア・Ｗ・カレア

髪色：白　瞳：金　１９歳

母親譲りのツリ目のクールビューティー系の美人
優しいのだが顔の所為か少々恐い印象を持たれがち
スタイルは良い方で、母親よりも胸がある

エースに想いを寄せる１人
しかし口調等から良くエースと口喧嘩をしてしまう為、エースはルビアに対してそういう感情は一切無く。エースはルビアを口の悪い親友と思ってる
その為に、現在ビーナスに頼み口調の訓練や女の子らしい仕草を勉強中

…………………………………………………………………………………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

未だに良くエースと口喧嘩をしてしまっている
その為に、引き続きビーナスから口調の訓練や女の子らしい仕草を勉強中の模様
現在、どうやってエースに告白しようかと悩み中。
Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版では見せなかった乙女思考が遂に発覚
エースの事を通常はアンタもしくはエースと呼び、頭の中ではダーリンと呼ぶ
ルビアが１０歳の頃エースが寝てる隙にキスをしている
その為に、エースは知らないが初めてのキスの相手だったりする
＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

リリア・Ｄ・ヒシンス

デバイス：万華狂　　稀少技能（レアスキル）：無型眼

髪：ブルーブラック　瞳：真紅　　１９歳

おっとり系で綺麗というよりは可愛い女性
スタイルも良く胸もそこそこある

エースに想いを寄せる１人
こちらでも歪んだ性格だが、エースの妃になれれば満足の様子
しかし、妃になれ無ければリリアが事を起こすのは火を見るより明らかだ

……

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版　第２王妃

第２王妃、リリア・Ｌ・サディア

２ｎｄでのリリアは、アクアの婚姻後にエースからプロポーズ受け第２王妃になった
婚姻を期に騎士を引退しビーナス邸に移り住んでいる
結婚前に比べて性格等が随分と丸くなっていおり大人の女性の雰囲気も出している
王妃に成ってからは姑であるビーナスの愚痴をよく聞かせれているエースと一緒に行動してる時、外や皆の前だと大人の女性モードだが・・・。

エースと２人っきりの時はものすごく甘えてくる
２人っきりの時のエースの呼び方はエーちゃん
＊＊＊

カリム・グラシア

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

こちらの世界でのカリムはエースとお見合いをして出会っている
エースとはお見合い後の関係も良好のようだ
…………………………………………………………
…………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

第３王妃、カリム・Ｌ・サディア

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ後もエースとの良好な関係が続き現在、
カリムは第３王妃になっている
現時点でのヒロインの内では１番、交際歴が短いカリム
その為、王妃を除くヒロイン達はカリムの事を信頼していない
王妃候補になった際に、管理局の職を辞めビーナス邸に移り住んだ
カリムは、ヒロイン達と仲良くしたいが信頼されて無い為悩んでいる
しかし、他の王妃のアクアやリリアとはかなり仲が良い模様。
＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

ジュピリア・サディア

こちらでは、ビーナスの部下では無く。エースの副官兼お目付け役として活躍中
そして、エースに想いを寄せる１人であり恋人になれる日を夢見ている
因みにエースとアクアの婚姻には反対している

…………………………………………………………
…………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

アクアと第２王妃の婚姻は渋々ながらも納得したジュピリア
だが、第３王妃にカリムが成る事は反対の未だに模様。
一方的ではあるが妻以外にエースと関係をもった女性は彼女だけ

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

ヒドラ・サディア　　１８歳

スコルが存命の為、こちら世界でのヒドラは心優しき青年に成長してる
こちらの世界のヒドラは、副筆頭騎士でありエースの良き部下となって活躍中。

筆頭騎士のエースが忙しい為に良く他の騎士達の面倒を見ている良い上司
エースとは後一歩のとこで及ばないものの、同格の強さを誇っている
ヒドラも母親と同じくジュピリアの恋を全力で応援中

……

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

王国の副筆頭騎士としてエースを支えながら相変わらず忙しく過ごしている
ＪＳ事件の時にはエースやルビアと供に、ゆりかごの撃墜や市民の救助、ガジェットの撃墜等に協力し管理局にも名が結構知られてファンもいるらしい
Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ後はエースの結婚の１ヶ月後に一般人の女性セリアと結婚している

……

セリア・サディア　２０歳

スペードやコニスが良く使う食堂兼酒場クラテルの看板娘
９年前、ヒドラとの出会いは酔いつぶれたスペードをビーナスがヒドラと一緒に迎えに来た時が最初の出会い
それから主にスペードがちょくちょくヒドラを連れて飲みに来てる時に自宅の方でヒドラと一緒によく遊び次第に仲良くなっていき恋人同士になり
その後、無事ヒドラと結婚し彼の妻になった
因みに、彼女は気付いていないが現在ヒドラの子を身籠っている

食堂兼酒場クラテル

元々、宿屋だった建物の１階を丸ごと改造し店舗にした店
その為に２階の自宅の１部分には未だに宿部屋の残りが幾つかある
残り部屋は・・主に、コニスやスペード達が使用したり、セリアと
ヒドラの部屋の他にもジュピリアの部屋等もある
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

セレッソ・Ｌ・サディア　　１６歳

この世界でも相変わらず超ブラコンのセレッソ・・と思われるが。
こちらのセレッソは残念な事にエースと供に暮らしてる所為なのか
ブラコン度にかなりの拍車が掛かってる模様。
最早、惚れている事を隠そうともせずに、堂々とエースの妃になる
事を宣言している。
そして既成事実を作る為にかなりの頻度でエースの部屋に裸で忍び
込む様子。
しかも、日に日に忍び込むのが上達している
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

カメリア・Ｌ・サディア　　１５歳

この世界のカメリアは・・・。
エースと供に暮らしてる所為でセレッソ程に酷くは無いが超ブラコンとなってる
何とか隠してはいるが、異性としてエースを意識してる模様。
エースに近づく女性全てに取り敢えず「お兄ちゃんは渡しませんよ」と警告をする
セレッソ程では無いが既成事実を作る事を時々思ってる様だ。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

コニス・Ａ（アクイラ）・クアラ　３６歳

リウスの夫でアクアの父親
本来は、スペード襲撃事件の際に偶々居合わせサキュラスに殺された人物
こちらの世界では間一髪の所でエースが救援に来て命を救われた
コニスは、戦闘はからっきしダメであり頼り無いにも程があるほど
しかしデバイスの開発、改修、発展等をやらせれば右に出るものは居ない
スペードの紅魅刃、スコルの紅龍妃は設計者は別人だがデバイスとして完成させたのはコニスである。
エースとアクアを許嫁にした人物の１人
早く、孫の顔が見たいらしくエースに逐一アクアとの関係を聞いて来る
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

スペード・Ｌ・サディア　３６歳

こちら世界でのスペードは療養中サキュラスが襲撃してきた時、間一髪の所でエースが救援に来て命を救われ存命の模様。しかし元々、重傷を負っていた為にサキュラスの襲撃後、治療したが短時間の戦闘しか出来なくなってしまった。

今は、エースに筆頭騎士の座を渡して自分は引退しのんびりと暮らしてる。

自分ではエースとは何とか親子をやってる模様・・・と思ってる↑

スペード「！？」

因みに、息子特にエースを可愛がってる（バカ親１号）

※エースはお母さんっ子であり「マザコンでは無い」実はスペードを助けた本当の理由は・・ビーナスの泣く姿が見たくないからであり別にスペードの為では無いらしい

因みに※は本人から直接聞いた意見です。↑スペード「！？」

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

ビーナス・Ｌ・サディア　　３５歳

こちらの世界でのビーナスも管理局と聖王教会の両方に籍を置いて

いる
そして、はやてやカリムとも友人であり表面上は余り変わり無いように思える・・・

・・というのは、大きな間違い！
実は逸話が幾つも残るほどの超バカ親（エース限定）になっている（バカ親２号）
しかし超バカ親（エース限定）になっても普段は子供達に平等で接する為に子供達の評価はスコルと同様にかなり高い様子。
因みにセレッソ達もエースの妻にしようと絶賛画策中

備考：他の４大王は本来と差ほど変って無い
＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

スコル・サディア　３４歳

こちら世界ではスペードが生きてる為スコルも存命してる
スペードが筆頭騎士の座をエースに渡した後は暫らくの間はエースの腹心として活躍していたが、ジュピリアがエースの腹心となった現在のスコルはビーナスの腹心として現在もその能力を生かし活躍している。
自分の子だけでは無く、ビーナスの子、エースやセレッソ達も溺愛しており子供達から良く慕われてる良い母親となってる。
因みに、ジュピリアの恋を全力で応援中
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

フェイト・Ｔ・ハラオウン　１９歳

この世界の彼女は、エースとの兄妹関係も無いのでヒロインでは無く今のところは元の原作版と余り変更はされて無い
エースに必要以上に迫って怒らせた事を後悔している様子

……………………………………………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版から少し後にお見合いをして顔見知りになった
しかし・・フェイトが、お見合い中にレジアスの名前を言った為に微妙だった関係が更に悪い方へ悪化し誘いの連絡しても即答で断る程になっている
断る理由は・・『占いが良い結果じゃなかった』、『眠い』等どうでもいい理由
つまり、遠まわしに『お前とは会いたくない』と言われてる様なものフェイト自身は恋人とはいかないもののそれなりに関係の修復をしたいと思ってる為に
リンディにお願いしお見合いをしながら関係を修復している

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

八神はやて　１９歳

この世界の彼女は、ビーナスの関係でエースとの面識はある
しかし片手で数えられる程度で仲が良いと言う訳ではない
一応、カッコイイ男の子として意識はしてる様子だが恋愛感情には
発展していない
だが、リィンに諭されエースへの思いを自覚する

……………………………………………………

………………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ後、積極的にエースをデートに誘っている様子
そして、何気にカリムに会うという名目で休暇を利用し王国にも来ており
３人娘の中では最も仲が良い事もあり１番多くデートもしている
そしてエースもかなりはやてには好印象を持っていて何時かは、はやての事を王妃に迎えようと思おりその事をはやてにも伝えてある
その為、現在はやては王妃候補。
しかし、親戚等の問題もあり王妃なるには、まだ時間が掛かる模様。
因みに３人の妻たちは、はやてが王妃候補になった事は知っている模様

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

高町なのは　　１９歳

この世界の彼女はエースがミッドを訪れた際にある事件でなのはを
助けていおり面識はある、だがその１度しか会っておらずエースは、
なのはの事を覚えていない
だが・・彼女は、助けられた際にエースに一目惚れをしてしまった
為にエースの事をとても鮮明に覚えている。
バレンタインデーをミッドに広めたのも彼女である。
このバレンタインデーはミッドに広まった後に王国にも広まりこの
所為で彼女は間接的にではあるがエースからとても嫌われている。
だが、その事を彼女は知らない

………………………………………………………………

…………

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ．２ｎｄ版

リンディがエースと知り合いという事をフェイトから偶然知り、リ
ンディにお願いしエースとお見合いをして顔見知りになっている
その後、フェイトとは違いエースとは友好な関係を築いており数回
程デートをしている
因みに義娘のヴィヴィオも紹介済み

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

リンディ・ハラオウン

管理局でのビーナスの先輩に当たる人物で幼少のエースを知っている
その為に、エースの１番苦手な人物である
だが、ビーナスが管理局での仕事の時には小さい頃ののエースの面倒を殆んど見ていた為に、ビーナス以外でエースが１番信頼を寄せている人物でもある

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

クロノ・ハラオウン

エースの頼れるお兄ちゃん的な存在
最近、エースに義妹（フェイト）の彼氏になってくれとしつこく言って来る
因みに、クロノは”妹”としかエースに言っておらず
肝心の妹の名前をエースは未だに知らない

＊＊

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ版

レジアス・ゲイズ

エースを管理局に勧誘している人物の１人

しかし過去にビーナスの事を「役立たずの女」と言った事がある
それによりエースを含め王国の人達より毛嫌いされている

因みに、先の発言が頭にきたエースやビーナスを除く４大王、王女達それに上位騎士達数百人はミッドチルダに攻め込もうとしていた。
その時は、伝説の３提督が王国に来て謝罪して難をのがれたが４大王が次は絶対に許さないと釘をさした

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｋｉｎｇｄｏｍ．２ｎｄ

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｋｉｎｇｄｏｍ　２ｎｄ．　始まります・・・。

サラマンディア：ドゥス地方

惑星サラマンディアにあるドゥス地方。
此処にテロリスト潜伏の情報を手に入れた女王リブイラ
彼女は騎士団にテロリスト殲滅の任を命じた
そして騎士団を代表し３人の騎士が殲滅に向かった・・・
＊＊

ドゥス地方：テロリスト基地内

騎士団が殲滅に来るとは知らないテロリスト達
その基地内ではテロリストのリーダーがメンバーへの演説を行っていた

　リーダー「・・あるからして４大王の殺しは殺害では無い！天の裁きである《リーダー》どうした？演説中だぞ？後にしろ」

　テロリスト「そっ、それが！経った今、高台の観測員からの通信で現在、この基地にアスカロン級戦艦”雷鳥”が接近中との事ですッ！《何だとッ！？》」

雷鳥はある人物の専用艦で恐らくこの世界でもかなり有名な戦艦だ
その戦艦も有名だが、テロリスト達が恐れてるのは座乗してる人物
の方

リーダー「・・・2代目筆頭騎士、エース・L・サディア」

エースの存在がテロリスト達に知られた頃、戦艦内のエースは・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

雷鳥：王族室

雷鳥の王族室にはエースと連れて来た2人の内の1人
ルプス女王の娘、ルビアが部屋に居た

エース「すまなかったな、こんな賊退治に付き合わせて」

ルプス「別にいいけど・・・ねぇ《何だ？》ジュピリアから聞いた
のだけど第3王妃をミッドから来た、あの女に決めたって本当なの
？」

エース「あの、お喋り《どうなの？》・・・本当だ」

ルプス「何故？《どうしてお前が知りたいんだ？》そっ、それは
（チャンス！？これってもしかして告白できるチャンス！？）あっ、
あのね・・」

ルプスはこのチャンスを逃さまいとエースに告白しようと試みる
しかし、そのルプスの願いは・・・
ジュピリア『筆頭騎士、目標であるテロリストの基地を捕捉しました。今直ぐにブリッジへお越し下さい《分かった》それでは・・』
任務という妨害にあってしまい、また告白の機会を失ってしまう
そんなルプスの心境を知らないエースは・・
エース「さて、行こうか？ルプス《そ・う・ねッ！！》なっ、何怒ってんの？」
ルプス「別に！何でも無いわよ！（また逃した・・この恨み晴らさせてもらうわよ・・。）」

この後、捕まった数名のテロリスト達はエースよりも恐ろしい鬼神を目撃したと言う
エース達がテロリストの殲滅に取りかかった頃、ビーナス邸では・・
＊＊

ビーナス邸：アクア＆エースの部屋

第1王妃アクア・A（アクイラ）・サディアは部屋である本を読んでいた
そんな時、部屋にある人物が訪ねて来た

？？？「あのぉ～・・。アクアさん少しよろしいでしょうか？」

アクア「どうぞ《失礼します》・・あのねぇ、カリム貴女も私と同じ王妃なのだから敬語は止めてって言ってるでしょ？《すみません・・》いや、謝られても・・」

部屋を訪ねて来たのは、第3王妃であるカリム・L・サディア
彼女は、落ち着かない様子で部屋に入る

アクア「で、どうしたの？やっぱりセレッソ達の事？《はい・・》う～ん」

カリムはお見合いでエースと知り合った上ミッドチルダ出身という事もあり
アクア、リリア以外のエースを想う人物達からあまりよく思われていないのだ
因みに2人がカリムを許してる理由は、エースの人を見る目を信頼している為

カリム「・・やっぱり、結婚すべきでは《それ以上言ったら怒るわよ？》ですが・・」

カリムが結婚した事を後悔するような発言をする
しかしその発言をアクアが遮り・・

アクア「いい、カリム？それ以上の発言はエースの侮辱になるわ・・それは、エースが許そうが、私が絶対に許さないわよ分かった？《はっ、はい》なら良いわ」

アクアは凄まじい殺気を出しながらカリムに忠告する

その殺気の凄まじさにカリムは相槌を打つしか無かった

アクア「う～ん・・じゃあ、今度、私から皆に話してみるよ《でも・・》大体、こんな状態が長く続いてみなさいよ。カリムがエースの子を授かった時、えらい騒ぎに成ってしまうのは目に見えてるじゃない《そうですね・・》ふぅ・・」

カリム「・・あれ？（・・アクアさんが持ってる本、何の本だろう？）」

アクアが一息つくその時、カリムは先程アクアが読んでた本が目に入る
それが何の本かカリムはアクアに聞いてみた

カリム「その、何の本ですか《これ？》はい」

アクア「・・これはねぇ《あっ・・》妊娠のアドバイスの本よ。私もエースも白銀種だしねどうしても・・出来にくいからね」

そう語るアクアの顔は、先程まで殺気を出していた人物とは思えない程に激変し苦渋の表情をしていた。現に、ビーナスもエースとセレッソの間に４年の開きがありアクアの母リウスもアクアの後も頑張ってみたが結局出来ていないのだ
アクアは苦渋の顔をしながらも更に語る

アクア「だから出来る限りの努力をしないとね・・私だって欲しいものエースの子供」

カリム「（・・・アクアさん）」

アクアの切実な願いにカリムはただ黙る事しか出来なかった・・・・・・・・・・・・・・・。

アスカロン級戦艦「雷鳥（らいちょう）」

エース専用の座乗艦で主に防御と適応性に力を入れた戦艦
基本色はオレンジ色に、艦首に雷を纏った隼が描かれているのが特徴
武装は少なく近接防御火器を除けば主砲と副砲の2つしか火器が無い
その反面、防御面は極めて高くバリア等が無くても計算上、1発だがアルカンシェルの砲撃にも耐える事が出来る装甲を持っている
また、バリアフィールドは艦全体を覆う事ができ正に完璧とも言える防御を可能する
そしてBF（バリアフィールド）を展開した雷鳥の総防御力は全魔法世界屈指の防御力を誇る
適応性も大気圏内、潜水航行、宇宙空間だけでなく次元空間も航行可能だというハイスペックを誇っている上に速度も結構速い
エースの配慮で船員たちの為に、艦内設備も休憩室や遊具も有り他の戦艦に比べてかなり充実していている
格納庫は、車2台、小型艇1隻、ヘリ1機が搭載されている
その他には、ストレッチャーや点滴等の医療道具が大量に搭載されている
これは、万が一戦争などになればこの艦を野戦病院にする為に、エースの指示により搭載させているものである
因みに、この「雷鳥」だが実は本編にも存在している
その理由は、ビーナスが万が一エースが自分の元に戻って来た時の為にと秘密裏に造船させた、流石に艦内設備等エースの指示による

設備等は無いが同型艦である事には変わり無く現在、王国の秘密格納庫にて雷鳥は航行の時を今も待ち続けている

Another story of the kingdom 2nd.

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

ビーナス邸：???の部屋

ビーナスはある悩みを相談する為に???の部屋を訪ねていた
???はビーナスが訪ねて来た時、あからさまに嫌な顔をしつつも
部屋に招き入れた

ビーナス「・・エースが構ってくれない《そうですか》このままだったら孫の顔を見る前に死んじゃう《頑張って生きて下さい》義娘（リア）が冷たい・・」

ビーナスはSD化し指で机に○を描きながらいじける
そんなビーナスの様子に第2王妃、リリア・L・サディアは呆れながら対応する

リリア「それに・・大体、今あの人は、騎士の仕事とアクアとの世継ぎの事でかなり忙しい事ぐらいお義母様（かあ）だって分かるでしょう？」

ビーナス「分かんない～！《はぁ～・・》だって！最近会っても『・・どうも』位しか言ってくれないのよおおおおお～！うわああん！エースしゅうううう！」

ＳＤ化したビーナスは年甲斐もなく泣き叫ぶ
そんなビーナスにリリアは・・

リリア「今日の夜にでもあの人に頼んでみますから、泣かないで下さいよ・・」

ビーナス「・・・ほにゅと？《はい》なら泣き止む《早ぇ～な、オイ》ところで、今夜、エースと会うって事は・・やっぱり、リリアもエースとし、してるの？」

リリア「・・何を今さら・・妻なのだから当然してますよ。勿論、アクア程ではありませんが、私とてあの人の子は欲しいですから・・」
リリアの言葉にＳＤ化したまま真っ白に燃え尽きるビーナス
そんなビーナスを見ながらリリアは・・・

リリア「（あの人の子かぁ・・本当に楽しみね、ふふっ♪）」

リリアは、まだ見ぬエースとの子供を想い浮かべつつ時間を過ごしていく
＊＊

フィラメント城：戦艦ドッグ

リリアがエースとの子供を想い浮かべてる頃、雷鳥が任務を終えて

帰還して来た
そしてエース達が雷鳥から降りてくる

アクア「おっ、かえりぃ～！《うわっ》あ・な・た♪」

エース「たっ・・ただいま、アクア／／／／」

エースが雷鳥から降りて来たとほぼ同時に妻のアクアがエースに飛びついてきた
急に飛びついてきたアクアを抱きとめるエース

アクア「今日は、もう任務は無いの？《あぁ》ならデート行こうよ♪《ダメです》へ？」

アクアは抱き付いたままエースをデートに誘う
しかしアクアの誘いはジュピリアによって遮られた

ジュピリア「義姉さん、お兄たんは、今日”私に”付き合ってもらうので遠慮して下さい《・・や》だ、とは言わせませんよ？義姉さんは何時もお兄たんにべったりなんですから偶には、私達にもお兄たんを貸してくれないと困りますっ！」

エース「（貸すって・・俺は物なのか・・・？）」

そう言って、ジュピリアはエースからアクアを引き剥がす
引き剥がされたアクアは捨てられた子犬の様な瞳でエースを見る

アクア「エース・・・。《ごっ、ゴメンね》うぅぅぅ・・・。」

ジュピリア「さっ！行きますよ！お兄たん！」

ジュピリアに引き摺られる様にしてエースは消えて行った
そしてアクアが引き摺られた方を見ながら落ち込んでいると・・・

ルビア「・・アクア《ん？》話があるんだけど」

アクアにルビアが話しかけてきた
一方、ジュピリアに引き摺られるようにしてエースはある場所に連れて来られた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

王都リラ：食堂兼酒場クラテル

ジュピリアはエースをコニス達がよ・・頻繁に使う店に連れて来た
そこの看板娘がジュピリアに気付き話しかける

？？？「あら！ジュピちゃんに義兄さん、いらっしゃい♪」
ジュピリア「セリア義姉さん、ちょっと個室を貸してくれませんか？」

エースの事を義兄と呼びジュピリアに義姉と呼ばれるセリアという女性
実はセリアは、エースの弟であるヒドラの妻である

セリア「だったら店じゃ無く家のジュピちゃんが何時も寝てる部

屋使うと良いよ」

ジュピリア「ありがとう。ほら行くよ、お兄たん《イ、イエッサー・・》」

再びジュピリアに引き摺られるようにして連れて行かれるエース
2階にあるセリアの自宅に行く途中でジュピリアはセリアに・・・

セリア「頑張ってね♪《はい／／／》」

・・と小声でそう言われた。
****

セリアの自宅：ジュピリアの部屋

ジュピリアはセリア宅にある自室にエースを連れ込む
そしてエースを椅子に座らせる

エース「・・わざわざ2人っきりにならないと出来ない話を聞かせてもらおうか？」

エースは席に座ると同時にそう言った
ジュピリアは見抜かれてた事に一瞬悔しそうな顔をするが直ぐに顔を直して席に座り

ジュピリア「・・ちぇ・・はぁ～・・じゃあ、お兄たん単刀直入に言うね・・」

ジュピリアは一息ついて続きを話し始めた・・・・。

ジュピリア「お兄たん・・あの人＝カリムと別れて下さい」

ジュピリアはエースにカリムと別れる事を薦めてきた・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom. 2nd

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

ジュピリアはエースにカリムとの婚約の解消を求めて来た
エースはジュピリアの言った事がくだらないのか呆れ顔でジュピリアに対応する

エース「はぁ～・・。理由は？」

ジュピリア「勿論、彼女は信用出来ないからです！」

ジュピリアは「バンッ！」と机を叩いて大きな音を立てながらそう言う
しかしエースは全くそれに動じることなくジュピリアに言い返す

エース「信用するかしないかは、ジュピリアが決める事じゃあ無いだろう《ですがッ！》ですがも何も、大体ジュピリアはカリムとまともに話した事も無いだろうが、話した事も無いのによく”信用出来ない”なんて言えるよな《ッ！》」

ジュピリア「わッ私には分かるんですッ！お兄たんは優しいからあの女に誑かされて《そんな訳無いだろう・・・。》でっ、でも！」

エース「でも、何も無いだろうが・・じゃあ、ジュピリアが最初、俺に言ったカリムとの婚姻の解消だが・・勿論、結果は否だ《くッ！》俺は自分でカリムを妻にし一生、愛すると決めたんだ・・別れ

るなんて事はしない」

エースは真剣な顔でジュピリアを見据えながらそう言う
そんなエースにジュピリアは一瞬、顔を曇らせ悔し声を出す
そして顔を強張らせたままジュピリアは更にエースにある要求をする

ジュピリア「・・仕方ありません・・お兄たんが、そこまで言うのでしたらもう婚姻の解消は諦めます。しかし！彼女が第３王妃というのは納得出来ません！彼女の王妃番号の降格をして下さいッ！これは、私だけでは無くセレッソ姉さんやカメリア姉さんも同意見です。彼女が第３王妃なんて・・納得出来る訳がありません！！」

ジュピリアは必死でカリムの王妃番号の降格をエースに願い出る

……

何故、これほど必死に言うのかというとポイニクセルでは、この国で強いとされている初代～３代目皇帝の影響もあってか古来より１～３の数字等はこの国では、大きな影響を与えるものになっているそんな、影響を与える数３を、国外出身のカリムに与えるのは如何なものか。
実はカリム・・初めての国外出身の王妃なのだ
その為に、多くの人間がエースにカリムが第３王妃なる事に異議を唱えたのだ

……

エース「そうか、しかし俺は今の王妃番号の変更はしな《お兄たんッ！》・・何だ？」

しかしエースは、ジュピリアの意見を即座に斬り捨てようとする

言い終わる寸前でジュピリアはエースの言葉を怒声で遮りその上、怒声の勢いに任せエースの腕を掴み部屋に備わってるベッドにエースを押し倒して

ジュピリア「どうしてッ！・・こんなに言ってるのに・・どうして・・分かってくれないのぉ？《どうしてって・・》知ってるんでしょう？・・お兄たんに陰口を言う連中が居る事」

ジュピリアは今にも泣きそうな表情でエースに陰口を言う連中が居る事を告げる
エース自身もその事を知っているのか反論せずに黙っている
カリムを第3王妃にする際、妹達や親戚の出した意見の「彼女は第3王妃にするべきではない」と言う意見に対してエースは『下らない・・』のたった一言で済ませた。
その事が癪に障ったのか伝統を重んじる親戚はエースの陰口を言うようになり・・。
エースの暗殺までも図った事がある・・しかし、その暗殺を仕掛けた人物と指令を出した奴は既に捕まり処罰された
だが、未だにエースの陰口を言う人物が居なくなった訳ではない・・・。

ジュピリア「私は・・彼女の所為で・・お兄たんが悪く言われるのを黙って見過ごす事なんて出来ないよおぉッ！！《ジュピリア・・≫ねぇッ《おッおい！！／／／≫」

ジュピリアは今にも泣きそうな声で自分の上着を脱ぎ捨て上半身裸になり
エースに抱き付いて来た後・・・

ジュピリア「私ぃ・・今まで以上に・・がっ、がんばりゅからぁ・・いろんな、お世話もするからぁ！あのひとの番号を下げてよぉ・・！もうこれ以上・・お兄たんが、悪く言われるの黙って見てる何てぇ・・できないよぉ・・」

ジュピリアには自分の大好きなエースが悪く言われるのはどうしても耐える事の出来ない苦痛だった・・その為に、ジュピリアはカリムとの結婚に反対をした
ジュピリアは今まで隠していた理由を言うと泣きながら力無くエースの胸をノックをする様な感じで叩く・・そんなジュピリアをエースは黙って抱きしめると・・・

エース「・・俺の事は大丈夫だ《れもぅ・・》大体、人の噂なんてそう長くない」

そう言いながらエースはジュピリアの背中を撫でながら慰める
しかし・・ジュピリアは、一向に泣き止まない

エース「・・いい加減泣き止んで《やだぁ・・》そう言ってもこんな所、だれか《義兄さん、ジュピリアちゃん、今日の晩御飯・・あっ・・》あっ・・」

そこにナイスタイミングで義妹のセリアが扉を開ける
現在、ジュピリアは上半身裸でエースをベッドに押し倒してる状態・・。
そんな2人を見たセリアは一瞬硬直した後、黙って扉を閉め・・・

セリア「ごっ・・ごめんなさい、お邪魔だったわね・・そっその誰にも言わないからどうぞ続きを遠慮なくしてちょうだい・・そ、それじゃあ！／／／」

そう言ってセリアは走って去っていった
そしてそんな現場を見られたエースは・・・
エース「終わった・・《ねぇ、お兄たん》はい・・何でしょう？」
何時の間にか泣き止んだジュピリアは抱きしめられてる状態で・・
ジュピリア「・・今日、お兄たんの口から直接カリムさんを真剣に愛してる事が十分に分かったから・・私と1つ約束してくれたら・・私は、カリムさんを許してあげる《やっ・・約束？》うん約束・・《それは・・一体》責任・・取ってよね／／／」
エース「なっ！？アレは誤解だから！直ぐに言えば誤解は解け《なら・・事実に、すれば良いんだね？》ちょ・・まさか！！」
ジュピリア「愛してるよ・・お兄たん／／／」
エース「やっ、やめ・・・・・。」
その後エースとジュピリアは夜になっても部屋から出て来なかった
そして2人が家に帰った時は何時もとは遥かに遅い時間だった・・・
・・・・・。
＊＊
ビーナス邸：アクア＆エースの部屋

その後、屋敷に戻ったエースとジュピリア
帰って来たジュピリアの歩き方が、と・て・も変だったので問い詰めると・・

ジュピリア『もうすぐ、義姉さんでは無くアクアさんと呼ぶ日が来ますよ♪／／』

・・そう言われたので、早速、エースを3人で尋問（きょうもん）する事にした
因みに、エースは現在3人の妻達にバインドで腕を縛られて拘束されている

アクア「さ～て・・。あ・な・た♪ジュピリアの不自然な歩き方と・・何時もとは、随分遅いご帰宅についてゆっくりお話をして下さるかしら？」

そう言いながら軽く３０？はあるであろう戦斧を片手で持つエースの愛しの妻
何時もは天使の様に素敵な妻だが、現在は白銀の髪を持った夜叉である
そして手に持った戦斧を夫の眼前に突き付ける

エース「そっ・・それは・・」

エースは涙目の上に背中から大量に冷や汗を流す
その後、何とか話を延ばそうとするが・・

リリア「それはも何もありませんよ～？」

カリム「さっさと、言って下さい♪全然、怒ってませんから♪」

エース「そう言いながら、鉈を首筋に当てるのは止めていただけませんか？」

エースの首筋にはカリムが突き付けてる鉈が少し触たり血が流れる
そして無垢な笑顔・・殺気に溢れた素晴らしい笑顔で・・

カリム「そう言うのなら・・お・は・な・し♪聞かせて下さいな♪」

エース「実はですね・・御3方・・・・・・・・・・」

最早、エースに逃げ場は無く・・先程の事を大人しく自白する事にした
そして・・自白を始めて数分後・・・。

カリム「・・それで、あなたは迫る妹に抵抗もせずに、そのまま場の雰囲気に流されて関係をもってしまったのですか？」

エース「ふぁ、ふぁい・・ずみまぜん・・」

両頬に真っ赤な紅葉を描き色んな箇所に痣を作り泣きながら答えるエース
そんなエースにお構いも無しに質問を続ける妻達・・。

リリア「・・ジュピリアがカリムを許すと言ったのは事実で良いんですね？」

リリアは瞳の色を単色にし大鎌をエースの首後ろに当てると笑顔のまま問いただす

まるで死神に首を刎ねられる寸前の罪人の状態まま答えるエース

エース「ふぁい、間違ひありまふぇん」

アクア「まぁ、家族の中でも最大の反対者だったジュピリアが陥落したのならば・・後、反対してるルビアやセレッソとカメリアも崩しやすくなるでしょう・・でも!これは、立派な浮気行為ですよ?あ・な・た♪《ヒイッ!》何か申し開きはありますか?」

エース「あっ、ありまふぇん・・」

エースは妻達の素晴らしい笑顔に最早今日が命日と悟り始めた・・。
そんなエースに更なる妻の追撃が襲う

リリア「そうそう・・確か今日届いたあなた宛ての手紙に、2通ほど、次のお見合いの日時についてという文面が書いてありましたが・・どういう事ですか?これは」

エース「・・どっどういうことへひょうかね〜・・・。」

リリアはエースの両頬を片手で鷲掴みしエースを持ちあげる
それは、アクア並かもしくはそれ以上の凄まじい握力を発揮するリリア
リリアは笑顔なのだが、その笑顔の奥には確実に何か別のモノが存在している

カリム「それと・・はやてが私に次のあなたの休日の事を聞いてきたのですが・・・何故でしょう?《さっ、さあ?》不思議ですね〜♪」

素晴らしい笑顔のカリム・・。
しかし、確実に怒ってるのが分かる位の殺気が滲み出ており
正直、エースは”恐い”と思い自然と冷や汗が滝の様に滲み出る

エース「ほんとだね～・・・。アハハ・・《何故、笑ってるのですか?》すいません・・」

アクア「これらの件、ちゃんと説明して下さいね♪あ・な・た♪」

エース「アハハ・・おっ、お手柔らかに・・お願いします・・。」

こうしてエースと妻達の楽しい楽しい時間が過ぎて逝くのだった・・・・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom 2nd.

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

ビーナス邸：リリアの部屋

昨晩、3人の妻達によるありがた～いお話＋お戯れをされたエース
その後エースは程々のお戯れの後、リリアに部屋へ連行されもう1運動して就寝した

エース「・・痛くて余り寝れなかったな～・・《すぅ・・すぅ・・》当事者はよく寝てるがな・・」

エースの横に何も着てない状態で気持ち良さそうに寝るリリア
そんなリリアを起こさないようにそっと起きあがりベランダに出るエース

エース「・・はぁ、やっぱり受けなきゃ不味いよな・・母さんの立場上《何を受けるの？》何って、母さんの友達が薦めてくるお見合い・・・」

悩んでたのをうっかり聞かれて思わず答えてしまうエース
答えた後に、この部屋には2人しかいない事を思い出し振り返るエース

リリア「ふ～ん・・”エーちゃん”は昨日のお仕置きが効いて無い上に妻が寝てるの良い事に他の女の事を想うんだ～・・私への愛

はその程度なのかな～？」

エース「きっ、効いてますから！！それに考えてはいましたが想ってはいませんから！ハイッ！」

昨日の事を思い出しエースは瞬時に敬語で謝る
そんなエースにリリアは悪戯な笑みを浮かべエースの腕を取ると・・

リリア「じゃあ不安要素を取り除いてくれるよね♪《ま、まさか》朝の運動をしましょうかエーちゃん♪《ちょ！ちょっと～！！》うふふ♪／／」

エースはリリアに腕を掴まれベッドに連行された
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

カレア邸：ルビアの部屋

昼前頃、休暇のルビアはエースをデートに誘うか誘わないかで悩んでいた・・。
その様子をバッチリと母親に見られてるとも知らずに

ルビア「・・誘う、誘わない、誘う、《ちょっといい？》誘わない、誘う《い・い・か・し・ら？》うわぁ！？かっ母さん！脅かさないでよ！」

母親の声に驚きベッドから飛び降りようとして床にこけるルビア
そんな娘の様子に呆れつつも話を続けるルプス

ルプス「はぁ・・ルビアが珍しく、部屋で下着姿じゃなく服を着てると思えば、エース君とのデートの事で悩んでいたのね《わっ悪い！？／／／》別に～、それよりもそのデートに対してのアドバイス欲しくない？《は？》だから、アドバイスよ。ア・ド・バ・イ・ス！」

ルビア「何で、お母さんがアドバイスなんてくれるのよ。・・何か企んでるんじゃあないでしょうね？《心外ね～なら教えな～い♪あ！そうだ、》何よ・・」

ルビアが疑いの眼差しでそう言う
するとルプスは呆れた顔で言い始めた

ルプス「アンタもう１９でしょ？《う、うん》そろそろ孫の顔がみたいのよ《孫ぉ！？／／／》折角の彼氏候補が居るのに手を中々出さないし、勿論アンタが！《わ、私い！？／／／》いや、アンタ以外、居ないでしょう？《そ、そうだけど・・》」

ルプスはビシッ！とルビアを指さしながら言葉を続ける
そんなルプスの勢いにのまれたルビアは従順にしている

ルプス「なら、さっさと手を出してもらえるように、こんなとこで部屋の花びら千切ってないでデートに誘ってきなさい！！《うわっ！》」

そしてルプスはルビアの腕を掴むと引き摺っていく
その後、ルプスは引き摺ったルビアを外に出すと・・

ルプス「ヤッてくるまで帰ってくんじゃないわよ～！！」

・・そう言ってルビアを家から締め出した

ルビア「ちょっと～！！・・・しょうが無い・・あ、エース？私だけど・・」

ルビアは勇気を振り絞ってエースに連絡を取った・・・。

＊＊＊

王都リラ：食堂兼酒場クラテル

ルビアは何とかエースを邪魔者を付けずに連れ出す事に成功した
そして２人は、食事をする為にクラテルに足を運んだ

セリア「それじゃあ！ゆっくりしていってね義兄さん♪」

セリアが料理を机に置くと仕事に戻っていった
その後２人は、料理を食べ始めるが・・・

エース「・・昨日はご苦労さん」

ルビア「あ、アンタの為じゃあ無いわよ《ヘイヘイ、そうですか》・・・・／／／／」

エース「・・・・」

何故か会話が続かない・・。
その訳は、ルビアとエースは似たもの同士であり自分から進んで会話すると言うタイプではないからだ。それ故に会話も長く続かない・・。と言ってもルビアは実のところ進んで会話しないというよりも緊張や恥しさの方が断然多いのだが・・・・。
そして結局、これ以降昼食を食べ終わるっても2人は会話をする事がなかった

エース「・・出るか《そっそうね／／》」

2人は店を後にし取り敢えず、街中を歩き始めた。
＊＊

王都リラ：街中

相変わらず会話もせずに歩く2人
そんな2人の思考はと言うと・・・
ルビア「はぁ・・（キタキタキタキタキタ━━━！　今回で、約50回目のデート！！ダーリンの隣に居るだけでもう・・逝っちゃいそうッ！）」
エース「はぁ～（全く、これだけ無言だと、あの金髪女（フェイト）とお見合いしている時と差ほど変わんね～な・・）」
ルビア「どうしたの？（哀愁漂うダーリンも素敵♪）」

エース「別に・・《そう》・・（まぁ、返事がスムーズなのと緊張しないだけルビアの方がマシだな・・といっても今はお見合いじゃあ無いがな）」

エースとデート出来て内心、狂喜乱舞中のルビア
それに対しエースは余り楽しくなさそうな顔をしている

エース「・・取り敢えず、ゆっくりできる場所に行くか？《うん》よし、それじゃあ・・」

ルビア「（えっ！？これって・・まさか！夜のお誘い！？キャ━━！！どうしよう！？いっ、一応勝負下着付けてきたけど・・こんないきなり！つっ、付き合っても無いのに・・でも、ビーナスさんとスペードさんって出来ちゃった婚よね・・だったら私達も・・）／／／／」

・・とルビアは勝手に次の行動を決め付け期待に胸を膨らませる
そんなルビアに、エースは冷たい現実を突き付ける

エース「・・よし、龍桜園にしよう。あそこなら静かに出来るだろうし、なっ？ルビア」

ルビア「・・・そうね、そうよね《どうかしたか？》いえ・・べつに」

ルビアはこの時改めてエースがスペードの息子だとい事を実感した・・・・・・・・・・。

Another story of the kingdom 2nd.

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

龍桜園：園内

エースとルビアはの2人は庭園内にあるベンチで隣同士で座り寛いでいた
雰囲気的には問題は一切無いのだが・・会話という会話が一切無い

エース「・・（ルビアは棘の有る発言とかしなければ可愛いのにもったいないよな）」

ルビア「（ダーリンがチラチラ見てるぅ～！！キャ～！！）／／／／」

エースが思考しながらチラチラとルビアを数回見る
勿論ルビアはその視線に気付いており見られるたびに妄想に浸っている

エース「（・・気の所為か見る度に顔が赤くなっているような・・多分俺の気のせいだなルビアが俺に見られたからと言って顔を赤くする理由など無いだろうし）」

ルビア「（またダーリンが見てる・・あぁ…もう、し・あ・わ・せ♪）／／／／」

ルビアがエースの視線に幸せを感じてる頃、ビーナス邸では・・・・
。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ビーナス邸：アクア&エースの部屋

アクアはビーナスからある話を聞く為に部屋に招いていたのだが・・
・。
呼ばれてきたビーナスは・・・

ビーナス「ええええぇしゅううぅ・・・」

ＳＤ化していた

アクア「あの・・お義母さん、どうしたのですか？」

ビーナス「え〜しゅが、構ってくれないのぉ〜〜・・・。」

アクアがどうしたのか尋ねる
するとビーナスは、手足をバタつかせ年甲斐もなく半泣きでそう語る
そんなビーナスにアクアはスペードとデートする事を薦めてみた

アクア「それなら、お義父さんとデートでもなさったらいかかが
です？お2人供お若いんですしきっと、お義父さんも喜びますよ♪」

すると・・ビーナスは急に泣き止むとアクアに向い

ビーナス「あのバカより、エースの方が、１００倍・・１０００倍・・いや、比べられないほど良いに決まってるわ！・・うっ、うぅえ～しゅううぅぅ・・・」

アクア「（お義父さんの価値って一体・・・・。）」

アクアは真剣にそう思った
再びＳＤ化したビーナスはアクアに半泣き状態で・・

ビーナス「ねぇ、アクア《何です？お義母さん》え～しゅ、貸し《嫌です》うわぁぁ～ん」

アクア「あの、そろそろ真剣な話良いですか？」

アクアが真面目な顔でそう言うとビーナスは泣き止む
そして、何時もの凛々しい女王の顔になって・・

ビーナス「・・どうぞ」

アクア「お義母さん、私とエースの子供は出来ると思いますか？」

するとビーナスは苦渋の表情を浮かべながらこういった

ビーナス「・・ハッキリ言えば、アクアとエースが1年間、毎日頑張っても子供が出来る可能性は・・大体５％未満も無いわね・・片親の私でさえエースとセレッソの４年の開きがあり、あなたの母親のリウスは結局あなた以外出来なかったのが良い例でしょう・・」

ビーナスの言葉がアクアの胸に冷たく突き刺さり顔を曇らせる

そんなアクアにビーナスは更に言葉を続ける

ビーナス「・・アクアは諦めろって言っても無駄だろから言わないけど・・リリアやカリムにもう少し程チャンスを与えなさい《っ！》エースの子供が欲しいのはアクアだけじゃあ無いのよ？《はい・・》なら、いいわ・・じゃあ《え？》どうして、え～しゅが構ってくれない話のちゅづきなんだけど・・・」

再び、ビーナスはＳＤ化してアクアに愚痴を語り出したのだった・・・。

＊＊

龍桜園：園内

その一方で、龍桜園エースとルビアは園内を並んで歩いていた歩いてる途中でルビアはアル決意をしていたそれは・・

エース「・・花、綺麗だな」

ルビア「そっ、そうだね。ねぇアンタ《何だ？》わっ私と・・」

ルビアは勇気を振り絞り・・

ルビア「アタシと手を繋ぎなさいッ！／／／」

エース「はぁ？意味分からんぞ、お前《～っ！／／／》」

ルビア「（も～！アタシのバカバカバカ！何で命令してんのよ！？）」

・・と、言ってみた
そして言った後にルビアはその事を後悔し目に涙を溜める
ルビアの事情を知らないエースは・・・

エース「（なっ、何で泣いてんだ！？おっ、俺が悪いのか？・・どうしよう、取り敢えず繋げば良いのか・・？）えっと・・はいルビア《え？》手、繋ぎたいんだろ？／／」

ルビア「ダっ・・あっ、ありがとうエース／／／（ありがとう♪ダーリン／／／）」

ルビアはエースの手を握り幸せそうな笑顔を見せる
初めてルビアのそんな笑顔見たエースは素直に・・・・

エース「（き、綺麗だ・・）」

思わず見とれていた
そんなエースにルビアは恥しさを隠す様に・・

ルビア「いっ、何時までつっ立てんのよ！《わっ、悪い／／》ふんっ／／／／」

再び、歩き出した
そして、暫らく歩いていると突然ルビアがエースに質問する

ルビア「・・ねぇ《何だ？》まだ、王妃を増やすの？」

ルビアの真面目な顔にエースは一瞬困った顔をしたが意を決したのか返答をし始めた

エース「・・増やすの？じゃ無くて増えるの間違いだな《・・え？》・・昨日、ジュピリアに迫られてしまってな《まっ、まさか・・》受け入れてしまった《！！》だから責任を取る意味でも近々、ジュピリアを王妃に迎えようと思っている」

エースがジュピリアと関係をもったという事に動揺するルビア
動揺しながらもルビアはエースに他の妻達の答えを聞く

ルビア「でっ、でも、アクアやリリアが黙って無いでしょう」

エース「アクア達なら、俺をボコボコにした後で・・『無理矢理とはいえヤッてしまったのなら責任を取りなさい』って一応許してくれたみたいだ」

ルビア「ちっ！（ジュピリアに先を越された！まさか、ジュピリアが強引にするとはッ！セレッソ達ならあり得る話だけどね・・もう、こうなったら・・）」

アクア達が許したという事でルビアを動揺させ更に焦らせる
そして、自分がまだエースと関係を持ってない事に焦るルビアはある決意をする

ルビア「・・ちょっと来て《おっ、おい！》いいから来るの！！」

その決意を胸にルビアはエースの手を引っ張りながらある場所に移

動する
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

龍桜園：ルビアの秘密部屋

ルビアはエースを園内に作った自身の秘密部屋に連れてきた
部屋に入ったエースは部屋の中を見ると机や椅子、そしてベッド等もある
ルビアは扉に鍵を掛けると部屋のベッドにエースを押し倒す

エース「～っ！なっ、何だよ、一体《あ、アンタ／／》あん？」
ルビア「わ、私をお襲いなさいッ！／／／／《襲われてるのはどう見ても俺なんですが？》ッ／／／」
自分が押し倒してる事をエースに突っ込まれるルビア
その後ルビアは顔を真っ赤にした後に体勢を変え自分が下になる
ルビア「こっ、これで！襲えるわね！さっ、さぁ！おおお襲いなさいッ！／／／／／／」
ルビアがエースに自分を襲うように言う
そんなルビアにエースは真面目な顔で・・・
エース「何で、襲わないといけないんだ？《え？》だから、何で俺がルビアを襲わないといけないんだ？《そっ、それは／／》それは？」

痛いところだが、当たり前の質問をエースにされルビアの声が吃る
その後ルビアは顔面を真っ赤にしながら考え始める・・

ルビア「（なっ、何て言おう!?てっきり襲ってくれると思って
それは考えて無かった!どうしよう、言う?言わない?いや、言う
べきなんだろうけど・・・面と向かってダーリンに告白なんて・・
恥しいよぉ～／／／／）《おい》はひっ《どうした?》べっ、別に
！《そうか、なら答えてくれよ》うぅ～・・／／／」

エースへの告白をどうするか悩むルビア
出来るものなら今直ぐしたいのだが、恥しさ等がルビア邪魔をし告
白をためらわす
そんな中ルビアは妙案を思い付く・・それは・・・

ルビア「（そっ、そうだ!好きと分からせる行動をすればいいんだ!!・・でも、どんな行動が良いのかな・・やっぱりアレかな?でも・・）《まだか?》（えぇ～いッ!）んっ／／／／」

ルビアはエースに急かされて考えが纏まらないままエースを抱きよせてキスをした
そして暫らくの間のキスの後、２人は口を放すとエースがルビアにこう言ってきた・・・

エース「ルビアが何を言いたいのかは今ので分かったが、俺は、ちゃんとルビアの口から言葉で伝えて欲しい・・」

エースはルビアの目をじっと見ながらそう伝える
それに観念したのかルビアは・・

ルビア「わわ私は、エースが大好きでちゅ、愛ちてます私をあなたの物にして下さいお願いしましゅ！／／／／（告白で噛んじゃったあああ！いやああ～！）」

エース「愛ちてくれてるのなら《っ／／／》俺を受け入れて入れるかな？」

ルビア「・・イジワル・・《どうも、んっ／／》んんっ！／／／」

その後、2人は求め合い夜遅くまで小屋から出て来なかった
そしてエースは帰る時にルビアにある事を告げてきた・・・

ルビア「・・は？もう1回言ってくれない？」

エース「だから、俺は元々5人程、王妃を決めていて第4王妃にはルビアを予定していたんだよ。告白しようと思ってたから《聞いて無いわよ！？》うん、さっき言ったもん」

ルビアがエースに詳しく聞くと、結婚後ビーナスに妻は5人位居無ければ色々と示し等がつかないと言われエースは王国でリリア、ルビアを選び、ミッドではカリムを選んだ後にはやてという女性を選んでいた第3王妃カリムの結婚の際、色々なゴタゴタがありそれを鎮める為にルビアを王妃候補する事を先延ばしにしていたのだ・・・つまり

ルビア「じゃあ、何？私って呆っておいても王妃になれてたの？《まぁ、ジュピリアの件で番号は下がるけどな》・・の！バカあぁぁ！《何だ！？》煩い！バカバカ！／／／／／」

ルビアはエースをバカと罵りながら連続で叩く
しかしそう言うルビアの顔は眩しすぎる程の笑顔だった
＊＊

ビーナス邸：アクア&エースの部屋

帰ったら3人の妻達が素晴らしい笑顔で出迎え
直ぐにエースを問い詰め、そして・・・・

アクア「・・・またですか？ア・ナ・タ♪」

カリム「どうなるかは・・」

リリア「ご存知ですよね～♪」

エース「・・・はい、分かっております」

この日、再びビーナス邸に悲鳴が上がった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

龍桜園

王族専用の庭園みたいな場所

元々は過去の皇帝が趣味で作らせた植物園
王国になった際それを改造して龍桜園を造った
王族専用の場所なので市民が入る事は出来ない上、ドーム型の膜が上に張ってあり
外部からの視認妨害がされている為園内は市民は見る事さえ出来ない
広さが結構あるが基本的に庭園なので遊具などは一切ない
出入口は1つしか無く、警備兵が常に在住している
元の植物園の名残があり、隠し小屋や人に見つからない場所等が多々存在する
因みに、市民等が入る場合は王族の許可腕章が要る、それがあれば入る事が出来る

ルビアの秘密部屋も隠し小屋を改造したもの
エースにも秘密部屋があるらしい

Another story of the kingdom 2nd.

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

ビーナス邸：カリムの部屋

お仕置きを受けた後、エースはカリムに捕まり一晩中相手をさせられた
その後、疲れたエースは疲れ果ててカリムと供に眠りに就いた・・・。

カリム「でへへ・・すぅ・・すぅ・・」

エース「うぅ～・・ごめんなさい・・もぅ・・しません」

幸せそうな寝顔のカリムとは対照的にエースは、苦渋の表情をしながら寝言で誰かに謝っているそんな中、寝ているエースに忍び寄る複数の影

???「さぁ♪エースを確保よ♪《はい、》久々にエースと一緒の行動ねッ♪」

???「確保しました《すぅ・・すぅ・・》」

???「じゃあ、しゅッぱ～つ！」

複数の影は寝てるエースを捕獲すると何処かに去っていった

＊＊

？？？

エース「・・・何処だ此処《起きた？》また、あなたですか・・母さん」

ビーナス「だって～寝てるエース可愛いんだも～ん♪／／」

そう言いながら身体をくねらせ身悶えるビーナス
母親の情けない姿を見ながらエースは呆れ顔で質問を始めた

エース「・・移動してるって事は此処はGアスカロンですか？」

ビーナス「そうよ♪《何で、そんなに嬉しそうなんですか？》だってエースと久しぶりに一緒に行動出来るんですもの嬉しいに決まってるでしょう♪／／」

よほど嬉しいのかビーナスはエースの後ろから抱き付いて頬を擦り合わせる
エースは慣れているのかビーナスが頬を擦り合わせても表情を変えない

エース「・・何の用事ですか？《リンディ先輩が、エースに用事があるんですって～♪》おいおい・・それってまさか《ねぇ～、エース何か欲しいデザートとかある？》ありません・・それよりも、ちゃんとアクア達に了承を取って来たんですか？」

ビーナス「大丈夫よ♪ちゃんと置手紙残してきたから♪それより、はい♪あ〜ん」

エース「はぁ〜・・あむ《美味しい？》うん・・《そう♪》（本当に大丈夫なのだろうか・・）」

満面の笑みでエースにケーキを食べさせるビーナス

そんなビーナスとは対照的にエースは置手紙の内容が気になっていた・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ビーナス邸：カリムの部屋

――――――なっ！何ですってえええ！！――――――

ビーナスの置手紙を見たカリムが部屋で絶叫する

置手紙に書かれていた内容は・・・

第3王妃、カリム・L・サディアへ

貴女が寝てる間にエースは貰っていくわね〜♪

ついでに、王妃が増えても恨まないでね

愛しの

義母、ビーナス・L・サディアより

　PS．孫を早く見せて頂戴
　それから、たまにはエースを私に貸して頂戴♪

・・・という様な内容だった
この手紙を見た後、カリムは・・・

カリム「びっ、ビーナスにエースを寝盗られた！！」

かなり危ない発言をするカリム
確かに、エースを寝てる間に盗られたので間違ってはいない
しかし・・・今の発言だけだと・・・

使用人「・・聞いた？」

メイド「うん、今のビーナス様だとありえない話じゃあ無いわよね・・・」

・・・噂の火元になるのは明白だ
現に、こうして噂が出来上がっている
この後、邸内は危ない噂で充満するのだった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

フロンティアホテル：スイートルーム

エースはビーナスにある人物とお見合いをさせられる為にフロンティアホテルに連れて来らされていた。そのある人物とは・・・

エース「・・何か喋れよ、”ハラオウン”さん」

フェイト「うっ、うん・・。（まだ、名前で呼んでくれないんだね・・）」

まるで戦闘中の様に険悪な雰囲気の中、進む2人のお見合い
フェイトは名前で呼んでもらえない事に苦渋の表情を浮かべる
何故なら婚約者のはやてはともかく、フェイトよりも後にエースとお見合いをしたなのはでさえ名前で呼ばれているからだ。

フェイト「・・さ、最近の調子はどう?《普通》そっか・・」

エース「・・そっちは?《普通・・かな》あっそ」

会話・・というよりも言葉が続かない2人
仕方ないといえば仕方ないのだが、流石に息が詰まる

フェイト「えっと、質問いいかな?エー《あん?》ご、ごめんなさい・・」

フェイトがエースの名前を口にしようとした瞬間・・エースはフェイトを睨みつける
エースの形相にフェイトは名前の途中で呼ぶのを止め謝った後、落ち込む
そんな、フェイトを見かねたエースは・・・

エース「・・何が聞きたいんだ?《え?》だから、何が聞きたい

んだよ」

・・渋々といった感じでフェイトに質問をさせるエース
エースに質問を許されたフェイトは嬉しいのかエースとは対照的に笑顔になる

フェイト「えっとね・・う～んと《忘れたのか？》あはは・・・」

エース「全く、忘れんなよな《あっ、そうだ》あん？」

エースが質問内容を忘れたフェイトに呆れているとフェイトは何かを思い付き
両手を合わせ何かを決意し・・うんうん・・と頷き

フェイト「質問じゃ無くて、お願いでもいいかな？《は？》ダメ？」

エース「・・図々しい奴め《うっ・・》・・今、出来るものか？《うっ、うん》言ってみろ」

エースがお願いの内容をフェイトに言う様に言う
するとフェイトは2，3回、深呼吸をした後エースにこう言った・・・

フェイト「名前で呼んでもいいかな？それと、私の名前で呼んで欲しいな」

エース「・・名前を呼んでもいいかだと？《うん・・》どうして？」

フェイト「仲良くなりたいから・・じゃあダメかな？」

フェイトにそう言われるとエースは黙って考え始める

その後、静かに口を開き・・

エース「・・呼びたきゃ勝手に呼べ・・ただし俺はお前が信用に足る人物と判断出来るまではお前の名前は呼ばない」

フェイト「うん！今は、それでいいよ。”エース”」

この日、２人の仲は、ちょっぴりとだが前進したのだった

その後お見合いを終えたエース達は、ビーナスは久々にリンディと話したいと言うので

ビーナスはリンディの自宅に泊まりに行った。そいてエースは・・・・

＊＊

ミッドチルダ南部：八神家

翌日にビーナスとGアスカロンで落ち合う約束をしエースは、婚約者の１人であるはやての自宅を訪ねたしかし八神家にはシャマル１人だけしか居なかった・・

シャマル「粗茶ですが、どうぞ」

エース「気を使わなくてもいいのに《そうはいきませんよ》全く・・」

エースはお茶を飲みながらシャマルにはやて達の事を聞くと仕事で帰りが少し遅れるらしく・・次にシャマルはお茶受けのお菓子を持って来てエースはそれを口にし・・・

エース「それは？《おまんじゅうですよ♪どうぞ！》ふ～ん・・あむ・・・・・・・フッ・・」

シャマル「キャ～～！エースさあああん！！」

・・・意識を失った。

エースが意識を失った直ぐ後にシグナム達が帰宅してきた

シグナム「っ！遅かったか！」

ヴィータ「遂に・・殺りやがった・・・」

リィン「お兄さん！死んじゃあダメですぅ～！！」

アギト「おい！エースの兄貴！」

はやて「あ～ぁ・・取り敢えず私は、私の部屋にエース君を寝かせてくるからシャマルへのお説教頼むでシグナム《分かりました》ザフィーラ手つどうてくれるか？」

ザフィーラ「・・心得ました」

エースは意識を失ったままはやての部屋に運ばれた

・・・ザフィーラ（人間形態）にお姫様だっこされて・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

八神家：はやての部屋

エースが意識を失って数時間後・・

エース「うっ・・う〜ん・・ここ《ここは、私の部屋やで》はやて？」

エースが目を覚ますとベッドに寝かされていた
そして横を見るとはやてが制服の上着を脱ぎYシャツのボタンを3個ほど開けて非常に色っぽい恰好で隣で寝ていた

はやて「そうやで♪愛しのマイハニーやで？ダーリン♪」

はやては小悪魔的な笑みを浮かべながらそう答える
そんな、はやての言葉を黙って聞いてたエースは・・・

エース「・・・僕を《ボクぅ！？》看病しててくれたなんて嬉しいよ。愛しのマイハニー」

死んだ魚の目をしながら棒読みで言い返した
はやてはエースの言葉に背筋が凍り・・

はやて「ごめんなさい、ごめんなさい・・言いませんからお願いですから許して下さい《なら、変な事を言うな》けど、私のダーリンなのはホントやろ？」

エース「なら、マイハニーって呼んでやろうか？《似合わへんで？》・・確かに」

そう言った後、笑い合うはやてとエース
そして笑い終わるとはやては静かにエースに抱き付く

はやて「久しぶりや・・この感じ《どんな感じだよ》内緒や♪今日は勿論、泊まっていくんやろ《まぁな》なら、一晩中イチャイチャできるな♪／／／／」

エース「何だ？誘ってんのか？《ダメ？／／／》・・いいや、光栄だよ・・・」

この後、エースははやてと何度もお互いを求めあった
そして何度目かの行為の後、はやてがエースに質問する

はやて「なぁ、エース君《何だ？》私は何時頃、エース君の奥さんになれるん？」

エース「正確な事は言えないが5，6カ月中には・・でもいいのか？《何がや？》折角、苦労して取った資格だろう？今なら、婚約のか《それ以上言うたら怒るで？》しかし・・」

はやて「私はエース君の事が好きで愛しとるから一緒になるんや・・その為に捜査官を辞めろ言われたら私は喜んで管理局を辞めたる《はやて・・》捜査官も大事やけど・・それ以上にエース君の方が私には大事や・・／／／／」

エース「ありがとう、はやて・・んっ《んっ／／》／／」

その後エースはやてにキスを再びお互いを求め合うのだった
そして何度か行為をし終わった後、２人は疲れ果て抱きしめ合いながら眠るのだった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ビーナス邸：アクア＆エースの部屋

エースが八神家に泊まってる頃アクアの部屋に珍客が来訪していたその人物とは・・・

？？？「義姉上！ジュピリアが第４王妃になるというのは本当ですか！？」

アクア「本当よ。セレッソちゃん第４王妃はジュピリアになるの《何故です！？》それはジュピリアちゃんがエースに迫って、それをエースが受け入れたからよ」

セレッソ「ちっ！ジュピリアがまさか仕掛けてくるなんてッ！どうする？カメリア」

カメリア「そんなの・・私達もお兄ちゃんに迫って関係を結べばいいだけよ！！」

カメリアが力強くそう言うとセレッソはそれに頷き部屋を出ていった
２人を止めようとしたアクアだったが２人のあまりの剣幕に言うのを忘れてしまった

Another story of the kingdom 2nd.

Another story of the kingdom 2nd. 始まります・・・。

ビーナス邸：廊下

エースとビーナスはミッドでの用事を済ませて自宅に帰って来たしかし、使用人達がエース達を見ながらコソコソと何かを話しそれをみたエースは・・・

エース「・・おかしい《何が？》何がってミラさん＝メイドの俺と母さんを見る目が・・」

ビーナス「カップルにでも見えるのかしらね～♪」

あながち間違いじゃない発言をするビーナス
その証拠にメイド達は、ビーナスがエースと腕を仲良さそうに組みながら歩く姿を見て小言で・・『やっぱりあの仲の良さは・・』とか『もし、ビーナス様と坊ちゃんが結婚したらスペード様は・・・お可哀そうに・・』等、色々言っている

エース「それは無いだろう《あっ》あれ？バカ親父」

ビーナス「あら、まるでダメな夫。略して、マダオどうしたの？マダオ」

エースの時とは天と地ほどの開きがあるかの様にスペードに毒を吐

くビーナス
そのビーナスの一言一言に打ちのめされながらも何とか耐えるスペード
スペードは持ち堪えた後、エースからビーナスを引き離すと同時に奪い・・

スペード「い、幾らエースでもあげないんだからなぁ！」

年甲斐もなく涙目でそう言うスペード
そんなスペードに対し、ビーナスは・・・

ビーナス「・・離れろ《うっ！》ぶっ飛ばすわよ？」

スペード「殴った後に言わないで下さい・・」

・・・何の躊躇も無く容赦ない鉄拳制裁を喰らわせスペードを壁にめり込ませる
その後、ビーナスはエースに駆け寄って行き

ビーナス「大丈夫!?マダオの所為で怪我とかしてない？《いや、全然大丈夫だからそれよりも・・バカ親父の方に行きなよ》あんなマダオの心配までするなんて、優しい子あんなマダオとは出来が違うわ～♪」

そう言いながら、ビーナスはエースの頭を撫でる

スペード「解せぬ・・・《だ、大丈夫か?》あぁ、何とかな・・息子よ」

スペードは力を振り絞り何とか壁から抜け出す

その直後、ドドドドという地鳴りの様な音が聞こえ・・・

？？？「お兄ちゃん！《カメリア！？それにセレッソも》デートに！」

セレッソ「行きますよ！《ちょ！？》問答無用！《えええええ！？》いざ！」

2人の妹はビーナスからエースを光の速さで奪い去るとそのまま消え去った。

その後残された、ビーナスは・・・

ビーナス「ど、ドロボー！！・・・・・まぁ、偶にはいっか、それよりも《ひっ！》メイド達が何を噂してたのかマダオ何か、知ってるわよね？《そ、それは》答えなさい・・・今すぐ！《はい！じ、実は・・・》」

鬼神の様な表情のビーナスに迫られあっさりと自白するスペード＝マダオ

そしてビーナスはこの後、笑撃の事実を知る事になる

＊＊

王都リラ：食堂兼酒場クラテル

2人の妹にほぼ拉致と同じ様な感じで連れ出されたエース

その後、2人は食堂兼酒場クラテルにエースを引き摺りながらやって来た

セレッソ「ど、どうぞ。兄上／／／」

カメリア「あ～んだよ。お兄ちゃん♪」

エース「・・・あむ・・」

セレッソ「どっ、どうですか？／／」

カメリア「おいしい？お兄ちゃん《あぁ》そう♪よかった」

エース「…け…か《ん？何？》いい訳あるかあああ！！何で！？俺、鎖で椅子に縛り付けれてんだよ！？《それは♪》それは！？」

カメリア「逃がさないためだよ♪えへ♪」

無邪気な笑顔でエースを鎖で縛り付けた理由を言うカメリア
その後、再びエースに食事を与えようとする。だが・・・

ヒドラ「・・何やってんですか？兄さん」

カメリア&セレッソ「…チッ！」

・・・エース達の机に料理を持って来たウェイター姿のヒドラに邪魔される
その後、ヒドラはエース達の机の上に料理を置くと鎖を外しエースを解放する

ヒドラ「全く、２人供、はしゃぐのは勝手だがセリアの店に迷惑を掛けるなよ」

カメリア&セレッソ「…は〜い、ふふっ（我、此処ニ作戦成功セリ）」

ヒドラはセレッソ達を注意し終わると店の方に戻って行った
その後、セレッソ達は普通に食事をし始めた
そしてエースもセレッソ達に続き食事をする・・次に起きる衝撃も知らずに・・・。
＊＊

ビーナス邸：大広間

スペードから笑撃の事実を知ったビーナスは大広間に全ての人間を集めた
そして、ビーナスは・・・

ビーナス「はぁ〜・・・全く、あなた達は揃いも揃って・・・情けない」

一同『申し訳ありません・・』

笑撃の事実への説明&説教をしていた。
そして、ビーナスは次に、カリムを名指しして説明をする

ビーナス「それとカリム《はい！》いい？確かに私は、エースの事があそこで石抱きをしているマダオよりも遥か・・比べるまでも無く大好きで愛してるけど・・」

スペード「くっ、比べるまでも無いんだ…《当然よ》…解せぬ…」

ビーナス「・・大好きで愛してるのはあくまで親子としてのものであって、エースもそれくらい分かってるわ。それに私が一応、女として好きなのはそこの情けないマダオよ」

スペード「いっ、一応なんだ…《当然よ、捨てられないようにね♪》…ど、努力します」

ビーナス「ともかく、これに懲りて、これ以降はこんな下らない噂をするのは厳禁よ！いいわね？『は、はい！』なら、解散。」

ビーナスは皆が散らばる様を見ながらため息をするのだった・・・・・。

＊＊＊

？？？

何故かエースは見慣れぬ部屋で目を覚ます

そして右横を見ると・・・

セレッソ「すぅ・・すぅ・・・」

エース「…何故、裸なんだ？」

・・・セレッソが裸で横に寝ていた。

これは何かの間違えと思って反対側の左横を向く・・すると・・・

カメリア「ふぅ・・ふぅ・・」

・・・今度はカメリアがセレッソと同じく裸で寝ていた
その後、エースは無言で首を回して正面を向き・・・

エース「（何故だあああああああ!?）」

何故こんな状況かというと、昼間クラテルで食事をした時にエースがヒドラに鎖を外してもらってる隙に、カメリアが媚薬、セレッソが睡眠薬を料理に混入した
そしてエースが薬で眠った後に2人はクラテルからこの場所にエースを運び・・・。

エース「（おおお思い出しなさい俺!またアクアに・・いいや、まだそう考えるのは早いかも!?だ、だって今までにもセレッソ達がベッドの中に潜り込んだ事なんて・・・）」

エースは今まで2人がベッドの中に潜り込んだ事を思い出す
確かに、セレッソ達は今まで何度もエースの寝てる隙に勝手にベッドの中に潜り込んで来た事はあった。しかし最低限下着は着ていたのだが…今は、着ていない
そしてエースが1人で慌てていると・・・

カメリア「ふぇ・・お兄ちゃん?おはよう・・」

セレッソ「ん～・・。・・おはようございます。兄上／／」

・・・2人が起きてしまった

起きたセレッソ達にエースは恐る恐る真相を聞いてみる事にした・・
・
エース「あ、あの～《何？お兄ちゃん？》私の知らぬ間にセレッソさん達と私は此処で何かなさったのであ、ありますか？」

・・・そしたら2人は頬染め上げていく
それと同時に、エースの絶望感が増していく
そして遂に、2人が同時に頷き・・・

セレッソ&カメリア『責任取ってくれるよね（下さいね）お兄ちゃん（兄上）／／／』

エース「あは・・あはははは・・・・。はい」

エースは2人の発言に”遂にやってしまった”と思いつつ目を閉じる
すると浮かび上がって来たのは・・・阿修羅の如き顔をする我が妻達
そして・・エースは怯えながらも2人と一緒に家に逝(かえ)るのだった
＊＊

ビーナス邸：玄関

エースが帰宅し自宅のドアを開けると、そこには・・・・

ルビア「お帰りなさい♪」

カリム「よく逃げずに召(かえ)ってきましたね♪えらいえらい♪」

ジュピリア「さぁ♪逝きましょうね♪」

・・・素敵な笑顔で死刑判決を言い渡す我が妻達が待っていてくれた！

その後、エースは激しい妻達のお遊びに意識を失った。

……

ビーナス邸：エース&アクアの部屋

エースはお遊びの後、ボロ雑巾の様になり意識を失ったまま部屋に運ばれた

そんなボロ雑巾の様なエースをアクアは黙ってベッドに寝かせた

エース「うっ・・う～ん《起きた？エー君》あ、アクア？」

アクア「うん、そうだよ」

しかし、寝かせた直後にエースは目覚める

そしてアクアの顔を見て彼女かどうか確認を取り本人と分かると・・・

エース「すっ《す？》すいませんでしたあああああああああああ！！」

アクア「え！？なっ、何？エー君！？」

高速で起きあがると土下座で床に頭を擦りつけながら謝罪した

突然の出来事にアクアがとまどってると

エース「この愚か者の私は、またも《妹に手を出したんでしょ？》は？」

アクア「はぁ～・・。もぅ、びっくりしたよいきなり土下座するんだもの《で、でも俺は・・》セレッソちゃん達に手を出した事なら怒ってないから大丈夫だよ」

エース「な、何で怒ってないの？」

そう言うアクアにエースは冷や汗を垂らしながら理由を聞いてみるするとアクアは・・・

アクア「ジュピリアちゃんがエー君に手を出してセレッソちゃんやカメリアちゃん達が黙って指を銜えてるなんて出来る訳無いでしょ？だから、ジュピリアちゃんがエー君に手を出した時点で確実にセレッソちゃん達が動くって分かってたから全然怒ってないよ《そっ、そうなの？》うん♪分かったらこっちに来て、エー君」

アクアにそう言われてエースは再びベッドの上がりアクアの隣に座るエースが隣に座ると、アクアは黙って抱き付き・・・

アクア「・・2人でこうするの随分と久しぶりな気がするよ」

エース「・・そうか？《うん》今日、一緒に寝るか？（頑張らないとな・・・）」

アクア「勿論♪私はエー君の妻だもの♪」

アクアとエースは抱きしめ合いながらベッドに潜る
その後、2人はお互いの愛を確かめ合う様に激しくベッドを軋ませながら愛し合った

これはもう1つの物語

――――Another story of the kingdom 2nd.――――

金の閃光のもう一人の義兄、Another外伝：Avenger story.（予告）

8年前のあの日、僕の故郷の街はある強盗団に焼かれ破壊（こわ）された
そして僕以外を残して父さんや母さんやみんな死んじゃった

「父さん・・母さん・・お姉ちゃん・・」

お姉ちゃん、僕決めたよ。

必ずあの強盗団供を１つ残らず斬り捨てるから

「待っててね・・父さん・・母さん・・お姉ちゃん、僕頑張るからね・・だから」

見守っててね・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

航空武装隊：第１０３９部隊

「おい＊＊＊」

爆乳女が座って休憩をしてる僕に話しかけてくる
それに、僕は軽いジョークを言いながら対応する

「何だい？爆乳女《へ、へんな呼び方をするな！／／／》」

僕のジョークに爆乳女は顔を真っ赤にしながら怒鳴る
相変わらず反応が面白い奴だ

「ゴホン！それで＊＊＊ちょっといいか？《模擬戦か？なら》違う《？》ちょっといいか？」

「いいよ《なら、行こう》はい、はいっと・・」

この爆乳女は言いたい事は何処でも言うのに僕を呼びだす？
何か、面白い事でもしてくれるのかなと思いながら僕は席を立つ
そして僕は、爆乳女の後に追いて行く

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１０３９部隊：シグナムの部屋

僕はシグナム部屋に招かれる
そして僕はシグナムが座る前に勝手に空てる席に座る

「相変わらず。お前は・・まぁいい。＊＊＊、単刀直入に言う今度新しく設立される部隊に＊＊＊お前をスカウトしたい」

「僕は高いよ？《分かってる》」

シグナムが真剣な目をしながら僕を見る
コイツがこんな目をするって事は八神はやて絡みか・・・八神陸佐は、確か特別捜査官だったな…あの強盗団（クズ）供の情報を少しは持ってるかな？
まぁ、良い持って無ければ探せばいいさ、その為に、まずは・・・

「…条件付きならいいよ《何だ？》まず１つ目は、僕に１人部屋を与える事。２つ目は戦闘、仕事以外では僕を自由に行動させる事、これが条件」

「…部屋の方は任せろ、もう１つの方は私の一存では何とも言えない、時間をくれ」

「いいよ、でも早めにね《分かった》じゃあ、取り敢えず。よろしく」

「あぁ、こちらこそ」

僕とシグナムは握手をする
握手をしながら僕は…出した条件よりも八神陸佐の持ってる情報の中にあの盗団（クズ）供の情報が有る事を僅かながら期待するのだった……。

ティアナのエース宅訪問

機動六課：部隊長室

ティアナは、ある日はやてに呼び出されて部隊長室に来ていた・・・。

ティアナ「休暇・・ですか？」

はやて「うん　本当はもっと前やったんやけど私の手違いでな遅れて今日になってしもうたんよ《はぁ・・》それで、お詫びと言ったらなんやけど今日と明日の2日程休みにしといたから、好きなところに遊びに行っておいで・・・」

＊＊

機動六課：廊下

ティアナ「（そうは言っても・・何処に行こうかしら）」

ティアナが悩みながら廊下を歩いているとローゼと遭遇する

そしてティアナはローゼに悩みを言うと・・・

ローゼ「そんなに暇ならエースさんの家にでも遊びに行ってきたら？」

ティアナ「エースさんの家にですか？」

ローゼ「えぇ・・貴女は、エースさんの家に行った事無いでしょう？《はい》それに、今どの位ライバルが居るかを知っておくのも良いんじゃないかしら？」

ティアナ「・・・私にそんな事を教えるなんてどういうつもりですか？ローゼ姉さん」

ティアナがローゼにそう尋ねるするとローゼは勝ち誇った笑みを浮かべながらこう言った・・・。

ローゼ「私の欲しい物の1つが手に入って余裕が出来たから可愛い妹分に、少し協力してあげようと思ってね♪《そうですか》うん」

ティアナ「（微塵も思ってないくせに・・）では、早速行ってみます」

ティアナは作り笑顔でローゼに対応した

ローゼ「行ってらっしゃ～い♪」

ティアナが去って行く・・・。
そして残されたローゼは・・・。

ローゼ「ふふっ・・・（おバカさん♪もうエースさんは”私達”の物なのよ。後は外堀を埋めるだけ・・精々良い夢を見ると良いわ妹分（いもうと）よ）」

ティアナはヴァイスに話(おどし)をしてバイクを借りエースの自宅え向かった・・・・。
＊＊

エースの自宅：客間

ティアナ「玄関を潜る前から思ってたけど・・大きいわね《待たせたな》エースさん」

エース「今日は、何か用事なのか？」

ティアナ「いえ、突然休暇が出来たのでエースさんの家に行こうかなと思いまして」

エース「家に？《はい》面白い事なんて無いぞ？」

ティアナ「良いですよ（目的は別ですから）」

エース「まぁ、別に良いが・・じゃあゆっくりしていけ」

エースが客間を後にしようとする際にティアナに理由を聞かれるとエースが振り向き

エース「俺は、Ｓｔ．ヒルデ魔法学院、中等科の試験問題を作らないといけないから」

そう言い残して客間を出ていった・・・。
残されたティアナは、仕方ないので1人でエースの自宅を探索し始めた・・・。

＊＊＊

エースの自宅：廊下

ティアナ「ふぅ・・（まぁ、本来の目的はライバルの確認だし”今は”いっか・・）」

ティアナが思考しながら廊下を歩いていると前から2人の女性が来たアリサとすずかだ2人もティアナに気付き近づいて来る

アリサ「アンタは確か・・前、海鳴になのはと一緒に来ていた」

ティアナ「ティアナ・ランスターです。それでは《待ちなさい！》何でしょうか？」

ティアナはその場を後にしようとするが・・・。
アリサがそれを止めてティアナに質問する・・・。

アリサ「何で、アンタが此処に居るのよ？」

ティアナ「私は、エースさんの弟子ですよ？師匠の家に居ても不思議じゃ無いでしょう
《もう1つは、私達を調べにかな？》さぁ？どうでしょう？」

すずか「ふ～ん・・・まぁ、色々と頑張ってね♪」

すずかはそう言い終えるとティアナの横を通り過ぎていく
それに続いてバツの悪そうな顔をしながらアリサも横を通り過ぎていった・・・。
ティアナは、２人が視界から居なくなるまで目で追っていた

ティアナ「（金髪の人はともかく・・あの隣に居た人は要注意ね）」

ティアナはそう思いながら次の場所に向かった・・・。
＊＊

エースの自宅：廊下２

ティアナと別れたアリサとすずかの２人は・・・

アリサ「ねぇ、いいの？《何が？アリサちゃん》さっきの娘よ、放っておいていいの？」

すずか「別に、好きにさせたらいいよ《どうしてよ？》だって、私があんな娘に負ける訳無いもの・・それに《それに？》・・（私が、気になってるのはエース君の初恋の女性だしその人に、何としても彼の事を諦めてもらわないと・・そう何としても・・）」

アリサ「どうしたの？すずか《ううん何でもないよ》そう」

すずか「（エース君の初恋の女性さえ何とかすれば・・後は、どうとでもなる訳だし・・アリサちゃん達には悪いけどね♪）」

アリサはこの時すずかがこんな事を考えてるとは微塵も思っていなかった

その頃、ティアナは廊下でまた別の人物と出会う・・それは・・・・。

****
****
****

エースの自宅：廊下

ティアナは廊下を歩いていると銀色の髪をした女性と遭遇した

勿論、リィンフォースだ

ティアナ「（また違う女性（ひと）が現れた！）」

ティアナが目つきを鋭くしてリィンフォースを見る

その視線に気付いたリィンフォースがティアナに近づいて来る

リィンフォース「私に、何か用か？」

リィンフォースがティアナに、そう問いかけた・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ティアナのエース宅訪問2

エースの自宅・廊下

リィンフォースがティアナに、そう問いかける

リィンフォース「私に、何か用か？」

ティアナ「いえ、特にｈ《嘘は、止めろ》どうしてそう思うのですか？」

ティアナの問いにリィンフォースは
目を鋭くして睨み付けるようにティアナを見ながら答える

リィンフォース「気付いていないのなら教えてやる・・お前の目はローゼの悪だくみを考えてる時の目と同じ目をしている」

それを聞くとティアナは肩を竦めた後、ため息をし

ティアナ「姉さんと同じ目か・・それは気付かなかったな～・・まっ、いっかエースさんにバレた訳じゃないし・・それで？私に聞きたい事って？」

ティアナの変貌に内心は驚いてるリィンフォース
しかしそれを顔には出さずにティアナに対応する

リィンフォース「先に、私を見て来たのはお前だろうが・・・」

ティアナ「そうだっけ？・・・ふ～ん、じゃあ言うわね貴女エースさんの何？」

ティアナの鋭い目がリィンフォースを睨みつける
リィンフォースは、それに臆する事なくティアナに言い返す

リィンフォース「まだ、友人ってところだ《まだ・・ねぇ・・》そうだ」

ティアナ「じゃあさ、エースさんに抱かれた事は？」

リィンフォースはティアナの質問に一瞬だけ笑う
そして、勝ち誇ったような顔で質問に答える

リィンフォース「あぁ、あるぞ・・お前は無いのか？」

ティアナ「想像にお任せするわ（コイツ・・予想以上の曲者ね）それじゃあ」

ティアナはそう言い残してリィンフォースの横を通り過ぎる
その後ティアナは、急ぐように次の場所に行った・・。
残された、リィンフォースは

リィンフォース「（アイツもライバルか・・だが、エースは譲らんぞ・・）」

そう思いながら静かにティアナの後ろ姿を見ていた・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

エースの自宅・道場

次にティアナは道場に来た。
此処では、ギンガとアインハルトがいた・・現在は休憩中らしくアインハルトが大の字で
倒れて休んでいた

ギンガ「どうしたの？ティアナ」

ティアナ「急な休暇で暇になったのでエースさんの家に遊びに来たんです」

ティアナがそう言うとギンガは笑顔でこう言った・・・

ギンガ「そうなんだ、私は敵情視察かと思ったわ♪」

ティアナ「そんな訳無いですよ（お見通しって訳ね）」

ティアナは笑顔で言い返す・・・
そして、大の字で倒れて休んでいるアインハルトを見て

ティアナ「キツイんですか？彼女の修行」

ギンガ「どうかしら？キツイかキツク無いかはあの子の気の持ちようでしょ？」

ギンガは少し冷やかな目でアインハルトを見ながら答える
ティアナはギンガにある事を聞く

ティアナ「やけに冷たいですね・・ギンガ姉さんは彼女の事が嫌いなんですか？」

ギンガ「さて、どうかしら《あのぉ・・・》どうしたの？アインハルト」

ギンガの視線は相変わらずだ・・。
そんな時、突如アインハルトが声をかけて来た・・。

アインハルト「ギンガさんこちらの方わ？」

ギンガ「あぁ・・貴女の姉弟子のティアナよ」

ギンガがアインハルトにティアナを紹介する
すると、アインハルトはティアナの方を向いて挨拶をする

アインハルト「どうも、初めましてアインハルト・ストラトスです」

ティアナ「ティアナ・ランスターよ（この子”今は”まだ心配いらないわね）」

ギンガ「もう、休憩はいい？《はい》なら始めるわよ」

ティアナ「それじゃあ、私は行きますね」

アインハルトの修行が再開されるのでティアナは道場を後にした
その後・・ティアナは、セシィの部屋にも行ったが・・。
彼女は、Ｐ〇Ｐを掴んだまま熟睡していた
その為にティアナは話す事が出来なかった・・そして時間が経って
夜になった・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

エースの自宅：エースの自宅

エースは問題を作り終え部屋でくつろいでいた・・・・。
丁度、その時・・ティアナが部屋を訪ねて来た・・エースは彼女を
自室に招き入れた

エース「どうした？ティアナ」

ティアナ「いえ・・特には、それよりも用事は良いんですか？」

エース「もう、終わったよ・・それでもう疲れたから寝ようかと
思ってたとこ」

エースがそう言い終えるとティアナは恥しそうに・・・

ティアナ「だっ・・だったら！一緒に寝ませんか？／／／／」

エース「何故？《いいじゃないですか、久しぶりなんだし／／／
》俺の意思は？」

ティアナ「排水溝に捨てて下さい♪」

ティアナは笑顔でそう答えた
この時、エースはティアナとローゼの顔がだぶってそしてこう思った

エース「（こいつ・・ローゼに似てきたな・・・未来（さき）が思いやられる・・）」

ティアナ「それじゃあ・・一緒に寝ましょう♪／／／／」

ティアナはそう言ってエースのベットに寝転ぶ
その後に、エースがティアナの隣に寝転びティアナに忠告をする

エース「襲うなよ？」

ティアナ「〝今は〟まだ襲いませんから安心して下さい♪」

エース「今はって！？何！？」

ティアナ「言葉通りの意味です・・んっ《ん！？》おやすみなさい・・エースさん／／／」

ティアナはエースにキスをして眠りについた・・・。
そして残されたエースは・・・

エース「ったく・・マセガキが、何時の間にか綺麗になりやがって／／／」

エースはこの時から・・ティアナをカリム達と同等に思い始めてた・・・・・。
翌日、エースはティアナと一緒に寝てるとこをリィンフォースに見つかって・・・・。
その後ティアナは、六課に戻り彼女の目的は、一応達成されたのか・・・・・・・・・・・・？

チャイルド?エース!?

ハプニング【ｈａｐｐｅｎｉｎｇ】・・それは、思いがけない出来事・・・

ビーナス邸：エースの自室

ある日、ジュピリアは何時ものようにエースを起こしに部屋にやって来た・・・

ジュピリア「おはよう・・お兄た《すぅ、すぅ》!?!?」

???「お姉ちゃんだぁれ?」

ジュピリア「君、もしかして・・・・・」

そしてジュピリアは???と遭遇してしまった

＊＊

ビーナス邸：廊下

セレッソとカメリアが朝食を取る為に食堂へ向かい廊下を歩いてるすると正面から”白銀の髪”をした小さい子を連れたジュピリアが来た

セレッソ「あら、ジュピリアおはよう《おはよう。お姉ちゃん》」

カメリア「あのさぁ《何？》この子・・誰？」

子供「ジュピリアお姉ちゃん。この人達だぁれ？」

子供がジュピリアの服の裾を引っ張りながら聞いてきた
ジュピリアは子供にセレッソ達の事を紹介する

ジュピリア「うんとねぇ、私の2人のお姉ちゃんでセレッソとカメリアって言うんだよ・・・」

――――――エースくん――――――

ジュピリアが子供の名前を言った瞬間。
セレッソとカメリアの趣向は一瞬停止した
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ビーナス邸：食堂

ジュピリア「はい、エースくん。あ～ん《あ～んっ♪》美味しぃ？」

エース「うん♪美味しぃよぉ！」

カメリア「じゃあ。次はこれね、はい。あ～ん《あ～んっ♪》ど

う？」

エース「これも、美味しいよぉ♪」

食堂ではジュピリアがSエース（ショタ）に朝食を食べさせている
その様子を面白く無い表情（かお）で見つめるセレッソ

セレッソ「（どうして、ジュピリアとカメリアには、懐いて私には懐かないのよッ！？）」

ジュピリアとカメリアにべったりのSエース
セレッソに懐かない理由は、Sエースは本能的にセレッソが危険と判断した為。
その一方で、カメリアとジュピリアにはベッたり懐いている

ビーナス「みんな、おはよっ！？」

そんな時ビーナスが食堂に来てSエースが目に入り直ぐに近寄りSエースを抱き上げて

ビーナス「（・・何で、こんなに可愛っ・・小さくなったの？エース／／／）」

流石は実母といったところかビーナスは一瞬でエースの幼児化した事に気付く
抱き上げられたSエースは無垢な笑顔でビーナスにこう話掛けた・・

・

――――――お姉さん、だぁれ？リンディおか～さんのお友達？

エースの質問にセレッソ達は俯いたり悲痛な表情を浮かべる
そんな中ビーナスも一瞬、悲痛な表情をするが直ぐに笑顔でこう答えた

ビーナス「そうよ♪私はビーナスって言うのよ君のお名前教えてくれるかしら？」

Sエース「うん、いいよぉ。僕、エース・〝ハラオウン〟《ッ・・》っていうんだよぉ」

ビーナス「そう、よく言えたわね。偉い、偉い♪」

この時、Sエースの頭を撫でながらビーナスはSエースがもしかしたら〝サディア〟と名乗る事に僅かな期待を寄せていた、だがSエースは、エースの幼児化した姿
その為、赤ん坊の頃2か月しか一緒に居なかったビーナスの事は覚えてはいなかった

Sエース「ねぇ、ビーナスお姉さん。リンディおか～さんは？」

Sエースが少し不安げな顔でビーナスにそう尋ねて来た
椅子に座ったビーナスはSエースを自分の膝の上に乗せて話し出す

ビーナス「リンディさんは、どうしても外せない用事があってね。エースくんを私に預けたの。だから、リンディさんがエースくんを迎えに来るまでお姉さんと一緒に、いい子で待ってる事が出来るかな？」

Sエース「出来るぅ！《そう、いい子ね。エースくん》えへへ～

／／」

Sエースは、元気よくビーナスに返事をする
それをビーナスが褒めてSエースの頭を撫でる
撫でられてる途中でSエースが不意にこんな事を言ってきた

――――――お姉さん、リンディおか～さんみたい！――――――

ビーナス「・・そう、ありがとうエースくん」

頭を撫でられ目を閉じながら気持ち良さそうな表情をするSエース
それにビーナスが悲痛な表情を浮かべながら答えた。

Sエース「すぅ、すぅ・・・・」

少し疲れたのかSエースはビーナスに抱かれたまま眠っている
Sエースを抱くビーナスの姿は、母子(おやこ)そのものだ
そんな中ビーナスがセレッソに質問を投げかける

ビーナス「・・ねぇ、セレッソ《はい、何でしょう》エースがこうなった理由知ってる？」

セレッソ「えっと・・それは、ですね・・・・・・・・・・・・」

セレッソはビーナスにエースが幼児化した理由を説明し始めた
そして、セレッソから理由を聞いたビーナスは唖然とするのだった・

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
  -

チャイルド？エース！？

ビーナス邸：中庭

現在、中庭ではある人物へのお仕置きが実行中だ。
その人物はエースの幼児化の原因を作った人物

？？？「ねぇ…シグナム。そろそろ、許してくれないかしら…？」

シグナム「そう言われても、私は見張りを頼まれただけだしな。
それに、頼まれたとはいえ、あんな薬を作ったお前も悪い訳だし、
ここは大人しく我慢してるんだなシャマル」

シャマル「ちょっと、酷くない！？《全く》」

シグナム「それと、少し静かにしろ。”リオン”と”リアン”が
起きてしまうだろう」

シャマル「・・・酷い」

シャマルはお仕置きの石抱きをしながら嘆く
そんなシャマルに対しシグナムはエースとの間に出来た双子の子供、
リオンとリアンが
起きないかと心配するのだった・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ビーナス邸：ビーナスの自室

ビーナスはセレッソ達に頼みエースの世話を１人でする事にした
そして食堂から自室に戻ったビーナスはエースをベッドに寝かせた
後・・先程、セレッソから言われたエースの幼児化の理由を思い出
していた

ビーナス「全く、しっかりしてると思えば、随分と間抜けな所も
あるのね・・一体、誰に似たんだか」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

セレッソ「えっと・・それは、ですね。シャマルさんが作った。
試験薬の所為らしいです」

ビーナス「試験薬って、どんな？」

セレッソ「シャマルさんによると、兄上に潜入任務の時、魔力を
使わずに自身の姿を一定期間の間幼児化させる薬が欲しいと言われ
て開発をした薬の試験薬らしいです。しかし、現段階では不可能な
為に制作を断念したそうですが・・・・・」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋

Sエース「すぅ、すぅ」

ビーナス「・・間抜けな所は父親ねきっと、いや。もしかしたら私かしら」

フェイト「失礼します。ビーナスさ・・・ん!?」

そんな事を思っているとビーナスの部屋にフェイトとチンクが訪ねて来た
フェイトはベッドで寝てる子供を見て驚くがチンクは

チンク「・・・どうして、エースは身体が縮んでいるんだ?」

一目でエースが幼児化した事に気付く

フェイト「えっ?」

ビーナス「どうして、分かったの?」

この時ビーナスは驚いた家族であるフェイトでさえ分からなかったそれなのに、チンクは一目でエースが幼児化した事に気付いたのだから
ビーナスは何故分かったのかをチンクに聞いてみた・・するとチンクは・・・。

チンク「・・・好きな人の変化ぐらい。普通、分かるだろ／／」

少し照れながらチンクがそう言う
その隣では、フェイトが膝をつきながら

フェイト「・・・私、家族なのに、分からなかった・・」

チンク「それは、お前がエースに対する愛が低いのだろう？《はうっ！》ふん」

チンクはフェイトに鋭いツッコミを入れる
ツッコミを入れられたフェイトは真っ白になりながら床にへたり込んだ
それから、暫らくの間フェイトは、燃え尽きたまんま動けなかった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ビーナス邸：廊下

フェイト達が部屋を出て行って少し後にSエースは起きた
そしてビーナスは用事の為に、城に行くというのでSエースは一緒に行動していた

ティアナ「あっ、ビーナスさん」

スバル「こんにち・・・」

Sエース「こんにちはぁ！」

Sエースはスバル達に元気よく挨拶をする
スバル達はSエースを見てふと何かを思い出す
そしてそれを思い出した2人は・・・

スバル「ねっ、ねぇ。テイア」

ティアナ「アンタの言いたい事は分かる」

スバルとティアナはSエースを見て目を丸くする
何故なら、目の前に居る子供は、以前リンディに見せてもらった小さい頃のエースの姿と瓜二つの姿をしているからだ。
そんな2人の姿を見たビーナスは何かを思いつき子供に何かを耳元で指示する
そして、子供はスバル達に近づいてきて

Sエース「ぼく、エース・ハラオウンです！よろしくねお姉ちゃん達♪」

ティアナ「あっ・・はい、よろしく」

スバル「こっ・・こちらこそ、よろしくお願いします」

Sエース「お姉さん、言えたよぉ！《偉いわね、エースくん》えへへ／／」

Sエースはスバル達に挨拶した後、再びビーナスの元に戻って行く
ビーナスは挨拶が出来た事を褒めてSエースの頭を撫でる

Sエース「お姉さん、抱っこしてぇ～」

Sエースは撫でられた後、ビーナスに抱っこを求める
それにビーナスはやれやれといった表情でSエースを抱き上げる

ビーナス「エースくんは、甘えん坊さんね」

Sエース「えへへ～／／」

Sエースは嬉しそうに表情をしながらビーナスにしがみつく
ビーナスはSエースを抱っこしたまま、スバル達の方を向いて

ビーナス「スバルちゃん、ティアナちゃん。私は城に用事がある
から失礼するわね」

Sエース「またね！お姉ちゃん達！」

ティアナ「あっ・・はい」

スバル「また・・後ほど・・」

ビーナスは目を点にしてるスバル達を残して城に向かって行った
因みに、この少し後ビーナス邸にスバル達の大声が響き渡った・・・
・・・・・。

チャイルド？エース！？

フィラメント城：城内（廊下）

ビーナスはSエースを抱っこしながら城内へ入城した
此処ではSエースの髪色は、とても目立つのでビーナスは、変身魔法の応用を使ってSエースの髪色を変更させている
そして髪色は、シグナムの要望（きょうぼう）により彼女と同じ色にしてある
ビーナスは暫らく廊下を歩いているとカレア親子と出会った

ルプス「あら、ビーナス何か用事？」

ビーナス「えぇ、ちょっと確認したい事があってね」

ビーナスと話をしているルプスをSエースは、じ～っと興味津々に見つめる
すると、Sエースの視線に気付いたルビアがビーナスにSエースの事を聞いてきた

ルビア「ビーナス女王、この子供は？」

ビーナス「あぁ、この子はねぇ・・エースくん挨拶わ？」

ビーナスに言われてSエースは自己紹介を始める

Sエース「僕、エース・ハラオウン！こんにちは！」

ルプス＆ルビア「「・・え？」」

Sエースの自己紹介の後にカレア親子は目を点にして固まる
カレア親子が固まった後、Sエースはビーナスにこんな質問をする

Sエース「ねぇねぇ、ビーナスお姉さん《なぁに？》どうして、この”おばあちゃん達”はお顔にしわが無いのぉ？」

ルプス&ルビア「「おっ！おばあちゃん・・・って・・・」」

Sエースの質問にビーナスは、笑いを堪えながら答える

ビーナス「えっ、えっとね。ぷぷっ・・・あの人達は元々、白い髪の毛なのよっ・・・ぷぷっ」

Sエース「ふ～ん・・・そっか～」

ビーナス「そっ・・・それじゃあね・・・ぷぷっ・・・」

ビーナスは、髪の毛だけで無く身体も真っ白になってしまったカレア親子を廊下に残して目的地に笑いを堪えながら向かって行った・・・・。

＊＊＊

フィラメント城：ビーナスの執務室

ビーナスはと用事のある資料を取りに自分の執務室に来ていた
その資料を纏めていると・・・

リウス「やっほ～♪ビーナスっ？」

アクア「失礼します・・・え？」

クアラ親子はビーナスの膝の上に座る子供に注目する
そして、リウスはその子供の顔をじっと見た後、急に納得し子供にこう話しかけた

リウス「こんにちは、エース・ハラオウンくん♪」

アクア「えっ？」

Sエース「こんにちわぁ！お姉さん！」

何とリウスは髪色が変わってるSエースの正体に気付いたのだ
再びビーナスは驚きリウスに分かった理由を聞いてみた

ビーナス「どうして、分かったの？」

リウス「幼馴染を嘗めない事ね♪《で、理由は？》つれないわね～♪」

Sエース「ね～♪」

リウスがSエースと一緒に悪ふざけをしているとビーナスは、デバイスに手を掛けようとする

リウス「じょ・・冗談よ・・。《早く言いなさい》はぁ・・、理由はビーナスの子供の頃と顔がそっくりだったからよ。これでいい

？」

リウスは冷や汗を拭きとるとビーナスに理由を答えた
ビーナスは、リウスの言った答えに少し照れながら聞き返した

ビーナス「そっ、そんなに、似てるかしら？／／／」

リウス「ビーナスの子供のころを知ってる人間から言わせてもらったら正に”瓜二つ”という感じよ・・。本当に、似すぎよあなた達。」

Sエース「えへへ～♪／／／」

リウスはどこか懐かしむようにSエースの頭を撫でた
因みに、リウスの娘のアクアは・・・

アクア「（かっ・・可愛い・・持って帰りたい・・／／／）」

……

ビーナスの執務室：室内

リブイラ「（ほら、私の目に狂いは無いでしょ？）」

リリア「（偶々、なんじゃ無いの？）」

リブイラ「（それにしても・・・）」

リブイラ&リリア「（可愛いわね／／）」

ヒシンス親子は幻術で姿を消しながらこの様子をちゃっかり覗いて
いた

………………………………………………………………
…………………

そして用事の終わったビーナスは、自宅に帰って来た
その途中で、ビーナスは真っ白になっていたカレア親子を再び笑い
そうになっていた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊

ビーナス邸：エースの部屋

夕食を済ませてビーナスは、エースの部屋にてSエースとの時間を
楽しんでいた
因みに、Sエースは疲れたのか既に眠っている

　Sエース「すぅ、すぅ・・・」

ビーナス「ふふっ・・・、リウスに言われた事、嬉しかったな♪／
／」

ビーナスは、そう言いながらSエースの頭を撫でる
すると、Sエースは嬉しそうな表情を浮かべながら無意識にビーナ
スの手を掴む

ビーナス「あら、あら・・・／／」

手を掴まれたビーナスは喜びに満ちた表情を浮かべる
そんな時、エースの身体が一瞬、光りそれが終わると身体が元の大きさに戻っていた
それは、この時間の終わりを告げる事だった・・・・。

ビーナス「・・楽しい時間をありがと、エース」

ビーナスは静かにエースの手を離して自分の部屋に戻って行った・・・・・・・・。

チャイルド？エース！？・・・終わり

SPデート

翠屋：店内

数年前のある日、エースは休暇で地球の自宅に帰ってきた
しかし、どうやらリンディ達は留守の様でエースは翠屋に足を運んだ

桃子「と言う訳で！私とデートしない？」

エース「嫌です」

いきなりエースをデートに誘う桃子
だが、エースにキッパリと断りの即答され反論する桃子

桃子「え～！どうして？」

エース「・・・何が悲しくて妹の友達の母親とデートしなければいけないんですか」

桃子「別に良いじゃん。それに、士朗さんが町内のおじさん連中と旅行に行ってて暇なのよ」

エース「・・・単に暇なだけなんですね《さぁ！行くわよ！》ちょ！ちょっと～！！」

エースは腕を掴まれ無理矢・・・桃子のリードによってデートに連れ出された

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

翠屋：店内

なのは「あれ？お母さん居ないのかな？」

なのはが学校から戻って来て桃子が居ない事に気付く
そして机の上に・・・・

エース君とミッドチルダに遊びにいってきま～す！

桃子

なのは「えええええええ！？」

なのはの絶叫が店内に響き渡った頃、桃子達は・・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ショッピングモール：服屋

桃子の提案でミッドの街を見て回る事になった
そしてひとまずエースはショッピングモールに行った

桃子「これはどう？エース君♪」

エース「良いんじゃないでしょうか？」

エースに服を見てもらう桃子
それを反応が薄く答えるエース

桃子「じゃあ・・次はこれ！」

エース「何ですか？ソレ《ネグリジェよ♪》士朗さんに見せなさい」

桃子「あら冷たいわね～じゃあ、これとこれ」

桃子はエースの元に数着の選んだ服を持って来る
そして、エースに選んだ服を渡す

エース「・・・これは？《お・ね・が・い♪》行ってきます。」

桃子「ありがとう♪」

エースは桃子の持って来た服を渋々買いに向かった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

ミッドチルダ：転送ポッド

エースと桃子がデートの真っ最中・・。

なのは「・・行くよ。フェイトちゃん」

フェイト「うん！ＢＤエースの位置を割り出して」

ＢＤ「・・・Ｙｅｓ，　ｓｉｒ．」

約2名の悪魔達がミッドチルダに到着していた

その頃、桃子とエースは・・・

＊＊

ショッピングモール内：映画館

エースと桃子は次に映画館へ足を運んだ
そこで、エース達は何を見ようかと悩んでいると・・・

？？？「何にしようか？」

女「ヴェロッサさんの趣味に任せます♪」

見た事ある顔が居た

その見た事ある顔にエースが行くと桃子が遅れて付いてくる

エース「・・・何をしてる？ロッサ」

ロッサ「え？あっ・・エース」

ロッサはエースに声を掛けられて苦笑いしていた
だが、遅れてエースの元にきた桃子を見ると・・
と言う事で・・」

ロッサ「いや～君も隅に置けないね～今日会った事はお互い秘密

エース「何を言ってるのか分からないのだが？」

ロッサは、エースに近づき肩を組んで・・・

ロッサ「またまた～。君も彼女とデート中なんだろ？」

・・と桃子を見ながらそう言う
それに対しエースはヤレヤレと言った顔で答え始める

エース「ロッサ・・高町なのはを知ってるか？」

ロッサ「あの、戦技教導官の《あぁ》一応は、知ってるけど・・
それが？」

エース「この人は、高町なのはの実母つまり正真正銘の母親だ。」

エースの言葉にロッサは目を点にして固まる
その後、再び動き始めたロッサはエースの胸倉を掴み

ロッサ「いいいいっ幾らなんでも母親は無いでしょう!?これは、どう見たって!年齢が合わないぞ!?《あらあら～♪／／》」

エース「年齢は、確か3〇歳だから合ってるぞ?」

エースの言葉に再びロッサが目を点にして固まる
そんなロッサに桃子が近づいてきて・・・

桃子「初めまして、高町桃子です♪」

ロッサ「ははっあははは・・・」

ロッサが苦笑いしてる中、エースは何処かに連絡をしていた・・。

エース「あっ、シャッハか?ロッサ奴がまた女ひっかけて遊んでるぞ?場所?えっと、＊＊＊映画館だ、あぁじゃあな」

エースが連絡を終わると桃子が見たい映画決まった様で声を掛けて来た
そしてエースがチケットを買いに行く際、苦笑いしてるロッサにシャッハの伝言を伝える

エース「・・ロッサ《何だい?》シャッハが、今から此処に来るそうだ《はぁ!?》因みに逃げたら殺す!・・だそうだ。じゃあな」

ロッサ「へ?.えええええええええ!?」

ロッサの悲鳴を後にエースは映画チケットを買う為に再び歩き出した・・・・・・・・・。

SPデート

ショッピングモール内：映画館

エースと桃子が映画を観終わって劇場から出てくる
因みに、恋愛映画だったらしいエースは映画を観ずに席に座って寝てた為内容を一切知らないしかし、桃子は満足しており、エースは内心ホッとした

桃子「次、何処行こうか？《さぁ？》も～！ちゃんとエスコートしないと駄目じゃない」

エース「スイマセン・・（何故、俺は謝ってるのだろう？）」

桃子「しょうが無いわね・・あ！そうだわ♪」

エース「（なっ、何を思い付いたんだろう・・・ロクな事じゃ無いのは確かだが・・）」

桃子はエースの腕を掴むと恋人の様に腕を組み映画館を後にした

＊＊

時空管理局：本局

エースは桃子にある物を交換条件に管理局の案内をお願いされそれを引き受けた
ある物とは・・翠屋製、苺大福1ヶ月分。

桃子「へぇ～こんな風になってんのね～」

エース「・・じゃあ、次に《あら、エースじゃない♪》ふぇ？」

後ろからエースの良く知った人物が声を掛けて来た。
エースの母親、リンディ・ハラオウンその人だ

リンディ「今日は、仕事は無い筈よ《どうも～♪》あら？桃子さん。どうして局に？」

桃子「エース君とデートのついでに、なのはの仕事場を見ておこうと思いまして」

リンディは桃子の「エースとのデート」という発言に目を点にしたその後、エースに詰め寄って来るとエースの腕を掴み少し離れた場所で問い詰める

リンディ「どどどどういう事ッ！？まッまさか！？不《んな訳あるか！》でも、桃子さんエースとデートだって！言ってたじゃない！！」

エース「士朗さんが偶々、留守で暇だからって連れ出されたんだよ」

リンディ「ほっ本当でしょうね！？流石に、桃子さんを娘と言うのはちょっと・・」

エース「安心して下さい、それと家の鍵を下さい」

エースがリンディに海鳴の自宅の鍵を要求する
リンディは自宅の鍵を渡す際に・・

リンディ「本当に！その・・ふっ、不《違います》そう・・じゃあ、私は行くからね」

エースと桃子の仲を最後まで疑うリンディだった・・。
その後、エースが暫らく案内していると・・・桃子はある異変に気付く

桃子「（ちょっと前から視線を感じるのよね～・・・）」

そう思いながらふと、頭上にあったモニターを見る
すると、そこに薄っすらと・・なのはとフェイトの特徴的な髪が少しだけ映っていた

桃子「（あらあら♪やっぱり気になって来たのね～2人供。まぁ、来るように、仕向けたのは、私だけどね～♪うふふ～ちょっとからかおうかしら）ねぇ、エース君《何ですか？》えいっ！《ほへ？》それじゃあ、続きの案内よろしくね♪《はっ、はい／／》うふふ～♪」

桃子は、なのは達を確認すると自身の悪戯心に火が付いてしまいなのは達をからかう為に、エースの腕に自分の胸をわざと押し当てながら密着する
桃子の悪戯を一部始終見ていた、なのはとフェイトは・・・

……

…………

なのは達が見ている中、桃子がエースの腕に自分の胸を押し当てながら密着する

なのは「・・・”婚約者”の私以外の女性・・しかも！私のお母さんに顔を赤くするなんて絶対に許さないッ！！」

フェイト「なのは、私は婚約者なんて認めていないよ？でも、確かに”私以外”の女性に顔を赤くするなんて・・帰ったらお仕置きだね、エース・・」

そう言いながら再びなのは達はエースと桃子の監視を続けた

……………………………………………………

…………

そして暫らくの間、桃子と一緒に局内を回ったエース

少し休憩する為に、食堂へ足を運んだ。

桃子「へぇ～此処の珈琲も中々美味しいのね～」

エース「士朗さんの方が１００倍美味しいですよ」

カリム「（次来た時、じっくりとお話を聞きますよ？エース）」

エースがそう言いながら珈琲を飲んでいる

その様子をなのは達以外で見つめてる人物がいた

偶々用事で局にカリムはそう思いながら聖王教会に帰っていった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、地球に戻ると良い時間なので２人は地球に戻り翠屋に桃子を送る

桃子「今日は、ありがとう♪とても楽しかったわ。またデートしましょうね♪」

エース「余りしたくありません」

エースの即答に苦笑いを浮かべる桃子。

その後、桃子はエースに近づきそして・・・

チュッ・・・

エース「！！？／／／／／」

エースの頬に軽くキスをする

その瞬間、エースは一気に頬を真っ赤に染める

桃子「これは、今日のお礼よ♪／／」

エース「あうっ、あうっ《それじゃあね♪》はっはい！」

桃子はエースに背を向け自宅に戻っていった・・・。

その後、エースの肩を・・『ポンッ』と何者かが手を乗せエースは、油の切れた機械の様に『ギギギ』と音を立て後ろを振り返るとそこには・・・

フェイト「・・エース今の桃子さんの行動について・・」

なのは「ゆっくりと、お・は・な・し♪する必要があるんだけど、いいかな?いいよね?」

背後には、魔王と金色夜叉の2名が殺気全開で立っていた

エースは咄嗟に逃げようとするが・・無駄だった・・・。

エース「・・きょ、拒否権は?《無いよ♪》ハハッ・・・。」

エースはこの後フェイトの家でじっくりとＯＨＡＮＡＳＨＩされた。

その上、後日カリムにもＯＨＡＮＡＳＨＩ＋ありがたい教育的指導を受けさせられた・・・。

IF. story・・・Pink Aria Space（前書き）

夜凪　彪さんのリクエストでアリアのデート編です

注意：エースとアリアは既に付き合っています

注意：間違いなくエースとアリアです本物です

IF. story・・・Pink Aria Space

地球、英国：グレアム邸

彼（エース）からアリアにメールが来た・・・。
明日、ちゃんと会えるようだ・・。
今から胸が躍るアリア・・・。

ロッテ「その顔は、エー助からのメールだねアリア♪」

ロッテがアリアの表情を読み取り誰からのメール当てる・・・。

アリア「もう！からかわないでよ！ロッテ！／／／」

ロッテ「あははっ！それで、何時生まれるんだい？《えっ！？／／／》」

グレアム「ふむ・・男ならカッコよく女の子なら可愛い名を与えないとな！」

アリア「とっ！父様！？《で、どうなんだ？》しっ！知りません！／／／／」

何時の間にか現れたグレアムもロッテと一緒になってアリアをからかう・・。
その後、アリアは逃げるようにしてその場を立ち去った・・・。
＊＊

グレアム邸：アリアの自室

アリア「はぁ・・子供かぁ～・・」

アリアは自室に入るなり先程ロッテ達に言われた事を考え始める・・・。

アリア「それは欲しいけどっ！・・私的には、まずドレスが着たいのよね～／／／」

ミッドにあるエースの自宅へ行く為の準備をするアリア・・・。
現在アリアは、エースの休みの度にミッドと英国を行ったり来たりしている・・・。

アリア「う～ん・・でも、エースはどっちが欲しいのかな？」

アリアは準備する手を一旦止めて考え始める・・。

アリア「やっぱり男の子かな？私は、女の子も良いと思うんだけど・・う～ん」

アリアがまだ見ぬ我が子の想像をする・・。

アリア「困ったわね・・両方とも良いじゃない！？どうしよう！」

そう言ってアリアは頭を抱えて悩む・・。
暫らく悩んでいると、ある事を思いつく・・それは・・・。

アリア「そっか！両方作れば良いのよ！簡単じゃない♪さ～て

と準備、準備～♪」

問題が解決したアリアは再び荷物の準備をする・・・。

　アリア「今回の休みは、少し長いそうだから多めに着替えを持っていかないとね」

アリアは準備をした後、明日に備えて直ぐに就寝した・・・。

＊＊

そして翌日・・。

ミッドチルダ：エースの自宅・（マンション）

　アリア「もぅ！また寝てるのね！」

アリアは部屋の呼び出しボタンを鳴らすがエースは出て来ない・・・。

その為、合鍵を使って部屋に入る・・・。

　エース「ＺＺＺＺ・・・。《やっぱり》」

エースは制服を着たままベッドにうつ伏せで寝ている・・・。

アリアは、仕方なくといった感じでエースを起こしにかかる・・・。

　アリア「ほら、起きて！エース」

エース「ん～・・ふぁりあ？《そうよ》ん～・・まだ眠いよ」

　アリア「今日は、デートの日でしょ？・・んっ《んっ》ほら起きて／／／」

アリアがエースにそっと口付けをし起きるように促す・・・。

エースは仕方なく起きあがる・・・。

　エース「ん～！はぁ・・で、今日は何処行こうか？アリア」

　アリア「う～ん・・何処行こうか？私はエースと一緒なら何処でもいいし」

アリアはエースの横に座る

そして・・エースと一緒にデートの場所を考え始める・・・。

そんな時エースの腹が鳴って・・。

　エース「取り敢えず・・お腹すいたな」

　アリア「何か食べに行く？それともここで食べていく？」

　エース「食べに行こうか、そのついでに考えれば良いし」

　アリア「そうね、じゃあさっさと着替えて！」

　エース「はいはい《はいは、１回！》は～い」

アリアに急かされてエースは着替え始めた・・・。

そして着替えた後、２人は手を繋ぎながらファミレスに向かった・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊
ファミレス：店内

エースとアリアは店内で少し遅い朝食を取っているのだが・・・。

アリア「はい、エース♪あ～ん」

エース「はむっ・・《美味しい？》あぁ、美味しいよ」

こう言う風に食事をしている為に他の客からの熱～い視線を貰っていた・・・。
しかし・・エースとアリアは、止めるどころかこの様な発言が出る・・・。

アリア「ここ人が多くて口移しが出来ないね・・残念・・はい♪あ～ん」

エース「はむっ・・しょうがないよ」

店内の1カ所より放たれるバカップル特有の桃色空間・・・。
一応これでもこの2人ファミレスなので自重しているらしい・・・。
しかし、周りにとっては、只の迷惑でしかない

アリア「それで、この後どうする？はい♪あ～ん」

エース「はむっ・・そうだな、偶には公園にでも行ってみようか」

アリア「わかった・・はい♪あ～ん」

エース「はむっ《あっ、付いてるよ・・ペロッ》ありがと」

エースの頬に付いたお弁当をアリアが口で取る・・。
そして、この2人は当然、店を出るまでこの調子だった・・・。
その為に多くの客が、迷惑を被った・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

IF. story・・・Pink Aria Space 2（前書き）

注意：設定上同一人物です↑ここ大事！

※これは、エースが1人の人だけを愛したらという可能性の物語です

IF・story・・・・Pink Aria Space 2

ミッドチルダ：公園・・・昼過ぎ

公園に着いたエースとアリアは、一緒のベンチに座り恋人の時間を満喫していた・・・。
無論、周りは迷惑千万だ・・・。

エース「なぁ・・アリア《なぁに?》呼んだけだ・・」

アリア「ねぇ、エース《何だ?》呼んでみただけ♪」

こうやって呼び合いながら最早1時間・・・。
よくも飽きずに続いている・・・。

エース「ん?周りの人から注目されてるような・・・」

エースはようやく・・よ・う・や・く!他人の視線に気付く・・。
アリアもエースに言葉に、よ・う・や・く!人の視線に気付く・・・。

アリア「あっ・・ホントだ・・なんとなくだけど視線を感じる・・何かあったのかな?」

エース「よく分からんが、他に行くか・・アリア《そうね・・》よっと」

エースとアリアは、仕方なくその場を立ち去った・・・。
経ち去る際も2人の周囲からピンク色の空気が漂っていた・・。

＊＊

ミッドチルダ：ショッピングモール

次に2人は、近くのショッピングモールへと足を運んだ・・・。

　エース「どの店に、行こうか・・」

エースはどの店に行くかを悩む・・・。
そんな時にアリアが頬を染め照れながらエースに

　アリア「あのね、だったら・・行きたい場所があるんだけど《何処だ？》こっち／／／／」

　エース「おっおい！《いいから！／／／》たっく・・」

アリアはエースを少し強引に引き連れて行く・・・。

＊＊

ショッピングモール：家具屋

アリアがエースを連れて来た場所は家具屋だった・・・。
しかもベッドコーナー

　エース「何故に家具屋？」

　アリア「あのね・・エースのベッドってシングルでしょ？」

エース「それが何か？」

アリア「えっと・・そのもうそろそろね・・そのっ／／／」

アリアは頬を染めながらチラチラとダブルベッドを見る・・・。

エースはアリアの言いたい事が分かっていたが、敢て分からなくしていた・・・。

アリア「そっ・・そろそろ一緒に暮らしてもいい時期だと思うし・・ならもっもう少し大きめのベッドが必要じゃ無いかと思って・・どっ・・どうかな？／／／」

エース「そうだな・・もう、そろそろいい頃だよな・・じゃあ買うかどれがいいんだ？」

アリア「えっとね～・・・・」

アリアはベッドを物色し始めた・・・。

エースはそんなアリアの姿を頬笑みながら見ていた・・・。

その後、エースはベッドを購入して家具屋を出て2人は色々店を回って時間潰した・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

ミッドチルダ‥エースの自宅

2人は夜になるまで色々店を回って時間を潰した後エースの自宅に戻った・・・。

そして食事を済ませた2人は・・・。

エース「ん～やっぱり何時食べてもアリアの作るご飯は美味いな」

アリア「もう・・上手なんだから／／／／」

エースがアリアの手料理を褒めるとアリアは照れながら反応する・・。

その後エースはソファーに座りくつろぐ・・。

食器を洗い終わったアリアがエースの隣に座る・・・。

アリア「洗い終わったよ《ありがとアリア》いいよ別に、私が好きでしてるんだから」

エース「それでも・・ありがと・・んっ《んっ》はあっ・・デザートを食べても？」

アリア「いっ・・いいよ《んっ》んんっ！／／／／」

エースはアリアの口を自分の唇で塞いだ後アリアを抱き上げベッドに運んだ・・・。

その後・・エースはアリアをベッドに押し倒し身体を重ねた・・・。

行為が終り息を整えてベッドに寝転がってる2人・・。

エース「なぁアリア《何？》グレアムさん俺達の事何か言ってなかったか？」

エースは不意にアリアにそう尋ねる・・・。

アリアは照れながらエースの問いに答える・・・。

アリア「えっとね・・そのっ何時、結婚するのかって・・わっ

私もね・・って何処行くの？《ちょっとトイレ》もう！」
エースがベッドを抜けて寝室を出ていく・・。
そして戻って来たエースは何故か服を着ていた・・・。

アリア「どうしたの？」

アリアがどうしたのかを尋ねるとエースは無言でアリアの前に来て・・・。

エース「アリア《何？》結婚しよう《えっ・・・》」

エースはプロポーズの後にポケットから小さな箱を取り出しそれを開く・・・。
箱の中身は当然・・婚約指輪だ・・・。
アリアはエースのプロポーズに

アリア「はい／／／」

一言そう答えた・・・。
エースのプロポーズの半年後２人は正式に結婚した・・・。
そして２人が夫婦になって幾年か年が過ぎていった・・・・・・。

……………………………………………………

………………

ミッドチルダ：とある家

アリア「こらっ！待ちなさい！《や～だよ！》ジルバ！」

その家の中でアリアは必死に子供を追いかける・・。
子供の名前はジルバという名前だ・・・。

ジルバ「あははっ！《おっと》パパ！」

ジルバは前を見ずに走っていた為に誰かとぶつかった・・。
それは・・ジルバの父親の・・・。

エース「よっと《わっ！》今度は何をしたんだ？」

エースがジルバを抱き上げる・・。

アリア「エース！お帰り《ただいま・・んっ》んっ・・／／／」

エースとアリアは顔を合わせるとキスをする・・・。
その後、再びアリアがジルバを叱る

アリア「それとジルバ！またお母さんの口紅に悪戯して《えへへ～》えへへじゃありません！」

それをエースは微笑みながら見ている・・・。

エース「またか、懲りないよな・・お前《すごいでしょ！》まぁ、ある意味な」

ジルバ「でしょ！」

アリア「褒めてません！エースからも何か言ってよ！」

エース「するなら分からないようにしない《エース？》ジルバ

悪戯は駄目だぞ？」

ジルバ「は～い《向こう行ってなさい》うん」

エースがジルバを下に降ろすとジルバはリビングへ向かった・・・。
その後・・アリアがエースに話しかける・・・。

アリア「ねぇ《何？》今度はどっちだと思う？」

エース「そういうって事は、もしかして《うん・・2人目／／／》」

アリアが照れながらお腹を撫でる・・。
その後エースがアリアを優しく抱き締め・・・。

エース「どっちでも嬉しいよ・・アリア《うん／／／》」

改めてエースとアリアは幸せを確かめるように暫らく抱き合っていた・・・・・。

アリア「（私に幸せをくれてありがと・・エース）」

その後・・エースとアリア夫妻は2人の子供と一緒に幸せに暮らしていった・・・・・・。

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ・・・・・・それは、もう１つの物語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

IF.　story・・・・・・紅き少女の想い

思えばあたしは、何時の・・いや恐らくあの時・・・。
はやてがアイツに助けられた時から意識していたんだ
なのに・・あたしは、アイツを好きと認める事が出来なかった

エース「エース・ハラオウン1等空尉　現時刻をもって機動六課へ所属いたします！」

エースが部隊長室で着任の挨拶をする

「よぉ！久しぶりじゃねぇか！！　エース」

エースが六課に来た事があたしは、嬉しかった
また、エースと一緒に居れる事が出来るから

……

翌日：朝

あたしはエースを起こしに、エースの部屋に向かった

はやて「ふぁ～あ・・アカンまだ眠いわ～・・・」

「え？なっ・・何で・・はやてが、エースの部屋から出て来たんだ？」

そこであたしは、エースの部屋からはやてが出てくるのを見て固まった
服と髪が少し乱れてる・・これは寝ていた証拠・・あたしの頭は、

最悪な想像をさせる

「くっ・・ちっ・・ちくしょう・・」

あたしの胸は張り裂けそうになりこの言葉しか出なかった
その日、頭の中はその事で一杯だった
……

……
シグナムとエースの模擬戦後・・・。

シグナム「とっ　ところでエースお前は付き合ってる女性は居るのか？／／／」

エース「今のとこはいないけど・・・・」

「（マジかよ!？朝のアレは・・あたしの勘違いかぁ～・・）」

あたしは自分の勘違いに胸を撫で下ろし一安心した
……

……
夜：隊舎裏の林

あたしはエリオとエースの修行をこっそり見守っていた
そして暫らく経って今日の修行が終わったらしくエリオが戻って行った

エース「何時まで隠れてるんだ？」

「分かってたのか？《当然だ》なら、さっさと言えつーの」

エースに言われて

エース「そんな事言われてもな」

「たく・・で、エリオはどうだ？《いいんじゃないか？》ねぇかってお前なぁ・・・」

内容はともかく・・この日あたしは、久々にエースと2人っきりで話をした

……

切っ掛けの日

「エースモテまくりだな・・・」

アリサがエースに告白した

あたしはただ呟く事しか出来ない・・・

シャマル「ヴィータちゃんはエース君の事好きなの？《えっ！？》どうなの？」

「アタシは多分、兄貴って感じが強いから違うな」

シャマルの問いにそう答えた・・胸が痛い・・・

ここで認めていれば・・もしかしたら・・・

次に、シャマルはシグナムにあたしの時と同じ質問をした

シャマル「そういえば、シグナムはエース君の事好きなの？」

シグナム「な！？　何故そんな事を聞く？／／／／／」

シグナムの動揺にあたしまで動揺してしまう

「（うっ・・嘘だろ・・おい・・）」

シャマル「エース・・・」

シグナム「っ！／／／／／／／／／」

この時のシグナム反応にあたしは、シグナムの事を仲間では無く敵だと思った・・・。

そして・・シグナムを敵だと思ったと同時にあたしは、ある事を嫌でも自覚してしまった

ーあたしはエースの事が好きなのだとー

……

運命の日

あたしがエースの事を好きと自覚してから数日経った・・・。

シグナムがエースの部屋から出てくるところ何回か目撃した・・・。

最近やけに機嫌がいいシグナム多分シグナムとエースはもう”そういう”関係なんだろう

それを想像すると・・胸が痛むと同時に焦りを感じてこう思った・・

・

ー負けられない・・負けたくない！絶対に！！ー

そんな事を思いながら歩いているとギンガと出会った
あたしがエースの居場所を聞くとまだ残って書類整理をしていると教えてくれた
その後、ギンガと別れてあたしはこう思いながらエースの元に向かった

ーあたしは！あたしのやり方でエースをものにしてみせる！ー

そう決意しヴィータは部屋の中に入って行った・・・・。
****

部屋で書類整理中のエース・・・。

エース「これで終わりっと・・ふぅ、もう入って来てもいいぞ」

エースは扉の向こうに居る人物に話しかける
すると・・ヴィータが不貞腐れた顔で入って来た

ヴィータ「お前はいっつも人の邪魔をするよな」

エース「そうか？照れるじゃないか《褒めてねーよ！》ははっ・・」

エースは湯呑に残ってたお茶を飲み干した後ヴィータに用を尋ねる
エース「で、どうしたんだ？《きょ・・・に・・・か？／／／／》は？何だって？」

ヴィータの声が上手く聞き取れないエース・・・。
もう1回言うようにヴィータに頼む・・するとヴィータは・・・

ヴィータ「だから！今日！一緒に寝ないかって言ってんだろが！！！／／／／」

顔を真っ赤にしながらそう叫んだ！
ヴィータの勢いに負けたエースは・・・

エース「はっ・・はい」

目をパチパチさせながらそう答えた

その後・・2人はエースの部屋に向かった・・・。
＊＊
エースの自室・夜中

2人は同じベッドに背合わせで寝ている
そんな中、ヴィータが話しかける

ヴィータ「おい・・起きてるか？《まぁ、寝ては無い》そうか・・

」

ヴィータはエースが起きてるのを確認する
そして、身体の向きを変えてエースの背中に抱きつく

エース「どうした？《こっち向くな》何で？《黙ってろ》・・・・・」

ヴィータが抱きついてきたのに気付いたエースが体勢を変えようとする
しかしヴィータがそれを止めて更に、エースに黙るように言う
そしてエースが黙ると再びヴィータが喋り出した

ヴィータ「あっ・・あたしは、まどろっこしいのが嫌いだからハッキリ言う・・・・」

ヴィータは一息つき続きを話す・・その内容は

ヴィータ「エースお前が好きだ《は！？》黙れ！《ほげっ！》」

ヴィータはエースの背中に軽く拳を入れて黙らす
しかし結構効いたようだ・・ヴィータは更に続きを喋る

ヴィータ「だっ・・だから！しっ・・シグナムと同じ事をしろ！／／／／」

ヴィータは顔を真っ赤にしながら言い終える
その後・・エースがヴィータに質問する

エース「あいたた・・結構効いたな・・で、シグナムと同じ事？」

ヴィータ「そっ・・そうだ！《意味分かってんの？》当たり前だ！《ちょ！》んっ・・・／／／」

エースの質問の後にヴィータはエースの体勢を変えて自分の方へ向かせる
その後、ヴィータはエースの唇を少し強引に奪う

エース「はぁ・・なら覚悟はあるのか？」

口を放したエースがヴィータを押し倒しヴィータに問いかける
するとヴィータはエースの目を真っ直ぐ見ながらだた一言

ヴィータ「ある！《そうか・・んっ》んっ／／／／」

覚悟を聞いたエースはヴィータの口を自の唇で塞ぎヴィータの身体を求めていく・・・。
ヴィータもエースを受け入れエースの身体を求めていく・・・。
そして・・・ヴィータとエースの２人はそのまま夜遅くまで愛しあった・・・・・・・・・。

ＩＦ．ｓｔｏｒｙ・・・・・・・紅き少女の想い2

ヴィータとエースが”そういう”関係になって幾日が経って
エースはイブリアとの戦闘後に入院・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

機動六課：朝

ヴィータ「アイツのお見舞いの品は、どんなのがいいんだ？」
はやて「それは、やっぱり甘い物やろ《うん》」
ヴィータが悩みながら歩いていると後ろからはやての声が聞こえた・・・。
その声にヴィータは慌ててはやての方に振り向く
ヴィータ「って！はっ・・はやて！？《うん・・おはようさんヴィータ》おはよ」
はやて「だけど、何を持って行くかが問題やな」
そう言ってはやては腕組をしながら悩み始める
だがヴィータは、はやてが悩む理由が分から無い為に理由を聞いてみた

ヴィータ「どうしたんだ?甘い物なら何でも良いんじゃねーの?」

はやてはため息をつきながら返答した

はやて「はぁ・・えぇか、ヴィータ《おう》エース君は、なのはちゃんを始め色んな女の子から甘い物を貰ってる筈やケーキとかありきたりなのは被るからNGや!《うっ》もっと個性的な物やないと喜んでもらえんで?」

はやてがそう言い終えると今度はヴィータも一緒に悩み始める・・・。

ヴィータがお土産の候補を言ってみる

ヴィータ「シュークリームはどうだアイツ好きだろ!《アカン、なのはちゃんの得意分野や》なのはの?」

はやて「そうや、ヴィータ忘れたんか?なのはちゃんは翠屋の娘やで?」

ヴィータ「そうだった・・アイツの好物の1つは翠屋のシュークリームだった・・・」

はやて「他に駄目なのは・・苺大福に・・・・あ!アレがあったの忘れとった!」

はやてが何かを思い出し二ヤリと悪代官の顔をする・・・。

ヴィータは何か知りたいらしくはやてに”アレ”について聞く

ヴィータ「何なんだよ!教えてくれよ!」

はやて「あぁ、ごめんな・・・アレってのは・・・・・」

＊＊

病院：”特別”個室

エースは本を読んで時間を潰し傍から見れば大人しく感じる・・だが

エース「（抜け出そうかな・・・）」

思考は、こんな感じである・・・。
しかもコイツは、よく病室を抜け出すので特別個室に入れられた
ちなみに、脱走で入れられたのはコイツが最初の人物である

エース「はぁ～（どんな姿になろうか・・この前は、フェイト（9歳時）だったし・・）」

そんな事を考えているとと病室にノックが響く・・・・。
入ってきたのは、ヴィータだった

ヴィータ「おっす・・元気か？《暇で死にそうだ》そうか、元気か」

ヴィータは挨拶した後にベッド横の椅子に座る・・。

ヴィータ「おっ・・・この椅子座り心地いいな」

エース「なんたって特別個室の椅子だからな《入れられた理由は

良いもんじゃね～がな》ほっとけ」

ヴィータ「あっ・・そうだお土産だ《これは！》どうだ？」

エース「羊羹だぁ！」

エースは羊羹を見た瞬間に歓喜の声を上げた
そして、ヴィータに振り向き笑顔で礼を述べる

エース「ありがとう！ヴィータ！《おっ・・おう／／／》ん・・
この味は・・」

ヴィータ「気付いたか・・そうはやてのお手製だ！《なんとぉー
！？》へへっ・・」

ヴィータは威張りながらはやてのお手製の事を告げる
嬉しそうに羊羹を食べるエースを見るヴィータ・・・

ヴィータ「にしても・・好きだな甘い物」

エース「俺の身体の半分は砂糖で出来ている《んな訳あるか！》
ふふっ・・」

ヴィータ「（にしても・・美味そうだな羊羹）」

ヴィータは自分があげた羊羹を見る
エースはその視線に気付いるのだが・・知らないふりをした・・理
由は・・・

エース「（要ると言わない限り・・羊羹はやらん！）」

こういうものである・・。

ヴィータ「あっ・・あのよ・・エース・・それ美味いか？《とっても！》そうか」

ヴィータは未だに羊羹を見てる
見てる言うよりも目が羊羹を追っている・・。

ヴィータ「あっあたしにも少し《断る！》くっ！良いじゃねえかよ少し位！」

エース「馬鹿野郎！この病院はな聖王教会が運営するだけあって頭が固い奴が多く大病院のくせに院内には売店が1つも無いんだよ！！だから糖分は、重要なんだよ！《知るかよ文句ならテメ―が言えよ》言えるか！あの院長のうすらハゲ人の言う事聞きそうに無いんだよ」

ヴィータ「うるせぇ！少しよこせ！《だが、断る！》このヤロー！」

ヴィータが椅子から立ち上がりエースの上に乗り羊羹を取ろうとする
その頃、病室の外のでは・・・。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
病院廊下

？？？「馬鹿野郎！この病院はな聖王教会が運営するだけあって

頭が固い奴が多く大病院のくせに院内には売店が1つも無いんだよ！！だから糖分は、重要なんだよ！《知るかよ文句ならテメーが言えよ》言えるか！あの院長のうすらハゲ！人の言う事聞きそうに無いんだよ」

？？？「うるせぇ！少しよこせ！《だが断る！》このヤロー！」

院長「・・売店だすか・・そうか、うすらハゲか・・・」

ちゃっかり院長に聞かれていた・・・。
この一週間後に売店が出来る品揃えはデザート中心
ちなみにこの院長は・・暫らく落ち込んでいた
＊＊
病院：”特別”個室

ヴィータ「はぁ・・はぁ・・はぁ・・しつこい奴め《お前がなうるせぇ！」

エース「あ～もう！分かったやるよ！ほい《なっ！／／／／／／／／》」

エースはスプーンで掬った羊羹をヴィータに突き付けるこれは、世に言う”はい♪あ～ん”だ・・・エースにその自覚があるかは不明だが
ヴィータはエースにスプーンを突き付けられて慌てる

ヴィータ「ばっ馬鹿野郎！こっここここんな事すんじゃねーよ！／／／／／」

エース「なら、おれが《まっ待て！》何だよ」

ヴィータ「えっと・・そのたっ食べてやっても良いぞ／／／」

エース「別に、食べてもらわなくても良いけど？《っ！／／／》どうする？」

ヴィータ「・・ったよ、食べたい！これで良いか！／／／／／」

エース「そんなに、怒鳴らなくても《うるせぇ！／／／》はいど～ぞ」

ヴィータ「はむっ《どうだ？》美味しい／／／／／」

エース「そっか」

ヴィータはエースに”はい♪あ～ん”をされながら羊羹を食べていった・・・。

食べ終わった後、ヴィータは勤務があるので病室を後にする・・その際に・・。

ヴィータ「逃げんなよ？《へいへい》まぁ、この後はやてが来るから逃げれねーけどよ」

エース「何だよ？」

ヴィータ「はっ・・早く良くなって溜ってる仕事片付けろよな！／／／／」

そう言ってヴィータは病室を出ていった・・・。

そして残されたエースは・・・。

エース「可愛げのない奴・・ふふっ・・・」

病室を出たヴィータは・・・・・。

＊＊

ヴィータ「（もう！あたしのばか！もっとアピールするべきだったのに！）」

反省点を振り返っていた・・・。

ヴィータ「（きっ・・嫌われては、無いよな？うん・・それよりも！シグナムが居ない今がチャンスなのにあたしときたら・・って！しけ込んでどうする！）よし！仕事、仕事！」

ヴィータは暗い表情を直し何時もの厳しい教官の顔に戻りそして・・・

―エースの彼女の座だけは！絶対に諦めねぇ！―

エースへの想いを決意を胸に抱き六課に戻って行った・・・・・・・・・。

ＩＦナカジマ家

ＪＳ事件が終わって数日経ったある日
エリオ＆キャロはルーテシアの元を訪ねており不在
そんな中、食堂で休憩中ティアナは、不意にスバルに義兄の事を聞いてみた

ティアナ「そう言えば、アンタ確か教会の騎士にお兄さんが居るんだったわよね？」

スバル「うん♪そうだよ《スバルのお兄さん？》なのはさん！」

そんな時、なのは達隊長陣が食堂にやって来た
その後、なのは達が席に座るとスバルに兄の事を聞いてきた

なのは「それで、スバルどんなお兄さんなの？」

スバル「強くて、優しくて、とっても頼りになる大好きな・・お兄ちゃん・・です・・。」

兄の事を語るスバルは悲痛な表情をしながら段々と声が小さくなっていく
そんなスバルに対してはやてが声を掛ける

はやて「どうしたんや？スバル」

そしてスバルはその訳を語り出した

スバル「・・実は、お兄ちゃんとは３年・・いやもう４年近く話

をした事が無いんです」

なのは「一体、どうして？」

スバル「それは・・お兄ちゃんとの約束を破ったからです《約束ってどんな？》お兄ちゃんは、私が訓練校に入る事を反対していたんです」

はやて「どんな風に反対してたんや？」

スバル「・・別に、訓練校に入り局員になっても構わないけども2、3年程、普通校を通いながら考えてみたらどうかって言ったんですけど、私はそれを無視して訓練校に入ったんです。その結果・・・」

フェイト「・・怒って口を聞いてくれなくなったんだ《はい》」

ヴィータ「そう言えば、スバルお前の兄貴の名前ってなんて言うんだ？」

ヴィータはスバルの兄の名前が気になり聞いてみるするとヴィータの後に続きシグナムとはやてもスバルに励ましの言葉を掛ける

シグナム「聖王教会なら、騎士カリムや私の友人シスター・シャッハも居る」

はやて「仲直り出来る力になれるかもしれんしな」

スバルは、はやて達に励まされ表情を元に戻し

そして、兄の名前を述べた・・・

スバル「お兄ちゃんの名前は・・エースです。エース・ナカジマ」

はやて「えっ・・エース!?」

ヴィータ「なっ!?」

はやて達はスバルから出た名前に驚く
そして、シグナムはスバルにこう聞いてきた

シグナム「すっスバル、お前の兄は、双迅のエースなのか?」

スバル「多分、そうだと思います。前にお父さんにそう聞いた事がありますから」

そう言うと、はやて、シグナム、ヴィータは目を見開きながら驚く
そんな中フェイトがはやてに驚きの理由を聞いてくる

フェイト「どっ、どうしたの?はやて」

はやて「え?あぁ、ごめんな~フェイトちゃん。ちょっと驚いただけや」

はやては、フェイトに謝るとスバルの方を向き

はやて「アイツが、スバルの兄ちゃんなら話が早いわ。私に、まかしときスバル。あのいけ好かん・・いや、兄ちゃんと仲直りさせたるからな!」

スバル「はいっ！」

そう言って無い胸を張るはやてだった

一方その頃、陸士１０８部隊では・・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

陸士１０８部隊：部隊長室

現在１０８部隊の部隊長室では、ゲンヤに会いにエースが来ていた

ゲンヤ「お前、何でＪＳ事件の時に八神に協力しなかったんだ・・っと！」

ゲンヤとエースは会話をしながら将棋をしている
会話の内容はどうやらＪＳ事件の事らしい・・

エース「あの、チビタヌキ。親父に似て俺への扱いが酷いからな。」

ゲンヤ「それ以外にも理由はあるだろうがよっと！」

エース「何の事かな？はい、王手っと《まった！》待った無し」

ゲンヤ「くそっ・・《だから、止めとけばって言ったのに》・・うるせえよ」

やれやれと言った顔でゲンヤに声を掛けるギンガ

そしてため息を吐きながら言葉を続ける

ギンガ「こういうチェスやボードゲームの類は、兄さんの独壇場って事は、お父さんも知ってるでしょうに、無理して対戦するからこうなるのよ。どうぞ、兄さん／／」

少し照れながらエースにお茶を渡すギンガ

エース「あぁ、ありがとう。ギンガ《いっ・・いえ／／／》」

ギンガは次に、ゲンヤにもお茶を渡す

ギンガ「はい、ついでにお父さん」

ゲンヤ「おっおう・・（何か、扱いが違うような・・）」

そしてエースは、お茶をひと口飲むと話を切り出した

エース「で、俺を呼んだ理由は一体何だ？たかが、将棋をやらせる為だけに呼んだ訳じゃあ、ないんだろ？」

ゲンヤ「あぁ、実はなＪＳ事件の時の更正組の戦闘機人達、チンク・ノーヴェ・ディエチ・ウェンディの４人を正式な保護者となろうと思ってなお前の意見が聞きてぇんだ」

ゲンヤがそう言うとエースはお茶を啜った後

エース「・・はぁ、親父の好きにしたらいいさ《反対しねぇのか？》これでも。一応、親父の人を見る目は信用してるんでね。んじゃ、ごちそうさま。俺は、もう行くよ」

そう言って席を立つエース
そして、扉の近くに立った所でゲンヤがエースにこう語りかけた

ゲンヤ「おい、エース《何?》スバルの事、まだ怒ってんのか?」

エース「・・・・さぁ」

そう言い残してエースはゲンヤ達の元を去っていった
残された、ゲンヤとギンガは・・・

ゲンヤ「・・まだ、許せねぇのかよ・・エース」

ギンガ「仕方ないよ・・兄さんスバルの事は、かなり可愛がってたし・・”私よりも”」

笑顔で”私よりも”を強調して言うギンガ
しかしその笑顔は1つも笑えない笑顔だった

ゲンヤ「(ギンガの奴、恐ぇ~な・・・これはアイツに彼女が居る事は言えねぇな)」

ゲンヤは嫉妬のオーラ全開のギンガの横でそう思うのだった・・・・・・・・・・。

エース・ナカジマ　　２０歳

エースがハラオウン家では無くナカジマ家に引き取られ成長した姿
幼い頃より義母のクイントから格闘術を教わってる
その為に本来とは違い「格闘＋剣術」という攻撃方法を取っている
そしてクイントの薦めで聖王教会に入った
教会騎士団でのエースは、六課の推薦人でもある人物の直接の部下
その人物の関連ではやてと守護騎士達と面識がある
エースは自分の事を「エース」としか言っておらず姓のナカジマは
教えて無かった
相変わらずのモテぶりで、彼女が居るにも関わらず・・ギンガ、は
やてからは異性として意識されている模様。ただし本人は気付いて
いない

彼女とは秘密裏に交際している模様。
ゲンヤはエースから彼女を紹介されておりその事を知っている
因みに、彼女の親もエースとの交際を認めている

作中通り、現在スバルとは口も聞いて無い様子
しかし、スバルの知らない所でエースはスバルを幾度も助けている
その為、スバルの事を嫌ってる訳では無い

ＩＦナカジマ家

聖王教会：廊下

ゲンヤとの用事を終えたエースは１０８部隊から教会に戻って来ていた
エースが廊下を歩いていると前からシャッハが向かって来てエースに声を掛ける

シャッハ「騎士エース。今日は用事で出かけるのでは？」

エース「もう、済んで今帰って来たところだ」

シャッハ「そっ、そうですか／／／」

エースはゲンヤ達家族に会って機嫌良く、頬笑みながらシャッハの疑問に答える
すると、エースの笑顔を見たシャッハが顔を赤く染めながら答えた

シャッハ「騎士エース《何？》今日は、この後何かご予定はありますか？／／／」

エース「えっと・・どうして？」

シャッハ「もし良ければ、一緒に外にお食事でもと思いまして／／／」

シャッハはエースにデートの誘いをする

エース「悪い、そういう事ならパス。俺よりロッサとでも行って
来るといい、それじゃあ」
　シャッハ「えっ、ちょっと！」
エースデートの誘いを断った後、シャッハの制止を無視して行って
しまった
廊下に残されたシャッハは・・・
　シャッハ「・・また、ふられてしまいましたね・・・」
廊下でシャッハは1人寂しげにそう呟くのだった
そして、自室に向かったエースは・・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

聖王教会：エースの部屋

エースが自室に戻り扉に鍵を掛ける
そして部屋を見渡すと、ベッドに先客が寝ていた
　？？？「すぅ・・すぅ・・・・」
エース「はぁ・・今日は何時帰るか分からないって言ってたのに」
エースは溜め息をつきながらベッドに寝てる人物を揺する

エース「おい、起きろ。カリム」

カリム「う～ん・・あっ、おはようエース」

エースに揺すりおこされるカリム
そしてエースはカリムに部屋にいる理由を聞く

エース「何故、居るんだ?今日は戻るか分からないって言ってたはずだが?」

カリム「今日は早く帰って来そうな感じがしたので先に部屋で待ってました」

笑顔でそう言うカリムにエースはため息をついた
その後、エースがベッドに座るとカリムが後ろからエースに抱き付く

エース「どうした?《補充です／／》補充?」

カリム「最近、2人っきりでこうして会う機会が少なかったですから／／／」

カリムは抱き付いたままエースにそう言う
するとエースはカリムの手を一旦解き身体の向きを変え正面からカリムを抱き締める

エース「じゃあ、俺も補充しようかな／／」

カリム「もう、してるじゃないですか／／／／」

その後エースとカリムは、部屋で抱き合いながら固有結界を生み出すのだった

一方、六課のスバルは・・・

＊＊＊

機動六課：部隊長室

現在スバルは部隊長室にてエースとの仲直り作戦（仮）
その作戦の打ち合わせを3隊長＋副隊長2人としていた

はやて「・・というのはどうやろうか？」

なのは「ちょっと強引な気もするな」

シグナム「しかし、騎士であるアイツには1番の方法だ」

フェイト「問題なのは、スバルのお兄さんの強さ・・だね」

ヴィータ「エースは教会騎士の中でも指折りの騎士だ、それをどうにか出来るのか？」

ヴィータがそう言うと席に座ってるスバルに一斉に視線が向く
皆の視線が集まる中、スバルは・・・

スバル「・・やります！やってみせます！」

瞳に強い意志を宿しながらスバルはそう答えた

そんなスバルに隊長陣は

はやて「なら、決まりやな」

シグナム「相手は強大な騎士だ心して掛かれよ」

フェイト「スバルなら大丈夫だよ」

なのは「頑張ってね」

ヴィータ「まぁ、気をつけろよな」

隊長達の励ましにスバルは大きく頷いた。
その後、はやてがスバルにあるお願いをした
はやて「そんでな、スバル《はい、何でしょう？》もし、上手くいったら、私とエース君のデートの約束を取り付けてくれへん？」

スバルはこのはやてのお願いに対して・・・

スバル「絶対に嫌です♪お兄ちゃんは誰にも渡しません」

殺気の籠った笑顔でそう答えた。
この瞬間、はやて達はスバルが重度のブラコンである事が分かった
スバルの新たな一面が分かった頃、１０８部隊では・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１０８部隊：部隊長室

ギンガは部隊長室である事を悩んでいた

ギンガ「・・最近、兄さんが冷たいんだけど」

ゲンヤ「知らねぇよ」

ギンガのエースに対する悩みは幾ら聞いても次から次に出てくる
なのでゲンヤはギンガのこの悩みについては協力はしない

ギンガ「あぁ！まさか、恋人が出来たんじゃあ！？」

中々、鋭い勘のギンガ
そんなギンガにゲンヤはある質問をしてみる

ゲンヤ「・・・あのよぉ、ギンガ《何？お父さん》いいか？もし、仮に、仮にだぞ？エースに彼女が居たらどうする？」

ゲンヤの質問にギンガは・・・

ギンガ「・・・そんな雌狐、殺し去ってやるわよ。ウフフ・・・・」

ギンガは目の色を単色にして殺気の籠った笑顔でゲンヤに笑いかける

この時、ゲンヤはエースとカリムが交際してるとはとても言えなかった・・・・・・・・・・。

ＩＦナカジマ家

聖王教会：エースの自室

翌日エースは目覚めるとベッドの横で着替え中のカリムが見えた
カリムはエースが起きた事に気付き着替え終わるとエースに近づいてきた

カリム「おはようエース《ぉはよ・・》今日の任務は、私の部屋に来た時に言い渡すから・・んっ《んっ》はぁ・・また後でね♪」

エース「・・わかった」

カリムは用件を言うとエースに軽い口付けを交わして部屋を出ていった

その後、エースは目を擦りながら起きあがり着替えを始めた

＊＊

機動六課：部隊長室

エースはカリムが機動六課に訪問に行くと言うのでカリムの護衛として仕方なく一緒に機動六課に来ていた。

はやて「久しぶりやな〜カリム、それにエース君」

カリム「久しぶりね、はやて」

エース「・・どうも」

はやてが挨拶するがエースはどうでも良いという感じだ
そんなエースにはやては積極的に話しかける

はやて「最近、調子はどうや？エース君《此処に来るまではとても良かった》相変わらずキツイ冗談やな～《本心だ》またまた～♪」

何時もなら直ぐに言い返すはやてにエースは疑問を持った
そしてその疑問を晴らす為にエースは・・

エース「・・おい、タヌキ。一体、何を企んでいるんだ？」

はやて「ふふ～ん。あのなエース君、ちょっとウチの隊員の模擬戦の相手をしてもら《断る》何や教会の騎士様は申し込まれた戦いを捨てて逃げるんか？」

エース「・・・相手は？《訓練所で待機しとる》カリムは此処に居ろ」

はやて「案内する人は今呼び出したから」

カリム「はい、分かりました《失礼します》」

カリムが言い終わると部隊長室に金髪の女性が来た
エースはその女性に案内され訓練所に向かった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

機動六課：海上訓練施設

エースは金髪の女性に案内されて海上訓練施設にきた
そこでエースは・・・スバルと再会した

　エース「・・・成程こういう事か」

周りを見ると何時の間にかシグナムやヴィータ達が騎士甲冑やＢＪを展開していた
これは明らかに帰さないという意思表示であり

　スバル「・・・久しぶりお兄ち《用件は？》っ！・・・私が勝ったら話を聞いて下さい」

エースは、はやてに嵌められた事に気付く
そしてスバルのお願いに対して・・・

　エース「はぁ～・・・勝てたらな」

そう言い不本意ながらもスバルの申し出を受ける事にした
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

海上訓練施設：訓練場

エースは模擬戦のルールをスバルにしていた
因みに、審判は有名人のエース・オブ・エース。高町なのは

エース「・・制限時間は３０分、お前が俺に有効打を入れればお前の勝ち、俺がお前を戦闘不能にしたらお前の負けこれで良いか？」

ルールの説明が終わるとスバルが頷く
両者デバイスと騎士甲冑（ＢＪ）を展開し所定の位置に着き試合開始の合図を待つ・・・

なのは「それでは・・・始めッ！」

スバル「一撃！必倒ッ！ディバイ～ン！バスター！！」

なのはの試合開始の合図と共にスバルは砲撃魔法を撃ち出す！
エースは避ける素振りもせずただ立ってるだけ
その後エースの居た位置から爆煙が上がる・・

スバル「・・やったのかな？《んな訳ねーよ》っ！《そらよ》ぐッ！！」

スバルは慌てて声のした方に構えるが・・既に遅くエースの強烈な蹴りを腹部に喰らい上空に身体を蹴り上げられ、その後・・更に、追撃の蹴りを再び腹部に喰らい背中から地面に叩き付けられ身体がバウンドする

エース「発想は悪くないが、相手が悪かったな」

スバル「ぐっ！・・・はぁ、はぁ」

スバルは腹部を両手で押さえ身体を震わしながら立ち上がる
エースはそんなスバルに・・・

エース「その程度の蹴りも防げないのかッ！《っ！》期待はずれなのも《ガはッ！》・・・大概にして欲しいところだ」

そう言いながらジャンプし飛び上がった後に身体を前回転させ、その後、上空から片足蹴りを放ちそれをスバルの左肩に命中させる

エース「人の忠告を無視してッ！《がッ！》勝手にッ！《ブッ！》入った！《ごッ！》割にはッ！《グッ！》大した事無いじゃあないかッ！《ガはッ！》」

エースは右肩への蹴りの後、体制が崩れたスバルに腹部への下突き、右の上段回し蹴り、左の上段回しそして再度、腹部への下突きその後右上段前蹴りでスバルの顎を蹴り上げ・・その後、スバルは糸が切れた人形の様に崩れ落ちた

エース「・・お前の夢とやらは大した事無いな・・ッ！？」

エースはそう言い残し向きを変えて去ろうとした
その時、先程人形の様に崩れ落ちたスバルがエースに向けて蹴りを放って来た
エースは意表を突かれるも、何とか防御に成功しスバルの蹴りを受け止めた

エース「ほぅ・・（流石に、今のはビビったな。）」

スバル「はぁ・・はぁ・・私の夢をッ！バカにするなッ！！」

エース「（〝するな〟か・・言うようになったな）・・だったら《くっ！》その夢とやらの思いをこの俺に示してみろ・・来いスバル」

エースはスバルの足を捌いた後一旦距離を取り構えを取る
その後、スバルは拳を構えて足元にベルカ式魔法陣を展開させ・・・

スバル「フルドライブ！」

ＭＣ「Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．」

スバル「ギア！エクセリオンッ！！」

ＭＣ「Ａ．Ｃ．Ｓ．　Ｓｔａｎｄｂｙ．」

ＭＣから魔力の翼を左右２枚ずつ展開される
その後スバルは凄まじい速度でエースに向かって行く

スバル「うおおおお！いっけえええええええ！！」

その後２人が拳を突き出しながらすれ違う

スバル「うっ！・・・・・・・」

そしてスバルが倒れ意識を無くす
倒れたスバルにエースが向かって行き、エースはスバルを抱き抱えると・・・

エース「・・お前の勝ちだ、強くなったなスバル」

エースの頬には微かに擦り傷が出来ていた
その後、審判のなのはがエースの元に降りて来た

なのは「どうでした？《まぁ、合格といったところでしょうか》
そうですか♪」

エース「スバルの事、頼みます《分かりました》」

エースは抱きかかえたスバルをなのはに渡す
その後向きを変えて去ろうとするエースになのはは・・・

なのは「起きるまで待たないんですか？」

エース「これでも忙しい身なので、それでスバルに「教会に遊びに来る際には、必ず連絡しろ」と伝言を頼みます《分かりました♪》それでは」

そう言い残しエースは六課を後にした
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

聖王教会：エースの自室

六課から戻ってきたエースは部屋でカリムと寛いでいた
そんな時、カリムがエースの機嫌が良い理由を聞く

カリム「すごく、上機嫌ね。エース」

エース「そう見えるか？《えぇ》そっか、それはな・・・・」

この後エースは久々にカリムに妹（スバル）の自慢をするのだった

カリムは久しぶりのエースの妹自慢に頬笑みながら付き合うのだった

＊＊

陸士１０８部隊：部隊長室

ギンガ「・・はっ！《どうした？》兄さんがスバルを褒めてる気がする！」

ゲンヤ「・・ギンガ、お前、本当に大丈夫か？」

エースがスバルを褒めるのを察知したギンガ

それをゲンヤは本気で心配していた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ギャラクシア＆プレアデス　　カートリッジシステム搭載型

エース・ナカジマの持つ双剣型アームドデバイス

待機状態は、２つの指輪

名前の由来は「銀河」と「昴星」から

備考：エースはスバルの最初の一撃を双剣モードで受け止めた後はデバイスを待機状態に戻して肉体強化のみで戦闘をした為使用して無いのと同じ

ＩＦアリシア（前書き）

設定※こちらの世界ではアリシアは存命しておりフェイトと一緒にエースの義理の妹になってる

設定２※エースは現在、リンディの策略により長期休暇を利用し私立聖祥大学付属中学校に短期留学生として通わされている

クラスは、エース、アリシア、はやて、すずかが同じクラスなのは、フェイト、アリサは別クラス

ＩＦアリシア

聖祥大学付属中学：教室

変わらぬ日常風け「ｚｚｚ」では無く
教室で寝てる問題生徒が約１名

教師「・・ハラオウン君《ふぁい・・起きてます・・・》ぐぬぬ！」

はやて「（あっ、アカン！先生、額に血管が浮いとる・・・）」

アリシア「（あわわ～ど～しよう！）」

すずか「（寝てるエース君も良いな～）／／／」

教師に注意されようが起きる気配がまるで無い
すずかを除きはやてやアリシア、生徒達はハラハラしながら様子を見ている

教師「はっ、ハラオウン君《ふぁい・・聞いてまふ》むむむっ！！」

教師が限界に来て問題児エース・ハラオウンを注意しようとする
しかし、その寸前でチャイムが鳴るその瞬間

エース「はっ・・また寝てた・・あれ？先生どうしたんです？もう終わりですよ」

エースのとぼけた返答に教師は怒りが一気に抜けしまい
しょんぼりしながら教室を出ていった

＊＊

聖祥大学付属中学：屋上

エースは昼食を取る為に屋上に来た
するとエースより先にフェイト達が来ていた

なのは「もう、遅いよ！エース君」

アリサ「さっさとしなさいよ！」

フェイト「遅かったね、お兄ちゃん」

エースは３人を見た瞬間引き返そうとする
しかしアリサに首根っこを掴まれ強引にアリサの隣へ座らされる

アリサ「ど〜して逃げるのかしら？《命が惜しいから》その言い方だと、まるで私達と居ると危険って事に聞こえるのだけど〜？」

エース「ほぉ〜・・。ゴリラでも”そ・れ・な・り・に”知能は有るようだな」

エースは怒りかけのアリサに向かって火に油を注ぐかのように挑発

をする
挑発をされたアリサは当然怒り心頭になるが・・・

アリサ「ぬわんでっすてえええ！《それ位にしときなよアリサちゃん》ぐぬぬ！」

はやて「そうやで、そう言う風に直ぐ怒るからエース君が面白がるんやで？」

アリシア「え・・兄さんもその辺にしときなよ」

怒ったアリサを宥めながらすずか達が遅れてやってきた
エースはアリサの怒りが止んだのでつまらなそうな顔を浮かべた
その後すずか達は、それぞれの定位置に座る
因みに、位置は・・・

な　フェ　は

アリ　エす　ア

こんな感じですずかはエースにくっ付く様に座る
しかし他のメンバーがこの事を黙って見逃すはずもなく・・・

なのは「・・すずかちゃん。どうしてエース君の横に居るのかな？」

すずか「将来の夫だからだよ。なのはちゃん／／」

エース「そうなの？」

フェイト「お兄ちゃんが迷惑だから、離れなよ。すずか」

すずか「私には分かるのエース君はそんな事思って無いよ。フェイトちゃん」

エース「お前は、エスパーか」

アリサ「エースが調子にのるか《うほーうッ！》あんたねぇぇぇぇぇ！！」

はやて「言っておくけどエース君は私の旦那になるんやで？すずかちゃん」

すずか「はやてちゃん寝言は寝てから言うから寝言なんだよ？」

エース「だったら、お前も寝てから言え」

エースはすずかへのツッコミが終わった瞬間
何時の間にか後ろに回り込んだアリシアはエースに密着するすずかの腕を素早く解き

エース「・・おい、アリシアさッ・・ぐぷヲアッ！？・・・・・・・・」

その後、無言で目にも止まらぬ速さの拳打でエースの顎を殴りつけ墜ちたエースの制服の首裏の襟を掴み上げると・・・

アリシア「・・ちょっと保健室でオハナシしてくるね♪」

一同「どっ、どうぞごゆっくり・・・」

目の色を単色にし邪気＋殺気を放ちながら素晴らしい笑顔で一同に話すアリシア
命が惜しい一同の答えは一つしかなかった
そしてアリシアは、意識の無いエースを引き摺りながら保健室？へ去っていった
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

聖祥大学付属中学旧校舎：旧保健室

アリシアはエースを引き摺りながら旧校舎へやって来た
この旧校舎は元々いわく付きの場所だったが、ここ最近は特に酷くなって来ており最早ポルターガイストのバーゲンセールという位だ
その理由は・・

1．高速で移動する人魂＝「誘導射撃魔法」

2．苦痛に苦しむ声＝「アリシアの攻撃に苦しむ声を上げるエース」

3．悲鳴を上げながら走る幽霊＝「アリシアの攻撃から悲鳴を上げながら逃げるエース」

・・と、まぁこの様に心霊現象が頻繁に出るので生徒は一切立ち寄らないのだ
この心霊現象に乗じたアリシア「犯人」はこの場所をエースのお仕置き場所＋密会場所にする事を思い付いたのだ

アリシア「で？”エース”は何時になったら、すずかの彼女紛いの行動を止めさせてくれるのかな？」

アリシアはエースを叩き起こし正座を床にさせ
その後、殺気全開の素晴らしい笑顔でエースに問いかける

エース「・・俺が言っても止めないと思うのですが？」

アリシア「ふ～ん・・じゃあ取り敢えず・・オハナシだね♪」

アリシアは無言で空中に複数の魔力スフィアを形成する
その光景にエースは顔を引きつらせながら

エース「じょ・・冗談ですよね？アリシアさん？」

アリシア「このッ！《ヒッ！？》浮気者オオオオッ！！！」

エースはアリシアからお仕置きを受けた
後日、旧校舎の心霊現象に「輝く教室」というのが加えられた・・・・・・・・・・・・・・・・。

アリシア・T・ハラオウン

フェイトの姉で明るく元気な少女
プレシアの関わっていた魔導実験の事故により1度亡くなり、時の庭園の奥深くに当時の姿まま保存されていた
時の庭園の崩壊の際エースがギリギリの所で駆け付けプレシアも助けよとしたが彼女はエースの手を拒み虚数空間に姿を消した
その後、アリシアの遺体は暫らくの間、秘密裏に保存されていた
数ヵ月後、エースがセシィと出会い彼女の力によりアリシアはリィンフォース達と同じ様に再生し再びこの世に生を受けた

立場上はフェイトの双子の姉

エースへの嫉妬が高まると、なのはやフェイト達とは比べ物にならない位に凶暴になり
アリシアはエースの事はなのは達の前だと”兄さん”と呼び2人きりだと”エース”と呼び方を言い分けている
その理由は・・・

ＩＦアリシア2

翠屋・店内

学校が終わったエースは帰りに翠屋に来ていた
エースは店内で、士朗＆桃子と話す

士朗「どうだい？学校は？」

エース「つまんないです。」

桃子「なのはの彼氏になってくれる気になった？」

エース「どうしたら学校の話題からそんな話題になるのかを教えて下さい」

桃子「今なら美人のお母さん付きよ♪」

エース「要りません♪《えぇ～》」

士朗「ハハハふられてしまったね。桃子」

エースは高町夫妻と楽しく会話をしている時・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バニングス邸：アリサの部屋

時を同じくしてアリサ達はある手紙と睨めっこをしていた

アリサ「これもよ」

フェイト「こっちも」

なのは「同じく」

はやて「これもや」

すずか「以下同文」

そして、全員で一斉にため息をつく

その後全員を代表するかのようにフェイトが言い始める

フェイト「・・どうしてお兄ちゃんはこんなにモテるんだろう？」

はやて「フェイトちゃん。それ私らが言える言葉じゃないで？」

アリサ達が見てるのはエース宛てのラブレター。

何故エース宛のを持ってるのかと言うと、アリサ達はそれぞれに役割分担を決めており何時もエースが来る前にラブレターが入っていそうな場所を全てチェックし回収している

その為にエースは自分がラブレターを送られた事実を一切知らない

アリサ「ところで、アリシアは？」

はやて「今日はちょっと行く所があるって直ぐに帰ったよ？」

アリサ「ふ～ん・・行く所・・ねぇ」

アリサがアリシアの事を考えてた頃・・・そのアリシアと言えば・・・

＊＊＊

海鳴神社：社裏

アリシアは時計を気にしながら社の裏手である人物を待っていた

アリシア「遅いなぁ～・・《悪い、遅れた》もぅ！遅いよ！エース」

アリシアが待ってたのはエースだった

エースは謝罪しながらアリシアに近づいて行く

エース「桃子さんに捕まってって《また翠屋に行ってたの？》うん、苺大福を食べに」

アリシア「あれッ？翠屋に苺大福なんてあったっけ？《あるみたいだよ》ふ～ん」

アリシアが疑問に思うのも無理はない翠屋は「喫茶店兼洋菓子店」であり和菓子屋では決して無い。では何故、苺大福が有るのかと言

うと・・以前、エースが翠屋にて苺大福が食べたいと言った為に桃子がエースの要望に答えて作った
因みに、現在の苺大福の注文はエースとリンディのみ

エース「それにしても・・此処来るの大変だよな～主に石段が」

アリシア「そうだね～・・・《なぁ、アリシア》何？エース」

エースはアリシアの横で彼女に問いかける

エース「・・何時まで、黙ってるつもりだ？《それは・・》いずれ分かる事だぞ？」

アリシア「それは・・分かってるけど・・」

アリシアの曖昧な答えにエースは・・・

エース「分かってるなら、何故言わないんだ？・・・・」

――――――――・・・俺達が付き合ってると・・・・――――――――

実は、エースとアリシアはエースが聖祥中に短期留学生として通う2カ月前位から恋人同士として交際をしている・・・因みに、アリシアから告白した模様。
エースはアリシアに告白された際、未だにカリムの事が好きだったその為に、アリシアに時間をくれと言ってエースはカリムに告白したが、例の如くカリムの勘違いにより振られる
ふられたのを機にカリムの事を諦めたエースは、数日間の間気持ちを整理し

その後エースはアリシアと正式に付き合う事にした。

エース「大体、みんなに秘密にする理由が分からん」

アリシア「だって・・言いにくいんのよ《何で?》それは・・（皆がエースの事を好きなんて言える訳無いじゃない！わかり・・無理よね、エースだもん）・・はぁ」

エース「・・何か今、馬鹿にされた気《気のせいよ》・・・」

2人は、なのはやフェイト達には秘密裏に付き合ってる為に、こうして人気の無い場所等で待ち合わせをして恋人同士の時間を過ごしている

エース「それに、母さんや兄さんに話してフェイトに話さない理由が特に分からん」

エースとアリシアの関係は、リンディを始め”フェイト以外”のハラオウン家の家族は全員が知っておりちゃんと許可も出ている

アリシア「・・フェイトだから話せないのよ《何か言った?》うぅん♪」

エース「そうか」

アリシアはボソッとエースに聞こえないように”フェイトだから話せない”と言う

その後、アリシアは少しの間、思考する

アリシア「（フェイトは恐らく・・なのは達の中じゃあ1番エー

スへの想いが強いと思うから・・・私とエースの関係を話すのは・・・色々恐いんだよ。エース）」

リンディ達は、アリシアからフェイトに交際を言えない理由を聞いている

その為、リンディ達は条件付きで２人の交際の事は知らせない事を承諾した

因みに条件は、フェイトが自分で２人の交際を突きとめた場合は否定しない事

その後、アリシアは話をはぐらかしエースと恋人同士の時間を過ごし始めた

そして恋人同士の時間を続けていく内に・・・

アリシア「ねぇ・・エース《何？》して・・／／／」

エース「・・罰あたりな奴め・・んっ《ん／／》・・／／」

エースはアリシアにキスをせがまれると静かにそして優しくアリシアを抱きしめた

その後、優しくアリシアの唇を自分の口で塞ぎ暫らくの間お互いの存在を確かめ合った

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ハラオウン家：エースの部屋

その後、夜になってエースの部屋に珍しくアリシアが尋ねてきていた。

理由は・・・

アリシア「はぁ・・《満足か?》・・もう1回・・お願い／／／」

エース「我が儘な奴だな・・んっ《ん／／／》・・／／／」

神社裏での密会の時のキスでは我慢出来なくなり
そして夜、アリシアは寝る前に、こっそりと部屋に来てエースとキスをするのだった。

……

エースの部屋の前

フェイト「（どっ、どう・・して?アリシアがエースとキスしてるの・・・・・?）」

フェイトは、偶然にも少し開いていたエースの部屋のドアの隙間から2人のキスを場面を目撃してしまい動揺し僅かだが物音を立ててしまった

……

アリシアは、その物音に反応し音の方を見るするとフェイトが無言で泣きながら去っていくのが見えてしまった・・・。

アリシア「（ふぇ・・フェイト!?）」

こうして、アリシアは自らの行動でエースとの関係をフェイトに晒してしまった・・・・・・。

IFアリシア3

エースの部屋の前で、アリシアとエースがキスしてるのを目撃したフェイト

この後フェイトは、泣きながら部屋に戻る

すると頭の中を嫉妬等、色々な考えが浮かんでは消えフェイトを困惑させる

その後、フェイトはそんな考えの中涙を流しつつ眠りに就いた

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

数年前・・・フェイトの部屋

アリシアとフェイトは部屋で何気ない会話をしていた

すると、フェイトはアリシアにある事を打ち明ける・・・

──アリシア、私ねお兄ちゃ・・エースの事が好きになっちゃった──

アリシア『そう、おめでとう！フェイト。私、応援するからね！』

笑顔でフェイトの恋の応援を宣言するアリシア

───うん！ありがとう。アリシア───

フェイト「（本当におかしいな・・応援してくれるって・・・言ったのに・・・どうしてアリシアは”私の”エースを盗っちゃたのかな・・・・・嘘つき）」

フェイトはそう思いながら夢の中で過去を思い出すのだった

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

そして夜が明け何時もの様に目を覚ますフェイト
起きあがって、ふと鏡を見ると・・・酷く歪んだ自分の顔が目に映った

フェイト「・・酷い顔・・」

フェイトは鏡に映った自分の顔を見ながらそう呟いた・・・。
その後、洗面所で顔を洗い何時もの様に朝食を取りにリビングに向かった
そこでフェイトは会いたくない人物・・アリシアと会う

アリシア「おっ・・おはようフェイト」

フェイト「・・うん、おはよう（白々しい・・）」

フェイトは席に座り無言で朝食を取り始める
アリシアが声を掛けるも今のフェイトには、アリシアの言葉の全てが憎らしく思える
そんな中アリシアは今のフェイト状態を知らない為、積極的に話しかけようとする

アリシア「あっ・・あのね、フェイト《ごちそうさま》あっ・・・」

フェイトは朝食を手早く食べ終えると先に学校に行ってしまった
残されたアリシアに様子を静観していたリンディが話しかけてきた

リンディ「一体どうしたの？フェイトのあの様子・・普通じゃないわよ・・」

アリシア「実はね、母さん・・・」

アリシアは昨日の事をリンディに話した

リンディ「最悪の形でバレちゃったって訳ね《うん》それにしても困ったわね・・こういう時に限ってエースは緊急出動で居ないし」

エースは昨日の夜アリシアとキスをした後に、ミゼット提督からの緊急指令により地球を離れていた

アリシア「それはエースが悪い訳じゃないよ・・それより私はどうすればいいのかな・・」

リンディ「そうね・・暫らくの間、静観して気持ちが落ちついたところで話し合うか、直ぐに話してじっくりと落ちつかせていくかのどちらかでしょうね、どっちにしても・・フェイトは傷つくでしょうけどね・・」

アリシア「・・・うん、そうだね。じゃあ私も行ってくる《行ってらしゃい》うん」

朝食を済ませたアリシアは学校に登校しに行った。
そしてアリシアは学校でなのは達にエースとの交際を打ち明けたなのは達は1名を除き取り敢えずアリシアを祝福した

だが内心なのは達が諦めて無い事はアリシアもなのは達の表情から分かった。
次に、すずかだが、彼女に至っては・・「だから何？盗られたのなら奪うだけだよ」・・とアリシアにエースの略奪を宣言するのだった
その後、アリシアは、なのはとはやてにあるお願いを言うのだった・・・・。
＊＊

海鳴神社：境内
アリシアはなのはとはやてにお願いしフェイトを連れてきてもらった
なのは達に連れて来られたフェイトはアリシアを見た瞬間・・顔を歪める
アリシアは息を飲みつつもフェイトに話しかける

アリシア「来てくれてありがとうフェイト」

フェイト「・・・用件は何？」

フェイトはアリシアを憎悪に満ちた顔で睨みつける
普段のフェイトとはかけ離れた変貌になのは達も息を飲む

なのは「（ふぇ・・・フェイトちゃん・・・？）」

はやて「（なっ・・・何があったんや！？）」

なのは達が驚愕してる中・・アリシアは話を続ける

アリシア「あのね、フェイト。私とエースの事なんだけ《黙れ》えっ？」

フェイト「黙れ工工工エ《くッ！》エエエエエッ！！」

フェイトはＢＤを起動させ瞬時にＢＪを装備しアリシアに斬りかかって来た！
アリシアはフェイトの斬撃を何とか避ける

なのは「フェイトちゃん！？」

はやて「何しとんねんッ！」

なのはとはやてが瞬時にＢＪ＆騎士甲冑を装備しアリシアの元に駆けつける
フェイトは、なのはとはやてが目の前に立ち塞がると・・・

フェイト「・・２人とも退いて、私は・・私のエースを奪ったそこの女を倒さないといけないの・・その為に２人を傷つけたくないの・・だから、退いて・・」

ＢＤ「Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ.」

フェイトはＢＤのフルドライブであるライオットブレードを憎悪に満ちた表情（かお）でアリシア達に向ける・・そんなフェイトを止めようとなのは達はフェイトに呼び掛ける

なのは「止めなよ！フェイトちゃん！」

はやて「絶対に、そんな事したらアカン！」

なのは達が呼びかけるもフェイトの表情は1つも変わらない

そして、フェイトは・・・

フェイト「・・2人も邪魔するんだね・・なら、倒すだけだよ≪止めて！≫・・何？」

アリシア「フェイトが倒したいのは私でしょ！？なのは達は関係ないでしょ！≪だったら早く、デバイスを構えなよ≫くっ・・アストライア！」

ＡＲ「Ｓｅｔ　ｕｐ.」

アリシアはＢＪに身を包み自身のデバイス、アストライアを剣の状態で起動させる

そしてフェイトの前に立ち剣を構え・・

アリシア「・・なのはとはやては結界をお願い・・」

なのは「アリシアちゃん！？」

はやて「何言っとんねん！≪お願い・・≫・・分かった、でも見てられなくなったら容赦なく割り込むからな・・」

アリシア「うん・・ありがと」

はやて「行くよ、なのはちゃん≪う、うん≫」

なのはとはやてはアリシア達から離れて結界魔法を展開する
そして、フェイトとアリシアは・・・

フェイト「・・私はあなたを倒して、エースを取り戻すッ！」

アリシア「・・エースの代わりにフェイト・・あなたを叱ってあげる」

フェイト「煩い！黙れ工工工エエエエエッ！！」

フェイトは怒声を上げながらアリシアに斬りかかって来た
こうして、２人の悲しき火蓋が切っておとされた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

アリシア・Ｔ・ハラオウン　ｖｅｒｓｉｏｎ２

フェイトの姉で明るく元気な少女
そして義兄のエースの彼女でもある
エースの彼女になった経緯は、フェイトの相談を受けてる内に段々とエースの存在が大きくなっていきついに・・フェイトよりも先にエースに告白
そして、告白は成功しアリシアは正式にエースの彼女となった
だが、フェイトへの後ろめたさからアリシアはエースとの交際を秘

密にしていた
しかし・・フェイトにエースとのキスの現場を見られるという最悪の形でフェイトにエースとの交際を知られる事になった

この世に、再び生を受ける際・・リインフォースと同じくセシィによりエースのリンカ―コアのクローンを与えられ魔力量はなのは達の中では最も高い

デバイスはアストライア
……
アストライア

エースの持つアストレアのコピー機

コピー機なのでスペック等もほぼ同一の物、
しかし・・アストレアは、エースの魔力や身体能力等も計算に入れて作られている為に

単純な複製機ではアリシアが扱う事はまず出来ない
その為にアストライアはわざとデチューンされて作られておりアリシアの成長と並行してその能力を徐々に解放していく仕組みになっている
アリシアに合わせて近接戦闘に特化した機体に仕上がっている
尚、アリシアはミッドチルダ式なので言語体系は英語になっている

フェイト・T・ハラオウン

こちらの世界のフェイトはエースへの依存がかなり強くなっている
数年前、アリシアにエースへの想いを打ち明ける
その後・・本来とは違いアリシアのアドバイスを参考にエースへのアタック等を積極的にしており、このアタック等がエースへの依存を大きくさせた
そしてアリシアに頻繁に相談した結果・・アリシアがエースへの想いを膨らませる事になってしまった

ＩＦアリシア４

海鳴神社：境内

神社の境内に響く金属音と火花

フェイト「このおおオオオ！《くっ！》返せ！返せ！返せぇ工エエエエエエ！！」

フェイトは我を忘れて何度も何度も長剣（ＢＤ）でアリシアを叩くアリシアは剣（ＡＲ）で防せいでるがＢＤの刀身に伴う高圧電流により、防御の上からアリシアに電撃によるダメージが襲う

アリシア「くううう！」

フェイト「エースを返せ！返してよぉ！」

フェイトの心の叫びがそのまま怒声となってアリシアへ浴びせられるその後も怒りに身を任せたフェイトの攻撃がアリシアを襲う

フェイト「何で！アナタは！アンタばっかり！エースに言葉が届くの！？私じゃなくて何で！アンタなのよ！絶対に許さないアンタだけはあああああッ！！」

アリシア「っ！（完全に怒りで我を忘れてる・・無理もないか・・）」

フェイトは最早アリシアの名前さえ呼ばなくなった

そしてアリシアは自分の過ちを後悔し複雑な表情を浮かべる

アリシア「（でも・・このままじゃあ殺(や)られる・・仕方ない）」

アリシアは長剣をシールドごと押してるフェイトを一旦払いのける
そして剣（ＡＲ）を天を指す様に構え・・・

アリシア「・・・Ａ(エース)・Ｂｌａｄｅ．発動ッ！」

ＡＲ「Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ．」

アリシアの剣がＡの文字の様な形の鍔を持った長剣へと姿を変える
長剣への変形後、アリシアはフェイトに向けて剣を構え直し・・

アリシア「・・いくわよ。フェイト」

フェイト「アンタが！エースの名前を口にするなぁアアアアッ！！」

フェイトがアリシアに向かい剣に殺気を込めながら迫ってくる
アリシアもフェイトに剣を構えながら向かって行く
そして、２人の剣が同時にぶつかり鍔迫の状態になる

アリシア＆フェイト「「ハアアアアアッ！！！！」」

互いの剣による斬撃魔法で２人の魔力がぶつかり合う
その凄まじい衝撃の中、フェイトはアリシアの僅かな隙をつく・・

フェイト「てやアアア《きゃッ！》アアアアッ！！」

僅かな隙を突かれアリシアはフェイトに吹き飛ばされる
その後、フェイトはアリシアの吹き飛んだ方を睨み付けながら

フェイト「・・・これで終わりね」

ＢＤ「Ｂｕｔ！《やりなさい》・・・Ｙｅｓ，　ｓｉｒ．」

フェイトはＢＤ構え直す
そして憎悪に満ちた表情を更に進化させ・・まるで全ての悪意を集めたかのような顔で

フェイト「うぅぅあああああああああああああ！！」

フェイトは剣を真っ直ぐに伸ばしアリシアを突き刺そうと向かって行く
アリシアは向かってくるフェイトに同じく突きの構えで迎え撃つ

フェイト「くたばれ工工工《Ｂｅｓｃｈｌｅｕｎｉｇｕｎｇ．》エエエエエエ！！」

フェイトとアリシアは同時に剣を交わらせようと剣を突き出すだが、お互いの剣は交わる寸前でフェイトやアリシアとは違う別の人物に突き刺さる

エース「なっ何とか間に合ったな・・」

ギリギリの所でＤＢからの緊急信号により駆けつけたエース
実は、ＢＤはこの戦いが始まった瞬間にエースに緊急信号を送っていた
エースはフェイト達の元に行く途中ＤＢに音声回線を開くように信

号送りＢＤの音声回線から聞こえるフェイトの悲痛な叫びに心を痛めつつ現場に駆け付けたのだった
そして２人の間に入ったエースはＢＤとＡＲに身体を貫かれその場所から大量の血が流れる

フェイト「えっ・・エース？」

アリシア「いっ・・嫌アアアアアアア！！」

目の前で起こった衝撃の光景に、フェイトは目を疑いアリシアは悲痛な声を上げる
エースはフェイトとアリシアの剣に貫かれながらもフェイトに語りかける

エース「ふぇ、フェイト・・ごっ・・ゴメンな《え？》フェイトの声を・・ハァ・・ハァ・・聞く事が出ッ来なくッてぇ・・これでもっ精一杯フェイトを愛していたっつもりだったんだけどな・・ほッ本当に俺は・・兄失格だな・・」

フェイト「ぞんな事無いよぉ！」

フェイトは泣きながらエースの言葉を否定する言葉の途中でフェイトが力を緩めた事に
よりエースに突き刺さってた剣が抜け落ちるそれと同時にアリシアの剣も抜け落ちる
そして、フェイトは口から血を流してるエースを抱きとめる
アリシアは放心状態のまま地面にへたり込む

エース「・・フェイト《喋らないで！》アリシアを許してッやってくれッ・・ハァ・・ハァ《え？》どっ・・どんなッ形であれ・・

フェイトを思っての行動だッ《分かったぁ！分かったからぁ！》恨むの・・ハァ・・フェイトの気持ちに気付けない俺、ひぃとりで・・いぃ・・・・・・・」

フェイト「エース？エース！？ねぇ！エースってば！？」

フェイトが大きな声で呼びかけるもピクリとも動かないエース

相変わらずアリシアは放心状態のまま地面にへたり込んだまま動かない

はやて「こっちゃ！シャマル！」

シャマル「っ！ひ酷い・・《はよして！》はっはい！！」

はやてに呼ばれたシャマルが急いでエースの応急処置を施す

その後、エース身体は意識の無いまま病院に運ばれた

＊＊

ハラオウン家：リビング

何時もは食事をとる席に放心状態のフェイトとアリシアが席に座っている

そんな中、なのは達から事情を聞いたクロノ、エイミィ、アルフはそれぞれ苦悩の表情を浮かべながら席に座り病院に行ったリンディの連絡を待っている

――TRRR・・・――

部屋に通信の音が響きクロノが通信を受け取る

クロノ「母さん！エースの容体はッ！？」

リンディ『エースは取り敢えず一命を取り留めたわ・・今は麻酔で眠ってるから連絡したの《そうですか・・よかった》今日は病院に泊まるからクロノは、明日フェイトとアリシアを連れて病院に来なさい分かったわね？《はい》それじゃあね』

リンディの通信が切れてクロノはアリシアとフェイトの方を向き

クロノ「分かったな？」

フェイトとアリシアは泣きながら静かに頷いた
そして翌日・・・
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

病院：エースの病室

昨日、アリシアとフェイトに突き刺されたエース
その事で管理局の上層部＝ミゼット提督が事情聴取に来ていた

ミゼット「では、貴方の怪我は”謎の襲撃者達”によるものでフェイト執務官とアリシア教務補佐官の証言は虚偽だと言うのですね？」

エース「はい、彼女達が何故、虚偽を言ってるのかは不明ですが・・真相は、今私が説明した通り・・恐らく、私の命を狙う輩達の仕業です。本当にフェイト執務官とアリシア教務補佐官が何故、虚偽の証言をしたのか理解しかねます」

ミゼット「ふふっ・・そうですか、じゃあフェイト執務官とアリシア教務補佐官には追って処分を言い渡しましょう・・それと余り年寄りを心配させないで下さいね」

エース「肝に銘じておきます」

ミゼット「それでは、私はこれで《わざわざ、ありがとうございます》いえいえ」

ミゼットが病室を出ていく
それから暫らく経って・・リンディが両頬に痣を付けたフェイトとアリシアを連れて病室に入って来た・・・。

エース「・・どうした？《私が殴ったのよ》かっ母さんが！？」

エースはリンディが殴ったと言う事に驚愕する
そして、視線をクロノに移すとクロノは無言で頷いた

リンディ「当然よ。事情を詳しく聞けば・・アリシアが、自分と同じ女として理解して無く好きな男の良い所とかを言ってアリシアを意識させたフェイトもフェイトだし」

フェイト「はうっ・・」

リンディ「エースの忠告を無視した上、フェイトにライバル宣言

もせずに黙って勝手に告白し付き合ったアリシアも悪い《うっ・・
》本当に、どっちもどっちよ。こんな事でエースが刺されたのかと
思ったら腹が立って取り敢えず殴らないと気が済まなかったわ！」

そしてリンディはフェイトとアリシアをエースの前に立たせる

リンディ「ほら！さっさと謝りなさい」

フェイト　アリシア「ごっ・・ごめんなさい」

フェイトとアリシアがエースに謝る
するとエースは・・・

エース「お前達は、仲直り出来たのか？《うん》そうか・・なら
よかった」

エースはフェイトとアリシアの仲が戻った事を2人の口から聞き安
堵の表情を浮かべる
その後、フェイトとアリシアの後に立ってるリンディが・・

リンディ「しなかったら、まだ殴ってたわよ」

エース「あはは・・」

リンディの怒気の籠った笑顔にエースは苦笑いを浮かべるしか無か
った・・・。
その後、エースは順調に回復していき退院し日常に戻っていった
因みにフェイトとアリシアの処分だが、エースがフェイトとアリシ
アの両名は自分の事件への関連性は一切無いと否定した為・・フェ
イトとアリシアの両名は偽証罪により4か月の謹慎処分となり”普

通の中学生” を満喫出来たそうだ・・・その後は・・・・。
＊＊

ハラオウン家：リビング

フェイト「はい。エース♪あ～んだよ《ちょ！？／／／》ほら」

アリシア「・・何やってんのよ？フェイト《アタックだよ？》人の彼氏を彼女の前で堂々と誘惑するなんていい度胸よね」

リビングで火花を散らすハラオウン姉妹。
エースの退院後、フェイトもすずかと同じく「盗られたのなら奪うだけ」とエースの略奪を宣言しアリシアが居る前でも堂々とアタックを掛けてくるのだった。

エース「これで、よかったのか？まぁ、どうでもいいか・・・。
（2人が笑ってるなら）」

火花を散らすフェイトとアリシアを見ながら言うエース
だが、その顔は嬉しそうに微笑でいるのだった・・・・・・・・・・・・。

IFプレシア家

エースはフェイトと一緒に学校から戻って来た
帰って来たエース達を出迎える???

???「お帰りエース、フェイト」

エース「ただいまプレシア母さん」

フェイト「・・・ただいま《どうしたの?》実はね・・」

返事に元気の無いフェイトそれを心配しどうしたのかを聞くプレシア
するとフェイトは・・・

フェイト「実はね母さん。またお兄ちゃんが例の手紙を貰ってね・
・断るのに苦労したんだ《またなの?》うん・・だから少し寝るね」

そう言ってフェイトは自室に行った
その後、プレシアはエースに近寄って行き

プレシア「余りフェイトを心配させないのッ!《イテッ!》全く
!」

エース「俺、何か悪い事したのか?」

デコピンをエースに軽くするエースは何故デコピンをされたのか全
く分からない様子。
そんなエースにプレシアは頭を悩ませていると・・・

？？？「ただいま～♪《お帰りアリシア》うん♪」

もう1人の娘のアリシアが少し遅れて学校から帰宅してきた
プレシアは帰りの挨拶をアリシアにして再びエースに話しの続きをしようとするが・・・

プレシア「あ、あれ？エースは？《エースならもう翠屋にバイトに行きましたよ？》全くあの子は《逃げられましたね。ふふっ》笑い事じゃないわよ？リニス」

リニス「あら、それは失礼しました」

プレシア「はぁ～それにしても何時もの事ながらモテるわねエース（主に父親の遺伝だろうけど）」

リニス「いい事じゃあないですか♪《そうかしら？》そうですよ」

プレシア「なら、良いんだけどね、さて私は、仕事をやろうかしら」

リニス「なら、私はアルフと買い物に行ってきますね《お願いね》それでは」

そして会話も終わってプレシアとリリスがそれぞれの役割をし始めた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

・翠屋：店内

一方その頃、エースは翠屋のバイトに精を出していた

エース「・・お待たせ致しました・・ブレンドになります《ありがとう、エース君／／／》いえそれではごゆっくりどうぞ」

エースは女性客にブレンドを渡し終わるとカウンターに戻ると店の主人の士朗とラスボスの桃子が話しかけてきた

士朗「お疲れ、エース君《いえ、》」

桃子（ラスボス）「今日もエース君のおかげで儲かるわ～♪うふふ～♪」

エース「は、はぁ」

士朗「ハハハ・・・。」

エースは何故自分のおかで儲かると言ってる桃子（ラスボス）の言葉が余り分かってない様子
そんな桃子（ラスボス）を見て士朗は苦笑いをするのだった
その時、なのはが店の手伝いに来た

なのは「あ！エース君♪もう来てたんだ《まぁな》そっか♪」

エース「そういうなのはは少し遅いようだな」

なのは「ちょっと居眠りしてたら遅くなちゃった《いや、寝るなよ》エヘヘ・・／／／」

エースのツッコミになのはは顔を赤くさせる
その後、エースの隣に来てエースに念話で話しかけてきた
なのは『エース君バイト終わったら時間ある？』
エース『大丈夫だけど？何故に念話？』
なのは『えっと・・デートしたいけど・・お兄ちゃんがね・・』
なのはがそう言うのでエースが横眼でなのはの自宅の方を除くと・・・
そこには恭也が”恨めしい！”という顔をしながらこちらを見ていた
エース「ははは・・・。」
そんな恭也にエースは顔を引きつらせながら苦笑いをするしか無かった
その後エースはなのはと一緒に翠屋で再びバイトを続行し始めた
＊＊

・プレシア家：プレシアの自室
プレシアは仕事を一区切りして休憩をしていた
その時、ある人物から連絡がきた
プレシア「あら？・・ビーナス。どうしたのかしら」
連絡をしてきた人物はエースの実母のビーナスだった

プレシアはビーナスの通信を受け取る

ビーナス『今、良いですか？《ええ》例の技術協力要請の件で連絡したのですが』

プレシア「それなら、大丈夫よ予定通りに話を進めてくれて問題無いわ」

ビーナス『分かりました。他の王にもそう伝えておきます。それでは《ちょっといい？》何でしょうか？』

プレシア「・・エースには未だあなたの事を伝えなくていいの？」

ビーナス『はい、言ってあの子を困らせたくありませんから・・それでは《ちょ》・・・・』

ビーナスはそう言うとプレシアが止めようとしたが先に切られてしまった

その後、プレシアも通信を切ると・・・

プレシア「エースは、貴女に似て強い子よ話してあげても良いんじゃないかしら？」

プレシアは1人、部屋でそう呟くのだった・・・・・。

プレシア・テスタロッサ

本編とは違い存命しエースの義母となっている
プレシアはある人物を通じてエースを引き取った
エースのおかげでプレシアはフェイトがアリシアとは別の人物と知っても彼女は正気を失わずに済みフェイトを自分の娘として育てている
辺境でフェイトを作った。数年後、もう一度真っ当な道を生きる事を決意しエースと巡り遭わせた人物を頼りその人物の計らいでミッドの中央技術開発局に復帰している
ジュエルシードが地球に散らばった際には、アースラに技術部員として参加した
その時に地球という星を知り住居を構えるほど気に入った。
現在はエース達の子育てに専念しつつ局の仕事をするという生活を送っている

アリシア・テスタロッサ

プレシアがフェイトを作った後にアリシアの入ったポッドをどうするべきか悩んでいた時
以前管理局に努めてた頃、知り合った女医ルイティアに相談したところ
ルイティアはプレシアの悩みを親身になって聞きアリシアを生き返す事を提案
それに提案にプレシアはダメ元でルイティアの提案を受けた結果
アリシアは無事に生き返る事に成功しエースの義妹になった

備考、ルイティアはセシィの母親である

フェイト・テスタロッサ

本編とは違いプレシアが育てると決めたので姓も変わっていない
こちらでもドが付く程のブラコンである
性格等は基本的に元の物語とそう変更点は無い

リニス

本編とは違いプレシアが存命し更に正気を失わずにいたので、存在している
フェイトのＢＤだけでなくエースとアリシアのデバイスもリニスが制作した
エースにとっては第２の母といった存在

エース・テスタロッサ

現在１４歳、時空管理局では執務官をしていて同じ執務官のクロノとは親友
ジュエルシードが地球に散らばった際にプレシアと一緒に地球に訪れる
そして、なのはと出会い数年後、彼女と恋人になる
性格等は基本的に元の物語とそう変更点は無し

高町なのは

ジュエルシードが地球に散らばった際に、ユーノの手伝いでジュエルシードの回収を手伝ってた時にエースと知り合い数年後、彼女と恋人になる
本編とは違い現在、彼女はエースの補佐官をしている

高町桃子

・ラスボス・・以上

高町士朗

・ラスボスの夫

高町恭也（ストーカー）

・シスコン
・「妹限定」のストーカー

IFプレシア家

・海鳴市：臨海公園

バイトが終わったエースは現在なのはとデートする為に公園で待ち合わせをしている
エースの到着から15分位遅れてなのはが到着し2人はデートを始める

エース「恭也（ストーカー）さんは追いて来て無いよな？」

なのは「大丈夫だよ、お兄ちゃんなら家で大人しくしてるから♪」

エース「マジで！？《本当だよ♪》珍しいな・・・」

なのは「じゃあ…はい」

なのはがエースに手を差し出す
差し出された手をエースはなのはの指を絡めるように繋ぐ・・・

エース「じゃあ・・行こうか？」

なのは「うん♪／／／」

高町家：恭也の部屋

なのは達がデート楽しんでる頃

なのは専門のストーカーはというと・・・

恭也「ウー！！ヴー！！！」

見るからにドMといった恰好をしていた
その理由はデートを妨害されない為に、なのはは出かける前、恭也を捕まえてロープで身体を縛り猿ぐつわを噛ませ部屋に放置し出かけて行ったから

恭也「（なのはあああああああ！！）」

流石は恭也（シスコン）といったところだ
こんな目に遭わされても未だ愛しの妹の名を叫んでいる

・海鳴市：臨海公園

なのはとエースは付き合って数カ月以上経っており”それなり”の関係も持っている
しかし何時まで経っても付き合い始めの様な感じで・・そう例えば・・・

なのは「エース君♪《何？なのは》呼んでみただけだよ♪／／／」

エース「なのは《何？エース君♪》呼んでみただけだ／／／」

・・・こんな感じに、自重して欲しいほどのバカップルっぷりだ
デートを始めて約1時間経ってるというのにベンチに肩を寄せ合いながら座り手は恋人繋ぎのままで未だにお互いの呼びあってるだけ

幸せな2人に対して自重しろと言っても無理な話なんだろが、自重して欲しいと思う・・・。

……

それから、暫らく経って2人は・・・お互いの顔を見つめ合い・・。

エース「なのは・・・／／／」

なのは「エース君・・・んっ／／／」

自然となのはとエースの口が重なる

始めの内は軽い口付けをお互いに何度も繰り返すものだったが次第に2人の口付けは激しくなっていき・・なのははエースの膝に跨ると更に、激しくそして情熱的な口付けを何度も何度もお互いの愛を確かめるかの様に繰り返す。

そして口付けが終わり唇を離すと、お互いの唇から唾液の糸が垂れ垂らした糸を取ると2人は桃色の雰囲気の中、会話をする

エース「ご、ごめん、やりすぎた・・／／／」

なのは「ううん、私はエース君に求められて嬉しいよ／／／」

エース「あ、ありがと／／／」

なのは「でも、これ以上は流石に公園(ここ)で無く・・・別の場所でお願い・・／／／」

エース「う、うん・・じゃあ、俺の家に来る?／／／」

なのは「うん・・お邪魔しちゃおっかな／／／」

２人はベンチを立ち上がり手を繋ぎながらエースの家に向かった
そんな２人は、自分達の結界の所為である重要な事をすっかり忘れていた
この場所がどういう場所かという事に・・・

…………………………………………………………………

…………

・海鳴市：臨海公園

買い物帰りに、少し公園に寄ってたはやてとヴィータとシャマル
そこで３人は強烈な光景を目撃する

『なのは・・・／／／』

『エース君・・・んっ／／／』

はやて「すごっ・・・／／／」

ヴィータ「何で、シャマルは私の目を塞ぐんだ？」

シャマル「ヴィ、ヴィータちゃんには、まだ早いのッ！／／／／」

その後もはやて達はエースとなのはの行動を隠れて観察するのだった
ヴィータを除いて
＊＊

・プレシアの家：エースの部屋

家に帰って来たエースはなのはを部屋に連れ込み直ぐに部屋の鍵を掛ける
その後、2人はエースの部屋のベッドに座ると・・・

なのは「エース君・・来て／／／」

エース「なのは・・んんっ／／／」

・・・なのはとエースは、直ぐに口付けをする
その口付けは公園の時とは違い始めから激しく情熱的な口付けを何度も繰り返す
2人の口付けの激しさは苛烈を極めていき・・・

エース「なのは・・・いいか？」

なのは「うん・・・いいよエース君・・来て／／／／／」

・・・一時的に口を離すとエースはなのはに行為を求める
なのはの同意の言葉を期にエースの理性が飛ぶ
そしてエースはなのはを、なのははエースをお互いを求め合いながら激しくベッドを軋ませ・・部屋になのはの喘ぎ声を響かせながら何度かその行為を繰り返した・・・・。

・プレシアの家：プレシアの自室

なのはとエースが部屋で行為に夢中になってる時
プレシアは自室で本を読んでいた・・そんな時

『・・スっ・・・君・・・・！』

『・・・・のは！』

・・・隣のエースの部屋から壁から声が漏れ聞こえる
その声を聞いたプレシアは・・・

プレシア「・・若いわね～♪もうすぐ私もお婆ちゃんかしら」

・・・等と言っていた
プレシアが1人で老けこんでいるとリニスが部屋に来た

リニス「もう少しで食事の用意が出来ますよ。プレシア」

プレシア「リニス食事の時間だけど遅らせる事は出来ないかしら？」

リニス「何故です？」

リニスは頭を傾けてプレシアに理由を尋ねる
するとプレシアはリニスに

プレシア「理由は、そこの壁に耳を当てれば解るわ」

リニス「？　はぁ・・・」

リニスはプレシアに言われた通りにエースの部屋の方の壁に耳を当てる
すると・・壁から漏れ聞こえる声にリニスは

リニス「わわわ、わっかっり！ました！食事の時間をお遅らせます！／／／／／」

リニスは恥しさを隠す様に急いで部屋を飛び出していった
そして、部屋の外で『みゃあ！？』といった声の後に誰かがこけた様な音がした

……

・プレシアの家：リビング

エースとなのはは行為を終え息を整えつつ余韻に浸っていると・・・。

リニスが夕飯の支度が出来た事を知らせに来た。
その後、２人は服を着直しリビングに食事を摂りに向かった
そしてなのはも交えてリビングで食事を摂ってるとプレシアが・・・

プレシア「ねぇ、なのはちゃん《何ですか？おばさん》もう♪お義母さんで良いわよ♪それよりも、式は何時にする？《うおおおおい！？》」

なのは「えっと・・１６歳になったら直ぐにしようかと・・お、お義母さん／／／／」

エース「お前も答えるなあああ！」

なのは「でも！それまでにもし・・・が出来ちゃったら・・直ぐに結婚します／／／」

エース「うおい！何ぶっ《お兄ちゃん？》な、何でしょう？フェ

イトさんにアリシアさん」

エースの背後に立ち強烈な殺気を放ちながら
左右の腕を掴み上げて・・・

フェイト&アリシア「説明・・・」

エース「あ、あのですね！お二方・・・・・・・」

・・・フェイト達はエースに説明を求める
2人に対しエースは冷や汗を滝の様に流しながら必死に説明（いいわけ）をする
騒がしくする我が子達の様子を見ながらプレシアは・・・

プレシア「・・・ふふっ♪幸せね私達家族は♪」

・・・優しく頬笑みながら静かにそう言うのだった・・・・・・・・・・。

――ＩＦプレシア家ｅｎｄ．――

ＩＦハラオウン家

エースは久しぶりの長期休暇が取れて地球の実家に帰省することにした
これでゆっくりと休む事が出来ると思いつつ自宅のドアを開ける・・
すると・・・

エース「ただいま～・・って・・。え？」

ビーナス＆リンディ「おかえり♪エース」

・・・2人の母がエースを出迎えた
そしてエースは2人を見た瞬間『休めないな』と思った
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・ハラオウン家‥リビング

エースは、玄関を入ると直ぐにリンディとビーナスに問答無用で捕獲されリビングに連れて行かれ強制的に椅子に座らせリンディとビーナスが両サイドを固める
その行動は、まるで何処かで訓練でもしたんじゃないかという程にシンクロしていた

ビーナス「はい♪エース、あ～ん」

リンディ「こっちよ、エース♪あ～ん」

エース「ハハハ・・。（だ、誰か助けてくれ・・）」

心の底からエースは助けを求めた・・・。
そんな時、エースに救いの女神？が現れた！

？？？「…何やってんの？エース」

エース「ふぇ、フェイト丁度良かった！助け…」

エースは自身の状況も知らずにフェイトに助けを求めた
現在エースは・・片方にリンディもう片方にビーナス２人の美人が胸を押し当てるようにしてエースを掴み更に、『はい♪あ～ん』攻撃をしている
この状況に、フェイトは・・・

フェイト「…ちょっと、エース借りますね♪」

エース「え？い、何時の間に…？」

何時の間にかエースを２人から奪い取っていた
そして、フェイトはエースを片腕で持ち上げ鬼の形相でエースを脅迫（せっとく）する

フェイト「エース…ちょっと話があるんだけどいい？《あの…》良いよ・・ねッ！」

エース「ひッ！《じゃあ・・こっちに来て…》うわあああああ！」

エースはフェイトに引き摺られて奥の方に逝った
残された、リンディとビーナスは・・・

ビーナス「少し、やり過ぎかしら？」

リンディ「大丈夫、何時もの事よ」

・・・と言っていた
この時のリンディの発言にビーナスは何時もエースはフェイトにお仕置きされてるのかと少し不安になっていた

・ハラオウン家：フェイトの部屋

エースはフェイトに部屋に連行され・・・

フェイト「…どういうことかな？」

エース「さぁ？わ、私にも分からないのですが《本当に？》は、はい！なのでデバイスを首に突き付けるのは止めて下さい…」

フェイト「…はぁ、分かった許してあげる」

・・・部屋に着いたと同時にバインドで縛られる
その後、ＢＤを首に突き付けられて尋問という名の脅迫を受ける
フェイトはエースが嘘を言って無い事が分かるとバインドを解除しＢＤを待機状態に戻す

エース「とんだ災難だよ。全く《だって》だってじゃない・・・ったく・・大体、考えてみろよあの２人は”親”だぞ？お前の考え

てる様な事はねーよ」

フェイト「それでも彼女としては、不安になるの！《じゃあ、どうすりゃあいいんだよ？》行動で示して安心させてよ・・・」

そう言い終わるとフェイトは目を瞑り口を突き出す
エースはフェイトの行動にため息を一度吐き覚悟を決めた後・・・

エース「・・・んっ／／／」

フェイト「・・んんっ／／／」

・・・フェイトにキスをする
その後、エースはフェイトを抱き寄せた後、２人はお互いに抱きしめ合う
そして、その状態ままベッドに倒れ込み・・その後、ベッドを激しく軋ませるのだった

・ハラオウン家：リビング

フェイトがエースを拉致って数時間後・・。
ビーナスは、リンディから衝撃の事実を告げられていた

ビーナス「…ふぇ、フェイトちゃんとエースが…つつ、付き合ってるぅ！？ほほほ、本当なんですか！先輩！《本当よ♪》いいい、何時からですか！？」

リンディ「どうやら内緒にしてたみたいでね…私も始めは、なの

はさんから聞いたのよそれで本人達に確認したのが、1週間前なのよ」

ビーナス「じゃあ…まだ付き合って間もないって事ですか？《それがね～♪》ふぇ？」

リンディ「本人達に確認した時に何時頃に付き合ったのか聞いてみたら《み、みたら？》もう付き合って”5年”になるんですって《なっ》～♪」

ビーナス「何ですって――――――――――!？」

リンディ「もう”5年”も付き合ってるんだから・・後は、もう結婚だけなんだけど今のところ本人達は赤ちゃんが出来ない限りはしないって言ってたわ」

ビーナス「あ、赤ちゃん!？ふぁ・・・め、目眩が《ちょっと・・大丈夫？》ダメ・・・・」

リンディ「ちょ！ビーナス！？」

ビーナスはエースが女の子と付き合ってる事に衝撃を受ける
しかし、それ以上に衝撃を受けたのはエースが経験済みという事だった
それにショックを受けたビーナス気絶した・・・・・・・・・・。

エース・ハラオウン　１８歳

本編との変更はビーナスとの和解、フェイトが彼女という以外は変更は無し

リンディ・ハラオウン

エースの義母、性格等は本編と余り変更無し
ビーナスがエースを迎えに来た時、ビーナスとエースを引き合わせ仲直りさせた人

ビーナス・Ｌ・サディア

エースの実母

残党貴族達を全て処理した後、エースを迎えに行った時にリンディがビーナスに気付き
エースと引き合わせ、その後見事に和解している
現在は、不定期だがちゃんとエースと会っている
偶に、地球のエースの実家に泊まりに来たりもしている

性格は、アナザーの性格を更に
拍車を掛けた物
具体的には・・・見たまんま

フェイト・T・ハラオウン　17歳

こちらではエースの彼女
12歳の時にエースに告白して付き合い始める
付き合ってた理由を内緒にしてたのは”気付いた反応が面白いから”らしい
因みに、なのはには付き合い始めて3日目でバレた

ＩＦハラオウン家

・ハラオウン家：リビング

フェイトとの行為を終えたエースはフェイトと一緒にリビングに向かった
そこではリンディは食事の用意をしビーナスは椅子に座ったまま気絶していた、そんな何とも言えない状況にエースは・・・

エース「ど、どうしたの？ビーナス母さん」

リンディ「それがね～エースがフェイトと付き合って関係も済ませてるって聞いたら・・」

エース「あぁなったと？《えぇ》な、何じゃそりゃ・・・」

エースビーナスの気絶の理由に呆れた顔をする
因みに、フェイトは気絶してるビーナスが珍しいのか指で突いてる

エース「てめぇは何時まで突いてんだ《はぅ！》ったく・・」

何時までも突くのを止めないフェイトにエースは軽い力で頭を叩く
叩かれたフェイトは可愛らしい声を出した後にエースに振り向く

フェイト「だって・・珍しかったし《それは確かに、そうだが・・》」

エース「だからといって突き過ぎだ《は～い》・・ビーナス母さんもいい加減に起きろッ《みゃ！》おはよう、ビーナス母さん」

ビーナス「おはよう・・エース。っ！そう言えばエース！あなたフェイトフェイトちゃんと付き合ってるって話な《みんな～ごはんよ～♪》」

エース「先に、ご飯にしようよ《そうね・・・》」

ビーナスはエースにフェイトとの事を聞こうとするが・・丁度良い所で邪魔が入る

その後、食事中は珍しく会話が少なかった

＊＊

・ハラオウン家：リビング

食事後リビングでエースとフェイトはビーナスから質問を受けていたビーナスの質問の内容は当然・・・

ビーナス「・・何時からなの？《何が？》何時頃からフェイトちゃんと付き合ってるの？」

エース「俺が１３の時だから・・もう５年だな」

ビーナス「はぁ・・幻聴いや・・聞き違いじゃあ無かったのね・・」

ビーナスはリンディの言った事とエースの言った事が合致し落胆する

エースは何故、ビーナスが落胆するのか全く分からず困っていた

そんなエースを余所にビーナスの質問は続く

ビーナス「・・・そのフェイトちゃんと・・しちゃったの？／／／／」

ビーナスはリンディから既に聞いていたが信じる事が出来ず
エースに直接聞いてきた・・がリンディは嘘を言っては無無いので・・・

エース「したよ？《はぅ！？》もう何十・・いや何百も」

フェイト「ちょっと！エース何言ってんの！？／／／／／」

エース「・・だって隠す事でもないだろう？・・ってビーナス母さん？」

エースはビーナスの方を向く
すると、そこには見るからに落ち込んでるという雰囲気を出したビーナスが・・・

ビーナス「・・・エースがとっくに汚れていたなんて・・・」

エース「何を言ってんだ・・アンタは」

ビーナス「言葉使いも汚くなって・・・うわあああああん！」

エース「もう・・勝手にしてくれ《ちょっと！エース！》悪い、後は任せた・・・フェイト」

フェイト「えええええ～！？」

エースは何故ビーナスが落ち込んだが分からない上、号泣までし始める始末
もう何が何だか分からないエースはフェイトにビーナスの事を任して自室に逃げた
そして残されたフェイトは押しつけられたビーナスの相手をする

フェイト「ほ、他に質問はありませんか？”お義母さん”」

ビーナス「だるれが《ヒッ！》あああ！”お義母さん”よおおおお！」

ビーナスの心からの叫びにフェイトは少し怯える
更に、ビーナスのフェイトに対する怒声の攻撃が続く

ビーナス「いい！？私ぃは未だ貴女を認めないからねッ！」

フェイト「じゃあ・・どうすれば”お義母さん”は認めてくれるんですか・・・？」

ビーナス「だぁ～かぁ～らッ！だるれがあああああ！”お義母さん”よおおおおおッ！《だ、だって》・・・はぁ、もう・・いいわ」

ビーナスはいきなり悟りを開いた様な表情になるとフェイトに対しこう告げる

ビーナス「・・どうせフェイトちゃんにしてもエースにしても”別れろ”って言ってもどうせあなた達は聞かないでしょ？《はい》即答しないでよ・・・。」

ビーナスはそう言った後に深いため息を吐く
その後ビーナスは諦めた表情になり

ビーナス「・・少し認める時間を頂戴(はい・・)ありがと・・」

ビーナスがそう言うとフェイトは席を立ってリビングを後にする
その後、フェイトの居た席にリンディが座る

リンディ「エース離れ出来そう?《さぁ?どうでしょう》私は出来そうに無いわ♪」

ビーナス「しつこい母親は嫌われますよ?」

リンディ「それはお互い様でしょ?《そうですね・・》それでどうするの?」

ビーナス「・・・明日、”義娘候補”のフェイトちゃんからエースを借りて・・・」

リンディ「面白そうね♪それ私も仲間に入れてよ♪」

ビーナスは明日の予定をリンディに伝える
するとリンディは目を輝かして自分も明日の予定に参加する事をお願いする
そんなリンディにビーナスは・・・

ビーナス「・・・ダメって言っても無駄なんでしょ?《そうよ♪》はぁ・・・」

リンディ「明日が楽しみにね~♪」

ビーナス「ソウデスネー」

・・・諦めた顔をしてそう呟いた

そして、夜が更けていく・・・・・・・。

ＩＦハラオウン家

・翠屋：店内

翌日エースが起きるとビーナス＆リンディが翠屋に来いと机の上にメモが置いてあったので余り気は進まないもののエースは翠屋に足を運んだ

エース「・・・どうしてこうなった？」

ビーナス「どうしてでしょうね～♪」

リンディ「ふしぎよね～♪はい、あ～ん♪」

リンディはエースに一口大のケーキをフォークに刺して差し出すこうなったリンディに対しエースは止める術を持っていない為・・・

エース「あむ・・《どう？》美味しいです」

リンディ「そう♪よかったわ」

・・・リンディのはいあ～ん攻撃を素直に受けるエースそんな２人の美女に囲まれてるエースをどす黒いオーラを放ちながら睨みつける３人の女性達が居る・・その女性達とは・・・

フェイト「・・また・・なのかな～♪エース」

なのは「おかしいなぁ・・エース君は”私の彼氏さん”なのに・・

」

はやて「なのはちゃん・・何言うとんのエース君は私の彼氏やで？」

フェイト「2人とも言ってる意味が分からないよ・・エースは”私の彼氏”なんだよ？いい加減諦めなよ・・それに”私とエースは確実に結ばれる”運命なんだよ？」

なのは「フェイトちゃんがどんな秘策を企ててようと破れば良いだけだよ・・」

はやて「そういうことや」

フェイト「ふふっ・・楽しみにしてるよ2人供♪（まぁ、2人には絶対に不可能だけどね）」

3人は何時の間にか誰がエースの彼女かで揉め始めていた
因みにフェイト以外の2人とは手を繋いだ程度の関係。しかもエースからでは無い
そして険悪な雰囲気の中・・3人に翠屋のラスボスの桃子が話しかけてきた

桃子「・・ねぇ、みんな睨み合ってるところ悪いんだけど・・エース君とリンディさん達・・もう商店街に行くと言って出て行ったわよ？」

桃子（ラスボス）にそう言われて一斉にエースの居た席の方を見る3人
そこには既にエースとリンディ達の姿は無かった

３人「何ッ！？・・・しまった（しもうた）！！」

３人は直ぐに立ち上がり急いで商店街の方に向かって行った

****

海鳴市内：ファミレス店内

何時は和気あいあいとした雰囲気の店内は、何時もと違って男性客達の嫉妬で満ち溢れていた・・その原因は・・・

リンディ「はい♪あ～ん♪」

ビーナス「こっちよ♪エース、はい♪あ～ん♪」

エース「・・・はぁ（誰か、助けてくれ・・）」

エースは溜め息を吐いて心の中で助けを求める
そんなエースに対して男性客達の嫉妬の目線が突き刺さる
そして、エースは誤解を解きたいので耳を澄ませて男性客達の声を聞いてみた・・・

『あのクソガキ・・美女を2人も連れてどういうつもりだ！？そこ変われ！』

『リア〇、爆発せよッ！』

そんな声が聞こえてくる

こんな中で”この2人は親です”と言っても誰が信じるのだろうか？
エースは周りに味方が居ない事に絶望した

エース「（何で俺がこんな目に・・）はむ・・《どう？美味しい？》えぇ、美味しいです・・」

エースは内心諦めて2人の攻撃を素直に受ける事にした
そんなエースに男性客達の嫉妬の目線が更に強くなってエースに突き刺さる
そうして嫉妬の目線を受けつつエースはファミレスでの時間を過ごしていくのだった
その後、男性客達の殆んどが居なくなり・・リンディ達の攻撃が一段落した後、ビーナスがエースに話を始めた

ビーナス「・・昨日、フェイトちゃんと少し話してみたんだけど・・エースはフェイトちゃんとの将来の事を考えてる？《勿論》・・そう」

エース「でも、どうしてそんな事を？」

ビーナス「昨日ね、フェイトちゃんに”お義母さん”って呼ばれてね《・・激怒しのか？》うん」

エース「はぁ・・」

エースはビーナスの行動を予測出来たのか深いため息をつく
ビーナスはエースが深いため息をした事が分からず理由を聞いてくる

ビーナス「な、何でため息なんてするの！？」

エース「そりゃあなぁ・・女が俺に冗談でちょっかい出そうとすると・・小さい子でも容赦なく睨みつける人だからな・・貴女は」

ビーナス「そ、それは！エースの顔が悪いのよ！《失礼だな！アンタ！》あぁ、言い方を間違えた。ゴホンッ・・エースはね、あのバカに似た雰囲気を持ってるからねどうしても女の子の方から寄って来るの・・でもエースは”私に似て”優しい部分もあるからね♪女の子無理に断る事なんて出来ない筈。そうでしょ？《いいや？》だから、私がしっかり見張らないとねッ♪」

エース「・・さり気なく親父をバカにしてないか？《いいや、堂々とバカにしてるけど？》するなよッ！アンタの夫だった人だろ！？・・ったく・・話が逸れかかったけど、母さんはフェイトの事認めてるの？」

ビーナス「・・何時から私がフェイトちゃんを試してるって分かったの？」

ビーナスは驚いた表情を浮かべながらエースにそう尋ねるするとエースはビーナスにこう言った

エース「昨日フェイトが”お義母さん”って呼んだ次の日に俺を引っ張り回す・・翠屋でフェイトが睨んでたのは気付いていたんだろ？後《向こうの店からのもでしょ？》まぁね・・で、どうなの？フェイトは母さんの期待に応えられそう？」

ビーナス「さぁ、どうかしら・・でも・・エースに嫌われたら嫌だから彼女の事は認めてあげるわ。これでいいかしら？エース」

エース「・・へぇ、気付いてたんだ認めなかったら俺が反発する

って」

ビーナス「まぁ、これでも一応母親ですから」

リンディ「さて！話も一段落した事だし次の場所に行くわよ♪」

エース「まだ、行くの！？っていうかビーナス母さんは帰らなくて良いのかよ！？」

ビーナス「大丈夫よ♪来週のエースの誕生日まではこっちに居るから♪」

リンディ「そういう事！それに大人のデートは夜からが本番なのよ♪」

エース「嫌だあああああ！！」

この後エースはリンディとビーナスに色んな場所に一晩中連れ回されるのだった・・・。

余談だが、次の週・・フェイトはエースの誕生日の日、エースに子供を身籠ってる事を打ち明けてビーナスはめでたく？フェイトの義母になってしまうのはまた別のお話・・・・・。

義妹ティアナ編

・機動六課女性寮内：ティアナ＆スバルの部屋

ＪＳ事件も一段落したある日、ティアナ宛てにある人物から1通のメールが届く
ティアナはメールを開いて内容を確認すると・・・

ティアナへ

明日、本局に戻って用事を機動六課に様子を見に行きます。
”フェイトにもちゃんと伝えておいて下さい”

エース・ハラオウン

・・・そのメールの差出人はティアナが恋い慕っている義兄エースからだった
その後、ティアナは端末を閉じると・・・

ティアナ「イヤッッホォォォオオォオウッ！！」

・・・奇声を上げて喜んだ
突然奇声を上げるティアナに同室のルームメイトでコンビを組んでる相方のスバルは目を丸くしながらどうしたのか聞いてきた

スバル「ど、どうしたの?ティア　どこか具合が悪いの?」

ティアナ「違うわよッ!バカスバル。　エース義兄さんが明日、此処に来るのよ♪」

スバル「エースさんって確か、ティアとフェイトさんの義兄さんの?」

ティアナ「・・そ、そうよ」

スバルは訓練校時代に一度、ティアナからエースを紹介され面識がある
その時スバルの印象は”カッコ良くて綺麗な優しいお兄さん”という印象

スバル「そっか~♪だからティアはエースさんに会える事が楽しみで喜んだんだね~《な、何よ?悪い?》ううん全然♪エースさんか~またカッコ良くなってるのかな?／／／」

スバルはエースの事を思い浮かべながら頬を赤くする
ティアナは頬を赤くしたスバルに反応し忠告をする

ティアナ「スバル言っておくけど・・エース義兄さんは、私のモノよ?分かってるの?」

忠告するティアナは禍々しい程の殺気をスバルに放つ
更に”私の義兄さんに手を出すな”と怒気を籠った目でそう言ってる

スバル「テ、ティアはそう言うけどエースさんって確か＊＊＊と付き合ってるんでしょう?それなのにティアのモノって何かおかし

くない？」

そんなティアナにスバルは、ティアナの殺気＋怒りの目に耐えながらエースに彼女が居る事を言ってティアナの怒りを逸らそうと試みるが・・・

ティアナ「・・確かに今のところは＊＊＊が兄さんの彼女って事だけど＊＊＊は未だ兄さんの妻では無いのよ？だったら未だ私にもチャンスはあるでしょ？《いや、流石にそれはな・・》あるわよね？《ヒッ！》あるって言いなさいよ・・・。」

・・・成功せず逆にスバルはティアナの放ってる殺気を倍増させてしまった

ティアナの殺気は禍々しさを通り越して清々しいオーラに変化した

スバル「う、うん。ある！あるよ！ティアにもエースさんの妻になれるチャンスが！」

ティアナ「うふふ・・。ありがとうスバル♪（・・にしても兄さんは、明日どうしようかしらミッドに久々に帰ってくるのだから泊まるのもミッド内だろうし・・。もし兄さんが、六課に泊まる場合は私の部屋に泊まってもらうとしてその場合・・勿論、スバルは部屋から無理矢理にでも追いすのは確定として・・問題は兄さんとどうやって”夜を供にする”かなのよね・・幸いにも明日は危ない日♪・・そう、既成事実を作るには絶好の日！・・さて、イロイロと作戦を考えないとね・・そう、イロイロと・・・ね）」

素晴らしい笑顔のティアナはエースとの対面を楽しみにしつつ作戦を考え始めた

そしてスバルはそんなティアナを引きつった顔で見ていた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

同じ頃・・・。

機動六課：部隊長室

六課の部隊長室では、はやてがある人物と通信で話していた
そのはやての通信相手とは・・

はやて「ふ〜ん・・するとアレか？”エース君”は妹のティアナにはちゃんとメールするのに”彼女の私”へのメールは忘れるんか？」

・・・フェイトやティアナの義兄のエース・ハラオウンだ
はやてが言った様に、エースとはやては恋人同士

エース『だから悪かったって言ってるだろう？《嫌や、許さへん》じゃあ、俺は一体どうすれば良いんだよ？俺に出来る事なら何でもするから許してくれよ』

エースはうっかりとはやてへのメールを忘れた為に彼女の機嫌を悪くさせていた
ご機嫌斜めなはやてにエースは困ってまう

はやて「・・・ホンマに何でもするん？《ああ》・・分かった、明日までに考えておくわ」

エース『りょ～かい《エースさんッ！トイレで通信しないで下さい！！って何度言えば分かるんですか！》あッ！悪い、これで切るわ』

自分の部下に注意され急いで通信を切り終わるエース
その後、はやても通信パネルを閉じ通信を終える

はやて「はぁ～・・。えらい静かな場所から通信してると思ってたら・・トイレからかいなもうちょっと場所を考えて通信すればいいのに」

エースのした行動に対して呆れた言葉を語るはやて
しかし呆れた言葉とは裏腹に彼女の顔は微笑んでいた・・・・・・・・・・。

ティアナ・R（ランスター）・ハラオウン

本来は天涯孤独の身だが、こちらではエースの義妹になっている
エースとの出会いは、実兄ティーダの殉職した際・・彼が所属していた部隊の元上官はティアナの居る前で無能扱いする
しかし元上官は、ティーダの葬儀に来ていたエースに”無能扱い”の発言を聞かれて・・見るも無残な程に顔面を形状変化させられてしまう
その後、元上官はエースに後頭部を踏みつけられ地面とキスし泣き

ながらティアナへティーダの”無能扱い”を取り消した
そして、エースはティアナと話をして天涯孤独の身と知り彼女を引き取り面倒をみた
引き取られた後ティアナは徐々にエースを意識しはじめ今ではベタ惚れ状態。
エースがはやてと付き合うと聞かされた時にティアナは、かなりのショックを受けるが”付き合ってはいるが結婚してる訳ではない”のではやてからエースを略奪する決意を固めて現在は、あの手この手で略奪を試みるもはやてに阻まれ失敗に終わってる
夢は本来と変わらずに執務官になる事
因みに六課に入った理由は”エースの推薦”だからしい

八神はやて

こちらではエースの彼女になってる模様
中学の卒業式後、フェイトの卒業式を見に地球に来ていたエースにはやてから告白し付き合いを始めて現在は付き合ってもう4年になり結婚も視野に入れている
だが、なのはやフェイトそしてティアナ等・・未だにエースを狙う女性が数多くいる為に嫉妬等が絶えないらしい
その他にもエースは任務でかなり危険な場所にも行く事が多く安否の心配もしているので気苦労も絶えないようだ

エース・ハラオウン

本編とは違い彼女のはやてと2人の義妹にティアナがいる

ティーダの葬儀の際エースはティアナと話をして天涯孤独の身と知り彼女を引き取ると決め時に始めエースはティアナを義娘として迎えるつもりでいたがエースの年齢が１４と幼かった為に義娘としてティアナを迎えるのは不可能とされた
エースは義母のリンディにこの事を相談したところリンディは自身がティアナの養母になる事をエースに提案しその後、ティアナはエースの義妹として迎えられた
因みにティアナの訓練学校の費用等は全てエースが支払いだがティアナにはその事を一切知らせおらずティアナはリンディが支払ってると思っている

義妹ティアナ編

・機動六課：隊舎前

翌朝エースは約束通りに機動六課にやって来た
そして隊舎の前で待ち合わせをしてると思われる女性が居た・・

エース「・・誰かを待ってるんですか？お嬢さん」

女性「あ・・うん♪私の彼氏を待っとるんよ♪・・・久しぶりやね・・エース君／／」

エース「元気だったか？はやて」

その女性・・はやてがエースに気付き飛びついてきた
エースは飛びついてきたはやてを抱きとめそのまま抱きしめる
少しの間2人は抱きしめ合った後

エース「そろそろ・・六課を案内してくれるか？はやて」

はやて「うん♪ええよ♪・・でも、その前に・・えいっ！《うわっ！？》えへへ～♪／／／」

はやてはエースの片腕に飛びつき自分の腕を絡める
そして手もしっかりと自分の指とエースの指を絡めて恋人繋ぎにする

エース「じゃあ・・エースコートよろしくな。部隊長さん」

はやて「任しとき！」

はやてがそう言うと2人は腕を絡め恋人繋ぎをしたまま六課に入って行った

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

・機動六課：部隊長室

ある程度に六課を回ったエースは部隊長室に連れて来られた
そこでエースは、はやてから六課で起こった出来事などを聞いていた

はやて「・・って大体、こんな感じやね」

エース「・・ふ～ん　それにしてもなのはとティアナが喧嘩ねぇ～・・。珍しいなフェイトとティアナなら別に珍しくは無いんだがな」

はやて「解決したから良かったけど、流石にあの時は焦ったわ」

エース「お前が焦るとは・・俺はそっちにも驚きだよ《・・バインド》ふぇ？」

ソファーに座るエースは両手を上げて手を曲げてヤレヤレといった態度を示す
それを見たはやては椅子から立ち上がると同時にエースの両腕にバインドで拘束した
後、部屋の鍵をロックし防音用の魔法を展開する

その後はやてはエースの前にやって来てエースの膝の上に対面するように座ると・・

はやて「そんなふざけた事を言うのはこの口か?あぁん?」

エース「ふぁ、ふぁやへはん・・い、いふぁいれす」

エースの両頬を引っ張りながら少し棘のある口調で注意するはやてはやての表情は微笑んでるのだが口調からも分かるように機嫌は少し悪いようだ
彼女はエースの両頬を引っ張りつつ少し棘のある口調を続ける

はやて「うっさいわボケ!大体、久々に会ったと思えば・・私という彼女の存在を目の前にしながら・・おのれは、まずは妹の話しかいな?偉いええ度胸やな・・ああん?」

エース「こ、こわいれふよ?ふぁやへはん・・」

はやて「恐い以外にかける言葉があるやろうが・・そうは思わへんか?エース君?」

そう言うはやての表情は先程と同じく微笑んでるのだが・・・。
纏ってるオーラに殺気が籠っている・・まるで”さっさと謝れやッ!”と言ってるみたいに

エース「ふ、ふみまふぇん・・ふぁやへはん・・」

はやて「・・それは何に対しての謝罪や?エース君♪」

エース「ふぁやへはんのまへで、へいととふぃあなの事ほ言った

ほほにふいてへふが《・・他には無いんか?》・・・・ふぇ?」

エースは、はやてに”他に無いのか?”と聞かれて悩む
何故、悩むのかというとエースは浮気とかは一切無いのだが・・その他の事でイロイロと多くの嘘を吐きまくる

はやて「・・もう、この際やから全部言ってしまい」

エース「(え~っと・・何があったけ・・?ヤバイ本気で思い出せない・・・)ふむむ~」

はやて「はあ~・・《ふみゅ!》・・・ふんっ」

エースは心当たりが有り過ぎて思い付く事が出来ず険しい表情になっていく
そんなエースの反応にはやては、大きなため息をついた後に両頬を引っ張ってた手を
放した後に左手に拳を作りエースの左腹部に少し強めの拳打を入れると・・・

エース「うぐっうううううううう!!?」

・・・エースは物凄い苦しみの声を出しながら顔を下に向ける
幾らはやてが少し強めの拳打を入れたといっても、そこまで苦しむものではない
では何故、エースが物凄い苦しみの声を出したのかというと・・・

はやて「・・エース君?”また”私に怪我した事を黙ってたな?」

・・・エースは怪我をしていたからだった

そしてはやては未だに苦しんでるエースに話を続ける

はやて「怪我だけはちゃんと教えてくれって私、言うたよな？《えっと・・》言うたよな？《言いました・・はい》な・の・に、どうして黙ってたんや？」

はやてはエースに優しい笑顔で問いかける
しかし彼女の優しい笑顔エースにとっては何よりも恐かった
はやてはエースの返答を待ってるのか優しい笑顔のまま黙っている
そんな彼女にエースは良い訳をする為に恐る恐る口を開き話始めた

エース「えっと・・ね《何や？エース君♪》怪我をしたと言ってもですねほんのかすり傷程度だったし黙っててもいいかなぁ～って《ほ～う・・かすり傷程度ね》は、はい」

はやて「・・剣で腹部を”２カ所”も貫通され串刺しになってかすり傷程度・・・？笑えん冗談は私は好きや無いで？エース君・・・」

はやてはエースがどんな風に怪我をしていたか既に把握していた
そんなはやてにエースは観念したのか諦めた表情をして

エース「・・ゴメン、言わなくて悪かったよ《ダメや・・許さへん》頼むから泣くなよ・・」

はやてに自分が重傷を負った事を認める
するとはやてはエースの身体に手を回してそのまま少しきつめにエースを抱き締めた後に、エースは彼女の泣く声が聞こえてきて・・
エースは、バインドを解除してはやてを優しく抱き締め返した

はやて「・・うっさいボケ・・っ・・どんだけ・・心配したと思ってんの？」

エース「（だから、言え無いんだろうが・・人の事を自分の事以上に心配する奴に重傷を負った事なんて言えるわけ無いだろうがよ・・・）・・ちゃんと無事からもう安心しろよ」

エースははやての言葉が胸に刺さりつつ彼女の言葉を受け止めた後、そう言って彼女を安心させようとする、するとはやては・・・

はやて「・・今のエースの言葉じゃあ信じられへんよ」

エース「ならどうしたら信じてもらえるんだよ？」

はやて「言葉以外で・・私にエース君の存在を示してや／／／」

エース「・・・日常生活に支障がでないとはいえ・・俺は、一応病み上がりなんだけど？《そんなん知らん》・・おいおい」

はやて「私に怪我した事を黙ってたエース君が悪いんやん」

エース「はぁ～・・。ったく怪我人に酷い奴だな・・・んっ」

はやて「んんっ／／／／」

その後、エースとはやては食堂に昼食を食べに行くまでの間の時間・・部隊長室に籠りお互いを求めそして存在を確かめるように行為を何度も繰り変えすのだった・・・・・。

・機動六課：食堂

部隊長室で”色々な事”を済ませたエースとはやて
その後2人は食堂に昼食を食べに来た

エース「あ～・・腹減った。誰かさんが我慢出来ない所為で余計な運動したから特に」

はやて「し、仕方ないやろ　ずっと我慢してたんやし／／／／」

はやては先程、部隊長室でやった”色々な事”についての言い訳をする
自分で言った事が恥ずかしかったのかはやての顔は真っ赤だ

エース「お前から誘っといて何、恥しがってのか・・」

はやて「うぅ～・・／／／／」

エース「はいはい・・恥しがるのは後で良いからまず昼食を食べてからにしようね」

はやて「うん／／／／」

2人で食事を受け取った後、はやては顔を赤くさせながらエースの隣の席に座る
その後、2人が食事を進めていると訓練を終えたメンバー達が食堂

に来た
食堂に来たメンバー達「なのは・フェイト・ティアナ」はエースに気付くと食事を受け取り即座にエースの目の前に座ると・・・

なのは「はい♪エース君♪」

フェイト「こっちだよ。エース♪」

ティアナ「違いますよ、兄さん♪こっちですよ♪／／／」

・・・彼女のはやてが隣に居るにも関わらず同時に、はい　あ～ん♪攻撃をしてきた
はい　あ～ん♪攻撃をしてきたなのは達にエースは顔を引きつりながら苦笑いをする
そんな光景に、はやてはムスッと不機嫌になり顔を横に向ける

エース「あはは～・・・（食いずらい・・）」

はやて「・・・『本当にええ度胸やね、なのはちゃん達…人の彼氏を彼女の目の前で堂々と誘惑するやなんて…あからさま過ぎて怒る気にもなれんわ…け・ど・なエース君は絶対に渡さんで?』」

はやては横眼でなのは達を威嚇しながらなのは達に念話をする
そんな、はやての威嚇の念話に対しなのは達は・・・

なのは「…どう?美味しい?《ああ》よかった♪『大丈夫だよ、はやてちゃん♪勝手に貰っていくから・・だから今の内に精々、楽しむと良いよ♪』」

はやて『安心してええよなのはちゃん…今の私とエース君の仲に、

なのはちゃんの付け入る隙なんて全然、無いから♪』

フェイト「どうかな？エース《お、美味しいよ・・》そう♪『まぁ、なのはの叶わない夢の話はともかく…エースは”私の”夫になるんだよ？今は、はやてに貸してあげてるだけなんだよ？そこのところ勘違いしないでほしいかな♪』」

はやて『フェイトちゃんこそ勘違いせんでほしいわ～♪エース君は”わ・た・し”の旦那さんになるんも事は決定事項やで？それに、フェイトちゃん寝言は寝て言いや何時私がフェイトちゃんからエース君を貸りたん？ボケるには早過ぎなんやないか？』

ティアナ「どうですか？兄さん《うん、美味しいよ》ありがとう///『姉さん達の意味不明な戯言は放っておくとして…いずれ兄さんは、私のモノにするので♪…どんな手段を使ってもね…今の内に精々良い夢を見て下さいね♪は・や・てさん♪』」

はやて『小娘アンタこそ意味不明やで？これは現実”げ・ん・じ・つ”やで？ええ加減に目覚めや♪それにいずれエース君がアンタのモノになる？それこそ戯言と違うか？私とエース君はもう結婚を視野に入れてるんやで？そやから、そろそろ兄離れの時期なんじゃないん？』

・・・平然な顔で殺伐とした念話をする４人

表情からは、エースのモテ具合にはやてが少し嫉妬してる様に思えるが…周りの空気

は既に修羅場に似たピリピリとした感じに仕上がっている

その後もこの重い空気は昼食が済むまで続くのだった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・機動六課女性寮内：はやての部屋

その夜、はやては自分の部屋にエースを招いて話しをしていた
そんな中、エースはある事を言いだす

エース「それにしても・・いいのかねぇ？男の俺を”女性寮”に泊めても」

はやて「別にええよ、それにもし他の女性に手を出したら…分かっとるな？」

エース「も、勿論ですッ！」

エースはとても気持ちのいい返事をした
その後、はやては突然エースにある事を言いだした

はやて「なぁ、エース君《何だ？》何時結婚する？」

エース「…突然どうした？」

エースは突拍子もない質問に一瞬驚いたが直ぐに顔を直しはやてに理由を聞く
するとはやては不安面もちで話しだした

はやて「…私、恐いんよ《恐い？》うん…このままだと何時かエース君が他の人に盗られるんじゃあ無いかって・・・」

エース「んな、アホな…大体、はやて以外に俺なんかに好意をもってる物好きなんて居るのかよ?居たら見てみたいな」

はやて「ハァ…。（ここまで鈍いとは…しゃあないな）よう聞いときや…アンタに好意をもってる物好きは、なのはちゃんにフェイトちゃん、それにティアナ。後、カリムを含めて数多くおんねん!ちょっとは自覚しいや!《いたッ!》ふんッ!」

エース「～っ!何も叩く事無いだろうが…ったく…なのはとカリムはもしかしたらと思ってたが…フェイト達もか…どうしてだ?まあいい《よくないわッ!》ゴホンッ、ゴホンッ…はやて直ぐに結婚したいのか?《え?／／》どうなんだ?」

はやて「そ、それは…し、したいです／／／／」

エース「じゃあしよう、結婚」

はやて「ふぇ?い、今何て?」

エース「結婚しようって言ったんだが?《う、嘘／／》嘘じゃないよ、お前の故郷の成人での成人する歳、２０歳まで待とうと思ってたんだが、はやてを不安にさせるくらいならもう、結婚しようはやて。それとも俺と結婚するのは嫌か?」

はやて「んな訳無いやん!!《じゃあ返事を聞かせてくれよ》ふっふ不束者ですが、どどうぞよろしくお願いします／／／／」

エース「こちらこそ・・よろしくな。はやて…んっ」

はやて「んんっ／／／／」

その後、エースははやてをベッドに押し倒すと昼間の時の行為が少し不満だったのか
激しくベッドを軋ませ再びその行為を何度も何度も繰り変えすのだった
＊＊

・機動六課女性寮内：ティアナ&スバルの部屋

エースとはやてが愛を確かめ合っている頃、ティアナは自室である事を考えていた
因みにスバルは既に寝ている

ティアナ「…ちッ（兄さんが一途なのは、前から知っていたけど・・まさか義妹のお願いを断るなんて…壁は予想以上に高いわね…こうなったら…無理矢理にでもヤるしか無いみたいね…覚悟しておいてね♪兄さん♪）／／／」

ティアナは部屋で頬笑みながらエースをモノにする計画を立てるのだった
＊＊

その後、はやてとエースの2人は翌日になのは達に婚約した事を発表
六課解散後に式を挙げ周囲から沢山の祝福を受けた…３名を除いて

だが

数ヵ月後・・・・。

エースの自宅：寝室

妻のはやて＋八神家が不在の隙を狙ってティアナはエースの自宅に
遊びに来る
そして…エースに”色々な物”を混ぜた飲み物を飲ませ・・・。

エース「…ティアナ…んんっ／／／」

ティアナ「…んんっ……はぁ…来て兄さん…いや…”エース”…
《んんっ》んんっ／／／」

ティアナは強引なやり方ではあるが目標を果たした
その後もはやてが帰って来る前日までティアナはエースに関係を求
め続けた
エースは後悔や色んなモノに心を押し潰されティアナの要求に応え
続けるのだった

そして、エースはもしもの時は責任を取る事をティアナに約束した

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

エースの自宅：リビング

8日後、妻のはやてが家に帰って来た
するとエースは直ぐに”大事な話がある”と言ってはやてをリビングに呼びだす
そして、ティアナとの間に起こった事を全てはやてに伝えた…。

はやて「…何回やったん？」

エース「21回はしてると思う…《歯、食いしばりぃ》…」

エース君はその後、はやてに60回近く殴られた
そして、エースを殴り終わったはやては・・・。

はやて「…また、こんな浮気みたいな目に遭わされのは嫌やし（ビーナスさんの事に触れんように教えるか…）はぁ～仕方ないな…エース君、実はな……」

はやては実母の事には触れないように気をつけながらエースが一夫多妻制の権利を持ってる事をエースに教えた
その後、エースはティアナを始め…なのは、フェイト、カリム、シャッハの計5人の妻を新たに迎え、6人の妻と幸せ？に過ごすのだった・・・・・・・・・・・・・・。

180万hit 記念♪ Another story of the kingdom

Another story of the kingdom 3rd 始まります・・・。

2ndから、3年の月日が流れエースは年齢が23になった
そんなエースは21の時、新たに・・ジュピリア・ルビア・はやて・セレッソ・カメリアの5人妻と更に1人の妻を迎え王妃の人数は9人になった
翌年エースが22の時には・・第2王妃リリアと第3王妃カリムの2人が女の子を生んだ
娘も生まれ順風万班な生活を送っている様に見えるエースだが・・・

エース「はぁ～…。どうしたものか」

・・・彼には頭を悩ませてる事があった
その悩みとは・・・

エース「これじゃあ・・・益々、アクアの元気が無くなってしまう」

・・・そう第1王妃アクアの事だった
第2王妃リリアと第3王妃カリムの2人はエースの子供を産んだしかし、第1王妃であるアクアには未だにその兆候が見られない

エース「明日の報告会・・・絶対あの腐れ爺供何か言ってくるな・・はぁ・・・」

エースは屋根の上に寝転びながら深いため息をつく

こればっかりは、エースやアクアでもどうにも出来ない事と分かっていても何とかしようと頭を悩ますエース…この後も暫らくの間、屋根の上で寝転び夜風に当たりながら考えを空回りさせるエースだった

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・フィラメント城『騎士宮殿』：筆頭騎士室

翌日エースは報告会を終えてフィラメント城の敷地内にある騎士のみが入る事の出来る建物、通称・・”騎士宮殿”そこの筆頭騎士専用の部屋である人物と寛いでいた

エース「ハァ・・・。疲れた」

？？？「お疲れさん♪いや〜モテる男は大変だね〜♪」

エースが疲れたと呟くと、一緒に居る人物は素晴らしい笑顔でエースに嫌味を言う
するとエースは少し不貞腐れつつ・・・

エース「…お前は本当に嫌味な奴だな”ディルマッド”」

・・・一緒に居る男に文句を言う
男の名は”ディルマッド・ホルエ”スペードの盟友の１３騎士の内の１人リン・ホルエの息子で王国の上位騎士の１人

ディルマッド「ありがとよ、モテ男」

エース「いや、お前の方がモテてるだろうが《そんなこたぁ知ってんよ！》そですか…」

エースの嫌みを嫌味で返すディルマッド
その後、暫らく2人は雑談しているとディルマッドがある話を切り出す・・・・それは・・・

ディルマッド「あっ…そうだ・・・あのよぉ《何？》巷で聞いたんだがよ《うん》この惑星にあの羽根サソリが潜り込んでるらしいぞ？」

エース「あの強盗集団が？《ああ》ふ～ん・・・そう」

ディルマッドはエースに王国に強盗集団が王国に潜伏しているとの情報を言う
するとエース薄い反応を示す・・・それに対しディルマッドは呆れながら話を続ける

ディルマッド「お前、もうちょっと反応しろよ…」

エース「だってあの強盗集団は頭が良い事で有名だろうが…この王国の街の1つにでも手を出したらどうなるか位、奴らだって分かってるだろう・・・それに大体奴らは、この国自体や街に興味は無いよ、興味があるとすれば恐らく・・・」

ディルマッド「あっ…国外の遺跡かぁ」

エース「そう言う事だ、それに俺達は国の騎士だ陛下の命無しでの行動は許されない」

ジュピリア「失礼します」

エースはディルマッドを少し窘める様に言う
それに両手を上げヤレヤレといった表情するディルマッド
その時、部屋にエースの副官、ジュピリアが入って来た

ジュピリア「あら、居たんだ脳筋ナンパ男」

部屋に入るなりジュピリアはディルマッドを小馬鹿にする
ジュピリアの侮辱にディルマッドは・・・

ディルマッド「言うじゃねぇか小娘ぇ・・・どうやらお前は俺の槍の錆になりたいらしいな」

・・・眉間にしわを寄せジュピリアを威嚇する
それに対しジュピリアも・・・

ジュピリア「恐い第8士団長さんね～思わず斬ってしまいそう♪」

・・・目を細くして戦闘モードになる
言うまでも無いがこの2人は最悪の関係、目を合わせたら直ぐにこうなる
戦闘モードで睨み合う2人・・・そんな2人にエースは・・・

エース「…お前等《ッ…!?》此処で死にたいのなら始めろよ・・・」

・・・本気の殺気を出して2人を威嚇する
エースの本気モードの殺気に2人は即座に睨み合いを止めた

ディルマッド「わ、悪かったよ・・・はぁ～…。取り敢えず・・・
またな」

ディルマッドは謝った後、部屋を出て行った
その後、不機嫌な顔のエースの前にジュピリアが近付き・・・

ジュピリア「怒って・・・る？《そう見えないか？》どうし《少し、1人にさせてくれ》う、うん…」

・・・怒ってるのかどうかを聞いてくる
エースは即答でそれを認めて少しきつめにジュピリアに、少しの間部屋を出て行くように言うとジュピリアは落ち込みながら部屋を出て行った
その後エースは1人になると専用の椅子から、灰皿の置いてる来客用のソファーに座ると服のポケットから煙草を出して置いてあるライターで煙草に火を点け煙草を吸い始めた

エース「…。フゥ～…。…で・・・何時までそうしてるんだよ？リリア」

リリア「何だ分かってたんだ～、少し残念♪」

エースは、煙草を半分辺りまで吸うと部屋に隠れてるであろう人物を呼ぶ…エースに呼ばれて部屋の隅から姿を現したのは第2王妃のリリアだった
姿を現したリリアは少し残念そうな顔をしながらエースの隣に座る

エース「…あの子の事は良いのか？《言える立場なのぉ？》…すまない」

エースはリリアに少し窘める様にそう言う
何故エースは、リリアに窘められるかというとエースは子供の世話は殆んどした事が無い

エース「何をしたらいいのか全く、分からなくてな・・・」

リリア「まあ、そんな事だろうと思ったけどね～♪《あ・・・》よっと♪」

リリアはそう言いながらエースの煙草をとり上げ吸いかけの煙草を灰皿に押し当てて消す
その後、エースを横に寝かせてエースの頭を自分の膝に乗せる

エース「…何だコレは？《膝枕だけど？》イヤ、そうじゃ・・・」

リリア「エーちゃんは黙って寝るの！《おっと・・》エーちゃん最近、少し無理し過ぎだよ！忙しいのは見てて分かったけど・・・それでも・・・無理し過ぎだよ…。」

半強制的な膝枕に始めはグダグダ言ってたエース
しかしリリアの悲痛な表情での忠告にエースは押し黙る
最近のエースは忙しい為か偶にぼーっとしたり、座ったまま寝たり挙句には何も無い所で転びかける姿が目撃されてるリリアが忠告するのも当然だろう
それを感じてかエースは少し不貞腐れた表情を見せた後・・・

エース「分かったよ、寝ればいいんだろ？寝れば《うん♪》たっく・・・すぅ・・・すぅ・・・《早ッ》・・・」

・・・即効で眠りに就いた
リリアは、即効で眠る速さに少し驚き目を点にさせるが直ぐに、顔を直し自分の膝で眠る夫の愛おしく思いつつ静かに夫の寝顔を眺めるのだった・・・・・・。

ディルマッド・ホルエ

スペードの盟友の１３騎士の内の１人リン・ホルエの息子でエースの男の友人の１人
その強さは、２代目の筆頭騎士エースが直々に第８騎士団の団長に任命す程
使用する武器は２本の槍、又は２本の剣

エースとは文句を言い合えるほどの仲の良さ
しかしディルマッドの趣味等が原因で副官であり妹でもあるジュピリアからはディルマッドは嫌われてると言うか・・・害虫的な扱いされている
ジュピリアからそこまでの扱いを受ける原因は、彼の趣味は”女漁り”ナンパ”等、呆れを通り越して素晴らしい趣味

本編ではディルマッドは、父親のリンが彼の母と出会う前に死んでる為に生れていない

騎士宮殿

ポイニクセル王国の騎士が鍛錬等をする建物エースが通常勤務の時に居る場所
此処は騎士しか入る事の許されない場所

４大王でさえも緊急時以外は入る事の出来ない神聖な建物

宮殿の様な外観をしている為に騎士宮殿と呼ばれている
この建物の歴史は?世の時代に建てられた物でかなりの歴史的な建造物で隠し部屋等も多数あるようだが、資料が革命時に焼失した為に全てを把握できていない

180万hit 記念♪ Another story of the kin

珀狼「1日遅れてスミマセンでした」

桃子「どうして遅れたの？」

珀狼「急用で、ちょっと無理でした」

桃子「あっそう…取り敢えず、明日のＡｖｅｎｇｅｒの更新日は大丈夫なの？」

珀狼「頑張ります（；・∀・）」

桃子「…（´Д`）＝3．．．．まぁ今回は、この辺にしときましょう」

珀狼「（；・∀・）ァ・・　アハハ・・・ハハ・・・・」

Another story of the kingdom 3rd.

Another story of the kingdom 3rd 始まります・・・。

・ビーナス邸：ビーナス&”スペードの部屋”？

翌日、此処はビーナス&スペードの部屋・・・のハズ
しかしこの部屋に居るのは・・・

ビーナス「・・最近エースが構ってくれないの」

はやて「わ、私に言われても・・・困りますけど・・・」

・・・SD化したビーナス…び～なすと八神家
もう1人の部屋の主は、義娘のはやてに・・・

スペード『俺！コニスと遊びに行って来るから♪アハハハハ！』

・・・と言い残し街に遊びに行った
つまりはやて＋八神家はSD化したビーナスの面倒をスペードに押し付けられた

ビーナス「それにカリムやリリアが孫をあまり抱っこさせてくれない」

はやて「は、はあ・・・（それはカリムやリリアさんに言って下

さいよ．．．）」

ビーナスは基本的に孫をあまり抱っこさせてもらえない
その理由はビーナスのあやし方に問題があったから．．．そのあやし方は・・・

ビーナス『そ～れッ！』

・・・当時１５歳のビーナスは息子のエースを”高い高い”のつもりで天井近くまで投げる
こんなあやし方では抱っこさせてもらえないのは当然
因みにビーナスのあやし方をカリムやリリアに密告したのはスペード

び～なす「エーしゅうううう！お母さん寂しいいいよおおおお～！うわああん！」

はやて「あは．．あははは…」

遂に泣き出してしまうＳＤ化したビーナス
それを苦笑いしながら眺めるはやて
そんな２人を少し離れたソファーから見る八神家

リィン「ヴィータちゃん、お義母さんはどうしたんですか？」

ヴィータ「う～ん…多分だけどよ、兄貴に構ってもらえなくて寂しいんじゃねぇのか」

案外当たってる予想をするヴィータ
ヴィータの予想をリインは冗談だと思い笑う

リイン「まるで子供みたいですね♪」
ヴィータ「だな、そういえばシグナムとシャマルとイ・・・ザフィーラはどうした？」
リイン「シグナムは騎士養成学校に、シャマルはお料理教室に・・イじゃなくザフィーラは何時もの散歩ですよぉ♪《そっか》ですぅ♪」
ヴィータは３人が何時の間にか居ない事に気付きその事をリインに聞く
リインは３人の居場所を答えるとヴィータは納得し再びリインと一緒にはやてとＳＤ化したビーナスの様子を眺め出した…その頃・・・。
＊＊＊

・王都リラ：食堂兼酒場クラテル
？？？「セリアさ〜ん！ご飯おかわりぃ！《ちょっと待って〜》うん！」
セリアに元気よくおかわりの注文をする少女
彼女の名は…ルネイナ・ラドイン歳は１２歳、王国の騎士の１人
セリア「はぃ♪お待ちどうさま♪《あんがと♪》今日はあの人に付いて無くて良いの？」
セリアは料理をルネイナの前に置き”あの人”の事を聞く

ルネイナは料理を食べながらセリアの質問に答え始めた

ルネイナ「ぐ…もぐもぐ…あの人…？あぁ、師匠の事ね《うん》いいのいいの《どうして？》どうせ奥様と仲良くしてる最中だろうし《え？》もぐもぐ…」

あの人とはどうやらルネイナの師匠の事らしい
そしてルネイナは料理を一気に食べるとセリアの質問に少々不貞腐れながら答える

ルネイナ「…奥様とラブラブなのは別に良いけどさ…それを弟子に見せつけるのは様な真似は正直止めて欲しいわね私にとっては不愉快だから…あの唐変木に言ったところで結局ダメよね～♪きっと♪アハハハハハハハハハハ！」

ルネイナは師匠の愚痴を言った後に高笑いを始める
セリアはそれを苦笑いで眺めていたが・・・

セリア「アハ、アハハ…！？ちょ！ちょっとルネちゃん！」

・・・何かを見つけて顔を青ざめるセリア
そんなセリアにルネイナは笑いながら話を続ける

ルネイナ「どしたの？セリアさん？あの唐変木の馬鹿ししょーでも来たの？アハハ～♪それは無いでしょ♪どうせ奥様と仲良くイチャついてる頃でしょ♪今日は思いきりあの唐変木の悪口を言いに言いまくるんだから！例えば…師匠の女たらし！！ロ××ン！シスコン！マザコン！ついでにバーカ！バーカ！」

？？？「酷い言われようだね？エー君♪《えッ！？お、奥様！？

≫やっほ～♪ルネちゃん」

ルネイナは後ろからの声に気付き瞬時に振り向く
そこに立っていたのは彼女の師匠の妻アクア・A・サディア
彼女の夫という事は自動的にルネイナの師匠は・・・

エース「とっても素敵な呼び方をどうも♪ル～ネ♪」

ルネイナ「アハ、アハハ・・・ど、どうもです師匠」

・・・2代目、筆頭騎士エース・L・サディアになる
笑顔のエース普通ならこの笑顔は女殺しの眩しい笑顔なのだが・・・
。
現在、その笑顔からは恐怖しか感じない

エース「さて、覚悟は良いな？クソ弟子イィ！≪ごめんなさ～い
！≫待てこらぁあ！」

エースがルネイナにお仕置きの覚悟を聞く・・その瞬間勢い良く逃
げ出すルネイナ
それを激怒しながらエースはルネイナを追いかけて行った・・・・・
・・・。

ルネイナ・ラドイン　12歳

王国の騎士の1人でエースの弟子
両親はルネイナの幼い頃に死別し彼女はその後8歳の時に親戚の保
護者に売られた
9歳の頃、非合法だった身売り組織は何かの用で飛行船でこの王国

にルネイナと一緒に来た時にエースの率いる騎士団に踏み込まれルネイナはエースが保護
その後ルネイナは身寄りの無い事を話すとエースは、騎士養成学校への入学を提案するが彼女はそれを拒否してエースに弟子にしろと要求
始めの内は拒否していたエースだがアクアの強い説得もありついにエースは根負けしてルネイナを弟子にする事を認めた
性格等が対照的な凸凹コンビの師弟だが結構、仲が良い様子

エースと一緒に居るのが長い所為か彼に密かな好意を持っている
因みにエースの副官のジュピリアとは性格等の違いからとても仲が悪い
だが、師匠のエースと同じく一緒に居るのが長い為に彼女との連携技はタイミングの良さといい本当は仲が良いのだろうと疑う程の出来の良さを誇る

桃子「まあ、何とも元気なお弟子さんね」

珀狼「そうですね（＾＾）」

桃子「何で彼女、１ｓｔや２ｎｄに出て来なかったの？」

珀狼「単純に台詞が少なくてカットしただけです（＾＾）ｂ」

桃子「あっそう．．．ところで次は誰が出るの？」

珀狼「次は、意外なキャラとエースの９番目の妻の登場です！」

桃子「じゃあ、今回はこの辺で！」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

Another story of the kingdom 3rd.

Another story of the kingdom 3rd.始まります・・・。

深夜・・・。

ケイレイス候国・デメテイル砂漠：オアシス

ケイレイス候国のデメテイル砂漠あるオアシスではこの辺りの遺跡の財宝を狙いに来た強盗集団、羽根サソリの飛行船が停泊していた

メンバー「良い夜だな～っと♪」

メンバーの1人が夜空に浮かぶ満月を肴に酒をボトルごと飲む
酒を飲むのに集中しボトルに目を移す

メンバー「…にしても見張りなんてメンド《それじゃあ休ましてあげるよ》何ぃ？」

メンバーの1人は見張りを1人でやらされてる様でその面倒くささに愚痴をこぼす
その時、急に後ろから声を掛けられ振り向くと・・・

？？？「…さようなら《うっ…！？》」

・・・いきなり黒い髪色の男がメンバーの背後から襲いかかる

襲いかかった男はまず悲鳴を防ぐ為にメンバーの口を塞ぎその後、
そのまま甲板にあるコンテナにメンバーを押し付けながら腹部を剣で刺し続け
その後メンバーはピクリとも動かなくなる
すると男は一旦、剣を引き抜き念の為か男は動かないメンバーの左胸を剣で刺す

???「さて、次は・・・おっと」

男は死体の左胸から剣を抜き取り次の駆除の方法について考えようとしていた
その時、他のメンバーが男の方に来た・・・それを感じた男は一旦、気配と姿を消す

メンバー「お～い見張り《死ね…》ぁ・・・・・・・・・・」

メンバーが男の側を通り過ぎた後、男は背後からメンバーにそっと声を掛ける
その声にメンバーが反応して振り向く・・そしてメンバーの振り向きざまに男は・・・。
メンバーの首に横薙ぎの斬撃を放ちでメンバーの首を一撃で斬り落とす

???「ふ～ぅ…」

男はメンバーの死体の横で煙草に火を点け吸い始める
そして男が煙草を吸い終わる頃には男の居る血の海が出来ていた

???「さて・・・・と残りの強盗（ゴミ）も片付けに行くか・・・」

そして男はそう言い飛行船の艦内の方へ歩を進めその中に姿を消した

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊

3日後・・・。

ポイニクセル王国：港町ピキスス

空港等がある街、港町ピキスス
そこにエースは弟子のルネイナを連れある人物を迎えに来ていた

ルネイナ「遅いですね～、師匠」

エース「そうだな・・・今日はアイツの他にもお客が来るから失礼の無いようにな」

ルネイナ「チイ～ッス！《あ？》は～い♪」

ルネイナのふざけた返事を注意するエース
そんな時にエースの端末に連絡が入って来た

エース「ここじゃあ少し騒音があるな・・・仕方ない・・・ルネ、アイツらを此処で待ってろ」

ルネイナ「アイさ～♪《ルネ？》は～い」

エースはルネイナの悪ふざけを注意した後、連絡を行う為にその場を離れた
その後ルネイナが1人でエースの客人を待っていたら・・・

???「お～い！ルネちゃ～ん」

ルネイナ「お待ちしておりました・・・・なのは様」

・・・エースの客人・・・というより彼の9人目の妻、なのは・L・サディアが来た

なのはとエースは2ｎｄ・から数カ月後に結婚していた

なのは「ルネちゃん、エース君は？」

ルネイナ「今ちょっとこの場を離れているんです・・・なのは様、あのヴィヴィオは？」

なのは「そうなんだ、ヴィヴィオなら《ママ～！》あ、来た来た♪」

ルネイナはなのはに、彼女の義娘のヴィヴィオの事を尋ねる

すると、先程なのはが来た方向からヴィヴィオと一緒に2人の女の子も来た

ヴィヴィオ「もう！パパと早く会いたいからって私達を置いて行かないでよね」

なのは「あはは～…ゴメンゴメン・・・・でも、此処は1直線の道だし・・・それにヴィヴィオはもう何回か来てるから迷わないと思ってね」

不貞腐れた表情のヴィヴィオになのはは苦笑いしながらいい訳をする

こんな1直線の道を迷えるのは・・・あのオタク女位だろう

ルネイナ「あのさぁ～ヴィヴィオ《何？ルネ》その2人は・・・誰？」

ヴィヴィオ「あ！うん♪ルネ紹介するね♪私の大親友のリオとコロナだよ♪」

ルネイナがヴィヴィオに一緒に2人の女の子の名前を尋ねるヴィヴィオは質問されるのを待っていた様でルネイナに笑顔で2人の紹介をするとヴィヴィオに紹介された2人が・・・

リオ「リオ・ウェズリーです！」

コロナ「コロナ・ティミルです」

・・・ルネイナに自己紹介して来た2人の自己紹介にルネイナは笑顔で自己紹介を返す

ルネイナ「ルネイナ・ラドインです、この国で騎士をしています…それと後、唐変木の師匠の面倒を見て《まだ、懲りて無いようだな？ルネ》…。オホン！素敵な師匠のお世話になっている馬鹿弟子です！《まあ、良いだろう》」

ルネイナが間違った自己紹介をしてる最中にエースが帰って来たエースの言葉に気付き即座に自分の間違えを訂正するルネイナその後、何とか許しをもらい胸を撫で下ろすルネイナ

なのは「久しぶりだね、エース君♪」

エース「そうだな、なのは

久しぶりの再会を喜ぶエースとなのは
その後、エースは・・・

エース「さてと・・いきなりだが移動するとしよう此処に居ては空港の邪魔になる」

・・・空港に迷惑をかけない為にリオとコロナの挨拶を後に回し逃げるようにこの場を後にした・・・・・・この時、別の場所では・・・。

……

市民A「あ、あれエース様の9人目の王妃よね」

市民B「ああ、そうだな」

2人の市民がエースとその妻なのはについての会話をしているそんな市民の様子を近くの椅子に座って眺める若い男と女
女の名前はトレニア、彼女は一緒に居る男に質問をする

トレニア「ねえ、ねえ、この国の王子って良く慕われてるみたいだね」

男「聞いた話だけど・・・王子なのにも関わらず自ら街を出歩いたりして市民との交流も深い・・・こんな王子そうそう居ないだろうさ・・・さて行くぞトレニア」

男はそう言うと荷物を持って席を立ち歩いて行く

トレニアも急いで席を立ち上がり・・・

トレニア「ちょ、待ってよ！ヴェナージ！」

・・・男の名前を言いながら後を追いかけて行った・・・・・・・・・・・・・・・・。

桃子「いや～なのはが9人目の妻だったなんて～（棒）」

珀狼「桃子さん母親ですから知ってたでしょう?」

桃子「えぇ♪勿論よ（＾＾）」

珀狼「（´Д`）ハァ…」

桃子「次はどんな感じになるの?」

珀狼「次はリオとコロナがビーナス邸や城に行く話等をしようかと思います」

桃子「ヴェナージ君は出るの?」

珀狼「未定です、出来たら出そうと思います（＾＾）」

桃子「そう…じゃあ、今回はこの辺で!」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

Another story of the kingdom 3rd.

Another story of the kingdom 3rd. 始まります・・・。

・王都リラ：車内

空港を逃げるように立ち去ったなのは達
その後、車での移動の最中にエースがなのは達に話しかけて来た

エース「さて・・と挨拶が遅れて悪かったね・・俺はエース・L・サディアこの国の騎士をしています。よろしくね2人供」

コロナ「は、はい・・わ、私はコロナです。コロナ・ティミルです／／／」

リオ「わ、私はリオ・ウェズリーです／／／」

コロナとリオは突然エースに話しかけられ少し戸惑う
その後、コロナとリオは緊張しながらもエースに返事を返す

ルネイナ「全く・・師匠ってば挨拶が遅いんだから・・・ふっ、ヤレヤレ」

エース「……」

師匠の挨拶の遅さに嫌味を言う弟子

そんな弟子の嫌味を師匠は黙って聞いた後・・・

エース「…なあ、ルネイナ《は～い♪》今日の外は良い天気だな」

ルネイナ「…はい？《城まで・・・ランニングで来い》ちょ！」

・・・ルネイナの襟を掴み走行中の車のドアを開けると・・・。

次の瞬間、エースはルネイナを外に投げ飛ばした！

ルネイナ「きゃあああ～ッ！？お、覚えてなさいよ！馬鹿師匠おおおおぉ・・・・・・・・」

するとルネイナはエースへの暴言を叫びながら消えた

その後エースが車のドアを閉めると・・・一同の目が点になっていた

エース「ん？どうしたんだ？みんな」

なのは「ど、どうしたって・・・る、ルネイナちゃんが！！」

ルネイナの事を心配してエースに迫るなのは

するとエースは煙草に火を点けてそれを吸い始めると・・・

エース「アイツなら心配いらないよ、この国の騎士は生存率ＵＰの為に脱出訓練等を１年近く繰り返し行うから車程度なら怪我１つもしてないよ」

・・・そう言ってエースは窓ガラスを開けるなのは達がそこから外を見ると・・・

ルネイナ「師匠！置いて行かないで下さいよ《ほらな？》おおお

お！」

一同「ァ・・アハハ・・・ハハ・・・・」

・・・そこには先程投げ飛ばされたルネイナが既に追いつき必死に抗議をしていた

その光景に一同はただ苦笑いをするしか無かった

＊＊

・フィラメント城：騎士宮殿前

その後、約1名と、途中ではやてと会う為に先にビーナス邸になのは以外の一行は車でフィラメント城に着きエースの案内で城内を歩いていると騎士宮殿前に来た

そこでエースは騎士宮殿に入る前にヴィヴィオ達にある物を渡す

ヴィヴィオ「パパこれ何？」

エース「これは”仮騎士輪”という腕輪型の許可証だよ」

それは腕輪型の許可証だった

渡されたヴィヴィオ達は何故か微妙な顔をしエースにこう尋ねた

ヴィヴィオ「パパ居るのにどうして許可証が要るの？」

エース「この騎士宮殿は騎士以外は、たとえ女王でも勝手に入る事は許されないもし勝手に入ろうものなら・・・」

リオ「ど、どうなるんです？」

エースが腕章の必要性の話を真剣な面持ちでしていく
説明の途中、エースが間を置くとリオが不安な面持ちでエースに尋ねる

エース「逮捕もしくは即斬殺になるから気を付ける様にね」

一同「は、はい」

エースの説明に一同は急いで腕輪型の許可証を身に着ける
丁度その時・・・

ルネイナ「や、やっと追い付いた・・・」

エース「遅かったな《師匠（アンタ）が言うな！》はいはい♪」

・・・ルネイナがようやく一行に追いついた
追いついたルネイナはエースに文句を言おうとするが・・・その瞬間エースはルネイナの頭をくしゃくしゃと撫でると・・・

ルネイナ「ちょ・・・はうううう～／／／／」

・・・気持ち良さそうな表情を見せる
そして撫で終わると、急に黙り大人しくなった

ルネイナ「（それは、はんそくだよおお～／／／／）」

エース「さて、コイツも黙った事だし中に入ろうか・・・腕輪は

ちゃんとしたね？」

一同「は～い♪」

エース「じゃあ行こうか♪・・・・」

そしてヴィヴィオ達とエースは騎士宮殿に入って行った・・・・。
約1名を残して・・・

ルネイナ「（もうエース師匠ってば～♪遠慮せずにもっと・・・・・）」

・・・残されたルネイナは1人妄想に浸っていた
彼女のこの妄想はセレッソ＋ルビアのモノが感ｓ・・移ったもので・・・。
例えて言えば"性質が悪く過剰で修復不可"3拍子揃った妄想だ
その後ルネイナは少しの間、1人妄想に浸り続けていた
＊＊

・騎士宮殿：内部（受付）

コロナ「わぁ～！」

ヴィヴィオ「す、すご～い！」

リオ「キラキラだ～！」

騎士宮殿の内部に入ったヴィヴィオ達は周囲の装飾に目を奪われた

その装飾は・・・灰皿～机・灯り等、ほぼ全てが輝きを放つ程の黄金色になっている
これは、？世が金を好んでいたからだと伝えられている・・・現に？世の遺した指輪等は金以外の金属は愛用の剣位で、その他は全て金で統一されている

エース「お～い、早くしないと置いて行くよ？」

呼び掛けにヴィヴィオ達は急いでエースの元に向かいその後、ヴィヴィオ達はエースの後に続き騎士宮殿の奥へと向かって行った・・・・・・・・。

Another story of the kingdom 3rd.（後書き）

土曜に更新できなかったので急遽Ａｖｅｎｇｅｒの方を６日の朝９時に更新しときました　珀狼

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｋｉｎｇｄｏｍ　３ｒｄ．

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｋｉｎｇｄｏｍ　３ｒｄ．始まります・・・。

・騎士宮殿：内部（廊下）

騎士宮殿の奥へと進んで行く一行
その最中、相変わらずヴィヴィオ達はよほど装飾が気になるのか歩きながらもその煌びやかな黄金の装飾に何度も目を移していた

ヴィヴィオ達「ほぇ～…」

エース「さ、此処が鍛錬室だよ」

ヴェナージは一旦立ち止まるとその部屋の説明をする
この部屋は文字通り普段騎士が鍛錬をする場の様だ
そしてエースとヴィヴィオ達は鍛錬室の中へと入って行く
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・騎士宮殿：鍛錬室

騎士「あ・・・！２代目」

エースとヴィヴィオ達が鍛錬室に入ると騎士の１人がエースに気付く

その後、その騎士の言葉を聞いた鍛錬室に居る全騎士が瞬時にエース元に集まり
全騎士が一斉にエースの前に跪き・・・

騎士達『おはようございます！筆頭騎士、エース・Ｌ・サディア卿』

・・・とエースに挨拶をする
その光景にエースの側に居るヴィヴィオ達は目を点にさせて驚く

エース「おはよう、挨拶はもういいから皆、鍛錬に戻りなさい」

騎士達『Ｙｅｓ，Ｍｙ Ｌｏｒｄ！』

エースの言葉の後、元居た場所に散らばる騎士達
王族のエースは本来”Ｙｅｓ，Ｙｏｕｒ Ｈｉｇｈｎｅｓｓ”＝「はい、殿下」なのだが筆頭騎士として騎士達と接している時は彼の上官として接しているいるので先の騎士宮殿でのエースへの返事になっている

エース「あ…そう言えばヴィヴィオは確かＳＡをやるんだったよな？・・・リオちゃんやコロナちゃんもそこそこやるんだろ？どう模擬戦でもしてみる？」

ヴィヴィオ「うぇ！？パパが相手してくれるの！？」

エースの模擬戦の誘いにヴィヴィオはエース自身が相手をしてくれるのかと思って目をキラキラと輝かせながらエースに尋ねる
そんなヴィヴィオにエースは申し訳なそうな表情を見せると

エース「お、俺は４大王の許可無く戦闘は出来ないんだよ。悪いな」

ヴィヴィオ「そっか・・・」

そう言ってヴィヴィオに断りを言うエース
エースが断った事で少ししょんぼりするヴィヴィオ、そんなヴィヴィオにエースは・・・

エース「そう落ち込むなって！十分俺の代わりになる”奴等”を呼んだから、な！」

・・・必死にそう言ってヴィヴィオを励ます
その姿はどことなくビーナスがエースにお願いをする姿に似ている
そんな中、１人の人物がエース達の元に来た・・・その人物は・・・

???「来ましたよ兄さん・・・あれ?ヴィヴィオ?」

ヴィヴィオ「あ！ヒドラ”おじちゃん”《グハッ!?》だ！」

・・・エースの腹違いの弟で副筆頭騎士のヒドラ・サディアだった
来た早々にヴィヴィオの”おじちゃん”発言に大ダメージを受けるヒドラ
あながち違っていないがヒドラは現在の歳で”おじちゃん”は流石に抵抗がある様子

ヒドラ「ヴ、ヴィヴィオ?お願いだからヒドラお兄さんと呼んでくれないか?」

ヴィヴィオ「何でぇ？おじいちゃんはヒドラおじちゃんで大丈夫だって言ったよ？」

ヒドラ「そ、それは・・・そうだけど・・・・ね？《女々しいよぉ？ヒドラ…”お・じ・ちゃん”♪》デ、デリイア・・そうは言うけどね・・・」

ヒドラが必死にヴィヴィオに説得・・・？お願い・・・？等をしていると彼の背後から女性の声がした・・・女性の名前は”デリイア・サディエット”エースやヒドラ達の従姉妹の女性で王国の第６騎士団の団長であり上位騎士の１人でもある

ヴィヴィオ「デリイアお《その先言うと斬るわよ♪》ご、ごめんなさい」

エース「何小さい子を脅してんだよ・・・大人げない」

デリイア「あら、若い女性にその言葉は言ってはいけない常識よ？《ハイハイ・・》全く貴方はつれないわねぇ・・・《そうかよ》そ・う・よ♪うふふ♪」

エース「さて、俺の代わりはこの国の上位騎士と副筆頭騎士の２人が相手だが…ヴィヴィオ達は・・・頑張れるかな？」

ヴィヴィオ「うん！」コロナ「が、頑張ります！」リオ「負けませんよ～！」

エースの挑発染みた言い方に戦闘意欲を燃やすヴィヴィオ達
そんなヴィヴィオ達の様子にデリイアとヒドラ達は

デリイア「あらあら、元気一杯ね♪お姉さん負けちゃいそうよ♪」

ヒドラ「全くだね、そろそろ世代交代の時期かな～♪」

・・・とこちらも戦(や)る気満々の様子
その後デリイアとヒドラ達は一息ついた後に

デリイア「――行くわよ”双吹雪(ふたふぶき)”」　双吹雪『Ｙｅｓ，Ｍｙ Ｌｏｒｄ』

ヒドラ「――こちらもだ準備はいいな?スカーレット」　スカーレット『Ｙｅｓ!』

それぞれの武器を手にしその後、甲冑を展開する
…がヴィヴィオ達は何故かＢＪや甲冑を何故か展開しない、その理由は・・・

ヴィヴィオ「そう言えば…」

リオ「私達って…」

コロナ「デバイス・・・無いよね…」

・・・そう、彼女達は未だ自分のデバイスを持って無いのだ
そんなヴィヴィオ達にエースはある物を渡す

エース「これを使うと良い」

それはＦＷという上位騎士が予備に使うデバイスの様な物
渡されたヴィヴィオ達はそれぞれ困惑の表情を浮かべている

そんなヴィヴィオ達にエースがＦＷの説明を始めた

エース「それはＦｒｅｅ　Ｗｅａｐｏｎの略、通称ＦＷといって上位騎士が自分のデバイスが整備や様々な理由で使用不可の時に使用する応急的なデバイスの一種だよ、このＦＷは脳内で思い描いた武器を具現化するんだ、といってもこれは応急的な物だから具現化出来るのは１種類だけだけどね・・・あ！勿論甲冑やＢＪも展開出来るよ」

エースの説明が終わるとヴィヴィオ達はそれぞれの腕にＦＷを装着し甲冑を展開
その後、それぞれの武装を具現化させていく
まずヴィヴィオは師匠のノーヴェと同じ様な両手に籠手＋ローラーブレード
次にコロナは短剣型で、最後にリオは両手に籠手という感じだ

エース「準備は良いかな？」

ヴィヴィオ達『はいッ！』

武装の具現化＋甲冑やＢＪを展開したヴィヴィオ達に準備の確認をするエース
その次にエースが横眼でデリイアとヒドラ達の方を見ると・・・

ヒドラ「こちらも」　デリイア「こっちもよ♪」

・・・とこちらも準備完了の様子
全員の準備が終わったのを確認したエースは真剣な表情に切り替え・・・

エース「それでは……模擬戦……開始ッ！」

・・・試合開始の宣言をした
宣言の後にヴィヴィオ達が一斉にデリイアとヒドラ達に向かって行った・・・・・・・・・。

デリイア・サディエット　（２５）

エースやヒドラ達の従姉妹の女性で第６騎士団の団長であり上位騎士
自称”エースの愛人”と言う程にエースに好意を抱いている
何気にエースとのコンビネーション&連携技を持つ数少ない騎士の
１人

武器は双吹雪（ふたふぶき）という２本の日本刀
その日本刀を２刀流、或いは１刀流と使い分けながら闘うスタイル
２本の日本刀のそれぞれの名前は”轟風丸”と”氷雪丸”

桃子「今回の遅れた訳は？」

珀狼「デリイアの名前を決めるのに迷った結果です、正直マジで悩みました」

桃子「へえ～…でも掛かり過ぎじゃ無い？」

珀狼「そうですね・・・スミマセン」

桃子「はぁ、もういいわ、ところで明日はＡｖｅｎｇｅｒの更新日だけど大丈夫？」

珀狼「頑張ります」

桃子「じゃあ頑張りなさいそれじゃあ今回はこの辺で！」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

Another story of the kingdom 3rd.

Another story of the kingdom 3rd. 始まります・・・。

・王都リラ：食堂兼酒場クラテル

午後になってデリイア達の模擬戦を終えたヴィヴィオ達は少し遅めの昼食を摂る為にクラテルに来て食事をしながら先程の事を思い返していた

ヴィヴィオ「はぁ～…もうちょっと出来ると思ったのにな～」

リオ「あ～く・や・し・い～っ！」

コロナ「うん・・・ちょっとショックかも…」

悔しがるヴィヴィオ達の反応から見てとれる様に模擬戦の結果は彼女達の負け

ヴィヴィオ達の初撃を避けたデリイアとヒドラ達はすれ違い際に目にも止まらぬ速さのカウンターをヴィヴィオ達に叩きこみ3人を一撃で即倒させた

ルネイナ「仕方ないよもぐもぐ。相手がヒドラ様とあの”自称”愛人さんのデリイア卿じゃあねもぐもぐ…ふぅ・・それに化け物染みた猛者達で構成されてる上位騎士達の中でも副筆頭騎士のヒドラ様と第6騎士団団長で？6の騎士、デリイア卿この2人にヴィヴィ

オ達が勝てるって方が可笑しいと私は思うけどね、もぐもぐ…まあ、ヴィヴィオ達はヒドラ様達を相手にかなりというか凄く良くやったと思うよ」

と、食事をしながらルネイナが真顔で喋る
だが、口にケチャップを付けていては希少なルネイナの真顔も一瞬で台無しだ
因みにルネイナが此処で食事をしているのはヴィヴィオ達の護衛の為なのだが護衛対象を余所に1人ガツガツと10人前の食事を食べる

セリア「へぇ～義兄（エース）さんが強いのは他のお客さんの話とかで知ってたけどあの人も中々強いのね～。はい♪ルネちゃん、ミートサンド5人前♪」

ルネイナ「どうも～♪もぐもぐ…美味しイイ～♪セリアさん料金は何時もの様に師匠にツケといて下さいね♪もぐもぐ…」

セリアがそう言いながらルネイナの追加注文の料理を運んで来た
その際にヴィヴィオはセリアにある質問をする

ヴィヴィオ「あのセリアさん《何かしら?》セリアさんはヒドラおじち・・・ヒドラお兄さんの奥さんなのに騎士の事知らないの?」

セリア「あの人は家の中では基本的に仕事の話をしないからね～♪それじゃあ私は戻るからゆっくりしていってね♪」

セリアはそう言った後、カウンターの方へ戻って行った
その後、静かにしていたリオが口を開いた

リオ「ねぇ、ねぇヴィヴィオ《何?》エースさんって何時位に此

処に来るの？《パパ？》う．．うん…ちょっと気になってね《暫らくの間は来ないよ》え？」

リオは此処にエースの事が居ない事が気になっていたのかヴィヴィオにエースの事を
聞いてみたところヴィヴィオの代わりにルネが答え始めた

ルネイナ「ししょ～はもぐもぐ…。何でも同盟国のケイレイス候国に居た強盗集団の羽根サソリが一晩で皆殺しにされたという緊急通信がヴィヴィオ達を空港で待ってた時にあって今は会議の真っ最中だし、今日は遅くなるって言ってたよ～もぐもぐ…」

リオ「そうなんだ～…残念、エースさんともっとお話したかったのにな～……／／／」

コロナ「私も．．．かな／／／」

ルネはヴィヴィオの代わりにエースが暫らくの間戻って来ない事をリオに伝える
リオはエースとの会話をとても楽しみにしていたみたいで暫らくの間戻って来ない事にコロナと一緒にとても落胆する

ヴィヴィオ「…むむっ」　ルネイナ「もぐもぐ…（これは．．．もしかして…）」

ヴィヴィオとルネはリオとコロナの落胆の仕方に独特の何かを感じ取り2人に疑いの視線を向ける．．．そんな時、1組みのカップルが会計に来た

セリア「――になります《はい》ありがとうございました」

？？？「ごちそうさま」　？？？「ありがとね～♪」

そして会計を済ませたらセリアにお礼を言うと店を出ていった

その後、ヴィヴィオとルネ達はもう暫らくの間、雑談等を楽しんでいた

＊＊＊

・ビーナス邸：ヴィヴィオの部屋

クラテルからビーナス邸に来たヴィヴィオ達は夕食や風呂等を済ませた後ビーナス邸に用意されているヴィヴィオの部屋で寝る前に雑談をしていた

リオ「…にしても大きいよね、ヴィヴィオの部屋」

そんな中、リオが改めてヴィヴィオの部屋を見て感想を言う

元々、このビーナス邸自体が１つの城を改造して邸宅にした建物なので敷地が広い上に部屋の１つ１つが大きく・・・この部屋も軽く１０人は寝泊まり出来そうな位に大きい

コロナ「うん、私も驚いちゃった」

ヴィヴィオ「私も最初パパにこの部屋を好きに使って良いよって言われた時は部屋の大きさに驚いたもん」

ルネイナ「全く、ししょ～はヴィヴィオには甘いんだから…私には部屋が無いのに…」

ルネイナは師匠への不満をこっそりと呟く
しかしルネは騎士宮殿の内に個室兼、自宅?が用意されているが…。
騎士宮殿の内装、装飾は全て黄金色でありそれはルネの部屋も例外ではなく装飾の
されている、その黄金の装飾の所為でルネは自室では余り寛げ無いらしくり寛く事が出来無い部屋は自分の部屋では無いと言っている

リオ「ねえ、ヴィヴィオ《何?リオ》ヴィヴィオはさお父さん…エースさんの好きな女性のタイプとかって知ってるかな?／／／」

コロナ「わ、私も知りたいかな／／／」

ヴィヴィオ&ルネイナ「「ビーナスおばあちゃん　(様)」」

ヴィヴィオとルネイナは即答でビーナスと答えた
事実、エースは子供の頃は母親大好きっ子でその影響からか理想の女性は母親だと言っており理想の女性は?という質問は常に母親
エースが少し前に受けた雑誌のインタビューでも母親だと公言もしている
因みにその雑誌見たビーナスは嬉しさのあまり笑顔で泣きつつ舞い踊るといった奇怪な行動をしていたらしい

リオ「え…?エースさんってもしかしてマザコン?」

コロナ「う～ん…違うと思うけど…」

リオとコロナはエースはマザコンなのかと疑問を持つ

実際は子供の頃は母親大好きっ子なのでマザコンかもしれないが、現在のエースはビーナスはあくまで”理想の女性”と思ってるだけ
その証拠にエースは妻達を深く愛しており子供も儲けている

リオ「ねえねえ、エースさんはマザコンなの？どうなの？ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「私はに分かんないな《そっか…》」

リオのエースはマザコンなのかという質問にヴィヴィオは分からないと答えるが・・・。
実はヴィヴィオはエースがマザコンでは無いという事をなのはや他の義母、祖母からも聞かされているから既に知っている、因みにルネも
何故、リオに嘘を吐いたのかというとリオとコロナがエースの妻になる事を阻止する為

リオ「う~ん」　コロナ「どうなんだろう」

その後リオとコロナ寝る前までずっとその事を考え結局答えは出無かった
そして王国から帰って暫く経った頃にヴィヴィオからエースはマザコンでは無いという事知らされた2人は「あの時、もっと話ていれば良かった」と言いつつとても悔しがっていた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

・ビーナス邸：エース＆アクアの寝室

その頃エースは自室でアクアとイチャ…のんびりと雑談をしていた
雑談の中でアクアはある質問をする

アクア「ねえ、エー君《何だ?》エー君は１０番目の王妃誰にするの?」

それはエースの１０番目の王妃についての事だった
１０の数字はこの国にとって1、2、3、に次いで意味のある数字なので１０番目の王妃が誰になるかがアクアは気になっていた
因みに現在、王妃の候補は3人いるその1人は・・・

アクア「デリイア?」

・・・先程、ヴィヴィオ達が戦った第6騎士団団長デリイア・サディエット
彼女は親戚達がエースに直接推薦してきた女性
親戚達が彼女を推薦して来た理由はこれ以上の一般の出身の王妃を防ぐため

アクア「それとも、リンディさんの娘さん?」

王妃の候補の2人目は管理局執務官のフェイト・T・ハラオウン
彼女との関係は恋人と呼べる程にまで修復そして発展しておりエースはフェイトの家に泊まったりしているが、両者忙しい身の上あまり会えていない様子
親戚達は彼女との結婚には良い顔をしていない

アクア「あ!それとも”ナイアス王女”?」

王妃3人目の候補は”アトラッサ王国”の姫君ナイアス・アトラッサ王女
アトラッサ王国はポイニクセル王国との同盟国家でエースがビーナスと供にアトラッサ王国に訪問した際、国王が是非にと自分の娘を王妃候補にとエースに推薦してきた
ナイアス王女とエースの関係は中々良好の様子
因みに親戚達は良い顔の前に、ナイアスが別の王国の人間の上しかも王女という事もあって王妃候補に推薦してきた事自体に疑いをかけている

エース「…お前、王妃が増える事に嫉妬の1つでもしろよな」

エースは呆れた表情をしながらそう言う
そんな呆れた表情をするエースに対してアクアは・・・

アクア「う〜ん・・・私的には今のままで十分満足してるし王妃が増えても別に問題は無いよ?あ!でも私をないがしろにしたらダメだよ?」

・・・条件付きでなら王妃が増えても良いと言う
その答えにエースは深いため息をついた後、返答をし始めた

エース「…デリイアは現状で満足してる様子だし、フェイトは人としては優しくて良い女性だが…王妃として振る舞えるかと言ったら微妙だな…そしてナイアスは、王妃として器は最高なんだが・・・いざ迎えると言ったら親戚達が何か言ってくるだろうしな…正直どうしたものかな・・・もうこれ以上王妃の人数を増やさないというのも手か…」

アクア「白銀種である私達の出生率の事を考えたら、やっぱり王

妃の人数は多いに越した事は無いからね～…ビーナス様も王妃の人数は多い方が良いって言ってるし」

エース「まあ、そうなんだけどね・・はぁ・・未だ先の事とはいえ色々と大変になりそうだ」

エースは未だ先の事とはいえ１０番目の王妃の事について頭を悩ますその後アクアは自分の腕をエースの腕に絡め身体を密着させ

アクア「大丈夫だよ”私達”が愛する夫をちゃんと支えてあげるから」

エース「ああ、頼りにしてるよ」

頬笑みながらエースに自分と他の妻達の想いを伝えるこの時のアクアの頬笑みは何時もの頬笑みより格段に良く見えたエースだった

…数カ月後、エースは悩んだ末に親戚達に”色々な事を言われる”の覚悟して１０番目の王妃をフェイト・Ｔ・ハラオウンに決め彼女に婚姻を申し込んだ

フェイトは１０の数字の意味を以前エースから聞いておりまさか自分が１０番目の王妃に選ばれるとは夢にも思ってなかった為、婚姻を申し込まれた際は号泣した

そしてエースは次に１１番目の王妃にナイアスを迎えた

エースは、国王のアトラッサ王国とポイニクセル王国との同盟強固の為の策と見抜き知った上でエースはナイアスを迎える事にした

最後にデリイアとの関係はデリイアが「今のとこはこのままで良い」
という事で彼女との関係は婚姻を申し込まれていない

更に2年後のある日一緒の部屋で寛ぐアクアとエース
その時にアクアはエースにある事を伝えた、それは・・・

アクア「あ、あのね・・・エー君《何?》そ、その出来たみたいなの／／／／」

エース「何が?プラモ?それともゲーム?」

アクア「ち、違うよ!私達の子供だよ!《は?マジで?》うん／／／／／」

エース「えっと・・・その、何と言うか・・・おめでとうございます?」

アクア「うん♪ありがとエー君♪／／／／」

・・・遂にアクアがエースの子供授かった事の報告だった
突然の報告に驚いたエースは微妙な顔でアクアを祝ってしまったた
がアクアはとても嬉しそうな表情でエースの祝いを受け止めた・・・
・・・・・・・・・・。

これはもう1つの物語

―Another story of the kingdom 3rd.―

琥狼「用事が立て込んで中々書けずに更新が遅れて申し訳ありません」

桃子「全く、次はちゃんとしなさいよね」

琥狼「はい、申し訳ありません」

桃子「さて．．．終わり方微妙だし今回は1話、少ないわね」

琥狼「2話を1つに纏めた為1話、少ないんです。終わり方が微妙なのはスミマセン」

桃子「ふ～んじゃあ次は？」

琥狼「”ユニゾンデバイスアギト！”です」

桃子「じゃあ、今回はこの辺で！」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪

Another story of the kingdom 3rd. 設定

Another story 3rd. 版

エース・L・サディア　２３歳

主なデバイス：アルビオン&シルバーブレイド

エースがハラオウン家に養子に出されず成長した姿
スペードとビーナスの息子であり第1王位継承者となっている
Another storyの最後に、アクアにプロ―ポーズし2ndで正式に妻に迎えている
他にも第2王妃の他に第3王妃にカリムを迎えており現在3人の妻が居る
そして3rdではジュピリア・ルビア・はやて・セレッソ・カメリア・なのはの5人妻を迎え王妃の人数は9人になった
２２の時には．．第2王妃リリアと第3王妃カリムの2人が女の子を生み2児の父
娘達との接し方が全く分からず子供の世話は積極的では無い
終盤で新たにフェイト・ナイアスを王妃に迎え王妃の人数は9人から１１人になった

未だに、筆頭騎士の座に君臨しており忙しい日々を送っている
ＪＳ事件の時にはリンディの要請を受けてヒドラとルビアの2人を連れて参戦
ゆりかごの撃墜や市民の救助、ガジェットの撃墜などにも1役買っている

好きな動物：サメとハムスター　↑！？

嫌いな動物＋事：鹿　妻達の制裁

Another story 3rd. 版

アクア・A（アクイラ）・サディア　性別女　誕生日8月6日

第1王妃

髪色：白銀　瞳：翠　23歳

母親譲りの優しい印象を強く受ける顔立ち
スタイルもフェイトと同じかもしくはそれ以上と決して悪く無い
そして母親のリウスと同じく”白銀種”でもある
アクアも？世の子孫、その証拠に名前にA（アクイラ）の文字を持ってる
3rdになってもエースとの子供の事で悩んでいる様子だったが…。
終盤、遂にエースとの子供を授かった

Another story 3rd. 版

リリア・L・サディア

髪：ブルーブラック　瞳：真紅　22歳

第2王妃

スタイルも良く胸もそこそこあっておっとり系で綺麗というよりは可愛い女性
かなり過激な思考の持ち主だったが結婚後は性格等が随分と丸くなって大人の女性の雰囲気を出している
王妃に成ってからは相変わらず姑であるビーナスの愚痴をよく聞かされてる様子
エースと一緒に行動してる時、外や皆の前だと大人の女性モードだが・・・。
夫と2人きりの時は普段と違い物凄く甘えてくる
2人きりの時のエースの呼び方はエーちゃん

エースとの子供の名前はリエラ

……

リエラ・L・サディア　1歳　　髪色：ブルーブラック　瞳：ブルー

エースとリリアの愛娘で長女

母親のリリアと同じブルーブラックの髪にエースと同じブルーの瞳両方を血を確かに受け継いでるのが見て分かる
顔等は母親のリリアの幼少期に良く似ているらしく祖母のリブイラがリエラを見た瞬間「生意気なガキになりそうね」と言っている

Another story 3rd. 版

カリム・L・サディア

第３王妃

こちらの世界でのカリムはエースとはお見合いをして出会い以降も良好な関係が続き２ｎｄでは結婚し第３王妃になっている
交際歴が短いカリムは結婚後、暫らくの間は王妃を除くヒロイン達に信頼されて無く悩む日々が続いたがジュピリア達がエースと結婚し彼女達と話す機会が増え徐々に打ち解けていき現在は全ての王妃と仲が良い模様

……

エリス・Ｌ・サディア　１歳　　髪色：金　　瞳：赤

エースとリリアの愛娘で次女

本編と同じ名前だが歴とした別人
その証拠に瞳の色がスペード譲りの赤になっている

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

ジュピリア・Ｌ・サディア　１７歳

第４王妃

こちらではエースの副官兼お目付け役
そして、エースに想いを寄せる１人であり恋人になれる日を夢見ている
因みにエースとアクアの婚姻には反対していた
一方的ではあるが妻以外にエースと関係をもった初めての女性
その責任を取る形でエースはジュピリアと婚約し３ｒｄでは結婚し

王妃になっている

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

ルビア・Ｗ・カレア

髪色：白　瞳：金　２２歳

第５王妃

母親譲りのツリ目のクールビューティ―系の美人
優しいのだが顔の所為か少々恐い印象を持たれがち
スタイルは良い方で母親よりも胸があり乙女思考の持ち主
結婚前の２ｎｄ．では、通常エースの事をアンタもしくはエースで
頭の中ではダーリンと呼んでいたが結婚後は普通にダーリンと呼ん
でいる

因みにエースの初めてのキスの相手

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

はやて・Ｌ・サディア　２１歳

第６王妃

この世界の彼女はビーナスの関係でエースとの面識はある
しかし片手で数えられる程度で仲が良いと言う訳ではなかった
一応カッコイイ男の子として意識していたがリインに諭されエース

への想いを自覚
想いを自覚した後は積極的にエースをデートに誘ったりカリムに会うという名目で休暇を利用し王国にも来ており3人娘の中では最も多くデートもしている
エースもはやてには好印象を持っていた為、何時かは彼女を王妃に迎えようと思おりその事を彼女にも伝えていた

その後順調に婚際を続け現在第王妃になった
本来は第4王妃のはずだったが親戚等と先にジュピリアが王妃なる等と色々と問題が重なって起き時間が掛かって順番が遅れた

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

セレッソ・Ｌ・サディア　１９歳

第7王妃

この世界でのセレッソは残念な事にエースと供に暮らしてる所為なのかブラコン度にかなりの拍車が掛かってる模様
最早、惚れている事を隠そうともせずに堂々とエースの妃になる事を宣言していた
そして既成事実を作る為にかなりの頻度でエースの部屋に裸で忍び込んでいた
２ｎｄの終盤では遂にエースと関係を結び妃になり宣言を叶えた

彼女は気付いていない様子だがエースの子を既に身籠っている

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

カメリア・Ｌ・サディア　　１８歳

第８王妃

この世界のカメリアはエースと供に暮らしてる所為で超ブラコン
何とか隠してはいるが異性としてエースを意識していた
エースに近づく女性全てに取り敢えず「お兄ちゃんは渡しませんよ」
と警告する
セレッソ程では無いが既成事実を作る事を時々思っていた
２ｎｄの終盤ではセレッソと一緒にエースと関係を結びそのおかげ
で妃になった

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

なのは・Ｌ・サディア　　２１歳

第９王妃

エースがミッドを訪れた際にある事件に協力しその事件で偶然にな
のはを助けた
その際になのははエースに一目惚れをし事件解決後にエースと直ぐ
に話そうとしたが既にエースは現場を去っていた

２ｎｄの時リンディがエースと親しい知り合いという事をフェイト
から偶然知ってリンディにお願いしエースとお見合いをして顔見知
りになった
お見合い後もデートをする等エースとは良好な関係を築いた
義娘のヴィヴィオも紹介していた

良好な関係が続き３ｒｄでは第９王妃になった
驚く事に未だにミッドに在住している
その理由としてはもう少し教導官を続けたいのとヴィヴィオをこのままミッドの学校で卒業させてやりたいという理由
これに親戚等は大反対したがエースの説得のおかげで親戚等は条件付きという事で納得した・・・その条件はヴィヴィオが卒業したらと子供を授かったら如何なる状況でも直ぐにこちらに来る事

エースの嫌いなバレンタインデーをミッドに広めたのは彼女

因みに連れ子が居る王妃はなのはが初めて

……

ヴィヴィオ・Ｌ・サディア

なのはとエースの義娘、エースの事をパパと慕っている
エースの弟子ルネイナとは歳も近い所為か仲が良く親友となっている

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ．版

フェイト・Ｔ・ハラオウン⇒フェイト・Ｔ・Ｌ・サディア　２１歳

第１０王妃

この世界の彼女はエースとの兄妹関係も無いのでヒロインでは無く
今のところは元の原作版と余り変更はされて無い
エースに必要以上に迫って怒らせＡｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ後のお見合いで顔見知りになった

フェイトがお見合い中にレジアスの名前を言った為微妙になり関係は悪い方に悪化し誘いの連絡しても即答で断る程に悪くなった
だが、リンディやはやて等がエースを説得しデートを重ねる内に関係を修復し現在は恋人関係になるまでに発展した

３ｒｄの終盤でエースは１０番目の王妃を彼女に決め婚姻を申し込んだ
１０はこの国にとって意味のある数字でまさか自分が１０番目の王妃に選ばれるとは夢にも思ってなかった為か婚姻を申し込まれた際は号泣する程に喜んだ

ナイアス・アトラッサ⇒ナイアス・Ｌ・サディア　２０歳

第１１王妃

”アトラッサ王国”の姫君ナイアス・アトラッサ王女
アトラッサ王国はポイニクセル王国との同盟国家でエースがビーナスと供にアトラッサ王国に訪問した際、国王が是非にと自分の娘を王妃候補にとエースに推薦してきた
ナイアス王女とエースの関係は中々良好の様子
因みに親戚達はナイアスが別の王国の人間の上しかも王女という事もあって王妃候補に推薦してきた事に疑いをかけている

後にエースは１１番目の王妃にナイアスを迎えた
アトラッサ王国とポイニクセル王国との同盟強固の為の策と見抜き知った上でエースはナイアスを迎える事にしナイアス・Ｌ・サディアとなった
裏では”こんな画策”があるが２人は良好な夫婦生活を送っている

Another story 3rd. 版

コニス・A（アクイラ）・クアラ　39歳

リウスの夫でアクアの父親でエースの義父
本来は、スペード襲撃事件の際に偶々居合わせサキュラスに殺された人物
こちらの世界では間一髪の所でエースが救援に来て命を救われた
コニスは、戦闘はからっきしダメであり頼り無いにも程があるほどしかしデバイスの開発、改修、発展等をやらせれば右に出るものは居ない
エースとアクアを許嫁にした人物の1人

Another story 3rd. 版

スペード・L・サディア　39歳

こちら世界でのスペードは療養中サキュラスが襲撃してきた時、間一髪の所でエースが救援に来て命を救われ存命の模様。しかし元々、重傷を負っていた為にサキュラスの襲撃後、治療したが短時間の戦闘しか出来なくなってしまった。
今はエースに筆頭騎士の座を渡して自分は引退しのんびりと暮らしてる。
自分ではエースとは何とか親子をやってる模様・・・と思ってる↑
スペード「!?」
因みに息子、特にエースを可愛がってる（バカ親1号）

※エースはお母さんっ子であり「マザコンでは無い」実はスペード

を助けた本当の理由は・・ビーナスの泣く姿が見たくないからであり別にスペードの為では無いらしい
因みに※は本人から直接聞いた意見↑スペード「！？」

最近は息子や義娘にもあまり相手にしてもらえず孫のアイリスの世話を良くしている
弱体化し本気の戦闘は短時間しか出来ないのにやたら強い
エースやヒドラと肩慣らしに偶にする模擬戦では常勝無敗の結果を出している

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ.版

ビーナス・Ｌ・サディア　３８歳

こちらの世界でのビーナスも管理局と聖王教会の両方に籍を置いている
実は逸話が幾つも残るほどの超バカ親（エース限定）になっている（バカ親2号）
しかし超バカ親（エース限定）になっても普段は子供達に平等で接する為に子供達の評価はスコルと同様にかなり高い様子。
セレッソ達もエースの妻にする計画が実り現在は新たな計画を立てている

備考：他の４大王は本来と差ほど変って無い

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ　３ｒｄ.版

スコル・サディア　３７歳

こちら世界ではスペードが生きてる為スコルも存命してる
スペードが筆頭騎士の座をエースに渡した後は暫らくの間はエースの腹心として活躍していたが、ジュピリアがエースの腹心となった
現在のスコルはビーナスの腹心として現在もその能力を生かし活躍している。
自分の子だけでは無く、ビーナスの子、エースやセレッソ達も溺愛しており子供達から良く慕われてる良い母親となってる

最近もう少しで孫のアイリスが喋り出しそうなのでそろそろ”おばあちゃん”と呼ばれる覚悟を準備している

Another story 3rd. 版

ヒドラ・サディア　21歳

スコルが存命の為、こちら世界でのヒドラは心優しき青年に成長してる
こちらの世界のヒドラは副筆頭騎士でありエースの良き部下となって活躍し筆頭騎士のエースが忙しい為に良く他の騎士達の面倒を見ている良い上司
エースとは後一歩のとこで及ばないが同格の強さを誇っている
ジュピリアの恋を全力で応援中する等、妹に甘い
JS事件の時にはエースやルビアと供に、ゆりかごの撃墜や市民の救助、ガジェットの撃墜等に協力し管理局にも名が結構知られてファンもいるらしい
エースの結婚の1ヶ月後に一般人の女性セリアと結婚し現在は子供を儲け1児の父

……

……

セリア・サディア　２３歳

スペードやコニスが良く使う食堂兼酒場クラテルの看板娘でヒドラの妻
現在はヒドラの子を生み忙しいと思いきや暇人＝スペードやビーナスが子供の面倒を進んで見てくれており生む前と差ほど忙しくない様子
因みに子供の面倒を良くしているのはスペード

子供の名前はアイリスという女の子

……

アイリス・サディア　２歳

ヒドラとセリアの愛娘
祖父親譲りの青髪と母親譲りの青目が特徴

ルネイナ・ラドイン　１２歳

王国の騎士の１人でエースの弟子
両親はルネイナの幼い頃に死別し彼女はその後８歳の時に親戚の保護者に売られた
９歳の頃、非合法だった身売り組織は何かの用で飛行船でこの王国にルネイナと一緒に来た時にエースの率いる騎士団に踏み込まれルネイナはエースが保護
その後ルネイナは身寄りの無い事を話すとエースは、騎士養成学校への入学を提案するが彼女はそれを拒否してエースに弟子にしろと

要求
始めの内は拒否していたエースだがアクアの強い説得もありついにエースは根負けしてルネイナを弟子にする事を認めた
性格等が対照的な凸凹コンビの師弟だが仲はとても良い様子
エースと一緒に居るのが長い所為か彼に密かな好意を持っている
因みにエースの副官のジュピリアとは性格等の違いからとても仲が悪い
だが、師匠のエースと同じく一緒に居るのが長い為に彼女との連携技はタイミングの良さといい本当は仲が良いのだろうと疑う程の出来の良さを誇る

デリイア・サディエット　２５歳

エースやヒドラ達の従姉妹の女性で第６騎士団の団長であり上位騎士自称”エースの愛人”と言う程にエースに好意を抱いている
何気にエースがヒドラ以外でコンビネーション&連携技を持つ騎士

エースの知り合いでは珍しく”年上”の女性
そして何気にエースの第１０王妃の候補の１人
次の王妃の候補はデリイアの他に３人も居るのだが１人は一般の出身でライバル国の王女で最後の１人は管理局の執務官ではあるが一般の出身
つまり４人居る候補の中で一般の出身が２人も居る
現在エースは、はやて・なのは、この２人が一般の出身だが親戚等は２人が王妃になる事を頑なに反対していた
その為、これ以上の一般出身の王妃を防ぐためにデリイアを第１０王妃の候補にした

しかしデリイア自身は言葉通りの”エースの愛人”というポジショ

ンが気に入ってる様子で第１０王妃にはあまり興味が無いらしい
何故、愛人なのかと言うと本人曰く「今の関係を壊したく無い」との事

武器は双吹雪（ふたふぶき）という2本の日本刀
その日本刀を2刀流、或いは1刀流と使い分けながら闘うスタイル
2本の日本刀のそれぞれの名前は”轟風丸”と”氷雪丸”

ディルマッド・ホルエ

スペードの盟友の１３騎士の内の1人リン・ホルエの息子でエースの男の友人の1人
その強さは、2代目の筆頭騎士エースが直々に第8騎士団の団長に任命す程
使用する武器は2本の槍、又は2本の剣

エースとは文句を言い合えるほどの仲の良さ
しかしディルマッドの趣味等が原因で副官であり妹でもあるジュピリアからはディルマッドは嫌われてると言うか・・・害虫的な扱いされている
ジュピリアからそこまでの扱いを受ける理由は彼の趣味である”女漁りやナンパ等”が原因でそれが無ければ普通に接している？

本編ではディルマッドは、父親のリンが彼の母と出会う前に死んでる為に生れていない

ユニゾンデバイスアギト！

Ｓｔｓから４年前のある日…。

エースはリンディの密命で違法研究の疑いがある＊＊研究所に潜入していた

エース「…これは面白い位にホコリの出る研究組織(ふとん)だな」

数時間の調査で多くの違法(ホコリ)研究が出て来た

違法研究の映像や記録等を集めて戻ろうとしたエースだったが帰等の途中に見えたある１室が何となく気になり室内に入って行った

エース「コイツは？」

エースが室内に入ると融合騎の少女が捕らえられていた

此処に居るという事は非合法の実験体という事が容易に想像つく

？？？「う…ん？誰だ？お前」

気配に気付き融合騎の少女が目を開けエースを見て何者かを尋ねるそんな少女にエースは・・・

エース「お前はこのまま此処に居たいか？《え？》それとも外に出てみたいか？俺は今、急いでいるんだ・・答えは早くしろ」

？？？「私は…此処から外に出たい…！」　エース「分かった」

・・・少女の意思を聞くと少女を拘束していた枷を外す

その後エースは、少女と供に研究所を後にした

エースが保護した融合騎の少女は本物の古代ベルカ式融合騎だという事が分かった
そして少女は自らをアギトと名乗り、自分と同じく古代ベルカ式、魔力変換資質「炎熱」を有しているエースにロードとなってもらう事を頼んだ
それを許した為エースは正式なロードになった

そして1年後、Ｓｔｓから3年前…。

・第１７無人世界

エースは、カリムからこの世界でガジェットドローンと呼ばれる機械兵器が出現する可能性があるのでそれの”調査”及び殲滅の依頼をされこの世界に来ていた

エース「ガジェットねぇ・・・噂では単機でＡＭＦの展開が出来るらしい」

アギト「兄貴、それってちょっとやばくねえか？」

話を聞いたアギトはエースの心配をする
不安な表情をするアギトにエースは・・・

エース「全然《え？》だって俺には烈火の剣精がついてるんだしな・・・そうだろ？」

アギト「ああ！任せてくれ兄貴！」

・・・自分にはアギトが居るから大丈夫だと言いつつアギトの方を見る
エースに頼りにされる事が嬉しいアギトはエースの問いに元気よく返事をした
そして探索を続けるエースとアギトの前に・・・

アギト「あ…！」

エース「…これは、また随分と多いお客さんだな」

・・・噂のガジェットドローンが待ち構えていた
ガジェットの数はざっと見ただけでも２０機位は居る
その後エースは直ぐに気持ちを切り替えて・・・

エース「…”黒桜”セットアップ」　黒桜『Ａｎｆａｎｇ』

・・・エース専用の日本刀型のデバイス黒桜（こくおう）を展開する
そして黒桜を展開した後、エースは・・・

エース「アギト！」　アギト「おう！」

「「ユニゾンインッ！」」

・・・アギトを呼んだエースの呼び掛けの後、アギトはエースとのユニゾンを行う
アギトとのユニゾンしたエースの姿は、赤い髪に紫の目とアギトに似た姿に変わった

エース「うん・・・大体２０前後だけど・・・行けるか？アギト」

アギト『勿論！』

エース「じゃあ・・・行こうアギト」　アギト『ああ！……炎熱強化！』

エースの言葉に勢い良く答えるアギト

高速移動魔法を使いエースは一瞬でガジェットの集団の前に来ると黒桜に手をかけ抜刀しガジェットの隙間を上手くそして速く駆け抜けつつガジェット達を斬り付ける

エース「┣…業火、無双連刃」　アギト『決まったな！兄貴！』

見事にエース達の技が決まり２０機居たガジェット達は既に半分以下になっていた

安心する暇も無く次のガジェット達がエース達に向かってくる

エース「油断してる暇は無いぞ？アギト、行くぞ…業火！『円舞斬！』」

向かってくる複数のガジェット達を身体を回しながら斬り付け迎撃するエース＆アギト

斬りつけられた複数のガジェットが少し遅れて爆散した時にアギトが・・・

アギト『ふふっ…兄貴こそ油断してると足元すくわれるぞ？』

・・・と薄っらと笑いながらエースに忠告する

アギトの忠告にエースは1本取られ苦笑いを浮かべた

アギト『兄貴！次で決めようぜ！《ああ！》┣…炎閃業破！』

その後エースはアギトの掛け声で刀を構え
エース達は黒桜の刀身に視認出来る程の高威力の炎を纏わせ

エース「アギト！『炎熱加速！』業火！『破桜閃ッ！』」

高威力の魔力斬撃を残りのガジェット達に向け放った
エース達の斬撃はガジェット達に命中した後、大きなドーム型の爆発を起こした後に全てのガジェット達を後片も無く消し去ってしまった

エース「決まったな『そうだな♪兄貴！』よし、じゃあ帰るか」

アギト『うん♪』

全てのガジェット達を破壊した後ユニゾンを解除して帰るエースとアギト
その途中でアギトがある事を思い出しエースに確認をする

アギト「兄貴《何だ？》ちゃんとガジェットのデータ取ったよな？」

アギトがエースに確認したのは調査の為のガジェット達のデータ採取
エースはアギトに言われた瞬間、急に静かになり顔から冷や汗を垂らしながら

エース「……わ、忘れた」

アギト「ええ――――!?どうすんだよ兄貴!また”あの人”に叱られちまうよ!」

エース「だ、大丈夫だろ?話せばちゃんと分かってくれるさ……多分」

アギト「兄貴…」

2人は不安な気持ちのまま戻って行く
この時の2人は”ちゃんと分かって欲しい”と切に願うのだった・・・・・・・・・・。

アギト

ある研究組織で実験体として捕らわれてた所、エースが救出した
救出後の検査でアギトは本物の古代ベルカ式融合騎だという事が判明
自分と同じく古代ベルカ式、魔力変換資質「炎熱」を有しているエースにロードとなってもらう事を頼みエースはそれを了承した
エースは正式なロードになった後は常にエースと行動を共にしている

因みにエースの技の名前は殆んどアギトが名付けた
技自体はあったが技の名前はほんの1割程度しか付いていなかった
為アギトが殆んどの技に名前を付けた事になる

黒桜(こくおう)　　カートリッジシステム搭載型

エースの持つ日本刀型のアームドデバイス
外見は黒の鉄製の鞘の日本刀
刀身は鏡の様に光沢を出す程に美しく高い切れ味を誇っている

ユニゾンデバイスアギト！（後書き）

桃子「かなり突撃思考のエース君ね」

珀狼「そこは否定しません」

桃子「次回はエース君達が恐がってる〝あの人〟が出るの？」

珀狼「はい」

桃子「一体誰なの？」

珀狼「…ストレートっすね（；・∀・）でもまだ言えません（、・ω・´）キリッ」

桃子「次回のお楽しみという訳ね」

珀狼「そゆことです（＾＾）」

桃子「じゃあ、今回はこの辺で！」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪

ユニゾンデバイスアギト！！

・聖王教会：カリムの執務室

？？？「それで？貴方はその戦闘思考の所為で”重要な”調査の部分をすっかり忘れて全てのガジェットを破片も残らない程にしたと？」

報告する為に”あの人”も居るカリムの執務室に来たエースとアギトそして願いも虚しくエースとアギトはあの人からお叱りを受けるのだった

エース＆アギト「「スミマセン」」

？？？「私や騎士カリムは今後の事もあるのであなた達に”必ず”映像を記録する様に言いましたよね？《そ、そのぅ》言いましたよね？」

エース＆アギト「「は、はい・・スミマセン」」

エースとアギトが反論しようとするものの？？？は言葉に怒りを込め2人を黙らせる

怒られる2人を見ていたカリムは見かねたのか？？？を止めに入った

カリム「2人も反省してる様だしそこまでにしてくれないかしら・・シャッハ」

シャッハ「はぁ・・・仕方ありません今回はこの辺にしておきま

しょう」

カリムの説得後シャッハはため息つきながら怒りを鎮めた
その後カリムはエース達に話しかけガジェットの事をどう思ったか
聞き始めた

カリム「それでガジェットとの戦闘はどうでした？」

エース「う～ん…強いて言うなら・・・・鉄屑？」

アギト「ガラクタだろ？兄貴」

ガジェットの事を”鉄屑”や”ガラクタ”等というエースとアギト
の答えに引きつった笑顔をするカリムとシャッハ…。その後、エー
スが報告の詳細を伝え終わると一同は雑談を始めた
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊

・ミッドチルダ：テーマパーク

翌日エースは休暇を利用し以前、アギトが来たいと言っていたテー
マパークにアギトを連れて来た・・・因みにアギトはリインでいう
所のアウトフレーム状態になっている

アギト「早く行こうぜ！兄貴」

エース「そう急がなくても遊園地は逃げやしないから落ち着けア
ギト《さあ！》ちょ…！オイオイ・・・はぁ～…全く・・・ふふっ」

よほど嬉しいのかアギトははしゃぎながらエースの腕を掴むと少し困る表情を浮かべるエースを余所に少し強引にテーマパーク内にエースを引き連れて行った

アギト「兄貴、アレ乗ろうぜ！」　エース「こ・・・これは…」

アギトはある乗り物を見付けエースを一緒に乗ろうと誘う
今日のエースはアギトの為に大抵のモノは乗ろうと決めていた…のだが…。
アギトの示した乗り物に言葉を途切れさせた・・・アギトがエースに乗ろうと誘ったモノは…
回転する床の上に床の回転に合わせ上下に動く座席を備えた遊具…
別名、回転木馬つまり早い話”メリーゴーランド”だった

エース「こ・・これ・・・乗りたいのか？《うん！》そ・・そうか」

エースは目の前のメリーゴーランドに息を飲む
現在17歳の健全な男の子のエース・ハラオウン…17歳の彼にはメリーゴーランド乗る事は、かなりの勇気が要る事らしい・・・とは言えこのテーマパークに来るを楽しみにしていたアギトを悲しませる事は出来ずに悩むエース

アギト「兄貴…コレ乗るの嫌なのか？」

エース「そ、それ《あれ？エース君？》ん？あ・・お前は…」

エースが一緒に乗ってくれないのかと思い少し顔を曇らせるアギトもう諦めて乗るしか無いのかとエースが覚悟をし始めた時にエース

にある女性が話しかけて来た…その女性とは・・・

???「いや～こんな遊園地で会うなんて奇遇やね」

エース「全くだ・・・それにしても助かったよ”はやて”」

・・・義妹の親友の1人・・・八神はやてだった
彼女は今日エース達と同じく休暇を利用しリインと2人でこの遊園地に遊びに来ていた
そして偶然メリーゴーランドの前で悩むエースを目撃し声をかけたのだ

はやて「何や、流石のエース君もこれは恥しかったん?」

エース「まあな・・・この歳でコレに乗るのは少し抵抗があるな」

はやて「ふ～ん昔は乗ってたん?」

エース「昔は母さんやリーゼやアリア達に連れて来てもらい乗ってたな」

エースとはやてはメリーゴーランドに乗るアギトとリインを見ながらそんな会話をする
アギトとリインの様子を見るエースとはやて…その様子は子供達を見守る親達の様だ
因みに正確にはエースは”乗せられていた”のだが本人は忘れている様子
暫らく経ってメリーゴーランドから降りてきたアギトとリインが2人の元に来た

エース「楽しかったか？」

アギト「うん！」　リイン「はい！お兄さん」

エース「そうか、次は何に乗りたい？」　アギト＆リイン「「アレだよ！（です！）」」

エースは次に何に乗りたいのかを2人に聞くとアギトとリインは同時にある乗り物に指を指し示す．．．その乗り物を見た瞬間エースは再び息を飲んだ

エース「…め、メルヘンレール…だと…？」

アギトとリインが指し示したのは名前の通りメルヘン的な物の建物内を可愛らしい列車が走るものつまり…メリーゴーランドより遥かに勇気が要る

はやて「あはは～…私も一緒に乗るからエース君、頑張ろ？」

はやては苦笑いをした後にエースを励ました
その後…エースは勇気を振り絞りメルヘンレールに乗った
エースはアトラクションの最中、楽しむアギトとリインとは裏腹にずっと下を向き恥しさをただひたすらに耐えていた…その後・・・

アギト「もう．．．食べれないって…兄貴」　リイン「ｚｚｚ…」

はやて「ふふっ．．．リインとアギトすっかりおやすみや」

エース「遊び疲れたんだろ」

・・・テーマパークを堪能しつくしたアギトとリインは帰りの最中に寝てしまった
はやての自宅よりもエースの自宅の方がテーマパークから近かったのでアギトとリインを休ませる為に一行はエースの自宅の方に向かった
エースの自宅に着くとアギトの部屋に2人を寝かせた後・・はやては自宅に連絡を入れる為に通信を始めエースはその間に珈琲を淹れ始めた

はやて「ふぅ～連絡終わったで～」

エース「ご苦労さん・・っと《お、ありがとな♪》どういたしまして・・・ふう今日、改めて子供のお守は色々と大変だと思い知らされたよ」

はやて「そう?私には何だかんだでエース君も一緒に楽しんでる様にみえたけど?」

エース「まあ、それは否定しないさ・・アギトやリインの他に美人な女性も居たしな」

はやて「ありがとな♪でも褒めても何も出んで?ふふっ」

エース「ちぇ・・ふふっ」

この後エースとはやてはとても良い雰囲気の中2人で雑談に花を咲かせるのだった

そしてこれ以降、エースはアギトと遊園地やテーマパークに行く際には自然とはやてとリインも誘い一緒に連れて行くようになった
気が合うのかエースとはやては一緒に行く回数が増える毎に2人の距離はどんどんと縮まっていき…2人は付き合うようになるが、それはまた別のお話・・・・・・・・・。

ユニゾンデバイスアギト！！（後書き）

桃子「これで終わり？」

珀狼「はい…（＾＾；）」

桃子「また微妙ね…というかどうして遅れたの？」

珀狼「えっとですね・・・この話のエースの彼女をカリムかシャッハにしようかで悩み更新が遅れました」

桃子「でもこの話のエース君の彼女さんは・・・はやてちゃんよね？」

珀狼「はい、散々に迷っていたところ…そう言えば、はやてにもリインが居るじゃん！と思いだし急遽エースの彼女をはやてにしました」

桃子「へぇ～…さて次は”ＩＦサディア家”ね、遅れなように頑張りなさい（「―「）」

珀狼「は、はい（「▽-；）アハハ…」

桃子「じゃあ、今回はこの辺で！」

桃子「物語の感想とかまってるわ～♪」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5234x/

金の閃光のもう一人の義兄　番外編集

2011年12月24日07時57分発行